THE CENTRAL REVIEW

中央公論

十月號

第廿九年第十一號　第三百十號

メレジュコーフスキー著　文學士森田草平　文學士安倍能成共譯――人としての部＝森田譯　藝術家としての部＝安倍譯

再版

人及藝術家としてのトルストイ並にドストイエフスキー

橋本邦助氏裝
四六判上製美本
肖像三枚入
全一冊
正價壹圓五拾錢
小包内地十二錢

此書は文明批評家として當今世界第一人者と言はるゝメレジュコーフスキーが靈肉一致を唱導する象徴主義の立場からトルストイとドストイエフスキーを評傳した文豪の書いた文豪の評傳である。此書を繙かば其ものである、即ち人の人生觀なり藝術觀なりを一變せずには止まない。譯者は始終興奮を以て此書を譯了した小說よりも面白い論文である。尚本書の英譯は誤譯と脫漏とに充つ。英譯を讀む程ならば、獨逸譯に據れる此書を讀まるべきである。

文豪の書いた文豪の評傳

戸川秋骨先生譯▼上下二冊總クロース金字入美本
上卷價壹圓四拾錢
下卷價壹圓貳拾錢
郵稅各一冊十二錢

エマーソン論文集

〔六版〕上卷目次
◉歷史論◉戀愛論◉大靈論
◉自恃論◉友情論◉圓環論
◉報償論◉細慮論◉智力論
◉靈法論◉勇壯論◉藝術論

〔三版〕下卷目次
◉詩人論◉作法論◉政治論
◉經驗論◉進物論◉名目論
◉人格論◉自然論◉改革論

ベーコン論文集

高橋五郎先生譯〔十三版〕
總クロース全一冊
正價一圓二十錢
郵稅十二錢

世界論文集中の珍として三百年來學者の爭ふて愛誦する所全五十八句の名什、句々金玉『之を讀む二十回、讀む每に新意味を發見し來る』とは眞なり、以て處世經たるべし、以て思想辭典たるべし。

版元　東京神田區雉子町　玄黃社　電話本局二〇九番　振替東京七九九五　◎全國有名書店賣捌

明治大學校外生募集

校外生ハ講義錄ニ就キ修學スル者ニシテ目下新學期開始ノ際ナルヲ以テ入學ノ最好時機ナリ◉新學年講義錄ニモ種々ノ改良ヲ加ヘ且校外生ニ特典ヲ與フ

詳細ナル見本附規則書入用ノ向ヘハ申越次第送付ス

法科講義錄

各學年共十月初旬ヨリ發行、一ヶ年ニテ完結

本大學法科ノ學級ト同ク第一、第二、第三學年ニ分ツ◉月謝ハ各學年トモ四十錢トス但減額ノ特例アリ◉志望者ハ何學年ヘ入學スルモ隨意トス、三學年ヲ兼修スルトキハ一年ニテ全科目ヲ修了スルコトヲ得但速修セント欲スル者ノ便ニ供スル爲メ別ニ『法科特別講義錄』ヲ發行ス

法學選科講義錄

十月十日ヨリ發行一ヶ年ニテ完結

國民生活上必須ノ學科ニシテ且ツ諸種ノ普通文官、警察官、司獄官、裁判所書記、府縣郡市町村吏員等ノ職司上及其受驗準備ニ必要ナル諸學科ヲ登載ス◉月謝ハ四十錢但減額ノ特例アリ

高等豫備講義錄

九月十五日ヨリ發行。七ヶ月ニテ完結

高等學校、高等商、工業、醫學專門、其他ノ高等諸學校ノ入學試驗準備ニ必要ナル諸學科ヲ登載ス◉月謝ハ五十錢但減額ノ特例アリ

●完結講義錄◉九月完結シタル大正三年度法科講義錄及法學選科講義錄ハ各殘本少許アリ、希望ノ向ハ至急申込マルヘシ

東京駿河臺
明治大學出版部
電話本局一八九四番
振替口座東京参貳六五番

源家一門の榮華

源□高須梅溪氏作

源氏の人々

の夢を謳ひ沒落の悲痛を哭せし無韻の詩!!

○川端龍子氏挿畫
○竹久夢二氏裝幀

○中版無双の美本
○定價七十錢
○郵送六錢

國民新聞評 源氏の人々を題材として著者が折口の感想を託して人生の幾波瀾幾曲折を詠じたるもの或は又人生の哀史とも言へよう。爲朝、義朝、義經、義仲、實朝、常盤御前、靜御前等十四人の面影が髣髴として眼前に在る。

中央新聞評。源氏一門の人々に著者一流の筆鋒を以て詩的生命を與へ犀利なる論評を試む。史論に似て史論に非ず、詩の如くして詩に非ず。亦これ著者の獨壇上なり……

前長崎高等商業學校教授

坂本忠恕先生著

新刊

獨逸語精講

新進獨逸語學者として錚々の聞えある著者が多年教授上の實驗に基き新案せる獨習書也。解說の親切と編纂の巧妙とは獨習者に些の難澁なく讀書會話作文に熟達せしめ新聞雜誌を讀み通信文をも自由に使用せしむ。

山口小太郎先生の評

ベルリッツ式によりて簡易なる獨逸語を說き初學者が斯道に入るにさしたる難澁を感ぜざるよう工夫したる又新聞抄錄を挿入して實際的獨乙語を示し、時文の讀破な學者に推奬したる又數十種の尺牘文を掲示して日常の音信に獨乙語を用ふるの方法を說きたる孰れも他の自修書に優る所である。

中版上裝
金文字入
紙數四百頁
定價壹圓
郵稅八錢
發音假名付

發兌 東京京橋南紺屋町 實業之日本社出版部 振替東京三二六番

賣捌 全國各地書店

泰西名著の全譯

新潮文庫

名著の責任ある全譯

梗概に非ず筋書に非ず殊に藝術的作品に至りては幾千頁の長篇尚ほ一字を苟もせざる全譯たるを期す

袖珍型特製の美本

携帶に便なる袖珍型にて金字入り色箔模樣の特製美本。紳士と云はず學生と云はず一般的好讀物也。

總六號内容の豐富

袖珍小型なるも總六號活字を用ゐ一冊二百頁以上、各篇十萬字を超ゆる最も豐富なる内容を有せり。

出版界極度の廉價

内容と裝幀と斯くの如くにして一部僅に貳拾五錢に過ぎず、敢て出版界極度の廉價と稱する所以也。

一部定價貳拾五錢 郵稅四錢

—十册以上前金申込者は郵稅を要せず—

新潮文庫目次 ▼は既刊 ▽は近刊

- ▼第一 人生論(全) トルストイ著 相馬御風譯
- ▼第二 ヱルテルの悲み ゲヱテ作 秦豐吉譯
- ▼第三 マルコポーロ旅行記(上) 生方敏郎譯
- ▼第四 白痴(1) ドストエフスキイ作 米川正夫譯
- ▼第五 イブセン書簡集 中村吉藏譯
- ▼第六 はつ戀(全) ツルゲエネフ作 生田春月譯
- ▼第七 種の起原(1) ダアヰン作 大杉榮譯
- ▼第八 マルコポーロ旅行記(下) 生方敏郎譯
- ▼第九 白痴(2) ドストエフスキイ作 米川正夫譯
- ▼第十 伯林包圍(全) ドオデエ作 後藤末雄譯
- ▼第十一 獨身婦人(全) ブリユウ作 中村星湖譯

東京市牛込區矢來町中の丸 **新潮社**
電話番町二三三三番 振替東京一七四二

一　當會社の保險料は低廉にして且つ利益金の百分の五十以上を五箇年目毎に契約者に分配す

一　當會社の保險料拂込方法は保險證券訂正の煩を要せず其變更契約者の隨意とす

一　當會社は拂濟保險の便法を設けあり

古河家經營

博愛生命

社長　男爵　中島久萬吉
專務取締役　小原元美
專務取締役　鈴木市之助
常任監査役　安達仁造

本店　東京市日本橋區本町四丁目十五、十六番地
（電長本局一八五六、五一五〇、一二八七番
振替貯金口座東京一一七一七番）

支店　大阪市東區本町一ノ一三（電長本局二三一一番）

一　當會社は低利なる金融機關の設あり

一　當會社は被保險者の年齡範圍最も廣く滿九年七箇月以上滿六十年六箇月迄契約す

一　當會社の保險金支拂は最も迅速なり是れ保險契約の目的を遂行せんが爲なり


營業品目
○懷中時計
○掛置時計
○ダイヤモンド 並ニ各寶石
○指環手釦 並ニ各種携帶品
○貴金屬美術工藝品製作
東京市京橋區八官町
小林時計商店
電話(新橋)一一〇三
一一〇四
振替口座 七八〇七

C. GOW, R. A.



Royal Prisoners

中央公論



十月號
第二十九年第十一號
第三百十號

獨逸ヴエルト・ポリチークの破滅

（一）

吾人は今より二十年の昔に於て日清戰爭の結果として老大帝國の破滅の端緒を眺め、敵ながら一大悲劇を觀るの感に堪へざるものありしが、今や老朽國にはあらで新興の大帝國が其覇圖雄略僅に央ならんとして將に覆顛せんとするを觀んとす、試に敵愾の心を除り局外者として之に對せんか豈に一種歎惜悲哀の情なきを得んや、今の獨逸帝國は世人皆な知れる如く十八世紀に勃興せる普魯西王國を基礎として築き建てられたるものにして、前に在りては大選擧侯と稱せられたるフリドリッヒ・ヴイルヘルム、大王フリドリッヒ及び賢相スタインの苦辛經營に負ふあり、後に於てはビスマーク、モルトケ、維廉一世の

雄圖大略に待つあり、此の偉人甍が前後約二百年に亘り心血を傾けて築き建てたる强大無比の獨逸帝國も、維廉二世の標榜せる世界政策の爲め、其飽くことを知らざる大野心を强て滿足せしめんとしたるが爲め、終に破滅に瀕せんとするの狀態に陷れるは誠に史上未曾有の悲慘事にあらずや、

ヴエルト・ポリチーク即ち世界政策は維廉二世獨創の雄圖なり、比公は其部下を稱し歐洲第一の外務省と稱し、年若き書記者などを戒飭するに際し『歐洲第一の外務省に勤務するものにして有まじきことなり』と云ふを常とせり、然れども比公は其建立せる大帝國の基礎を固定するに專念し、覇業の範圍を區限するの必要を思ひ、平生ナポレオン、路易十四世の覆轍を遮くべきの用意ありしを以て未だ曾て世界政策と云ふが如き絶大無限の企圖を抱懷せざりしなり、歐洲中原に於て四隣を壓するの强大國たると同時に世界第一の殖民國と爲りて地球上の制海權をも專有せんとは比公の夢にも思はざりし大雄圖なるが、比公の後に出で、比公の企て及はざりし功業を成すに腐心せるカイザーは功名心に驅られて歷史の敎訓を忘却し、世界政策なる一大雄圖を案出せり、ナポレオン畢生の夢は東方に大帝國を建つるに在りき、維廉二世亦た夙に一大殖民帝國を建つるの志あり、即位後未だ二年ならざるに比公を革職し、直に海軍擴張に着手せり、民間には海軍同盟を組織せしめて盛に海軍擴張の必要を說かしめ、以て上下唱和して覓に比公一流の健全なる保守的國論を一掃し去れり、日淸戰後の三國干涉に際し獨逸東洋艦隊の如何に威風堂々たるものありしかを回顧せば帝の世界政策の此時の已に其萠芽を發したるを察すべし、幾許もなく獨帝は聖地パレスタインの巡禮を試みたり、此時帝はアラビヤ風に擬したる花やかなる異裝をなし

て聖跡を巡禮して人目を聳てしめしが、歸途君頁丹丁堡に土耳古皇帝を訪問して慇懃を交換したり、世人多くは此旅行を以て帝の旅行癖に加ふるに一種幼稚なる信仰心を滿足せんが爲めなりと解したりしが、是より土領亞細亞に於ける獨逸の鐵道經營は頓に活氣を帶び來り、君府對岸より小亞細亞を經てバグダッドに達し、更に延長して波斯灣に出でんとする大線路の特許は幾許もなくして獨人の手に落ち全歐洲を呆然たらしめたりき、即ち土領亞細亞に於ける鐵道は一八九二年には九〇〇哩、一八九七年には一五〇〇哩に過ぎざりしが、一九一一年には二、八三六哩の長さに達したるは、以て此間に於ける獨逸經營の成功を察すべからずや、論者或は獨帝を嘲りて獨逸實業家の手先なりと云へり、何ぞ知らん帝は實業發展の名の下に帝國擴大の前途を想像し、他日百萬の兵をマルモラ海邊に移し、馬を金角岬頭に立つるの日あるべきを夢み、帝の眼中實業の發展は寧ろ後に率ゐんとする遠征軍の先驅たるに外ならざりしなり、帝が其信頼する名將を君府に送り陸軍の改革に從事せしむるや、其胸中には西亞何ぞ別提封あらんやの慨ありしことと察するに餘あり、別語之を云はゞ帝は獨墺同盟の熱心なる支持者なれども、其墺を見ることと一種の附庸に外ならず、墺の勢力を巴爾幹に延ばすは自ら獨逸の發展に異ならず、若しも他年帝の雄圖が實現せらるゝことありとせば其版圖は必ずや墺洪を經て巴爾幹を含み、小亞細亞を併せ、メソポタミヤ一帶の地を加へて終に波斯灣に出でんとするものたるべし、而して帝は唯た之を樂しき理想として胸底に潜めるに止めず着々其實現に向つて武歩を進め來れり、而かも此れ只た一方の觀察のみ、一九〇〇年南阿戰爭の將さに開かれんとするや帝は一の怪しむべき親電をトランスワール大統領クリュ

ゲルに迄りて大に其反英態度を挑發せんと試みて徒らに英人の反感を買ひしは世人の記憶に新たなる處、其東阿に於ける獨領擴大の野心は遂に滿足し得ざりしも、摩洛哥の佛國經營に對しての干渉は多少の功を收め得たり、即ち數年間佛國政府を十分に苦しめたる上にカメルーン方面に割地を得たり、帝が如何に阿弗利加に殖民帝國を開かんとして焦心せることと以て察すべし、支那に對する帝の野心に關しては我々日本人の鼻端に現はれたる事實にして別に語るの要なし、蓋し山東方面の獨逸の經營は着々成功し中部支那の最も膏腴の地は若しも今次の事變起らざらしめば數年を出でずして政事上經濟上共に獨の制裁を仰ぐべかりしことは何人も疑ふ能はざる處なり、斯くて亞細亞に對しては西東兩方面より經濟的方式を以て蠶食の道を開き得たるも、阿弗利加に對しては尋常の手段を以てしては其志を遂ぐる能はざるを知れるを以て佛英の本國を征服して後に其殖民地を奪ふの外道なきを觀念するに至りしもの丶如し、即ち現戰爭に先だち獨の首相が英國大使に對し佛國と戰ひ勝つの曉に佛の歐洲領土を奪はざるべきを誓へるの裏面を察すれば佛の殖民地を獲得せんとするの計畫あることを最も明に察すべく、アルゼリ、チウニス、摩洛哥の如きは現戰爭の開始と共に已に獨帝の有に算せられしや知るべし、國家を擴大するは國家として正當の野心なりとするも、人の領土に垂涎するの餘り故なく戰を挑んで其目的を達せんとするに至りては市井强盜の所業と何の選ぶ所あらんや、更に獨帝は他の方面に向つて大に略奪の歩を進めつゝありたり、他の方面とは他なし和蘭、白耳義方面即ち是れなり、抑も獨逸國は波羅的沿岸に於ては幾多の良港あるに關はらず北海方面に於ては僅にハムブルク、ブレメンあるのみ、然れども此二港とて

も太西洋を距ること稍〻遠く、萊因方面の內地に對する輸出入貿易に關しては蘭國のアムステルダム、ロッテルダム、白國のアンウエルプの大に便利なるに如かず、故に獨逸政府が自國港よりする貿易に多大の保護を加ふるに關はらず、ハムブルク、ブレメンを通過すべき輸出入品の却て蘭白諸港を通過するもの頗る多きは獨帝の煩惱する所ならずんばあらず、因て蘭白を聯邦に編入するか否らざれば之と經濟同盟を結んで事實上獨逸政府の制裁に服せしめんとするは帝が多年の宿志なり、今次の開戰に際し白の中立を破りしは素より軍略上の必要に出づるなるべきも、同時に戰後に於て白國を併呑すべき口實を作らんとするの目的ありしは否むべからず、且つ此二國を合併するは其良港を獲るの外廣大なる殖民地、即ち阿弗利加に於ては白のコンゴー領、東洋に於ては蘭領東印度の諸島を版圖に加ふを得べきを以て蘭白の合併は實に獨逸世界政策の一大要件たりしなり、

試みに獨帝にて此の偉大なる計畫に成功し得たりと假定せよ、獨逸は歐洲の中原に於て絕對の强國となり、唯だ露國のみ版圖の大、民衆の多きを以て相匹敵し得べしと雖も民智の程度に於て容易に雄を爭ふ可らず、佛は力及ばずして雌伏し、英國亦た制海權の獨占を失ふて多く其羽翼たる殖民地を奪はれ竟に辛ふして孤島の淋しき獨立を支持するに過ぎざらん耳、然れば今回の事變に際し四圍の大小列國が期せずして聯合反對の態度に出でたる眞に勢の然らしむる所、獨帝たるもの靜に內に省みて外、大勢を察せば伊太利の同盟脫退尤むべからず、英の宣戰亦た恨むべからず、那翁の專横を憤りて其覇業を覆へしたる歐洲は遂に獨帝に對し今日の擧に出でざる能はざるを以てなり、

（二）

斯くて獨帝の所謂世界政策の眞相、動機は既に遺憾なく世間に暴露したる以上其遂に世界の反抗に遭ふて破滅すべきは數の免る能はざる處なり、蓋し吾人已に之が破滅を斷言する所以のものは理の當然より推して斷定する耳ならず亦た實に歐洲戰局の推移は此斷定に事實上の根據を呈供するものなり、回顧すれば八月二日獨逸が露國に對し開戰を宣するに當つてや獨軍は既に絕對の優勢を保てり、露は此時既に全國の動員を命したりと云ふも、其國土尨大にして輸送の便不十分なるが爲め三週間を待つに非ざれば大軍を國境に集中し得べからず、佛亦た獨逸に後るゝこと十餘日を要すと算せられ、英國に對して獨帝は其必ず中立の態度に出つべきを期して疑はざりしものゝ如し、少くとも萬一戰列に加はるも海軍の活動を主とするに止め、迅速に陸兵を派遣し佛の危機を救ふに至るべしとは平素英國の陸軍組織を輕侮せし獨逸參謀本部の豫期せざりし所なるが如し、即ち三日ルクセンベルグに入り五日白國のリエジユに迫りし獨軍は意氣冲天、一蹴白の要塞を拔きて佛境を突破し、佛國の東北防備の薄弱なると動員の未だ完成せざるに乘して、疾風迅雷直に佛京巴里に殺到し以て城下の盟を强ゆべく毫も疑を懷かざりしなり蕞爾たる白耳義が大膽にもリエージユの堡壘に據り能く獨の大軍を支へ十有餘日の久しきに及はんとは實に全世界の意外とせし處にして、獨の參謀本部が其作戰計畫を立つるに當り思茲に及ばざりしは强ゐて尤むべからざるも亦た絕大の遺算なるを失はず、此遺算の爲めに佛國をして動員を完ふするの餘裕を得しめ、同時に英の援軍亦た戰期に後れずして上陸することを得たり、若しも他日亂定まりて後に聯合

列國の勳功を評論せば白耳義は其國小にして其參加兵數僅に二十萬を過ぎずと雖も勳績の赫々たる蓋し毫も他の諸大國に劣らざるを認められずんばあらず、白國の今次の戰爭に於ける宛も西班牙民兵が各地に那翁の大軍に反抗して列國聯合の先驅を爲したると髣髴たり、假りに白耳義の反抗なかりしとせよ獨逸は必ず豫定の行動を遂げて先づ佛都を拔き直に其精鋭を旋還して露境に向はしむるを得たりしなるべく遂に戰局の利は各方面とも獨逸の占むる處となり、聯合諸國は僅かに持久戰に由り獨逸を兵糧攻にして最後の勝を制するの餘儀なきに至りしなるべし、然るに獨軍がリエジユの要塞に支へられて貴重の日子を費せる間に英佛聯合軍は大略防備を整へて佛境に待つことを得、一旦獨軍の精鋭を避けて大決戰の挑みに應ぜず第一線の防禦を撤して第二線に退き、更に第三線に踏止まるの止むを得ざるに出でしが、此間更に約二週間を費やしたるが故に露國をして遺憾なく其初期の作戰を決行せしむるを得たり、即ち東普魯西の一半先づ露軍の有に歸したるが爲め獨帝をして三軍團の兵を白耳義方面より東北境に移すの止むを得ざるに至らしめたり、次にガリシヤ方面に於ては九月三日首府レムベルト露軍の有に歸し、百萬の墺軍はカルパシヤン山脈の北方當さに全滅に瀕せしかば獨帝は其在佛軍中より八個軍團を割きて之を東送せり、當時佛國方面の戰機方さに熟し獨逸の爲めに謀れば一兵だも他に移すべからざるに關はらず帝が其忍ぶ可らざるを忍び三四十萬の大軍を東境に送りしは、政治的必要に應ぜんとせしものにして、墺國に對する情誼上止むを得ざるに出づ、正に是れ我片腕の肉を割き頻死の僚友に食はしめしものにして獨帝の心事亦た憫むべからずや、然れども戰略は政治の干渉を許さず、普佛の役佛軍の司令官は孰れも

巴里政府の政治的必要よりする干渉を受けて大に作戰を誤り遂にモルトケの乘ずる處となりしは隱れなき事實なり、維廉二世今は却て政治的必要より作戰に干涉し獨軍の大敗走を促がし前年に於ける佛軍の轍を踏めり、斯て佛英聯合軍側に於ては獨軍の東方輸送を略ぼ偵知せるものの如く九月五六日の交より斷然攻勢を取るの氣勢を示せしが、先づ其最左翼は此時宛も旋回運動を開始せる獨の右翼、第一軍に向ひ盛に側面攻擊を開始し他の英佛軍亦之に參加し、約一週間に亘る大激戰の後ち遂に雄大なる獨の右軍を遠く東北境に向つて擊退せり、同時に二百哩の永きに亘る戰線一般に戰機大に動き到る處佛軍は獨軍を擊退し、九月十五日頃の形勢に由れば南方アルサース、ローレーン方面には佛境內また敵の一兵をも留めず、東北方面には佛軍はアミエン、サンコンタン、ランスを回復し、追擊益々急にして獨軍は漸く窮地に圍まれ、ウエルダン附近の皇太子の率ゆる主力の一軍亦た頗る危險の地位に陷れられたり、玆に於て佛國方面の戰局は略ぼ一定せりと言ふべく、東普魯西の獨軍の戰況聊か振ふの觀なきに非ざるも是れ露軍が全力を擧げて墺軍と戰へるの際暫らく放任するもの、今や二百萬の露軍は墺軍を殲滅し了して將に獨境に殺到せんとす、是れより東普方面の局面亦た一變すべきは言を待たず、假令カイザー尙ほ三百餘萬の精銳に擁せられ畢生の奮闘を試みるならんも、海面と云はす陸上と云はず四圍皆な是れ强敵なり、獨逸の敗滅は只た日月の論のみ、

（三）

戰局の形勢已に斯の如し、一面より觀察すれば維廉二世としては此際速に媾和の途を求むるは國家を

死地より救ふべき唯一の方法と云ふべし、既に米國の一部に平和運動の起れるを傳ふる亦怪むに足らず然れども英佛露の意氣込は果して姑息の平和を許すべきや大に疑なき能はず、想ふに列强は假令今日媾和をなすも必ず十二分に獨帝の世界政策を破滅するに足るべき條件を要求すべし、即ち佛國はアルサスローレーンの還附、白耳義は中立破壞に對する有形無形の賠償、露國はガリシヤ、東普魯西（又はシリシヤ）の割讓、塞爾維はボスニヤ、ヘルゼゴビナの併合、英國はヘリゴランド、ビスマーク群嶋、トーゴーランド、獨領東阿弗利加の讓與を求むべきは略ぼ察するに難からず、之に加ふるに我日本は膠州灣の還附を要求すべし、大凡そ是等の要求たるや蓋し、列國として今次開戰の目的を貫徹せんとするには最少の限度なるべし、各國政府は少なくとも此れ位の要求を貫徹するに非ざれば獨帝の世界政策を破滅し得べしとは信ぜられず、若しも姑息なる平和を構へ禍害を他日に遺こすが如くんば始めより開戰せざるに如かざるなり、然れども轉じて維廉二世の身となりて之を觀れば斯の如き條件を納るゝは皇帝として自殺するに異ならず、試みに思へ東普魯西は普國王室發祥の地なり、シリシヤはフリトリッセ大王が七年戰爭を賭して逆取順守したるの地なり、而してアルサス、ロレーンに至りては七十年戰役の唯一の紀念物なり、其他膠州灣を初め各殖民地に至りては獨逸民族海外發展の最も必要なる策源地なり、今此等の地域中孰れかの其一を失ふも普國王、獨逸皇帝に取りては實に其責任問題たらずんばあらず、況んや今此等の地域を同時に失ふべきに於てをや、想ふに獨帝の慧敏なる大に前途を悲觀せざるに非ざるべきも、今や交戰の最中に在りて如何ともすべからず、深く耳を媾和の談に傾くに暇なく、東奔西馳其三

百萬の忠勇を指揮し、斃て後に已むの一事あらん耳、

昔者フリードリッヒ大王露墺佛を敵として戰ひ七年の久しきに及びしが、國力相異の甚だしき今日獨墺が略ぼ兵數に於て佛露英白に匹敵するが如くならず、故に大王は只た自己の天才と精鋭なる二十萬人の軍隊に依頼し、必死の決心を以て戰爭に從事したり、曾て出征中一日伯林に歸り首相フィンクを戒めて曰く余今少兵を以て大軍と戰ふ、假令へ誤つて捕虜の身となることあらんも、決して余を救ふべき賠償として國土の一寸地方をも敵に割讓すべからず、余をば宛も死せるものと見做して鋭意戰爭を繼續せよと、又たロイテンに於て四萬人の普軍を以て十二萬人の敵軍と戰はんとするや、王は其將ツイテンを顧み竊に之に告げて曰く、余は此日特に危險を踏まざるを得ず、故に余もし斃れなば汝の外套を以て余が身體を隱蔽し何人にも告ぐる勿れ、戰爭は必ず我軍の勝利に歸せんと、斯くて大王は屢々大勝を博して盛名を歐洲に轟かせしにも關はらず、戰亂久しきに及びて國力疲弊し、其最終の年には殆んど絶望に沈みしが、僥倖なるかな、大王に私憤を抱ける露國女帝エリサベット崩し熱心なる王の崇拜者たる彼得三世の即位するあり、多年の强敵一變して友邦となりしを以て大に戰局を緩和し遂に名譽ある媾和を結ぶを得たり、

今維廉二世は非常の逆境に處し遠祖フリトリッヒ大王を想ひ必ずや自ら慰むる所あらん、交戰久しきに亘る間には如何なる事變の生じて帝に倖するあらんも計られず、殊に帝を初め一族中多く戰線に立ち其愛子の負傷し戰死するものありと云ふに至りては、開戰の責を帝に問はんとするものも胸底自ら一種

の感激の潜むを拂ふ能はざるべきなり、然れども帝を以て大王に比較するに、吾人は異餘を以て黄金に對照するの感なき能はず、維廉二世には果してフリドリッヒ大王の如き殉國の至誠ありと認むるを得べきか、彼は自己の名譽、意地、權勢を把持する爲めには死を辭せざるの覺悟あらん、然れども國家の爲めに其身を犧牲にするの至誠ありと云ふを得べき乎、又其作戰の天才に於て帝は大王が當世に卓越せし如く現に露佛の諸名將に卓越するを得るか、既に獨軍が佛國に深入りして大敗を招くに至りしが如き、帝の作戰は佛の作戰に及ばず、又假りにフリードリッヒ大王をして帝に代はらしめたりと想像せんに吾人は海軍の作戰上必ず英國海軍に對し一二の大なる奇勝を收め得たるべしとの感を禁ずる能はず、フリドリッヒ王は逆境中にも英國を友邦とし毎年百五十萬圓の補助を得、露の彼得三世の未だ位に卽かざる以前にも彼より潜かに敵狀の通告を得て大に利せしことあり、ルースヴエルト氏大統領にてもあらば多少帝に利することありたらんと思はるれど一私人のル氏は帝の爲め片肌脫ぐの氣魄もなかるべし、吾人は不幸にして維廉二世の前途に對し毫も樂觀すべき所以を知らず、

（四）

獨逸ヴエルト・ポリチークの破滅は獨帝及び獨逸の聲望の失墜となり、幾多の方面に種々の面白き影響あるべし、其最大なる影響は獨逸の政界に於て之を觀るべし、現今の獨逸憲法に據れば皇帝の位は必ず普魯王の占むる處にして、斯の如く規定されたるは普國がその版圖の大、人口の衆卓然各聯邦を拔くが故のみに非ず、主として一八七〇年の役普國が功第一に居りしが故なり、即ち普國王は戰勝の餘威に因

り獨逸皇帝の位を占むるに至れるが故に今次の戰敗と共に聯邦組織上果して如何の變動の生ずるも測量す可らず、假令組織上の變動なきも、維廉二世の帝位は竟に晏如たるを得べきか、更に帝が讓位を迫らるゝ如きことなしとするも、其統治の方針に至りては一大變化を免るゝ能はざるべし、少なくとも君主神權の主張は撤回せられざるを得ざるべし、即ち國會に於ける社會黨及び自由主義派の勢力は益々旺盛と爲り聯邦會議亦た從來の如く普魯西の專横を容さゞるに至らんと殆んど疑を容れず、玆に於て責任內閣の主張は必ず政界を聳動すべく、超然內閣主義は必ず其本家たる獨逸に於て一廢地を拂ふに至るべし、事情斯の如きに至らば獨逸以外にまで影響する處なかるべきか、即ち我邦の如き憲法制定の前後獨逸に學ぶ處多かりし緣故に由り自然に獨逸一派の憲法論の糟粕を甞めて得々たる學者も少しとせず、彼等は英國流の憲法政治を以て我憲法の本義に反すと爲し、政黨內閣を排し超然內閣を正則なりとす、其說く處往々君主神權論に似たるの言句を含み帝國議會の存在を侮蔑するが如きの傾向を有す、而して彼れ一派の崇拜する偶像は即ちカイザー維廉二世なりしなり、然るに今や彼等の黃金佛は已に全く其後光を失へり、吾は彼學者輩の狼狽の狀を想像し竊に笑止の感なき能はず、我帝國は自ら萬世一系の皇統ありて君臨まし〳〵、君主神權說を海外より借來りて憲法を解說するの必要を見ず、獨立の見識なく、事每に制を外國の學者に仰ぐものゝ末路も亦た憐むべからずや、

　獨逸崇拜に凝固して獨立の見識を沒却するものは學者にのみ限らず軍人の間にも多く其弊を見るが如し、或る一部の軍人中には獨逸流を崇拜するの餘り、今次佛軍の必敗を斷定し、英軍を罵りて傭兵用ゆ

るに足らずと爲せり、然れども老モルトケを拔きたる獨逸參謀部は必ずしも萬能ならず、昔は死せる孔明生ける仲達を走らせ、文明の今日名ばかりのモルトケは、遂に佛軍を敗ること能はず、獨の佛露に對する作戰計畫は兵學の方式に適ひたらんも活ける實在の事實に對する打算を誤りしが爲めに全然破滅に歸し、佛露の作戰は却て屈伸能く機宜を制して最後の勝利を收得せんとするなり、形式に捕はれたる我軍學者は多くの點に於て佛軍の獨軍に優れるものあるを看破するを得ざりしなり、殊に英軍に對する批評に至りては妄斷を極めたり、曰く英軍は傭兵なり用ゆるに足らず佛軍は英兵を以て手足纏ひとなし却て迷惑の感あらんと、誤解も亦甚たしからずや、抑も英國が徴兵法を執らず一種の義勇兵法に由るは何人も知れる所なるが、其兵員は皆な志願者に由るものにして、決して衣食の爲め兵卒と爲る浮浪人を包容せるに非ず、古來傭兵即ちメルシナリーなるもの歐洲にありて金錢の爲め外國政府に傭はれたることありしが、英兵は國防の爲めに志願して軍籍に入るもの、軍隊生活を好んで之に入るもの、忠勇奉公の精神に至りては他の徴兵法に由るものと毫も擇む處あることなし、之を傭兵と呼ぶは侮辱も亦た甚だし英國の兵卒を以て多く衣食の爲めに陸籍に入れるものなりと想像するは英人社會生活の狀態を知らざるものゝ言のみ、若し衣食の爲めにせんとせば英人の前には、南阿、加奈太、濠洲あり之に移住せば軍籍に入るより遙かに安樂なる境涯に入るを得べし、而かも尙ほ兵營生活を選むは各人一種の好尙と愛國心に基けるなり、蓋し英國の陸軍が名將フレンチ氏の統率の下に如何に規律あり精銳なるかは近時の歐洲戰報の證明する處、亦吾人の辨を待たざるも獨逸僻軍人の妄を闢かん爲めに一言するのみ、

終に一言せんとするは將來の獨逸に關してなり、世界政策破滅の爲め大に國土を削らるべく思はるゝ獨逸は果して文明强國として其聲價を落すべき乎、吾人は斯く信ずる能はず、佛國が大敗戰の爲めに、ナポレオン三世の詐僞的政治を脫し共和政體の下に遂に、全然其國力を復活して今日あるに至れるが如く、獨逸國も亦た世界政策の空しき夢想と際限なき軍備の負擔より脫し、自由寬大なる政治方針の下に必ず一種の美はしき文明的發展を爲すべきは吾人の豫期せんとする所、學術技藝の盛んなる從來の獨逸は大に尊敬するに足れるも、軍國主義を脫し自由の空氣を呼吸すべき今後の獨逸國民は更に一層の尊敬に價すべきものたらんことは、全世界の希望たらずんばあらず、嗚呼カント、ヘーゲル、フイヒテの國嗚呼シルレル、ギヨーテ、ハイネの歌ひし山河、久しく砲兵廠と化し、軍營の地となり、硝烟彈雨に蔽はれりたしが、今や時は來れり、多年滔天の妖雲を一掃して以て、再び自由と文明の鄉土たらんことを期せよ、

所謂擧國一致

本年の第三臨時議會も無事に閉會を告げ、六千餘萬圓の軍事費の無難に兩院を通過したるは國家の爲め大に慶賀すべし、然れども六日間に亘る會議討論の跡を回顧せば何人も深く遺憾とする處なくんばあらず、他なし擧國一致の形式あるも一致の精神なく、政府は民間黨を以て徒らに揚足を取るものと見做し民間黨は大隈首相を以て國家に對し十分の至誠を缺くものと斷定し、相互に其一擧一動を邪推し曲解し

遂に精神上氷炭相容れざるものとなり、若しも双方の肚裏を分析せば政府は民間黨が如何に跪くも擧國一致を破るほどの勇氣なきを見くびり嫌や／＼ながら政府案に賛成するを小氣味よしと爲し、民間黨は政府が早晩必ず一大失策を爲すべきを豫期し暫く反噬の齒牙を包み、僅かに彼が揚足を取りて小快を貪らんとするに過ぎず、斯くて不一致の精神は濁流滾々として流れつゝあり、國民の此の精神狀態は稍々もすれば遠征軍人に對する同情の厚薄にも影響する所あるに到らざるべき乎、試に我邦現在の心的狀態を以て同しく交戰中に屬する歐洲各國と比較せば英佛露の表裡圓滿なる擧國一致に對し大に慙色なきを得るか、更に今日の國情を以て日清戰爭日露戰爭、各時代の國情と比較せば亦た大に及ばざるを歎ぜざる得る乎、膠州灣の攻擊は固より國命を賭するが如き大事件にはあらざるも外に在て我忠勇なる艦隊及び軍隊が君國の爲め犧牲奮鬪するに際し內、人心の不和今日の如くなるは豈に國家の深憂に非ずや

斯の如き不滿足なる危險極まれる人心の狀態を釀もすに至れるは是れ果して誰の責任に歸すべきか、憶ふに公平に仔細に之を評論せば在野黨も政府も共に其罪を免る能はざるべきも、吾人は先づ之を政府に責めざるを得ず、如何となれば假りに誤ちは双方五分／＼なりとなすも、我邦の如き官權萬能の國に於ては在朝者の責任常に重大ならざるを得ざればなり、大隈伯の云へる如く政府は擧國一致を强ゆ可らず、自然に擧國一致の精神を呼起すの途に出てんことを要す、然るに何等反對黨の心を和ぐべき方法を執らず、却て反對黨が擧國一致の態度に出でざる能はざるを見て政府の一種の勝利と見做すが如くなる、は吾人の甚だ遺憾とする所なり、擧國一致を强ゐずと稱しながら國家觀念の爲め嫌や／＼ながら擧國一

致に出づるを待つは即ち之を强ゆるに非ずや、寧ろ政府として虛心坦懷軍國の事情に而し反對黨の擧國一致に出でんことを懇請して可なり、更に一歩を進めて之を論ずれば原敬氏の如きに對しては加藤外相親しく之を訪問して其援助を求むるも當然のことなるべく、又た首相が軍事費要求の演說に際し、一言前内閣の行財政整理に及び、一億五千萬の剩餘金あるを德とするの意を暗示するも亦た相當の禮儀なるべし、斯の如き緩和的態度に出づるも出でざるも軍事費通過の一事には相異を生ずることなかるべきも擧國一致を精神的ならしむると否とは一に繫り當局の配慮如何にあり、配慮と云へば稍々術策を意味し語弊あるに似たるが故に吾人は寧ろ當局の至誠坦懷の如何に在りと云はんと欲す、平生無事の日に在りては黨派の勝敗を爭ふも可なりと雖も國家有事に際しては須らく黨派根性を去り公明の心事に立反へらざる可らず、苟も國家の大事を自家權勢の支持の爲め利用せんとするが如き、少くとも斯かる嫌疑を招くが如き、即ち精神的擧國一致を不可能ならしむる所以なり、

更に吾人は在野黨の領袖諸氏に對しても亦雅量坦懷を求めざる可らず、政府當路の多少の失言の如き必ずしも深く尤むるの必要なしと思ふ、國家有事の日に政府を支持するは政府を支持するに非ず國家を支持するなり、同じく政府案を贊成せんとせば不愉快に贊成せんより快よく贊成するは大に勝れるに非ずや、現内閣もし死解すべくんば必ず相當の理由によりて死解すべし、一二の失言問題の如き豈に大政黨の熱心なる攻擊を煩はすほどのものならんや、

之を要するに過去は追ふも詮なし、現在の精神的擧國不一致は尤も憂ふべく、來るべき議會の成行甚た寒心に堪へず、吾人は刻下の狀勢に顧み切に朝野先輩の反省を促さずんばあらず、

公論

歐洲戰爭の發展を論じ思想問題に及ぶ

(英佛露を中心として立論す)

茅原華山

所謂「問以二經濟策一。茫若レ墜二煙霧一」とも言ふべき學者公人の多きに驚く、私が危険を冒して大膽にも重ねて歐洲戰爭に關する意見を發表するは、聊か文章を以て世の用と爲さんとする微衷に過ぎない。

第一 文章は世用

萬卷の書を讀み萬里の途を行つたものが、百年にして始めて見るを得る歐洲戰爭に對して、其大局を揣摩し、以て國民を指導——若し指導といふが僭越ならば——國民に向つて自己啓發の資料を供給することが可能ないとすれば、彼れは實に迂儒ではないか、然らずんば腐儒ではないか、葉氷心曰く、文章、世の用を爲さずんば工と雖も益なきなりと、私は日本に李太白の

第二 善く戰ふ者は善なり

戰爭其物に對する私の意見は日清戰爭に於て決定した、日露戰爭に於て決定した、歐洲戰爭が起つたからとて、私には戰爭は罪惡なりや否を問ふの必要はない

叉劍を把つて戰場に馳するのは個性中心說に反いてゐるや否やを問ふの必要はない、當時私は戰爭を罪惡なりとする基督敎主義には賛成は可能ない、右の頰を打たれたならば更に左の頰を向けよといふ無抵抗主義は私の何うあつても取らぬ所だと決定した、然るに今日に於てもトルストイの說に聞いて戰爭は罪惡なりと言ふものあるに於て、私は日本の思想界が何の位の進步を爲したかを疑はざるを得ない。

私は人生其物が戰爭であると信ずるものだ、萬有界其物が戰爭であると信ずるものだ、萬物生々といふ、殺々であるから生々ではないのか、殺さるれるものがあるから生きるものがあるのだ、生きるものがあるから殺さるものがあるのだ、宇宙は殺々の場であるから生々の場なのではないか、殺々なくして生々のあり得べき理はないてはないか、若し宇宙の間に殺々がないとすれば生々もない譯だ、さうならば宇宙の實在は死の一字に歸着する。

戰爭は生の根本調子である、萬有永劫の相である、物質も戰ふてゐる、山川草木も戰ふてゐる、禽獸蟲魚も戰ふてゐる、地球も戰ふてゐる、太陽系も戰ふてゐる、人類も無論戰ふてゐる、戰爭は嚴然たる自然界の一大事實てはないか、我々は此事實に對して始めから罪惡なりといふ批判は下せない譯てはないか、何となれば戰爭は道德以前の事實であり、超道德の事實であるからである、若し强いて言へば、戰は萬有の眞實の相てあり本然の性であるといふ點に於て之を善なりと言へぬことはない、善く戰ふものは善なりと言へる。萬物の進化は戰爭の賜てはないか、戰爭は常に偉大なる物を產み出したてはないか、私はニイチエが戰爭と勇氣とは博愛よりも大なる事功を擧げたりといふ論に贊成する。

事實は理論に先つ、理論に拘らず、事實は進行するてはないか、現に歐洲戰爭は幾多戰爭に反對する理論のあるにも拘らず、盛に發展しつゝあるてはないか、或は曰く、武器の進步は戰爭を不可能ならしむと、去れど人間は歷史あつてより以來、最も進步したる武

器を把りて、怖ろしき殺戮を行ひつゝあるではないか
或は曰く、國際經濟關係は戰爭をして不可能たらしむ打算は戰爭に反對すと、然り打算は戰爭を不可能ならしむ、去れど人間は戰爭を爲しつゝあるではないか、人間が打算を遣るのだ、故に人間は時として打算を捨て、更に大なる打算に入らんとする。

第二　日本民族生活權の主張

或は言ふ、戰爭の形式は一にして足らない、必ずしも人類相殺戮する戰爭の形式を取るには及ぶまいと、私は端的この論を駁し得られる、私は決して戰爭を好むものではない、私はナポレオンが人は戰爭に由りて永久に價値ある何事をも爲す能はずと言ひ、フランクリンが未だ曾て善き戰爭のありしことなし、又惡しき平和のありしことなしと言つたのを記憶してゐる、又現代に於ては戰爭は財政の一點、商工業の一點から見ても容易に闖入すべきものではないことを了解してゐる、然しながら見よ、白人と黄人とは其數に於ては五億内外で相若いてゐる、然るに白人は世界十分の九を領有し、黄人は其一を占めてゐるに過ぎない、黄人の國といつても聊か自己を主張し得るものは唯我日本ばかりである、三界に家なしといふが、黄人は殆どこの大地球上に國がない、日本は年々五十萬の人口を増加して行くが、之を排泄すべき餘地がない、是に於て乎自然に積極消極の兩論が主張されて來る。

消極の點から言へば人口減殺論である、所謂平和論者は其議論を徹底せんとならば、人口減殺論即ち避妊論に到達せねばならない、私は日本の青年に向つて打算なき結婚を爲す勿かれ、人の父と爲つて始めて生活難を覺るのは全く舊式であると勸告するものであるが、私は人口減殺論即ち避姙論に對しては絶對に反對せねばならない、「産れよ殖えよ」私は日本民族よ産れよ殖えよと呼ばんとするのである。

積極論は即ち「産れよ殖えよ」論である、從ふて日本民族の生活權を主張せんとするものである、日本民

族の生活權を主張するからには、時としては攻勢を取つて戰端を外國に啓くのも已むを得ずとするものである、私は此に一例を擧げる、唯例として擧げるのだ、夫の濠洲を見よ、濠州の約二分一なる支那は四億の人口を有す、濠洲の約二分一なる印度は三億の人口を有す、濠洲の約十八分一なる日本は五千萬の人口を有す濠洲の約六十分一なる瓜哇(ジャヴァ)は三千萬の人口を有す、而して支那及び印度を合せたる濠洲は唯四百萬の人口を有するに過ぎない、米國は八九千萬の人口があるが、加奈陀は六百萬を有するに過ぎない、濠洲にせよ、加奈陀にせよ、將た米國にせよ、優に二億の人口を容れ得るにも拘らず、白濠洲、白加奈陀、白米國を主張して黄人を拒絶する、日本人を拒絶する、濠洲に在ては、第一、歐洲の移住民は多く米國に引附られる、第二、濠洲の氣候は北歐に屬する英國民族に適せない、第三白人の通弊たる避姙が盛に行はれて到底俄に人口の増加する見込がない(英人フレーザー氏の計算に依れば濠洲に於ける人口増加は一年僅に六萬五千)第四、濠洲は大農國である、英人は農業に適せざるのみならず大陸の白人と雖も、之を米國の例に徴するに、農業よりも工業に就きたがる、故に現在の儘に放任しておけば、濠洲は未來永劫殆ど發達する見込がないと言へる、一方に於ては國の面積小にして人口の増加に苦しむ國あり、一方に於ては國の面積大にして人煙の稀薄なるに苦しむ國あり、前者の多きを移して後者の少きを補ふのが最も自然なのではないか、若し之が可能ないとすれば、それは人爲の致す所で全く自然に反してゐる。

私は白黄の文明及び生活が互に相異つてゐるのを認める、白人の諸國が日本人の移住を拒絶するは、白人の立場から觀れば、固より多少の理窟がないとは言はない、故に私は居常日本人に向つては居常苟も彼れに移住す、彼れの文明と生活と言語とを採用し、以て彼れに同化せよと勸告しつゝあるのだ、然しながら我れが此の如くするにも拘らず、彼れにして長へ(とこしな)に我れを容れず、而も日本にして其人口の増加に堪へずんば、

終には腕力を以て黄人入るべからずとする鐵の扉を打破して以て民族として我れの生活權を主張するに至るも之を不法不義だとはいへないではないが、況や若し彼れにして盛んに兵備を爲して以て日本人來を防がんとするが如きことあるに於てをや。

人は戰はんが爲めに生れたものだ、戰爭が戰爭であるのみならず、平和も亦固より戰爭である、戰爭は言はゞ急性の戰爭で、平和は言はゞ慢性の戰爭だ、戰爭は實に慘酷だといふものがあるが、若し日本の男兒が慘酷の二字に泣くやうでは、日本民族の前途も思ひ遣らるゝ、戰爭は戰友の死骸を履んで進むやうでなければ兎ても勝しない、戰爭の戰爭に於ても平和の戰爭に於ても、我々は友の死骸でも敵の死骸でも構はない、之を履み越えて進まなければならない、戰爭其物が慘酷なのではない、人生其物が慘酷なのだ、人生其物が慘酷なのではない、自然界其物萬有界其物が慘酷なのだ、若し戰爭の戰爭が慘酷だとすれば、平和の戰爭は尙更慘酷である、戰爭は見ゆる慘酷で、平和の戰爭は見えざる慘酷である、平和は戰爭あつての平和で、調和は是れ葛藤、軋轢、紛爭、衝突あつての調和だ、平和即戰爭、戰爭即平和、調和即葛藤、葛藤即調和、愛が深めらるゝに從ふて戰も強く爲る、愛しつゝ戰ひ、戰ひつゝ愛して行くのが我々の生活の久遠の姿である、故に愛即戰、戰即愛、久遠の平和は即ち久遠の死。

筍が椽の下に生へて陽光の迸る方角に伸びて來る、主人に在つては迷惑であるかも知れないが、何もそれは筍の罪惡ではない、筍は斯の如くにして生を遂げんとするのだ、生命の伸長する所、若し二個以上の生命があつて、而も納々として其れを容るゝ乾坤がないとすれば、此二個以上の生命は格鬪するより外はないではないか。

第四　歐洲民族の萬華鏡

歐洲戰爭は民族戰爭であるといふは何人も朧げながらも知つてゐるやうだが、私は窃に懼れる、未だ徹底した民族的自覺なき日本人には、歐洲に於ける民族戰

爭の意義に徹底し得ないことを、私は此ごろ二三度歐洲戰爭に關する講演を遣つた、講演が講演だけに地圖が要る、普通の世界地圖を掛けて貰つたが、露西亞を除けば歐羅巴は餘りに小さくつて講演の役に立たない、由來亞歐の兩大陸は實は一個の大陸――ユーラシヤと稱する一個の大陸であつて、而も歐羅巴は西班牙を頭にして佛蘭西を胸にし伊太利を手にし、北を背にし南に面した洋服姿の女の形を爲した半島に過ぎない、露西亞を除けば印度半島と大した徑庭はないやうだ、確に二倍だけはない、この半島の中に無數の民族が充溢漲集して、自然と戰ひ人間と戰つて來た、日本の歷史は全く大陸の風雲から游離した歷史、歐羅巴の歷史は蒙古人種の壓迫を東方から受けて、戰爭格鬪に滿ちた歷史、日本の歷史を背景としてゐる日本人に歐羅巴の歷史を背景としてゐる歐羅巴人を理解するのは六ケ敷い、從ふて歐洲戰爭を理解することが可能ないといふは、實に萬己むを得ない「生存競爭」といふ熟語は日本には無かつた、「民族競爭」といふ熟語も日本には無かつた。

私は姑く議論することを停めて、大體ではあるが、歐洲の重なる民族を叙述して、以て日本人の參考に供して見たい、先づスラヴ民族から始める。

第一　露西亞民族、スラヴ民族の頭領株であつて、之を分つて大露西亞人、白露西亞人、小露西亞人とする、此區別は蓋し其初めに於て芬蘭民族、リスアニヤン民族及び突厥民族と混血したる結果だと言はれる、露西亞人は勿論エリヤン人種の一分派で、史前に在つてはダニューブ河、エルベ河及び波羅的海の南岸に居つて、紀元後西よりして今の露西亞に移住したものだとされてゐる、そして蒙古民族即ち芬蘭民族、突厥民族を驅逐し或は之と混血して現在の露西亞人と爲つた、然しながらスラヴは決して大白小の露西亞人に限つたのではない、東歐羅巴の重なる住民は大抵皆此スラヴである、東スラヴが露西亞人とルセアニヤン族で、西スラヴはチエツキ族、スローヴアツク族、波蘭族、ヴエント一名ソルブ族で、南スラヴは勃牙利亞族、塞耳比亞族、クロアト族、ダルマシヤ族スローヴニヤン族、黑山族である。

註　此ルセアニヤン族は現に露兵に侵入された墺國のガリシヤと匈牙利のカーパジヤ山方面に住す、ヴエンド族は六世紀獨逸の北西に移住し來り、現にサキソニーと普魯西の傍近ルサチヤには遺民今に存し、其女は數々子守女として下婢として伯林に發見される。

此各スラヴ民族にして獨立の國を爲してゐるのは、勃牙利族ゝ塞耳比亞族と黑山族とであつて、他はルセアニヤンといひ、チェッキといひ、スローヴアヨクといひ、クロアトといひ、ダルマシヤンといひ、スローヴェニアンといひ皆墺匈國に雜住ひをしてゐる、波蘭族は其國亡びて獨墺に分住し、そして塞耳比亞族の墺匈國に居るもの寡からず、これ大塞耳比亞主義の高調せらるゝ所以、エリヤン人種にして最も多く蒙古と混血したのは、スラヴ民族であらう、蓋し其居る所の然らしめたのだ、故に英人は曰く『露西亞の頭を叩いて見れば蒙古人種の音がする』(露西亞人を一皮剝けば汝は其處に蒙古人を發見するであらう)。

第二　突厥民族、東歐羅巴の民族から叙述し始めたから、序でに土耳格民族即ち突厥民族とルーマニヤ民族と匈牙利民族とに就いて書いて見る、突厥民族は一にチスマンリ又はチットマン、トルコといふ、ジヤキザーチス河に居つたセルジユク、トルコより出てたもので、十一世紀に於て早く回敎の洗禮を受けた、波斯を略し、シリヤ、小亞細亞(一にアナトリヤ)に王國を建設し、十三世紀頃、蒙古民族が背後から推寄せて來たので、チットマンに率ゐられて益す西方に迫み、十五世紀の中葉に於て東羅馬帝國を亡ぼし、都をコンスタンチノープルに奠めた、突厥人は眞の野民士である、生産は其長所ではない、故に突厥國内に於ける平和の事業は全く其征服したる希臘人、勃牙利人、シリヤ人、猶太人の掌中に在る、一九〇九年の秋、私は突厥の都に遊び、ラングンの高塔に登り、左右に歐亞の兩大陸を望み風に嘯んで五律一首を賦した、縹渺神將レ往。殘陽欲レ沒天。落霞高冶外、長笛暮雲前、宮闕無二常主一。國家雖二萬年一。一江分二大陸一。片月濟二千煙一。露西亞に一蹴されて其國が地圖より抹殺されるのは、蓋し遠きにあらず。

第三　ルーマニヤ民族、ルーマニヤはワラシヤ、モルダヴイヤの兩公國より成る、其族はウラヒ(Vlachs)といはれる、英國のウエールス人(Welsh)と其名相似てゐる、或は一民族の西東に分かれたものではないかと言はれる、ウラヒは二世紀羅馬のトラジヤン帝に征服されたスレーシヤ人の一部落なるデーシヤ人の子孫ではないかと言はれる、兎に角羅馬尼亞人は羅典語人民の系統に屬し、スラヴ民族とは毫も關係のないだけは明白である、然しながらゴス、ハン、スローヴニヤン、アルバニヤン、突厥等と混血したのは言ふまでもない。

第四　匈牙利民族、マジヤルといふが正當である、蒙古の一族で、歐洲に現はれたのは一千年以前である、羅馬の領土たりしパンノニヤ、デーシヤを取つて匈牙利王國を建てた、其容貌體格はゼルマン、スラヴ、ルーマニヤンと混血して殆と白化したが、其言語には今尚フイノ、ウグリヤン語系を認みられる、嘗て露兵に蹂躙された、スラヴを好まないから墺國と一とゐつてゐる。

第五　アルバニヤ民族、巴爾幹地方には尙一つの民族がある、それは今問題に爲つてゐるアルバニヤ民族で、スラヴでもなく羅典でもなく、巴爾幹に於ける最も古い民族で、エリヤン人種の最初に歐洲に移住したものではないかと言はれる、そしてこれが羅馬と戰ふて征服された雄猛

なる海賊イリヽヤ民族の子孫ではないかと言はれる。

第六　ゼルマン民族、白耳曼民族は即ちチユートン民族で字を異にしてゐるが義は同じである、白耳曼民族を解せねば歐洲は解せられない、白耳曼民族が始めて歴史に現はれたのは、羅馬の時代で、ライン河からヴイスチユラ河に延長する森林の中に生活してゐた、其社會組織は個人的民主的で、近世歐洲の個人主義、民主々義は實に此民族の貢獻である早くより『高白耳曼』(ハイ、ジャーマン)『低白耳曼』(ロー、ジャーマン)に分たれた、近世獨逸の中央及び南方に住んでゐたのが高白耳曼で、北海及び婆羅的海の低地方面に住んでゐたのが低白耳曼である、高白耳曼の重なるものはゴス族、フランク族、バルカンデイヤン族、瑞西族、スウオビヤン族、墺斯太利族であつて、低白耳曼に屬するものはサキソン族、アングル族、ジユート族、フリシヤン族、フレミツシユ族、バタヴイ族などである、高白耳曼族が今の獨逸民族で低白耳曼族が今の英國民族と和蘭民族とである。

註　ゴス(又はゴート私は英語の發音に從ふ)は東ゴス、西ゴス、中ゴス等が歴史に現はれてゐるが、其現はれてゐるのは紀元三世紀から八世紀までの間で、特殊な民族としては今は存じてゐない、フランク族は五世紀の終り六世紀の始めに於てクロヴイ帝の下にフランク王國を創建して、後之が今の佛蘭西に爲つた、去れど佛人は獨りフランク族ばかりではないことは後に明にする、バルガンデイヤン族は幾多の王國公國を建て、チヤーレス禿頭王(ゼ、ボールド)は其最も名のあるもの、今は佛蘭西のバルガンデーに居つて佛化したが、尚其體型風姿に於てチユートンの名殘を留めてゐる、スウオビヤン族は今も尚獨逸帝國の南西方面なるスウオビヤに居る、英國民族を爲すものはサキソン族、アングル族、ジユート族で、バタヴイ族が近世の和蘭民族で、フレミツシユ族は白耳義と和蘭とに居る、フリシヤン族も和蘭に屬し、北海のフリシヤン諸島に分住してゐる。

第七　羅典民族、人種學的に言へば、羅典民族と言ふよりも、ローマンス民族(Romance Race)といふのが適當である、羅典といふのは古の羅馬人を言ふので、最も精密に言へばタイバー河とリリス河との間に横はる中央伊太利のラチユームの住民を謂ふたのだ、近世の羅典民族とは羅典語より流れ出てたローマンス語を話す人民を言ふので、伊太利民族佛蘭西民族、西班牙民族、葡萄牙民族及び既出のルーマニヤ民族などである。

第八　ケルト民族、近代に於ける歐洲の四大民族は即ちスラヴ、日耳曼、羅典とケルトとである、ケルトは歴史以前佛蘭西及び大英諸島に移住した民族で、シーザーの時代に於けるゴールとベルジー(白耳義國の名は是より起る)及びアングロ、サキソンの移住前英國に居りしブリトンをいふ、ケルトには兩つの枝族がある、一をゴイデリツク、ケルトといひ、一をブリソニツク、ケルトといふ、前者はキユー、ケルト(q celt)後者はピー、ケルト(P celt)とも言はれる、蓋し其言語の特徴から來たので、キユー、ケルトは愛蘭人、マンクス人(英蘭土と愛蘭土との中間にある一小島)高地蘇格蘭人(スコッチ、ハイランダース)であつて、ピー、ケルトはウエールス

人（英國大藏大臣ロイド、ジョージは此民族の出身）コーンウオルス人（英國南海岸）などが代表してゐる。

第九　猶太民族、歐洲の四大民族の外、別に猶太民族あるを記臆するを要す、セミチツク人種の一派で、古い話しだが、紀元前二千年の頃メソポタミヤより迦南（カナアン）に來たアブラハムの子孫なりとされてゐる、後埃及に移住し、更にパリスタインを取らんが爲めに還つて來た、紀元七十年羅馬がゼルーサレムを降服せしむるや、世界に分散するに至つた、今日に於ては國民的の統一もなければ民族としての故鄉もないが、歐米諸國の商權及び財權の大半が彼等の掌中に在るのは、私が茨くに新聞や雜誌に於て說明した所であつた、曩きに日本が獨逸に對して最後通牒を發つたが爲めに日本の公債を賣り且つ日本協會との關係を絕つた紐育のシッフ氏は獨逸のフランクフォート、アム、マインから移住して來た獨猶（シャーマン、シユー）である、彼れが獨逸の爲めにするは英國を惡むからではない、露國を惡むからだ、猶太種にして獨逸に與みするものゝあるは爭ふべからざる事實ではあるが、若し這回の戰爭に於て猶太種は孰れに與みするかといへば、勿論英佛兩國である、英佛兩國は猶太種が多く人種的迫害を受けずして生活し得らるゝ土地である、英猶、佛猶が英佛に同情するは言ふまでもないが、西班牙にせよ葡萄牙（此國の財政は全く佛猶カマンドーなるものゝ掌中に在る）にせよ伊太利（羅馬市長は猶種である）にせよ何も歐洲の猶太種は皆英佛の味方であらう、猶太種は最も露國を惡み、次きに獨逸を惡む、開戰に方つて露帝が特に猶太種に自由を與ふる詔を下されたのは、猶太種の反對を懼れたからである、猶太種は銀行家である、同時に武器製造家である、猶太種が其資金と其武器とを以て協商三國を援助す、獨逸の大敵は實に此猶太種である、そして或意味に於ては、獨逸は軍國であるから猶太種は動もすれば冷遇される、歐洲戰爭は一に之を猶太種の獨逸征伐だと言へる、若し如何に經濟界に金融界に猶太種の勢力大なるかを知るものは、此一點だけでも大に獨逸を危まねばならない、歐洲戰爭は民族戰爭である、此見方からいつても亦民族戰爭ではあるまいか。

註　歐米にはフリー、メーソンと稱する秘密結社がある、表面は相互扶助の團體であるが其裡面は秘密結社で猶太人が其中心だといふ、佛國の如きは全く此フリーメーソンの掌中に在るさうだ、見ゆる佛蘭西が共和國で見えざる佛蘭西はフリーメーソンだといふ。

是を以て觀る交戰諸國は一方が露西亞、英吉利、佛蘭西で、一方が獨逸、墺太利である、故に之を詳に言へば、スラヴ民族、低白耳曼民族（英）羅典民族と高白耳曼民族（獨逸）との戰爭ではないか。

然しながら英國には其主人たるアングロ、サキソンの外に兩ケルト族がある、佛國は羅典民族だとはいふが由來ケルトに屬するゴールとチユートンに屬するベルジートフランクとハミチツク人種に屬するアイベリヤ人と羅馬人とスカンデイネーヴイヤから移住したノルマン族との混血である、獨逸にもケルトもあればスラヴもある、白耳義は佛系のウォルーンと低白耳曼系のフレミッシュがある、佛國を援助すべしと言はるゝ

西班牙にはサラセン人の血が少からず交つてゐる、古い英國の同盟國たる葡萄牙には亞細亞種だと言はるゝバスク族の血もあればケルトの血もあるサラセンの血もある、近世の伊太利はゴスとロムバードとの血を雜へ、近世の希臘は古のヘレニツク族の外、アルバニヤ人、ワラシヤ人、スラヴ人の血を雜つてゐる、そして歐洲には波斯の血も印度の血も流れてゐる。

加之、歐洲人は黑人の土地を奪つて黑人の女を娶つたものさへ寡くはないから、黑人の血さへも流れてゐるとすれば、歐洲戰爭は實に世界總民族の戰爭だといつても必ずしも誇張の言ではあるまい、我々は敍して此處に到りて一事の忘るべからざるものあるを發見する、歐羅巴は世界總民族の充溜滙集した處である、米國に於けるが如く、歐洲に於ても世界の民族が絕えず混血してゐる、歐洲人の世界思想は洵に此根據から發生してゐる、去れど孰れの國でも主たる民族がある、そして一の民族でも相分るゝこと久しければ、異れる言語、風俗、歷史、利害、感情を生じて、各異りたる民族と爲る、此民族が斷えず外より來る民族と同化して了ひ、其民族の理想、方角、歷史を以て之に吸込む

から、一面から觀れば歐羅巴は如何にも世界的だが、他の一面から觀れば歐羅巴は依然として民族割擧して覇を爭ふ舞臺である、そして亞細亞の半島に過ぎない土地に於て相爭ふのであるから、其民族競爭が世界の他の部分では見られない激烈の程度に達するも亦已むを得ないではないか。

日本と獨逸とは膠州灣に於て敵對行爲を取つてゐる、然れどもこは要するに歐洲戰爭の傍生結果(サイド、イッシュ)である、から、私は歐洲戰爭を觀察するには局外者の公平を以てするが最も適當であらうと思ふ、私は一民族が其自我を主張し生活權を主張するが爲めには、時に及んで戰を開いても宜ろしと信ずるものだ、現狀を打破せんとするのは新國では已むを得ない、現狀を維持せんとするのは舊國では亦已むを得ない、私は人間の競爭は善と善(ライト、アンド、ライト)、正義と正義との戰であると言ひたい、若し夫れ孰れが兵を窮め武を瀆かしたかは、歷史の裁判に任かすべきもので、要するに今日に於ては勝てば官軍て、所謂善く

戰ふものが善とされるのだ。

第五　獨逸の作戰竟に如何

獨逸に於ては利は速戰に在り速和に在るは殆ど自明の理である、私は前には維廉二世を中心として立論したから、今度は英佛露（寧ろ英露）を中心として立論すべき順序ではあるが、獨逸は東に於てこそ今尚守勢を取つてゐるが、西に於ては電光石火直ちに佛國に向つて攻擊を取つた、故に我々は先づ何よりも獨逸の作戰計畫を識る必要があるが、私は近ごろ本年二月佛國の兵學雜誌に印刷され歐米に喧傳された獨逸の作戰計畫に關する秘密書類なるものを讀んだ、果してそれが獨逸の秘密書類であるか又は或者の假託であるかは解らない、只不可思議とすべきは過去六週間に於ける戰爭の經過が全く此所謂秘密書類にある通りなのだ、其處で私は之を飜譯するの勞を惜まない。

先づ佛トに對して攻勢を取らん　歐洲各强の衝突は先づ露國が最も利害を有する東方から生ずる筈である、故に若し東方事あらんか、我々は直ちに佛國に向つて宣戰せねばならない、佛露兩國が預じめ計つて攻勢を取るのでなければ、露國の戰備は開戰に際して決して十分に整つてゐない。

墺匈國は賴むに足らず　露國と開戰すれば英國を挑發するやも計られない、從來我々は常に露國に對しては墺國を勘定に入れてゐたが、羅馬尼亞、塞耳比亞、希臘、黑山國は皆露國の側に立つものであるを忘れてはならない、縱し勃牙利、突厥が獨逸の側に立つを以て牽引せらるゝとするも、內紛墺國に生し、爲めに墺國の軍隊をして統一して戰ふ能はざらしむやも亦未だ知るべからず、小心は如何なる場合にも最初に於て墺國の賴むべからざることを命ず。

伊太利は中立すべし　伊國に關しては決して多きを望むべきではない、伊國が深く英國に信賴するを察せよ、優勢なる英佛の地中海聯合艦隊は伊國の艦隊をして危險の位地に陷らしむ、故に伊國はトレンチノ、イストリヤ（所謂未だ恢復（イタリア、イレデンタ）せられざる伊太利にして墺國のアドリヤチック海岸に在り）及びアルバニヤルに關する利益ある約束を得て中立するに若かず、而して我獨逸は伊國に啗はすべき利益なきを奈何せん、去らば我々は最も善く言つて、伊國は『疑ふべき盟國（ヌウトフル、アライ）』といふが可い、我々は何處から觀ても伊國は先づ形勢を觀望し、勝敗の大局略ゝ決するを待つて、勝者の側に立つて以て自國の利益の爲めに活動せん、若し幸にしてウイクトル、エムマニエル王が獨逸に與みして佛國を攻擊すれは、我々が露國と戰ふに

方つて如何ばかりの便宜を得るかは計られない、且つ佛國をして講和條件を承認せしむるに於て最も力あるであらう。

西班牙は協商三國に與みすべし　西班牙は三國協商に與みするに至るであらう、去れど西班牙の動員機能は敏活ならず、其軍隊は訓錬足らず、加ふるにモロッコを占領しつゝあるを以て、其進退は必すしも深く憂ふるに足らず、且つ我々にして大勝を博すれば、アルフホンソ十三世の好戰熱をして氷結せしむるに餘りあるであらう。

英國の態度如何　英國の主力は其艦隊に在り、この艦隊の援護で英國は二個軍團と多數の騎兵とより成れる遠征軍を派遣し得るが、獨逸（ジャーマン）入冦（インヴェーション）の恐怖に襲はれて、英國は長い躊躇の後でなければ、大陸に其主力軍隊を送り得ぬであらう、特に英國は我高海艦隊（ハイシーフリート）を全滅した後でなければ、大陸派兵を遣らぬかも知れない、若し英國の態度にして此れに出たならば『晩かりし英國』と謂はざるを得ない、若し我々にして時を失はずに露佛孰にかに向て決勝的打撃を與へ得れば、大陸に於ける勝敗の數は早く已に定つたと言へる。

我れ先づ二國の中立を破らん　知らず英國は何の地點に於て其兵を上陸せしむべき、直接英軍の我海岸に上陸するは、先づ我艦隊をして無能ならしめた後でなければ爲らない、從ふて多くの時間を要するから、毫も意とするに足らない、若し英國にして其軍を白耳義に送らんと爲らば、是れ直接佛國を攻撃せんとする我軍の行動に影響を與ふるものである、何となれば獨逸は大抵の場合路をルクセンブルグ公國及び白耳義に藉りて佛國に入らんとすればなり、果して然らば我々は先づ二國の中立を破らねばならないから、白耳義の敵對を豫期しなければならない、我々は其右翼及び後方に於て英軍に依りて援助された白耳義軍に對して自ら護らねばならない、此二國を犧牲に供するは獨逸の進軍の爲めに必要已むを得ない。

佛國を後にするを得ず　孤立したる獨逸が恐らくは直接英國に援助せられ、更に露國と共にする佛國に對する戰に於て決して佛國を後にするを得ない、獨佛の國境はメッツとチョンヴィルを中にしてバスルからストラスブルグに至るまで佛國を防ぐには十分の設備がある、之に反して東に於ては要塞防禦の完備せるはブレスラウ、ポーゼン、トルン、ダンチッヒの一線であつて、シレシャと東普魯西の全部は殆と無防禦の狀態に殘してある、然るに二十萬乃至三十萬の兵は三週間にして瑞西よりルクセンブルクに至る獨逸を防衛するに足りる、去れど若し我々にして西佛國に對して專ら防勢に出でたならば伊國は我が爲めに立たぬであらう、而して英國及び西班牙に與ふるに兵備を整頓するの時間を與へる。

英佛をして中立二國に入らしむべからず　我々が專ら獨佛の國境を防禦すといふは、佛國が二國の中立を尊敬すべしとする假定の上に立つのである、去らば若し佛國にして二國を經て侵入し來らば如何ルクセンスルグは固より佛軍に抵抗する能はず、白耳義に至つては

縦し其中立を維持せんとするも、佛軍に援助された英國は能く此決心を鞏さしむべし、且つ獨逸は白耳義をして英軍に抵抗せしむべき位地にあらず、故に獨逸は英佛をして二國の中立を破らしむる前に先づ二國を經て佛國に入らねばならない。

佛の主力を粉砕するを急とす　露國は動員するに多くの時間を要す、獨逸は三週日若くは四週日自在に佛國に對して攻勢を取ることが可能る、若し神算を以て決戰的勝利を得れば更に妙だ、佛國將校の自尊心は露國の準備の完成するまで待ち得ぬであらう、又佛國の輿論は長く敵兵をして内地を縱横に蹂躙するを許さぬであらう、故に攻勢を取つて龍虎相搏つは兩軍に取つての必要だ。

（最も明白なる誤算）開戰二週日にして必ず一大衝突があるは確かなことだ、若し此衝突にして獨逸の利に歸せば、露國はいざ知らず英國と西班牙とは必ず拔き掛けた刀を鞘に收めるであらう、伊國をして我軍に加つて協同戰鬪を爲さしむることが可能やう、佛國は或は最初の一戰に於て利用し得べき兵力を殲くして、一蹶復た戰ふ能はざるに至るかも知れないで、我々の提出した講和條件を呑み込むに至るであらう、若し我數十萬の兵にして伊軍と共に新に獲得した地域を守るならば、直に大兵を東、露國に送り得る（これ最も明かなる獨逸の誤算ではないか）

東はオデル河まで退くも可、若し我々にして佛國に勝つに先ち、露國が其戰鬪準備を整へて東普魯西とシレシヤの一部を侵すも、苟も我防禦軍にして敗戰せざる限りは我々は何の失ふ所はない、我々は退いて我要塞に入るも差支はない、場合に依りては敵をしてオデル河まで迫らしむるも可（亦以て獨逸の東に對する戰略を窺ふべし）

四週間は露國に對して防勢を取るべし　第四週日の末日までは東に於ける獨逸の司令官は縱しやオデル河まで退却するも、斷じて優勢なる敵と交戰すべからず、佛國に於ける最後の勝利は露國に對して決戰的動作に出づる先決條件である。

瑞西を敵とする勿かれ　モルトケ將軍は唯四十萬の兵を用ひしのみ今日の作戰計畫は百萬の兵を動かし得る、此大兵を展開するには四百キロメートルを要する、ベルフホールからルクセンブルグ公國までは餘りに距離が短かい、故に我々の戰線は獨佛國境よりも延長せられねばならない、獨逸もさうだが、佛國もさうだ、夫らは南を用ひんか、武器を取つて起てる瑞西は獨逸の左翼に非常な危險を與ふるのみならず、瑞西の地は大軍を通過せしむるには餘りに險岨である、殘るものは白耳義とルクセンブルグとのみではないか、二國は我々を停めることが可能ない、然しながら我敵をも停めることが可能ない、白耳義を敵にするは瑞西を敵にする程手剛くない。

右翼を巴里に投ぜん、獨逸に取つての最大要務は獨逸の右翼をして敵の左翼よりも優勢ならしめ、敵を撃破して直に巴里の方面に進出するに在る　此目的を達するには十軍團の兵をしてシールクからサンウイツトの間に活動せしめねばならない、又且つこの大軍の右側

に於て豫備六師團を以て敵が其左翼の外部及び背面に備ふる軍隊に當らしめねばならない、右翼は專ら進み、左翼はストラスブルグから出發するも最も愼重の態度を取る、場合に依りては左翼及び中軍は退却しても可い、要塞が敵を喰ひ止むるに十分である、我々はアルサスに於て、ッホスゲに於て、トリユーッエに於て、チョンヴィルからメッツの國境に傍うて、其兵力を經濟することが可能る、そして獨逸は開戰八日にして軍の輸送を終り、左翼と中央とは第九日に於て進軍を開始し第十日に於て佛國境に入らん（獨逸は餘りに白耳義に對して樂觀したやうだ）

此等が所謂秘密書類の要領である、恐らくは秘密書類てはあるまい、或者の假託かも知れない、去れど此度の戰爭に於て獨逸が此假託を實現し若くは此假託を實現せんと努力したのは何人にも忽ち明瞭に承認し得べき所てあつて、苟も此假託を讀んだもの丶驚嘆を禁じ得ない所てある、此れは假託であらう、去れど豫言である識言である、そして今は歷史である、之を讀みもて行く間に獨逸の長短が悉く暴露して來る、廟算の歷々たるものがあるが、中には遺算の掩ふべからざるものがある。

第六　獨逸は戰局に於て敗者たり

日本の新聞紙ては獨逸は全然黑く（ペインテッド、ブラック）描かれてある、外電が都て協商三國より打せられるのが其一の理由、夫れから日本が英國とは同盟國である、露佛兩國共に協商ありといふのが其二の理由、最後に日本が膠州灣に於て獨逸と戰ひつ丶ありといふのが其三の理由、然しながら私の見る所を率直に言へば、日本は唯膠州灣に勝ちさへすれば善いのだ、南洋に向つて進行曲を奏したいが、日本は狹く既に同盟國の爲めに其自由を縛せられてゐるといふ外電があつた日本民族は最も嚴肅な且つ莊重な態度てこの戰爭の發展及び歸結を見て、以て後圖を爲すのが一番の得策なのてはないか。

私は決して所謂一秘密書類を楯として論ずるものではない、私は曾て『バーンハーデー將軍の『アワー、ネッキスト、ウオア』を讀んだことがある、又獨逸に關する書物は多少目を透したことがある、這回の開戰は

確に獨逸の作戰計畫の如くに發展したのは殆ど疑ふの餘地がない。

獨逸の利は速戰に在り速和に在り、所謂內線作戰(インナア、ライン)を遣つて、先づ佛國の主力を潰亂殲滅し、轉じて露國に向つて大打擊を與ふるに在るのだ、或は三週間にして或は四週間にして或は六週間にして佛國の主力を潰亂殲滅せしめねばならないといはれる、六週間は四十二日で八月一日から計算すれば、佛國の主力は既に九月十一日に於て潰亂殲滅せしめねばならない譯だ、勿論多少の餘裕を與ふるとするも、獨逸は最早佛國を片附けなければならない譯だ、佛國は都を巴里より慕留都(ボルドウ)に遷した位だから、佛國が其始めに於て連戰連敗して居つたのは爭はれない、そして獨逸は豫定計畫の如く先づルクセンブルグと白耳義の中立を破り、力を右翼に注ぎ、此方面に於て先づ敵を破り、一氣巴里附近まで殺到した、白耳義に於て十三日もリエージに遮られて居たが、一たび佛國境に入つては破竹の勢を以て進軍したらしい、何でも一日七八里を進軍したので、殆ど演習に異らないと言はれた、英軍は最も勇敢に戰ふて退却したと報ぜらる、最も善く戰ふて最も善く敗れると報ぜられた、或處で英軍は獨軍の爲めに包圍せられて、殆ど全滅せんとし、此報到るや、英國は上下擧げて戰慄したと報ぜられた、私は實に英佛兩軍が受けた損害を知りたいと首を延ばしてゐるが、それが一向に報ぜられない。

然しながら獨逸の豫定計畫に狂ひを生じたのは、必ずしも白耳義が死力を出して獨逸に抵抗したのではない、其陸軍は志願兵より成り、所謂善く戰ふて善く敗れる英國が此戰爭に參加したのであるといふことを忘れてはならない、獨逸が墺國を賴んでゐなかつたのは明白なる事實である、國內十七の異民族を有し、而もスラヴ族に屬するもの二千五百萬の大多數あるを以て、軍隊が果して統一を保ち得るや否やを危んだのは言ふまでもない、故に少くとも戰爭の始めに於て獨逸が墺國を賴んでゐなかつたことが解かる。

華盛頓に在る獨逸の一武官が『伊太利は墺國を救ひせす(イタリ、ヘズ、ノーラヴ、フホア、チーストリヤ)』と喝

言した、伊國が中立の態度を取つたからとて、それが直ちに獨逸に向つて意外の出來事（アンエキスペクテツト、イヴエント）とは言へない、羅馬法皇の宮廷は舊敎國といふ關係からして墺國のハップスブルグ家と親善である、民族と民族との利害感情の衝突は姑く置き、同しく舊敎ではあるが伊國のサヴオイ家（伊國皇室）はヴアチカン（法皇宮廷）とは歴史的に善くない、ヴアチカンと善くないサヴオイ家が自然にハップスブルク家と善くないのも已むを得ない、去れば羅馬法皇が居仲斡旋の意ありといふは、畢竟するに同盟二國の爲めにするのであらう、然しながら獨逸が百方伊國を誘ひつゝあるは事實である、伊國にして獨逸に加擔すれば、何の位『速戰速和』の目的を達するに便宜があるかは計られない。

故に私は最も公平なる位地に立つて獨逸の作戰計畫に狂ひを生じたのは、墺軍の孱弱なるが爲めでもない又伊國の中立した爲めでもないと明言する、作戰上の事は私が容喙する限りではないが、佛國に於て獨逸が全線に亘つて退却し、遂に佛國を空しくせねばならなくなつたと報ぜられた（九月十六日）後報を按し又專家の說を聞くに獨逸は作戰に於て大なる齟齬を生じた、其作戰上の得失は專家の說に問いて日々新聞紙上に現はれるてあらうから、私は此には略するが、獨逸が英國を後援とする白耳義の爲めに其作戰の根本に大なる錯誤を生ぜしめられたのは爭はれない。

露軍が伯林に達するは容易の事ではない、如何に露軍が全勝の勢に乘ずるも、恐らく遂に伯林には達しられまい、獨軍がペトログラードに達するよりも、露軍が伯林に達するは勿論容易てはあるが、露國の士官が『我々が伯林に達するは尙遠し』（ウイ・アール・イエツト、エ・ロング、ウエイ、フ・ーム・ベルリン）と言つた、又或專家の說く所に依れば、露軍は到底オデル河以西に進めない、後方勤務が何うしても之に伴はないからだ、孰れにしても獨逸は東に於ては始めに於て防勢を取るの戰略てあつたに相異ない、西に於て攻勢を取れば、東に於て防勢を取るは已むを得ない、獨逸は實際場合に依つてはオデル河までフオール、バックする積りであつたらしい、然るに墺國の反覆せる哀求に依り、未だ佛の主力を殲滅せざるに方つて、八個軍團の兵を割いて佛國より東境に移したのは、殆ど常識を以てするも、其愚實に測るべからざるものがある。

孰れにもせよ英國がウイリアム、ピットが奈破烈

翁戰爭に對すると同一の決心を以て此戰爭に參加したのは、獨逸をして戰鬪に勝つても戰爭に敗れしむるに至つた（Germany is winning battles but losing the war）今や戰鬪にも亦敗形を曝露するに至つた、何人も當初此戰爭に英國が參加すべしとは信じなかつた、維廉二世も帝國首相ベトマン、ホルベーヒも外相ヤゴーも英國は之に參加するものではないと信じてゐたらしい、維廉二世が英國の勳章を地に抛つたので見ても個中の消息が解る、又獨逸は百方英國をして局外に立たしめんと努力したらしい、比斯麥克の故智に倣ふて、倫敦のタイムスに獨露間の外交文書を提供し、之を公にして、開戰の責露國に在るを明かにし、以て英國の輿論を制せんとして、タイムスの爲めに拒絕されたといふことさへ傳つて來た。

　起たないと信ぜられた英國が起つに至つたのは能く〳〵の事でなければならない、私の言つた如くに、獨逸の目指す最終にして最大の敵は實は佛國でもない露國でもない、全く英國である、果して然らば英國にして若し其位地の危險に自覺したならば、其敵の獨逸なるを知り、早きに及んで之を鎭壓するの利なるを了せねばならない、そして私の聞く所に依れば、壯年の海軍大臣ウインストン、チャーチル（四十二歲）が英國內閣をして開戰に決せしめた最大動力だといふ、獨逸が一時に陸に佛露、海に英國を敵として戰ふは必勝の途ではない、敵を少くせよ、そして其敵を鏖滅せよ、そして更に他の敵を鏖滅せよ、獨逸は英國を中立せしめて置いて、先づ陸に佛露を平げ、次ぎに海に英國を平げやうといふ蟲の善い計畫をしたのだ、然るに英國は獨逸の裡を掻き、獨逸が陸に戰ふに乘じ、且つ獨逸造艦計畫の未だ完成せざるに乘じ、海と陸とに於て全力を擧げて獨逸と戰を開いた、英國は慥かに大局を制したではないか、縱し戰鬪に失ふても戰局に得る所ある餘地を造り出したではないか。

　英國にして中立せんか、白耳義は決して抵死獨逸に對抗せず、獨逸は容易に佛國に侵入し得た、佛國にして西歐に孤立すれば、獨逸の佛國に勝つは萬里の長風

が根なき浮雲を一掃するが如き勢であつたらう、此勢に乗じて維廉二世をして馬首を回らして氷河の如くに動き出したスラヴに對して眞成一擲乾坤を居らしめば、其勝敗は未だ俄に知るべからず、英國が中立したとすれば倫敦から羅馬に來る壓迫は自然に強くない、從ふて伊國も強い者に捲かれて獨逸と共に戰ふたかも知れない、土耳格も速に獨逸の側に立つて開戰したであらう、斯うなれば羅馬尼亞、勃牙利は喜んで獨逸の爲めに犬馬の勞に服するであらう。

獨逸の豫定計畫通りではないか、速戰速和の豫定計畫通りではないか。

意外にも英國が參加した、白耳義が抵死對抗を試みる、英國は白耳義の中立を擁護せんが爲めに兵を送る、英國の司令官は隨時佛の司令官と協同戰鬪をするの權を與へられてゐる、動もすれば寂寞を感ずる佛民族は激勵し慰藉し生死を共にする味方を得た、英軍は其始めに於ては大兵を送り得ないやうだが、次第に其數を加へられる、英軍訓練足らずとするも、數は力なり、英軍五十萬は獨逸と雖も之を無視することが可能ない、且つ久しく戰場に馳驅すれば弱いものも強くなる、伊國は固より動かない、土耳格も動げなくなるかも知れない、獨逸の味方だと數へられたものも、斯うなれば形勢を觀望して山を下らない、全く西を片附けない中に東を顧みねばならなく爲る。

英國の參加は大勢を一轉したではないか、獨逸の豫定計畫に狂ひを生じたではないか、速戰速和の豫定計畫に大なる狂ひを生じたではないか。

歐洲戰爭は或意味に於ては維廉二世とカーツームの英雄キツチエナーと佛國の參謀總長として『彼れ何時でも噛むの用意ある番犬だ』と言はれたジョフレ將軍と露國のミフネウイッチ、シフケノウイッチ將軍との格鬪である、維廉二世は其天才に於て遠く群を拔いてゐるに相異ないが、彼れにはフレデリッキ大王、維廉一世の鐵意がない刻苦がない深沈がない大度がない隱忍がない持重がない精刻がない深酷がない、英國が中立すべしと信じて先づ之を確めない中に露國に宣戰し

たのは、即ち其性格上の弱點を語るものではないか、驕傲敵を輕んずとは其れ維廉二世の謂ひか。

第七　露國の位地

露西亞は少くとも一年は干戈を戢めない決意だと傳へられる、私は曾て露國に遊んだ、スラヴは單純にして無慾、西歐打算の國よりして、太古惇朴の風あるスラヴと混ず、一種の快感を禁じ得ない、疎野であるが社交的である、其社交的なるは寧ろ言語應酬の上てはなくして、實物贈答の上に在るのだ、汽車などて私を包圍せるスラヴは或は煙草を與へ或はビールを與へ或は葡萄酒を與へ、砂糖とレモンとを入れた茶を喫めと勸むるものもある、オーッカを飲めといふものあるに至つては反て有難迷惑であつた、露西亞は如何にも平な國である、所謂『天如二穹廬一掩二四野一』日が地平線から出てて地平線に入る、平な國であるから『漠然國』といふが最も適當である、此漠然國に棲息するスラヴの漠然として不得要領なるは無理もない、露西亞は水の海でなくして土の海である、土より外には何ものもない、而も其土は極めて平だ、其一大農國なのは故ありと首肯れる、然り最も平凡な農國である、露西亞に遊ぶものは、第一に其自然の平凡なのに驚く、平凡も此に至つて奇絶と謂へる、露西亞は地理上からいへば歐羅巴の滿洲である、支那本部ではない、ドニーペル河やドン河は決して黃河、楊子江の如くに文明を產まない、露西亞は之を『世界の裡店國』だといへる、裡門があつて表門のない世界の大國てはないが、婆羅的海といふ裡門はある、北極洋に面する白海にはアーチエンジエルといふ港がある、然るに南方に於て黑海は突厥に鎖されてゐる、波斯の北半面を其勢力範圍としてゐるが、波斯灣までは未だ大分ある、日本海は第二の黑海で日本に鎖されてゐる。

露西亞は北半を以て『材木國』といひ得るならば、南半を以て『穀物國』だといひ得る、南半は實に歐洲の穀倉であつて、ベサラビヤ、キエフ、チエルニボッの三州さへ實れば、猶支那に於て兩湖實らば天下は饑

えずといはるゝ如く、全歐洲に小麥を供給し得る、北に行くに從ふて、森林漸く多く、遠く獨逸と相連つてゐる、所謂『自由は獨逸の森林より生ず』といふは、此森林の續きてある、趙甌北の語を藉りて言へば『樹海』である。

スラヴは遠いといふことを知らない、豆腐屋に三里酒屋に五里といふが、露西亞は仲々そんなものではない、隣村に行くにも宿りがけてある、急いでは間に合はない、ノッソリとするのも當然だ、紅なる花もなければ綠なる柳もない、松の並木の間に隱見する富士の山もない、日本人は急ぎながらも路草をする、單調な自然の中に住するスラヴは全て反對だ、ノッソリと歩きながらも、決して左右を振向かない、振向かないのも無理はない、西東北南孰を振れ向ひても地平線てある、若し佛蘭西人は刀を見れば斫られぬ前から血を流す民族だとすれば、スラヴは斫られてから後てオャ痛いぞと感ずる民族てある、何にも隱くさない、惡事をも語る、賄賂を取つたことも語る、盜賊したことも語る姦通したことも語る、官金を費消したことも語る、そして何事もニチエオ（仕方がない）て濟まして了ふ、スラヴは自然の平板と單調とに堪へない、之を破らんが爲めに好んて極端から、極端に奔る、忽ち平和、忽ち好鬪、忽ち悲觀、忽ち樂觀、忽ち眞面目、忽ち滑稽忽ち親切、忽ち殘忍。

露西亞は農國であるから保守の國、支那及び米國と相似た大陸的空氣がある、露西亞に向つて長足な五彩燦爛たる文化の發達を望まれない、露西亞は『依然國』てある『相變りもせず國』てある『不老不死の國』てある『泰然自若國』てある『平氣の平左衛門國』てある。

然しながら露國も最早漠然國としては居られない、相變りもせずては居られない、泰然自若、平氣の平左衛門ては居られない、東は日本に辱められ、西は獨墺二國に辱められ、南進の宿志は遂に成るなし、今日一たび西隣の二强に對して戰を開く、獨逸に向つて一大打擊を與ふるまては決して引込めない、暴風雨がスラヴの國から起つた、それが遂に如何なる變化を世界に

與ふるであらうか、孰れにしても此戰爭に於てスラヴは大なる曉(ドーン)が彼等の眼前に燃えてゐるのを見た。

佛國や墺國が二大强國だと言はれるは、歐洲に大規模の現實暴露、偶像破壞が行はれない以前のことだ、私は墺國の運命を語るに忍びない、獨逸が勝つても損をする、負けても損をする、獨逸が勝つたならば、或は其國家を全うするかも知れないが、益々獨逸に依存せねばならなくなる、フランツ、ヨセフ老帝の無事で居らるゝ間は遠慮もしやうが、陛下百歳の後には、或は獨逸聯邦に入れられるかも知れない、若し獨逸の敗れた場合には、アドリアチック海一帶はアルバニヤと共に伊國の有に歸するかも知れない、塞耳比亞は墺國内の塞耳比亞民族を合して大塞耳比亞の夢を實現するかも知られない、匈牙利は墺國と分離して巴爾幹同盟に入りて自ら全くするかも知れない、ガリシヤ一帶は固より露國に入るであらう、唯英國が中央歐羅巴に一個の緩衝國として墺國を存じて置きたいといふ希望があるから、獨逸の敗れた場合には、反て其憫れな獨立を全くするかも知れない、靜に考へれば運命は奇なものである、そして獨墺同盟は此に過去の歷史の扉の中に入つて了ふ、戰後の歐洲には、戰中の歐洲に於て既に獨墺伊の同盟がないやうに、獨墺同盟がなくなるかも知れない、有つても告朔の餼羊に過ぎぬかも知れない、佛國にして若しこの戰爭に於て終始あるを得ば、そは同盟國の賜なりといはんよりは寧ろ英國がこの戰爭に參加した賜である、縱ひこの戰爭に勝つてアルサス、ローレン二州を恢復するも、到底第二流に墮ちねばならぬ國であるプーランゼー將軍のレヴアンシュ(復讐)の呼聲も畢竟空元氣であつた、一九〇五年モロッコ問題起り、獨艦パンテルのタンジールに現はるゝや外相デルカッセは最も强硬なる態度を取らうとした、大統領ルーヴイエー俄に閣議を開き、閣員の意見を問ふ、デルカッセ曰く、艦隊を派遣すべきのみ、大統領曰く、これ開戰を意味するに非ずや、顧みて陸軍卿に問ふ、陸軍卿曰く、佛國は如今到底戰ふに堪へずと、デルカッセ是に於て乎、議の容れられざるを知り、辭表を捧げて出づ、爛熟した文明、頹廢した生活、私は佛國が他年遂に其殖民地から徹退するに至るの日來るとも之に驚かぬ。

佛國も伊國も皆羅典民族である、羅典民族として生の疲態(エンヌイ、オヴ、ライフ)に堪へない、墺國獨逸人は羅典化した獨逸人である。

最も未來のあるは何うしてもスラヴ民族であらう、西歐洲は既に花を開き實を結んだ、所謂言ふべきものを言ひ盡くした、獨逸は今言ひつゝあるが、この戰爭が其外交の誤算よりして戰局にも戰鬪にも敗を取るとすれば、其未來は容易に明言すべからざるものがある、露西亞に至つては今まで餘りに勝つたことはないが、去りとて負けたといふことを感じない民族である他國が徹底之を負かすといふことが可能ない民族であ

る、若しノッソリとしてゐなかつたならば、露國の黒鷲旗は疾く既にコンスタンチノープルに飜つてゐたであらう。孰れにしてもスラヴが其陰欝なグルーミーな背後の自然から逃れ出て、紅花綠葉の溫地を求めたいといふは、其巳むに巳まれぬ要求であらねばならない、蒼白いそして暗い北の曙から南の方陽光の滿てる眞晝に出て來ねばならない、あの寂しい白夜の光景とあの黒い地平線から出て來て、世界の進歩と歷史の過程に一大轉化を起さねばならない。

　そして露西亞が南進するには先づ伯林を經由せざるべからずとすれば、スラヴは唯宜しく決勝的戰爭をゼルマンに向つて挑むべきである、日本は感情に於ても利害に於てもスラヴの勝利を祈る理由がある、若しゼルマンに勝つて隨意に南進する能はずんば、他日復た維廉二世は遙に天の一方滿洲の野を指して、スラヴに向ひ、汝の進むべき路は唯西伯利亞の一路あるのみ、亞細亞人は宜しく亞細亞人と戰ふべきのみと言ふに相異ない。

獨逸の利は速成速和に在る、スラヴは鈍し重し、其利は遲戰遲和に在る、今や大局は獨逸の速成速和を艱難ならしめた、獨逸は戰局に於て窮するのみならず、戰鬪に於ても亦必ずしも勝者たり得ない形勢を生じて來た、勝利が遲戰遲和を利とする露國に在りスラヴに在るは、殆ど疑はれない。

第八　英國の位地

　日本人は春秋義戰なしといふ漢語を耳學問で覺えて、動もすれば戰爭を正邪に別けたがる、日清戰爭は義戰だ、朝鮮の獨立を擁護する義戰だといつた、然しながら一國家は專ら他の國家の爲めにのみ其興亡を賭して、戰ふことは可能ない、其國家自身の名譽、權利利益を主とせねばならない、而も利益なき名譽權利は畢竟するに空名空權たるに過ぎない、故に國家は專ら其民族的生活の利益を基準として其進退を決すべきものである、歐州戰爭に對しても開戰の責任は獨逸は二コラス二世に在りといひ、協商三國は維廉二世に在り

といふ、英國の如きは佛國の滅亡を觀るに忍びない、白耳義の中立を擁護せねばならないと言つて兵を按して起つたのであるが、然らばこれこそ英國の義戰であるかといへば、決してさうではない、若し獨逸にして縱に大陸に於て露佛に致命的打擊を與へしめば、次ぎに致命的打擊を與へらるゝものは英國である、英國も無論其國民利益(ナシヨナル、インテレスト)の爲めに戰ふたのだ、佛國と共に戰ふは佛國にして一敗地に塗れしめば、獨逸の勢力獨り伸長して、爲めに大陸に於ける權力平均(バランス、オブ、パワー)を失ふからである、白耳義の中立を擁護するは、白耳義が獨逸の有と爲れば、直ちに其孤嶋生活を脅かさるゝからだ。

　獨逸は軍備擴張の張本たり、故に擊たざるべからずといふも、私は一國が其軍備を如何なる點にまで擴張すべきかを決するは其國の權利であると信ずる、國家主權の作用は決して他の容喙を容るべきものではない、去れど一國が膨脹の雄心を抱いて軍備を擴張すれば、近隣の諸國は自然に恐怖を感ずるは已むを得ない其場合には近隣の諸國は宜しく自衞の計を爲すべきものだ、若し國貧にして自衞する能はず、又は防禦の準備を怠りて爲めに其一國に乘ぜらるゝが如きあらば、それは乘せられたる國の罪である、故に隣國の軍備を制限せんとならば、我力を以て軍備の益なきを知らしむるより外はない、力の伴はない說法は權威のない說法である、一民族が他の民族を凌いで强者たらんとするは疑ひもなく進化の一作用だ、强者たる意志(ウイル、ツー、パワー)を抱いてゐるといふことは、他から惡まれる原因には爲らうが、是を以て罪惡なりとはいはれない。

　英國は數々獨逸の海軍擴張を愁訴する、英國の利益からいへば無論當然であらう、然しながら英國が永遠海上優勢(スープレマシイ、オヴ、ゼ、シー)を把持せねばならぬといふ天の明命は何處に在る、若し英國が海上優勢を把持するが英國の利益だとすれば、英國の海上優勢を打破するが獨逸の利益かも知れない、一は現狀維持を以て其利益とし一は現狀打破を以て其利益とす、若し强いて正邪を別ちたいといふならば、双方共に正なり義なりといふより

致方はないではないか、淡人曰く四時の序功を成すものは去る、西人曰く國民は個人の如く生れ榮へ且つ死すと、若し新舊交代の觀點の上からいへば、私は獨逸が英國の海上優勢を打破せんとする努力に同情する。

若し獨逸をして英國を顧みるの憂なくして專ら露佛と衡を大陸に爭はしめば、二國の蹉躓は殆ど自明の事實であつた、二國の敗局を轉じて勝局としたのは、英國がドーヴアー海峽の彼方から星馳電發、大陸戰爭の旋渦（ヴォルテックス）に投じたからだとすれば、この歐洲戰爭は事實英獨二國の決闘だと言ふが適切だ、若し獨逸の利は速戰速和に在りとすれば、英國の利は露國と同じく遲戰遲和に在る、問題は遂に推詰つて獨逸は克く速戰速和の目的を達し得らるゝ乎、英國は克く遲戰遲和の目的を達し得らるゝ乎といふに歸着するではないか。

獨逸は英國の參加したが爲めに速戰速和の目的を達し得られなくなつたことは既に明白である、去れどもこは獨逸側から觀たのだが、去らば英國側より觀て果して遲戰遲和の目的を達し得られやうか。

獨逸が假に軍費に窮し假かに糧食彈藥に窮するとは思はれない、紐育タイムスの報ずる所に依るも、列強共に金準備に對して大なる用意をしたらしい、租税も賦課される、愛國公債も募集される、英佛露白諸國は糧食には事缺かない、恐らくは彈藥にも事缺くまい、何處からでも自由自在に輸入することが可能る、獨逸は一年十箇月の糧食を産ずるが、他の二割三割は之を外國に仰がねばならない、瑞典諾威は丁抹を經て若くは波羅海から獨逸に糧食を輸入してゐる、鐵軌に中斷せられない限り巴爾幹地方の糧食は羅馬尼亞を經て輸入される、英國のジー、エッチ、ウエルス氏は書を米國の新聞紙に寄せて米國船が和蘭を經て糧食を獨逸に輸入しつゝあるを訴へてゐた、去りながら獨逸は波羅的一海が開いてゐるだけで、其以外海陸共に包圍されてゐる姿である、南のアドリアチッ海は無論英佛聯合艦隊の爲めに封鎖されてゐるであらう、史家モムゼンは二千年前の羅馬を亡ぼしたものは食料の不足であつた、二千年後獨逸を亡ぼすものは同じく食料不足の爲なりと言はしむる勿かれと言つた。

果して然らば戰の遲くなるだけ獨逸は軍貨に於ても食料に於ても彈藥に於ても窮迫を加へて來ることは殆ど疑問とするに足らない、之に反して協商三國は戰の遲くなるに於て大なる苦痛を感ずること決して獨逸の如く甚しからざるのみならず、遲く戰ふて遲く和すれば始めて絶對的に獨逸を降服せしめ得るではないか。

そして此形勢を馴致し、獨逸を形格勢禁の位地に擠したのは英國なりとすれば、獨逸國民の怨恨は長く英國の上に在るであらう、維廉（カイゼル）二世は狂人として讓位せしめられ、聖、ヘレナに配所の月を眺むるに至るとも獨逸國民の怨恨は綿々として決して盡くることがあるまい。

『避戰遲和』は既に確實のやうではあるが、我等は世界に散在する英國の領土にこそ危險の存在することを忘れてはない、我々にして之を知るにあらずんば國際政局を學び得たものとは言はれない。

加奈陀と濠洲とニユージーランドとは此際問題にはならない、英國人蘇格蘭人愛蘭人等が主として移住した地方であるから母國に向つて援兵を出すのも決して異數ではないが、南阿コムモンウエールスは自ら之と相異つてゐる、其多數を占むる白人は和蘭種なるブアーである、一たびはオレンヂ共和國、トランスヴアール共和國を建てたが、チエームバーレンの時代に亡されて英國の領土になつた、このブアーが最後まで英國に忠義なるや否やは自ら問題であるが、此度は何處までも英國に忠義なるべしと決議してゐる、兎に角ブアーは輕々しく動くものではないらしい、英國は此外に印度があるを忘れてはならない、印度反亂(インデイヤン、ミユチニー)の昔は今言はず、近く駒形丸事件に就いて見ても、印度人が英國に對して積不平のあるは掩ふべからざることだ、加之ならず、印度の青年にして新しい教育を受けたものは殆ど皆革命黨である、印度獨立黨てある、バンデマタラム黨である、此革命運動は全世界に擴がつてゐる、然しながら倫敦よりの海底電信(ケーブル)は印度土人州の各マハラジヤが皆英國に忠實なることを報じてゐる、一般人民も亦自國の戰のやうに這回の戰爭に熱中してゐるやうに傳へられてゐる、タイムス、オヴ、インデイヤも亦同一の事を書き立てゝゐる、英國に不利益なことは一つもない。

土耳格の去就はこれ亦英國及び佛國の大問題である、土耳格の蘇丹(スルタン)は即ち回敎徒の羅馬法皇である、土耳格が獨逸に味方して開戰すといふは一は北、高加索に於て露軍を牽制するといふ意味になる、一は南、其舊領土たる埃及に侵入して、英國を威嚇することになる、此場合には土耳格は英國のブレツトルート(麵麭の路)といはるゝ蘇士運河を破壞するといふ說さへある、蘇士運河を破壞すれば、印度への、濠洲への、東洋への航路は中斷せられる、去れど土耳格の起つは更に大なる意味がある、回敎徒のカリフとして土耳格皇帝が回敎徒を煽動することだ、回敎徒は太西洋に面する阿非利加のモロツコ(佛國の勢力範圍)アルヂエリヤ(佛國の領土)チユニス(佛國の保護國)トリポリ(新に伊國に歸す)埃及及びスーダン(共に英國の保護に屬す)に居る、阿剌比亞にもシリヤにも小亞細亞にも波斯にも居る、印度は三億の人口中八千萬が回敎徒である、中央亞細亞から支那本部に入り滿洲に至つて畢る、沙漠の住民＝サハラ＝阿剌比亞＝波斯＝戈壁の住民は皆回敎徒である、其數は約二億(セイニヨボ氏西洋文明史)と註せらる、西には基督敎國あり東には佛敎國あり、其中間に橫はるのは即ち回敎國である、若し所謂神聖戰爭(ホーリー、ウオア)にして布告せられ、此等の回敎徒にして煽動鼓舞せられたならば、印度、埃及に於ける英國、モロツコ、アルジエリヤ、チユニスに於ける佛國、トリポリに於ける伊國は其艱難名狀すべからざるものがあらう、そして遲戰遲和の目的が達せられなくなる、獨逸の新聞紙が英國は黃人たる日本人を誘ふて獨逸の敵たらしむ、蓋し獨逸は回敎徒を煽動して英國をして講和するを餘儀なくせしむべしと言つたのは個中の消息を洩らしたもの

だ、維廉二世が常に自ら回教徒の擁護者を以て任ずるも亦之が爲めである。

勢の伸びるに方つては『疑はしき味方』も『慥かな味方』になり、勢の蹙まるに方つては『慥かな味方』も『戈を倒にする敵』となる、これがユニヴアサル、マインドである世態人情である、英國は固より此等の問題に對して如才はなかつたらうが、英國は戰爭の大局を制してゐる、斯うなつては獨逸の『疑はしき味方』は勿論『慥かな味方』さへ、此際は維廉二世を鬼ケ島征伐の桃太郎とし、一つ下さい御伴致しませうとは言はなくなる、果して然らば英露は遲戰遲和せざるも、猶勝算あり、獨逸は速戰速和するも猶勝算なしといふ形勢を逼出し來つたのではないか。

第九　獨逸別に術ある乎

戰爭は大海の波瀾の如く一進一退一弛一張あるを免れない、維廉二世が如何なる神算鬼工ありて此頽勢を挽回して來るかは、固より逆じめ視るべからず、一旦の退却に依りて直に閉息するものではあるまい、更に軍容を整へ士を捲いて重ねて來るかも知らない、若し獨逸は到頭西は聯合軍の爲めにライン河まで壓迫せられ、東は露軍の爲めにヲデル河まで壓迫せられて和を請ふより外はないとすれば、唯外交手段あり、此戰局を更に一轉し得ないとは限らない。

由來獨逸が西は白耳義、和蘭を略し、英國に向つて其海權の鼎の輕重を問はんとするに方つて、別に墺匈國を經て巴爾幹、小亞細亞、亞剌比亞、波斯方面に手を伸ばさうとするのは所謂二兎を追ふものではないが、今日までは行掛りもあつたから致方ないとして、敗形既に成る、獨逸は早きに及んで一刀兩斷せねばならない、西と南とに併せ赴くを止めて專ら西に赴くことに決定せねばならない、西に赴くと決定すれば、墺匈國の存亡などは深く眼中に置く必要がないではないか、既に眼中墺匈國なしとすれば、土耳格もバグダツト鐵道も皆一併に放棄すべきではないか、東歐羅巴はスラヴ民族の自由裁量に任かすとすれば、獨露が生死の競爭をする必要は全く消滅するてはないか。

維廉二世にして若しニコラス二世に向つて我れは西せん汝は南せよといへば、大局は更に一轉するてはないか。

英露は早晩衝突せねばならない、英國が佛露と相約して講和に關する協約を締結したのは、一は佛國の早きに及んで和を請ふを憂へたのであらうが、一は露國の東歐に其勢力を扶殖するを制せんとするに在るは言ふまでもない、そして英國は此戰爭に於て最も利益せんと計るものである、露國からいふも獨逸を全滅して而して後に英國と衝突するよりは、獨逸を保存して西より直に英國の孤嶋を脅かさしめ、更に自ら南に於て英國を制するのが最も萬全の計なのではないか。

露國にして南、英國を制せんとすれば、先づ獨逸をして西、英國を脅かさしめ、獨逸にして西、英國を制せんとすれば、先づ露國をして南、英國を脅かしむ、露獨同盟の基礎は確に此處に在るではないか。

勿論維廉二世(カイゼル)が之を申出したとしても、ニコラス二世は獨逸に決勝的打擊を與へた後でなければ承知しないかも知れないが、若し維廉二世(カイゼル)にして此雄斷に出ないとすれば、彼れは最早天才ではない、立派な狂人だ。

第十　獨逸の全敗は果して日本の利か

我等が戰爭をやるのは、外交の目的――國家の利益を達するが爲めなので、戰爭の爲めに戰爭をするのではない、獨逸は日本の敵であるといつても、それは膠州灣の事で、歐洲戰爭とは自ら別問題である、私はこの戰爭に對しては日清日露の兩戰に於けるが如くに戰熱(ウオア、フイヴアー)の爲めに一掃されないで、最も嚴肅、最も莊重、最も沈着の態度を取り、以て我國の後圖を爲さねばならぬと主張するは之が爲めてある。

然るに日本人は唯獨逸の全敗を祈つてゐる、唯英國の全勝を祈つてゐる、英國の笛に連れて踊つてゐる、私は日本人の打算のないのに、國際政局に關する知識のないのに驚くものだ、英國は切に佛國の勝を希望してゐやう、從ふて佛國の爲めには百方計る所があるであらうが、或者の言ふが如く果して英人全體は露國に對しても同一の熱心を有つてゐるてあらうか、露國にし

て大に獨逸に勝たしめば、次きに實現して來るものは露國の南進である、故に英國は西に於ては全勝し、東に於ては露獨共に戰ふて共に疲憊し、少くとも露國が南進するまでには更に十年の休養を必要なりと感ぜしめたいのではあるまいか。

英國の獨逸に求むる所は其軍備制限――海軍制限てある、エドワード七世之を樽俎の間に求めて成らず、英國は此戰爭に於て其目的を達せんとするのである、英國は今や盛んに製艦能力を增加してゐる、獨逸に比ぶれば一年の後には戰艦については二倍、巡洋艦については四倍し得べしといふ、獨逸が全く戰爭に疲憊すれば其海軍擴張は固より中止せねばならない、英國が海軍擴張の禁令を獨逸に推附けるのは決して艱難ではあるまい。

事こゝに至らば、英國に取つては日英同盟の必要は全然無くなるてはないか、といふものがある、私はさうはいはないが、其必要の程度の多少減少するは數の見易き所てはあるまいか、彼れに我れの必要減ずる時は我れの更に彼れを必要とする時ではないか、事實太平洋に於て英に與みせずんば獨に與みすべしとする芝居が打てなくなる。

且つ英人の中日本の强大を好まないものがある、濠洲ありニユージーラントあり南洋の島嶼あるが爲めのみてはない、日本の勃興は痛く白人以外の人種を刺擊した、印度人を刺擊した、波斯人を刺擊した、土耳格人を刺擊した、埃及人を刺擊した、支那人を刺擊した多くの回教徒を刺擊した、英人は英國にして若し其帝國の圈内に在る異人種をして靜穩ならしめんとすれば先づ日本を下に保たねばならぬと信じてゐる。

日本が北進するの難きは天然あるが爲めなり、その南進するの難きは人爲てある列强があるからてある、私は現在の國際關係を以てしては、日本の南進は絕望だと信ずる、歐洲戰爭に於て英國は獨逸領南洋群嶋を奪ふてあらう、然しながら私は斷言する、日本は御膳立てをするクックには爲るが、決して大隈首相の所謂御馳走には與れないと。

第十一　ヨリ強國の時代

孰れにても此戰爭以後は英米露獨墺佛伊日が世界の強國なりとする時代には一大轉化を來すは我々の豫じめ覺悟せねばならない所だ、強國の時代去つて於強國の時代來る、獨の運命は兎に角、墺國や佛國や伊國は、諸葛孔明の語を藉りて言へば、到底王業偏安を免れない、英露米が覇を世界に稱するに於て日本も亦遂に東亜半壁の天を支持し得るに過ぎないではないか、英露米が覇を世界に稱すといはんよりは、全智全能の英國の時代なりといふが、最も其當を得てゐるかも知れない、獨逸にして海軍に於て競爭する能はざるに至らば、誰か更に獨逸に代るものぞ、佛國は全く英國の懐に入るであらう、白耳義は固より實際上に於て英國を其宗主國と仰くより外はあるまい、和蘭といひ西班牙といひ伊太利といひ大陸諸國は皆英國を仰いで之に朝宗するに至るであらう、米國も獨逸を喪ふては獨愛同盟も亦英米の接近を妨くるの勢力と爲り得まいかも知れないではないか、少くとも一時は世界は全く英國の[illegible]威の下に屈するより外はなくなる。

日米戰爭は或は時間の問題であるかも知れない、米國は或意味からいへば獨逸の作戰の根據地である、コロンビヤ大學教授リチャード氏の計算に依れば、米國に住する獨逸人は一千二百萬、獨逸人の子孫たるもの三千萬だとのことだ、此獨種米人と其數に於ては多く劣らざる愛蘭人及び其子孫と團結してゐる、普通に之を獨愛同盟と稱し、平生力を盡して英米の接近を妨げてゐる、英米總括仲裁條約が上院に否決せらるゝのは何時も此獨愛同盟の運動である、此戰爭に於て土耳格を刺擊し回教徒を煽動し印度人を教唆する本部は伯林と夫れから米國とに在ると言つても強ち虚言を弄んだのではあるまい、勿論米國政府が與り知つてゐるといふのでは斷じて無い。

少しく米國近時の外交を學んだものゝ、其外交政策は共和黨にせよ民主黨にせよ大なる徑庭はない、共に著るしく帝國主義に傾いてゐることを看取するであら

う、私は日米戰爭を願はない、長く五十年以來の傳說友誼を維持したい、日米戰爭の遲速は歐洲戰爭の結果に由りて決する、そして日米戰爭の動機は支那問題から爆發するといふは蓋し好事者の流言に外ならない。

第十二　勤王主義と平民主義

平和論だの非戰論だのといふは實際の問題ではない全く講堂の討論に過ぎない、戰爭といふ事實が理論に拘らず進行發展してゐるのみならず、此後も戰爭の繰返へさるゝは双眼の明あるもの〻皆百も承知二百も合點する所だ、故に經國家は『常の時』と『非常の時』とを合せ考へねばならない、常の時は即ち熟慮（Deliberation）の時、非常の時は即ち果斷（resolution）の時なのではないか、陳龍川が『非常の時には非常の斷を要す』といつたのはこれである、ルビコン河を渡つてから辯闘を縱にする餘地はない。

熟慮は合議を豫想し、果斷は專制を豫想す、前者は自治主義に歸し、後者は集權主義に歸す。

ダンテが理想した中世の帝國は集權主義の帝國であつた、近代歐洲の理想する帝國は民本主義の帝國である、西人は分拆に長ずるも綜合するに短、一理に拘りて他の理を容るゝ能はざるの弊がある、故に集權主義の帝國を理想するものは民本主義と兩立すべからずと做し、民本主義の帝國を理想するものは集權主義と兩立すべからずと做す、焉ぞ知らん最も新なる帝國の理想は東洋の帝王主義と西洋の民本主義との一致合流するものなるを、

私が常の時に方つて個人の自覺を高調するを以て、或者は是れ民本主義なり、民本主義は遂に共和主義に歸着すと爲して私を排擊するものがあるが、私の民本といふは官本に對していふのだ、私の民主といふは官主に對していふのだ、民本ならざれば官本、民主ならざれば官主、私は民本民主に出でねばならない、個人の自覺といへば個人をして個性を自覺せしめ、更に自治的に自覺せしめ、國民的民族的に自覺せしめ、世界

的に自覺せしむるの謂ひである、自覺のない奴隷の如き人民を率ゐて果して自覺の盈ち溢るゝ於强國の民族と角逐競爭し得べしといふ乎。

私が曾て「新勤王論」を高調するや、他の或者は何うして君の主張から勤王論が出て來ると尋ねた、奴隷の如く唯命唯從ふの人民でなければ勤王は不可能といふことに爲る、私は日本民族の自覺の上に立つた皇室であつて始めて富嶽の安きに居るものだと信ずる、常の時には學を修め業を習ひ智能を啓發し德器を成就し進むで公益を廣め世務を開く、これが民本主義ではないか、一旦緩急あれば皇室を中心としシラリーイング、ポイントとして義勇公に奉じ以て天壤無窮の皇運を扶翼するのが、新勤王論ではないか。

常の時は何處までも個人の自由を尊重し、それをして自由に個性を發揮せしめ、非常の時は日本民族の生活の象徵たる國家の爲めに犧牲と爲る、此場合には言論の自由が制限されても已むを得ない、戒嚴令を布かれても已むを得ない、生命財產を投げ出しても我々は一に團體の利益を主とせねばならない、是に於て乎、民本主義と專制主義とは明に兩立するではない乎、民本主義に於て或點を讓り、專制主義に於ても亦或點を讓つて妥協の態度に出でないでも、自然に此二主義は調和するではないか。

人間の生活には明かに二方面がある、自己との生活(ライフ、ウイズ、セルフ)と隣人との生活(ライフ、ウイズ、チーボアース)とである、或は前者を自存の生活、後者を依存の生活とも言へる、勿論何處から何處までが自己との生活で何處から何處までが隣人との生活だとは言へない、我々の實生活に於てはこれが劃然として區別されてゐない、要するに說明上の便宜に過ぎない、が、若し私が暗室屋漏の中、旋乾轉坤の大經綸を案出しつゝありとせよ、又は心官は只是れ思、或は一身の上、或は宇宙の事を冥思默想するとすれば、それは自己との生活だといへるではないか、是時に方つては、眼に王侯もなく將相もなく父母も妻子も兄弟もなく朋友もなく、切言すれば、天地もなく神もなく、宇宙の間、カーライルの語を藉りて言へば『唯我れ獨り(マイセルフ、アローン)』の

境地を現出し來るではないか。

隣人との生活は日常の生活である、若し自己との生活が立體的の生活だと言ひ得るならば、隣人との生活は平面的の生活だと言ひ得るであらう、汝の隣人を愛せよといふ、隣人を愛するは隣人と戰ふことではないか、隣人と戰ふは隣人を愛することではないか、隣人相團結して、此に自治體の競爭が出て來る、商工業の有ゆる競爭が出て來る、言語を同じくし歷史を同じくし感情利害を同じくする隣人相群して、此に民族生活を爲す、一の民族と他の民族とは相愛しもする相戰ひもするが歷史の事實て又眼底の世相てはないか。

常の時の生活は打算の生活、富を作る生活といへるが、非常の時の生活は感激の生活、民族の生活力、向上力を鐵火に掛けて試驗する生活、苟も感激の生活を爲すに於て、人は先づ感情の滿足を求めねばならない、ルーズヴエルト萬歲ては物足りない、何うしてもゴッド、セーヴ、ゼ、キングと謡ひたく爲る、日本の歷史を見るも、國家一旦緩急あるや、皇室は自然に國民の中心と爲る、元寇の時に於ても、黑船來の時に於ても日清戰爭の時に於ても、日露戰爭の時に於ても、

然しながら私は兵士をして個人化（インヂヴイヂユアライズド）せしめねばならないと主張する、モルトケ將軍の所謂『個性化した兵士』てあらねばならないと主張する、自分て戰爭の目的を解し自分てイニシエチーヴを取つて戰鬪し得ないて、何うして最後の勝利を望み得らるゝ、一將功成つて萬骨枯るのてはない、一將功成つて萬骨亦功成るてなければならない、死ぬるも死ぬ意味を知り、犧牲に爲るのも犧牲に爲る意味を知らねばならない、故に爾今以後の戰爭は將軍や政治家の戰爭てなく民族の戰爭てあらねばならぬ。

私は痛切に日本は果して新に興りつゝある國てあるや否やを疑はざるを得ない、新興の國民には必ず國民的理想、國民的大願があつて、之に向つて一意勇往精進せねばならない理由（わけ）だが、日本國民には今何の理想あり何の大願がある、少しく理想を語り大願を語れば寧ろ迂遠實際に益なしとして排斥せらる、理想大願を

望んで奔るが青年國民、日常の實際に齷齪たるが老衰國民。

社會主義はいけないといふだけだ、平和主義、非戰論はいけないといふだけだ、其いけないのは私も知つてゐる、然しながら唯いけないいては國民は惑ふ、寧ろ若かん高く理想の太陽を揭げて以て國民を導かんには、消極論萎縮論は自然に姿を隱くす譯ではないか、私は維廉（カイゼル）二世のやうな狂人じみた天才、否、天才じみた狂人はいらないが、迷へる萎縮した國民を率ゆる天才の出でんことを望むものだ、政治界に經濟界に思想界に藝術界に、而して乾坤茫々更に人なきが若し、覺えず筆を投じて長嘆。

此稿は九月九日に起稿し發熱の爲めに中絕し十七日に至つて完成した、歐洲戰爭は如何に發展するも現在及び近き將來に於て私の前後二篇の外には出まいと思ふ、若し更に新なる發展を齎らし、別に綜合大觀する必要を生ずるに方ては、私は其場合『中央公論』の讀者に負かない積りである(華文識)。

對支外交刷新の秋

中野正剛

△俎上の肉は東洋諸國

民族的帝國主義は二十世紀の大勢を支配すべし。舊時代の羅馬帝國主義は到底今日以後に實現せらる可らざることは、最近の世界的大戰爭に見るも、益々顯著なりと謂ふべし。學者は說明して曰く、舊時代の帝國主義は力を以て唯一の信條となし、他國の文明、他國の國民性を破壞して、專ら領土を擴張し、列國を統一して統治權を其上に行はんとせり。然れども武力を以て覺醒せる民族主義を壓倒することは、ナポレオン第一世の英邁を以てするも不可能事に歸し、十九世紀は各民族が各領土を保有して、其上に國家を建設するの

趨勢を示せり、斯くて各國家の領域が、各民族の分布と略々一致するに及びて、是に民族的帝國主義は即位するに至れり。然らば民族的帝國主義とは何ぞや。前時代に流行せし羅馬帝國主義と比較して如何なる差異あるか。曰く、民族的帝國主義は羅馬帝國主義の天に二日なく、地に二君なきを理想とするに反し、各民族的國家の存在を前提とするものなり。故に民族的帝國主義は既に高度の文明に達せる、他の民族的國家を侵略併合するの企圖なく、唯或は探險により、或は投資により、未開の土地を略し、劣等なる民族を統治せんとするなりと。然り吾人も亦此趨勢を看取するものなり、二十世紀の戰爭は、高度の文明を有する列强が、所謂未開の地、劣等の民を併せんとするによりて生ずるに非ざれば、領土の色別が民族の分布と相一致せさる所に於て、終局の安定を得んとする際に起るべしとは、吾人の豫想なりしなり。

然るに今回の歐洲大戰爭は、强國が强國の領土に侵入し、高度の文明に達せる數國が、互に血を流して爭鬪するもの、之を一面より觀察すれば羅馬帝國主義が再び出現せしやの觀あれども、實際は却て益々民族的帝國主義の權威を加ふるものなくんばあらず。夫れ民族の分布に準ひて國の領域を定むるは、民族的帝國主義の根柢たる民族主義の歸結なり。若し列强相接するの間、其領域が民族の分布に據らざる不自然の線によりて劃せられんか、必ずや此裡に國際的不安あり、此不安にして除かるゝに非ざれば、關係列國は紛議、怨恨、鬪爭より免かるゝ能はざるなり。今回の大戰亂を概觀するに、直接の原因は墺太利皇儲フェルヂナンド大公夫妻がセラエウォにて狙擊せられしにありと雖も、更に遡れば七年前ゼルマン人種たる墺太利が、スラブ人種たるボスニヤ、ヘルゼゴビナ二州を塞爾維より奪ひしことは、是れスラブ國たる露塞二國が、ゼルマン國たる獨墺二國に對して、深怨を懷くに至りし所以なり。彼の露國皇帝が我等は七年半脅やかされたり、既にこれにて充分なりとの悲痛なる詔勅を發せられしに見れば、大亂の機は夙に七年前に萌せしを認め得べ

し。然らば獨露の大戰爭は獨墺二國が自らと異なれるスラブ民族の國を奪はんとせしによりて起りたりと稱するを得べし。

更に獨逸と佛蘭西との關係を見るも、亦酷だこれに類せり。佛蘭西が四十年來一日も獨逸に對する怨を忘るゝ能はざるものは、彼のアルサス、ローレンスの二州あるを以てなり。佛蘭西が獨逸を忘れざれば、獨逸も亦佛蘭西を忘るゝ能はず、獨逸は之が爲に海外植民地の關係に於て英國に備へ、巴爾幹問題に就て露西亞に備ふるが上に、常に佛蘭西を敵國となさゞる可らざる地位に陷れり。ビスマルクは普佛戰爭の終結に於て軍人側の意見を容れてアルサス、ローレンス二州を併合せしも、是れ畢竟獨逸が歐洲の最强國英露佛の協約を激成して、自ら孤立の危きに居らざる可らざるに至りし原因なり。然らば歐洲大戰爭の一面たる獨佛の破綻は、之も亦他の一面たる露獨の破綻と同樣、ゼルマン民族が他民族の領土を侵せしに因りしなり。

余は學者の說に從ひて、民族主義は十九世紀の大勢にして、民族的帝國主義は二十世紀の大勢なるべしと論じたり。墺太利がボスニャ、ヘルゼゴビナを奪へる、獨逸がアルサス、ローレンスを奪へる、何れも此の既に過去の決定となりし民族主義を蹂躪して、十八世紀以前に行はれし羅馬帝國主義の片影を留めたるものに外ならざりしなり、時勢の潮流は日に流れ行きて、舊時代の弊套を洗ひ去らずんばあらず。然らば今日に於て民族の分布に準ひて、領域を變更すべく、露塞對獨墺、獨墺對佛蘭西の爭ひあるは、自然の命數に非ずして何ぞや。是に於てか吾人の劈頭に絕叫せし、民族主義、民族的帝國主義の權威は益々鞏固たるに非ずや。

英獨間の爭ひに至りては、英國が佛蘭西に對する協約を重んじて起ちたるの觀あれど、更に深く大勢を究むれば、英と獨とは民族的帝國主義の競爭よりして、衝突の已むなきに至りしなり。民族的帝國主義は文明國相互の本國領土を略奪するの虞なきも、未開の地、劣等の民を統治せんとして、其活動の新天地を求むるもの、英獨兩國が共に海外の植民地に着目するの結果

遂に干戈に訴へてまでも、其繩張を爭ふに至りしは、實に民族的帝國主義の最後の危險を證明せしものなり。然らば墺塞、露獨、獨佛間の戰は民族主義の爭ひにして、英獨の開戰は更に進みたる民族的帝國主義の衝突なりと說くを得べきなり。今回戰亂の結果は、未だ之を豫測する能はざれども、戰爭の原因より推斷すれば、墺塞、獨露、佛獨間には民族の分布に近き境界に準ひて、其領域を改正するを順當とすべく、英獨の間には別に植民地の授受あるものと想像するを得べし。若し不幸にして大陸の戰爭が、獨軍側の勝利に歸せば、歐洲の地圖は却て民族の分布と反對するが如き色彩に塗らるべきも、斯くて成れる平和なりせば、決して永久の平和と謂ふ可らず、民族的怨恨の重なる所再び三たび戰爭は爆發するものと思はざる可らざるなり。民族主義の大勢よりすれば、ボスニヤ、ヘルゼゴビナは塞爾維に返り、アルサス、ローレンスは佛蘭西に返るを順當とす。是れ關係列國間の怨恨を一掃して永く平和の基を定むる所以なり。否今一歩を進むれば巴爾幹に於ける列國の境域を民族の分布に準ひて區別することは、更に根本的に禍根を芟除する所以なり。一九一三年のブカレスト平和條約は、國境を別つに、民族主義の根本的見解によらず、一時の權宜によりしを以て、之が根本的解決を得るまでには、歐洲列强の均勢は安定に歸する能はざるなり。今回の大戰爭に就ては、巴爾幹諸國の一部も動搖せんとするもの丶如し戰爭の結果果して巴爾幹の色彩が、民族的に塗り別けらるべしや否やは、戰爭の勝敗と共に吾人の未だ窺ひ知る可らざる所なり。

歐洲大陸の形勢は、民族的國家の對立となり、互に相犯す能はざるに至らざれば安定とならず。既に一戰を經る每に益々大勢は是に歸せんとするの傾向を示せり、否今回の戰にして、世人の豫想するが如く、遂に獨逸側の敗北に歸せんか、歐洲大陸の色彩は、殆んど完全に幾きまでに民族的に區別せらるゝに至るべし。斯くなりて尚殘存するものは巴爾幹の根本問題なり、而してこれすら一歩一歩根本的解決に近づくか、若く

ば列强の睨み合ひにて、何等の發展を示さゞるに於ては、稍完全に民族的國家を形成せし歐洲列國は、其國家を基礎とし、進んで所謂民族的帝國主義に向つて躍進するに至るべし。然り而して此民族的帝國主義は文明列國の民族的國家を形成するを承認し、其本國領土に向つて掠奪の手を下さず、專ら未開の地、劣等の民を征服し、懷柔せんとするものなり。然らば歐洲人の所謂未開の地、劣等の民は那邊に存するか。阿弗利加に於ても南洋に於ても、皆列國の繩張りは確定せられたり。南米には發展の餘地あるが如くなれども、米國がモンロー主義を固執する以上、之に手を下すは不可能事ならん。亞細亞に於ても印度、波斯、暹羅、安南既に列國の分割に歸せり。凡そ此等の勢力範圍確定せる地に向ひて、强て列國が民族的帝國主義を行はんとせば、植民國相互の戰爭を惹起すの外なし。然るに大なる植民地を有する大國家の衝突は、其の損する所甚だ多くして、益する所甚だ少なかるべきは、今回の大戰爭にて證明せられんとする所の如し。然らば此等の地に於ては、本國の勢力失墜するもの、例へば和蘭、西班牙、佛蘭西と謂ふが如きものより、順序に其植民地を失ひて、本國の勢力日に旺盛なるもの、例へば獨逸、米國、露西亞と謂ふが如き國が、之に代りて領土を增すに至るべし。然れども今日の歐洲列國には、强弱の間、互ひに合從連衡の關係ありて、其勢力の權衡の容易に破り難きものあり、强て之を破らんとすれば今回の如き大戰爭を惹起すの危險なしとせず。是に於てか列國は成るべく此等の既定繩張地を避けて、衝突の危險少き地に、新發展の活路を求むべく、而して世界の他の部分が、列國の繩張地となれる今日、列强の民族的帝國主義の犧牲となるは、東洋、殊に支那の外にこれなきなり。然らば大戰爭終結後、支那が列强爭奪の中心點たるは、自然の大勢とも謂ふべく、東洋の安危を以て、國の榮辱の別るゝ所となす我日本帝國臣民は、今後の大勢を達觀し、對支政策に就て、根本的方針を確定せざる可らざるなり。

△東亞に於ける帝國の覺悟

劣等の民を征服し、未開の地を略することは、二十世紀の大勢を支配すべき民族的帝國主義の信條なり。而して歐米人は何を以て國民の優劣を別ち、國の文明と野蠻とを辨ずるか。今回の歐洲大戰爭に於ける獨逸の行動に見れば、其の老幼を虐殺せしが如き、其の永久中立地帶に侵入せしが如き、其の占領せる都市に對して、莫大なる賦課金を徴せしが如き、決して之を文明的なりと稱す可らず。然れども戰爭の爆發するまで歐米人は獨逸人を以て文明優等の民族に屬すとなし、彼等自身亦高く居りて、異色人種を劣等なりとし、其劣等なる日本人の跋扈を憂ひて、黄禍論を振廻したり今日に於てこそ三國協商側の白人は、我日本を謳歌して、其力を借らんとはすれ、彼等が心の眞底を叩けば敵も味方も皆日本人を以て、白人よりは一種劣等なる民族と認めざるはなし。然らば我國も亦劣等の民を住する未開の國として、民族的帝國主義の犧牲に供せらるべきものに非ずや。唯彼等が吾人を以て土耳古人、若くは印度人、支那人と同一視せざるは、我に武力あるが故のみ。一朝武力を失墜せし後の帝國は、彼等の眼中に毫も土耳古人、支那人と選ぶ所なきなり。歐洲大戰亂の終結後、列國は各々其民族的帝國主義を以て極東に臨むべきが、聊か彼等が躊躇する所のものありとせば、そは日本の武力を憚りての事なるべきのみ。

彼等は日本の武力を知れり、故に敢て我本國の領土に指を染めんとするなかるべきも、我國の極東外交界に權威なきこと、今日の如くなるに於ては、彼等の所謂民族的帝國主義は、遠慮會釋もなく支那の領土に向ひて實行せらるべし。御土産は近きにありと放言せし内閣は、瑣々たる膠州灣問題以外に、支那に對する列國の野心を牽制するの名案ありや。吾人は終始一貫せる支那保全論者なり。支那の爲に支那保全を説く者に非ずして、東亞全體の利福の爲に、否別して我帝國の榮辱の爲に、支那の保全を必要とするものなり。歐米列國と雖も、口に支那の保全を説けども、彼等の保全

論を認むる所以のものは、單に日本を憚りての事のみ日露、日英、日佛の間には、皆支那を保全すべき條約を締結せり、此等は關係列國が何れも極東に於ける日本の武力を信じ、其意向が保全にあるを以て、之と握手して保全の策を講ずるに非ざれば、東方に向つて其國勢を發展せしむる能はざるを知ればなり。彼等が保全の協約に甘んずるは、保全に非ざれば、我と結ぶ能はざるを見ればなり。若し我國にして分割條約を締結するの意ありとせば、乃ち日露、乃ち日英、乃ち日獨幾多の分割條約は日本を中心として結び得らるべきこと、強ち空想なりと謂ふ可らざるなり。然るに歐米諸國は所謂其の民族的帝國主義の上より、其領土を擴張せんが爲に支那を睥睨すれども、我帝國は國の興廢の關はる所として、支那の運命を監視せざる可らず。我にして一歩讓歩し、支那の江山を以て歐米列國の席卷に委せんか、列國は其領土を分割して、國權を其上に行ひ、進んで我國を窺覦せんとするに至るべし。是れ決して架空の言に非ず、歐米人の目よりすれば、日本は武力ある劣等人種にして、民族的帝國主義の信條は劣等人種の領土を奪ふことを證すればなり。

ピエール・ロチ氏の著、チュルキー・アゴニサントを讀む者は、何人も土耳古に對する基督教徒の暴戾を憤るべし。數世紀に亘りて白人が土耳古を窘迫し虐殺せることは姑らく言はず、二十世紀に入りても、伊土戰爭に於て、巴爾幹戰爭に於て、白人の慘虐行爲は、之を聞く者をして戰慄に堪へざらしむ。歐洲の各新聞は逆に『土耳古人は虐殺す』と說けども、白人が土耳古領に侵入する時、到る所の都市に於て、負傷者は鏖殺せられ、婦女は凌辱せられ、街區は燒かれ、且つ掠奪せられたり。サロニックに於ける基督教兵の暴行の如きは其一例にして、怖ろしき刧盜と虐殺とは三日間繼續せられ、俘虜たる土耳古人は將卒共に生きて送還せられたるも、鼻なく唇なく、瞼なく、總て大鋏にて截取せられしなりと。固より土耳古人の白人を虐殺せしこと、例へばアルメニヤの虐殺の如きもあれど、こは數世紀に亘る壓迫、虐待、窘迫、殺害より生ぜし土耳古

人の怨恨が、報復的に爆發せしのみ。曠原の中に寛厚偉大なる野獸あり、之に水と草とを與へ、之に安息の天地を與ふれば溫和にして親しむべく馴らすべし。唯其の不意を襲ひ、鎗を掉ひて其肉を刺せば、血に染まりたる野獸は、死物狂ひに暴れ狂ひ觸るゝ所皆斃さゞれば已まざるのみ。歐米人の目よりすれば、支那は我國の武力なきもの、我國は土耳古の未だ疲弊せざるものに過ぎず。我國にして直接歐米各國と境を接するに至り、其國家の根本勢力にして、多く今日に勝るなからんか、我國は獵犬の群に取卷かれたる傷きたる野猪として憤死するの外なきに至るべし。吾人は必ずしも强國と境を接するを怖るゝものに非ず、敵國外患なければ其國危く、四隣に虎狼の國を控ふれば其民怠らざるべしと雖、我國にして直接歐米の爪牙を邀へんと欲せば、今少しく國を富まし、今少しく兵を養ひ、今少しく國家の根本勢力たる國民性を陶冶せざる可らず。別して全世界の白人が、舉りて有色人種を劣等視し、其領土を奪ひて所謂民族的帝國主義を行はんとする以上、吾人は成るべく多くの有色人種の與黨を有せざる可らず。是に於てか吾人は直接歐米人の壓迫を免れんが爲に東亞の現狀を保持し、有色人種の朋友を得んが爲に、日支の提携を固くせざる可らざるなり。支那を亡ぼして而して後の我國の地位は、巴爾幹に於ける土耳古の地位と擇ぶなきのみ。

斯く論ずるを聽かば、英國にかぶれて、土耳古の如き有色人種を劣等視する加藤外相の儕は、定めて此喩の當らざるを冷笑すべし。然れども現に我國は此千歲一遇の危期に當り、歐米列國より土耳古の如き待遇を受け、土耳古の如く窘窮せられつゝあるに非ずや。土耳古人の武勇は史上の花にして、稍々我國の夫れに髣髴たるものありき。然るに伊土戰爭より巴爾幹戰爭に及び、彼等は漸く其武威を失墜し、有色人種を惡む白人の新聞紙上に於て『腐敗せる土耳古人、卑怯なる土耳古人』と罵られつゝあり。是れ實は土耳古人の罪に非ずして、歐洲人が聯合して土耳古を積弱の地位に陷らしめし結果なり。見よ一戰爭の終結し、一條約の締

結せらるゝ毎に、土耳古の要塞は毀たれ、土耳古の兵員は制限せられ、土耳古の將士は誘惑せられ、總て土耳古の軍事的優越の地位は奪はれしに非ずや。斯くなり果てし土耳古の負傷兵を虐殺して、土耳古人は卑怯なりと謂ふ。是れ恰かも爪を拔き、歯を拔き、舌を截り、尾を縛したる虎を屠りて、虎は無力なりと謂ふが如きなり。我國民の武勇は日露戰爭の結果歐米に認められしは事實なり、虎とまで怖れられたりと期待せんは聊か己惚れに過ぎんも、小なれども豹の力あることは普ねく知られたり。然れども外交政策にして、今日の如き失敗を繰返さんか、此矮小なる豹は、爪を拔かれ、牙を折られ、遂に獵犬に咬み斃さるゝに至るべし。今日東亞に於ける列國の野心を制して、我帝國の優秀なる位置を確保するは、小さきながらも豹をして爪牙を保有せしむる所以なり。然るに戰亂の終結後、列國の境界が東洋及び南洋に於てまでも改正せらるゝに當り、若し我國の位置が危險に陷るが如きことあらんか豹の爪牙は既に拔かれたるものにして、彼の土耳古が戰爭毎に、平和條約毎に不利の地位に陷りたりしと、五十歩百歩の差あるのみ。

是に於てか吾人は東亞に於ける優越なる我國の地歩を確保すべく、造次にも顚沛にも支那保全の必要を忘るべからず。歐洲大戰亂に際しても、吾人は戰爭の經過を見、戰爭の終結を思ひて、豫め東亞の現狀を破らざるの覺悟なかるべからず。而して東亞の現狀を保有せんと欲せば、東亞に近接せる地方及び東亞に勢力を有する各國の動靜を覗ひて之に備ふる所なかる可らず。乃ち北に於て露西亞、東に於て米國、南に於て英國、獨逸の發展し來る進路に就て、吾人は大に研究し準備する所なかる可らざるなり。吾人は東亞の平和を保有すべく、列國に對し、或は消極的に、或は積極的に、斷々乎たる態度を執るの覺悟なかる可らざるなり。

△無謀の剛强と宋襄の仁を排す

吾人が東亞の保全を必要とすること上述の如し。之

に反對する者ありとせば、そは民族的帝國主義を積極的に實行して、所謂劣等の民を征服し、所謂未開の領土を開拓せんとする侵略的の白人に外ならざるべし。東亞の保全とし謂へば、大半支那の保全を意味す、支那の保全は固より支那の希望する所なるべしとせば、東亞の保全を以て任となす我國と、自ら保全を熱望する支那中華民國と唇齒輔車の交りあるを當然とす。然るに日支の國交往々にして圓滑を缺ぎ、彼我互に罵倒を事とするが如きものあるは何ぞや。日獨戰端を啓くの已むなきに至り、日本が東洋の平和の爲に兵を動かさんとするに際し、支那が終始猜疑の眼を以て我國を見るが如きは、確かに膺懲の價値あるものなれども、日支の國交が單に此一事のみならず、事毎に面白からざるに就ては、吾人も亦翻て一考する所なかる可らず固より事理を論じて、表面より公平の判斷を下さば、失の彼に在るもの甚だ多かるべきも、彼は半ば亡國の危難に遇へるものにして、我は新興の第一等國たり。賢愚相交り、優劣相携ふるに際しては、賢にして勝れる者先づ一歩を讓りて、愚にして劣れる者を指導するの覺悟なかる可らず。滔々たる日本の支那策士、皆帝國の優勝なるを信じ、支那の憐むべきを說きながら、而も猶國交を論ずるに當りては、彼と同列の高さに居りて事理の曲直を爭ひ、遂に罵詈罵倒を逞しうするに至りては、彼と其愚劣なる點に於て軒輊なきを示すは何ぞや。同じく東洋に國を建て、一日の長たる我國が存亡の危機に瀕せる支那を指導し得ざるが如きは、恥辱に非ずして何ぞや。

惟ふに形勢を觀望して、最强なる者を擇びて之に仕へ、以て一日の苟安を計らんとする事大思想は、獨り之を支那に於て責むべきに非ず、凡そ國の危機に瀕し自立の力なきものゝ通弊なり。若し夫れ信ずべきを信じ、絕つべきを絕ち、斷乎として所信を改めざるが如き健氣さありせば、如何にして國の衰亡を招くことあらんや。然らば亡國の危きに臨める國と交りて、之と圓滿なる友情を持續せんと欲する者は、備さに亡國の弊を明察して、之をして信賴せしむるの用意なかる可

らず。畢竟問題は如何にせば病み衰へたる支那をして我に信頼せしむるを得んかの一點に歸着せざる可らず。吾人は是に於てか一の前提を挾まざる可らず、何ぞや、對支那問題は單に對支の活動によりて決せらるべきに非ずして、支那を主題とする日本の對列國活動によりて決せらるべき一事なり。支那に對して我を信頼せよと言ふ、支那は決して此命令に聽きて我を信頼するものに非ず、支那をして信頼せしめんと欲せば、支那の望みを繋ぐに足るが如く、列國に對して我の腕前を示さゞる可らず。換言すれば北京に於ける外交界に於て、支配者たるの權威を示さゞる可らず。古き支那人の項羽を悲みたる詩に『剛强必死仁義王』と謳へるあり。支那人に對して王者たるの輿望を繋がんと欲せば、剛强を排して仁義に就かざる可らざるを誨へしなり。然れども勝てば是れ官軍負くれば是れ賊と謂ふが如きは、支那に於て我國に於けるより甚しきものあり、仁義にして敗者の地位に陷る者を以て、宋襄の仁となし、頗る之を侮蔑するの風あり。是に於てか余は信ず、支那に對して信望を繋がんと欲せば、剛强にして且つ仁義ならざる可らずと。其剛强は東亞に於ける列强の民族的帝國主義を牽制するに足り、其仁義は困憊して正氣を失へる支那をして唯一の救濟者なりと思はしむるに足り、斯くて始めて日支の國交を圓滿にして、彼我互に相利し、以て東亞を歐米人の爪牙より免かれしむるを得べきなり。然るに我國歷代內閣の執り來りし對支政策は、果して列國を制し支那を扶助するに足るものありしか。北方に活動する滿蒙論の策士、南方に斡旋せし革命派の浪人は、能く虛心平氣に大局の打算に忠なるものありしか。最初漢陽に革命の勃發するあり、當時の桂內閣は最初に清朝を助くるの意あり、次に南方派に心を寄せ、遂に打算全く相違して遲れ馳せに英米獨の態度に倣ひて袁世凱に阿附せんとし、其の及ばざるや伊集院公使の如きは、袁の傀儡とまで成り下りて、我外交の權威を失墜せしに非ずや。而して內閣は其後幾變遷するも、其政策は傳來的謬誤を踏襲し、毫も列國の行動を牽制して、東亞の大局を

保持するの根本的信念を確立するなし。英米獨の諸國が半身不隨の袁世凱を擁して利權を獲得すれば、我は一も之を控制するの態度に出でずして、毎に影に驚き焔に附き、纔かに殘肴餘瀝の別け前を得れば、自ら誇稱して對支政策の發展と曰ふ。斯くて支那の我に信頼せんことを求むるも得べけんや。或は說を爲す者あり今日我國の武力は協同して壓迫し來る歐米の民族的帝國主義に抗する能はず、故に姑らく隱忍讓步するの已むなきなりと。吾人も亦暴虎馮河直ちに釁を列國に構ふるの愚なるを知る、然れども總ての列國に對するの軍備なければ、外交舞臺に發言權を保有する能はずとせば、何れの世、何れの所にか斯の如き强國あるべきか。算なくして列國を敵とせしは、强大なる獨逸を提げて、カイゼルが今日の危厄に遇ひし所以なり。列國の勢力を互に制肘せしめ、以て自ら進むべき道を進みしは、小國なる普魯西を擁して、ビスマルクが歐洲大陸に覇業を開きし所以なり。吾人は我政府をして東亞に於けるカイゼルの行動を執らしめんとするものに非ず、ビスマルクの外交手段は之を凡庸の徒に求む可らずとするも、歐米列國の間に今日の如き大戰爭を惹起すの禍機あるを看取せば、東亞に於て幾分かモンロー主義に類する大方針を樹立するは、決して難事に非ざるを知るべし。吾人は我國が東亞に於て天然的優勝の地位を占めながら、毫も此好地位を利用するなきを見て、慨嘆に堪へざるものなり。

政府の意氣地なきは殆んど救濟す可らざるものに似たり。然らば民間に對支外交の根本義ありや、大政黨と稱する政友會は、下院に頭數を揃へて、專ら黨利と私利とを圖る一種の不正營利會社にして、此徒の不熱心、不眞面目、無經綸、無方針なるは、官僚政府よりも甚しきものあり。其心事の陋劣にして、對外問題に對して冷淡無識なることは、臨時議會の議場に於ける大岡某の妄言に就ても見るべし。其他所謂民間の支那有志と稱するものも、多く之と擇ぶなし。『俺れの孫さん』『俺れの貴さん』を利用して、以て一身の功名利祿を貪らんとし、遂に千歲一遇の革命に際して、可惜大

局を誤りし南方派の浪人、本省と連絡なき官僚軍人の手先となりて、満蒙の野に無算なる火事泥を働かんとせし満蒙派の策士、何れも世界の大勢と東亞の時局とを達觀せざるに於て、歴代の政府者流と異るなし。

吾人は重ねて言はん、東亞の大局に處すべき我國の外交的態度は、剛強にして且つ仁義なるにありと。即ち剛强は一定の見解を把持して、列國を牽制するを意味し、仁義は小是非の上に超脱して、支那の獨立を扶持するを意味す。然れども剛强と稱するも一徹に高壓的態度に出てんとの意に非ず。大戰亂の經過と、米國の仲裁振りとを監視せば、何れと結び、何れを斥くべきか、具眼者は勢を看取して、手段を擇ぶに窮せざるべし。満蒙論は露國との協約を擴充するによりて、根本的に安全なる解決手段なきに非ざるべし。吾人は支那保全論なりと雖も満蒙拋棄論に非ず、其拋棄す可らざる所以は、蓋し東亞の大局を支持すべき、我國の立脚地として満蒙を他に委す可らざればなり。獨逸との國交を傷りしは遺憾の至りなれども、之によりて獨露の接近を暫時不可能ならしめし點に於て、大に日露の親近を助けたり。膠州灣攻陷後、之に附屬する山東鐵道、山東鐵道に接する津浦鐵道の處分如何によりては或は今日南支那に覇を唱ふる英國の力を助長して、北支那より満洲に及ばしむるの虞れなしとせず。然らば現に我國との間に存する利害の衝突範圍を、益々擴大するに至るべく、日英同盟は多少危殆に瀕すべきも、一方に於て露國の强大を加ふることは、印度に於ける英國の地位を危険ならしむべく、既に露國との握手を固くせし日本は、英國をして幾分東方に於ける利益を譲らしむるも、彼より日英同盟を擲つ能はざるべし。米國は吾人の陸上の塵なりとは世人の往々唱ふる所、若し英米握手して、日英の關係に變化を來たすが如きことあらんか、是れ固より面倒に相違なきも、斯くならば露國と協議して、之に處するの策なきにも非ず。斯の如き面倒なる國際關係を利用し、臨機應變克く東亞の問題を文明的に處決するは、政治家及び一般國民の覺醒に待つに非ざれば能はざるなり。若し夫れカイ

ゼルの轍を踏み、白人の列强を連衡せしめて、我れ獨り孤立の地位に陷るが如きは、最も警戒すべき事に屬す。剛强と無謀とは別物なり、ビスマルクの行動にも見るべし。

又吾人は支那に對して仁義なれと謂へり。然れども其仁義は所謂宗襄の仁に流る可らざるは、識者を俟たずして知るべし。仁義も同等の者に對する仁義あり、以下の者に對する仁義あり。支那人を我より下等なりと斷定せば、彼れ固より不滿なるべきも、我が彼に比して一日の長者たるは爭ふ可らざる事實なり。然らば長者の後進に對するには、決して虛禮と虛飾とのみを以てす可らず。鞭撻することあり慰撫することあり、激勵することあり、懲戒することあるべきは勿論なり要は彼我の根本的利害を打算して、救濟の目的を徹底せしむるにあり。我國民の支那人を解釋する、多くは形式に流れたる漢文の糟粕により、毫も彼の眞面目を知らざるは失敗の由りて來る所なり。言忠信行篤敬ならば、蠻貊の國と雖も行はれんと言ひしは、眞に千古の知言なりと雖も、慈悲の佛者にも方便の存するあり威嚴なき仁愛は最も後進を導くに適せざるを思ふべし。此點に於て外人の支那民族性研究は、誤れる先人に支配せられざるだけ、却つて正鵠を得たるもの多し吾人此に鑑みざる可らざるなり。

余は二十世紀を支配すべき民族的帝國主義の傾向より察して、大亂後東亞の時局の困難なるべきを信じて疑はず。吾人は彈丸黒子の膠州灣を攻陷せんとするを見て、猶遠大なる大問題の眼前に横はれるを知らざる同胞に對し、東亞百年の長計を確立せんことを警告せざるを得ず。而して東亞の長計は日支の國交に始まりて、支那に於ける列國對日本の折衝に環聯す。嗚呼大戰亂の終結は、我國に大任を下さずんばあらず。我國の上下は、是に對支外交の根本的刷新を企圖せざる可らざるなり。若し夫れ枝葉の手段に至りては、他日論ずるの機あるべし。今は唯根本的度胸を如何に定むべきかを概論して止まんのみ。（九月十五日、於京城）

思想の獨立（解嘲）

文學博士　桑木嚴翼

上

思想の獨立を唱道し要求する者は多い。本來「考へる」といふことは自己の活動であるから、必ず自主獨立であるべきもの、又然らねばならぬものである。如何なる人も苟くも考へる以上は其處に自我を主張して居るのである。然し自我を主張しつゝ反て之を意識せざる者もある、又正當な方法で自我を主張することを知らない者も尠なくない。所謂獨立思想論者は果して悉く自己立言の意味を理會して居ると云へようか。

　思想は自己の作用なると共に普く一般に通じ得べきものでなければならぬ、然らざれば思想は妄想と何等の異なる所がない。而して思想が妄想と區別せられぬ間は、其所謂思想は動搖不定、常に外界の事情に從て變化常なきものとなり、從て自主獨立の性質は少しも顯れない事になる。故に思想の共通性と確實性とは其獨立性と結局一致することになると云はねばならぬ。從て獨立の思想を要求する者は先づ思想をして共通確實ならしめる根據を求めねばならない。而して思想は既に各人自己の作用であるとすれば、かゝる自己の作用をして自己以外にも妥當なるを得しむるものが何所にか發見せられねばならぬと思はれる。

　此の如き根據として或人は古來の傳說習慣を擧げ、或人は又某聖賢の遺訓を算へる。然し是等が思想の根底となる爲には先づ其が共通確實である理由を要する。是に於て或人は又論理の法則とか心理の法則とかいふものを究竟の理由と考へやうとする。然し是等の法則が何故に自己の思想に對して斯る權威を有するかといふ事は未だ毫も說かれてないとしたら、是等はた

だ自己に對する外物たるに過ぎないから、思想の獨立性はまだ十分に建立されたとは言はれない。思想の獨立性即ち思想の自己存在性を樹立するには、先づ是等一切の法則權威等が畢竟自己より發するものであることを證明し得ねばならない。換言すれば、傳說も敎權も論理の法則も皆自己內に存する。即ち內在的な形式であることを承認し得る場合に、初めて思想の獨立性は眞に建立されたのである。

人類が出現してから以來、苟くも思惟を運用する限り、此の如き自我の作用は既に行はれて居たのである。然し其初は種々の障碍の爲に此作用が完全に行はれないのみならず、其不完全な作用をも自ら意識して居ない。斯くして空しく傳說や敎權に囚はれて僅に思想の共通性を維持したり、感情や性癖に御せられて恰も獨立の思想を有する如く裝つて居ることが多い。其間に會、確實な知識思想が成立すれば學的知識となつて衆人の倚依する所となるが、然し其正確なる所以の理由が明てない爲に、時としては遂に又空しく疑惑の裡に沒することがある。然るに傳說や個人の判斷に對して其共通性を疑ふことは敢て怪しむに足らぬが、數學の如き學的知識をも疑ふことはやゝ不當のやうにも考へられる。かく意識の奧底には論理や數學の確實なることを信ずる情がありながら、而かも之に對しても絕對的疑惑を懷くに至るのは、畢竟知識を正確ならしめる理由を捕捉し得ぬからである。即ち此場合に知識は依然自我に對する外物であるから、其の特別に確實なる所以を說くことが出來ないのである。從て知識や思想が自我と必然的關係を有し、單に外物の影響に止まらざることを知り得れば、此に始めて眞の思想の獨立を得る譯である。

個人的自我の中にかゝる超個人的自我の存することを認め得たのは、思想史上實に僅に百餘年前の事であると言つてよい。其前とてもかゝる超個人的自我を暗に認めた識者は少なくはない、然も多くは皆かゝる超個人的自我を個人的自我と全然別異なものと看做して、兩者の合一を眞理の根據標準としようとするが、

此の如き根據は自我に對しては結局外物たることを免れないから、依然自我思想の獨立性を損害することになる。知識を外界の刺戟等即ち客觀から說明せずして自我の統一作用即ち主觀から說明せんとした企圖は、實に天文學上地球中心の天動說に對する太陽中心の地動說に比すべき一大革新であると謂はねばならぬ。

思想知識の根據を自我中に求めることの必要は此に確立したが、其根據の解釋は未だ充分決定したとは言へない。從て時としては其根據のみならず、其材料をも全然自我中に求め、單に自我作用の論理的演繹から一切の思想知識を展開し得ると考へる者をも生じた。固より此の如き解釋は實際他の極端に奔つたものであるが、論理上とにかく一種の解釋となつて居る、即ち此の如く思想の排他性は其本來の性質であると言つて差支へないのである。

然し自我が如何に超個人的意味を有するものなるにせよ、自我のみから悉く其思想の材料を演繹することは出來ない。自我の論理的演繹は思想の形式を構成して思想をして思想たらしめるものではあるが、然し之によつて思想の內容を充實することは出來ない。內容は經驗の源泉から汲出されねばならぬ。思想の獨立を欲してかゝる供給を杜絕するものは絕食者と同一の結果に陷ゐることを避けられないであらう。

余は此意味に於て獨立なる思想の成立し得る根據となるべき眞の自我を發見せんことを欲し、自らも亦得べくんば獨立なる思想を樹立して現在の個人的自我をして超個人的意義を有せしめんと欲する。然して斯る自我は過去の傳說や或社會の思想に囚はれず、目前の私心や一家の好惡に動かされず、自由にして又公明なる思想を有する爲の根據たることを認めて居るものである。既に囚はれず、動かされない、即ち其材料としては一切の傳說や思想を包容せんことを欲する。殊に過去に於て一般に仰視せられた思想や衆人の憑依した傳說に對しては尊敬の念を有すると共に、今日に於ても其積成のまだ地に墜ちないことを認めて、其處から我思想の材料を得んことを欲する。昔は他山之石とい

ふ語があつたが、今余は自己の食物としても飲料としても亦、他の材料を仰ぐことの必要を感ずるのである。千差萬別なる思想の源泉を汲んで渴を醫することを知らず、漫りに私情に動かされ傳説に囚へられて偏狹なる立脚地に甘んじ、而して自ら誇稱して思想の獨立と言ふ者は、實に自ら其立言を理會しないものに過ぎないのである。

下

余は單に自己一身に關する論難に就ては深く辨ずることを欲しない。然し輕薄なる論議の横行するのを見ては、上述の抽象論に對して一二の註解を加へる必要があると思ふ。

果して余一人の事に限られるか否か知らぬが、一新聞に掲載された余の談話が一部の非難を招いたらしい。談話は余の口授したものではないから、余自身は其一々の言辭に對して責任を負ふの要は無いが、然し大體の趣意に對しては勿論辯解し得ると思ふ。余自身も外國書籍（談話中には獨逸の事を話題としてあつた）が來ないと其國語の教科書などに差支へるとは言つたらうし、我々の參考書に不便を感ずることも述べたらうと思ふが、果して「思想源泉の涸渇が來るだらう」と言つたかどうか記憶しないが、假りに其に類似した言があつたとしても、思想界に對する一種の皮肉のやうな又戯談のやうな口調で述べたのではなかつたらうか、新聞の文章を注意して見ると其樣にも取れさうである。然し假りに眞面目に文字通りの意味を含むとしても、別に之によつて我思想界が悉く外國思想の流れを汲んで居ると自認したことにはなるまい。獨逸が滅亡して假りに獨逸思想も消滅しないまでも萎靡することがあつたら、（或は其反對に反て眞の獨逸思想が發達するかも知れぬが）此思想の系統に屬する觀念論的唯心論的羅曼派的思想等の發達が沮害されるには違ひはない、而してたとひさう言つても、決して是等唯心論的思想が全然獨逸傳來のものであるといふことを說いたことにはならない。眞理は世界の公有物である。眞理ならば受け賣しても一向耻ぢるに足らない。然し眞

理を受け賣をする者は其時既に自ら一部分眞理を創作しつゝあるのであるといふことを注意したい。而して余自身は受賣りて世を送るほど多讀博識でないことを常に耻ぢて居るのである。

余がもし或場合に獨逸の學術思想を賞讃することがあつたならば、其是非の判斷はなほ他に一面には輕薄な論議に反對するものと、又一面には趣味の上の論議とが混じて居る。獨逸學者の研究法が悉く皆正當であるといふ譯ではない。時としては煩瑣な形式や朦朧たる推論もある。之に對しては佛英の學術思想に於て遙かに勝るものを發見することは少なくない。又今日獨逸の哲學と稱するものも實は佛英の影響より生じた場合も少なくはない。然し又佛英の哲學思想中今日人々の賞讃するものゝ中には獨逸哲學の流れを汲んだものも多い。概して言へばカント以來の獨逸哲學には興味あるものが多いことは何人も許さねばならぬことと思ふ。世には敵國であるとなつてから遂に一切學術まで非難しようといふ者もあるし、(平生から嫌つて居たからでもあらうが)或は自己の趣味若しくば專攻の學術的研究から、例へば佛國の文化をのみ賞讃するものもあるから、其に對しては數百年の歴史を有する獨逸思想にも亦文化的意味があることを示してもよいと思ふのである。而して此思想は勿論十九世紀の初に盛であつたが、然し其後と雖も全く衰えたのではない。今は國としては勿論敵である、而して新聞の傳ふる所によれば、歐洲に於ける獨軍の擧動には多々非難すべき點もあるが、然もなほ單に文化學術の點から此國を觀察する餘地はあると思ふ。而して此立場から例へば獨逸の哲學を賞讃することがあつても、同時に佛國の學術文藝の價値を認めない者でないといふことを附記したいのである。

なほ歐米の思想及び社會に關する卑見の一端は『哲學綱要』中「歐米哲學界の印象」及び『現代の價値』中「歐米の一瞥」に陳述してあるから、今此には贅しない。

我實業家に檄して販路の擴張を薦む

法學博士 河津暹

一

今回の歐洲大戰亂は經濟上より觀察すれば、英獨兩國の商權爭奪の爭とも見ることが出來る。英國は其先進國であつた和蘭の商權を破り、其競爭國であつた佛國を抑えて競爭することが出來ないようにしてから、世界商業の覇權を握るようになつて、他國の追隨することを許さなかつた。勿論、英國が世界商業の覇權を握つたといつた所で、曾て和蘭などが世界商業の覇權を握つたとは大に趣が異るので、恰も群雄の首班たるに過ぎなかつたのである。然るに星霜を經るに從ひて世界經濟の狀態が大分變つて來た。其れは獨逸と北米合衆國の經濟の進歩が特に著しいものがあるので、漸次英國の塁を摩せんとするに至つたのである。數字に於て英國の經濟と獨米の經濟とは直ちに比較することは出來ないが、英國は老大國丈に其進歩は遲々たるに反し、獨米兩國は新進國丈に其進歩は著しきものがある。獨逸の貿易表を採つて見ると、輸出入合せて、西暦千八百七十二年には五十九億五千七百萬馬克であつたが、千九百十一年には百七十八億千二百萬馬克に上つたのであつて僅々四十年の間に二倍半弱の進歩を示して居る。此は外國貿易に例を取つたに過ぎないのであるが其の經濟の進歩の速なことは推知することが出來る。英國は此の勢を見て實は氣が氣ではなかつたのである。英國に帝國主義論が起つて英本國と英植民地とを打つて一丸となして永く商業の覇權を維持しようと試むるものがあるのは畢竟之が爲である。特に獨逸は天與の恩惠には乏しい國であるから、其の經濟を發達せしめたのは國民の奮勵努力の結果である。政府も學

者も國民を奬勵し鞭撻して少しても早く長足の進歩をなさしめようとしたのである。國民を奬勵鞭撻する目標は常に英國であつたのである。「英國は是々てあるから、之を凌駕しなければならぬ、英國は近年是々に勢が衰へたのてあるから、この際奮發して之を倒して仕舞はなければならぬ」とは政治家學者などが折に觸れて國民に敎えた紋切形の敎訓てあつたのてある。獨逸國を通じて排英の氣風が漲つてるのは、半は其の國民の氣風に由ることてはあるが、半はこれ等政治家等の敎訓の結果といはなければならない。所て、獨逸側の觀察ては此の戰亂に乘じて英國に大打擊を與ふることが出來たなら、英國の商業の覇權は破壞せられ、運よくば、獨國が之に代りて世界商權を握ることが出來るてあらうと思つて居つた。甚だ虫の善い話てはあるが獨逸國民の大部分は此位に思つて居つたのてある。英國も前に陳べたように商業の覇權が奪はれることを憂へてゐたのてあるから之を機會に獨逸を粉碎して再び其隙を窺ふことなからしめようとして居るのてある。獨逸皇帝が宣戰せらるゝに臨みて英獨兩國の商業上の緊張した關係を重視せられずに、英國はよもや戰爭に加はることあるまいと思はれたのは大なる誤算てある。現に英國が聯合軍の首班になつて居るてはないか。

この觀察が大過がないとすると、英國の目的とする所は獨逸の商權を根底から破壞して再び起つこと能はざらしむるにあるのであらう。其目的が達せられざる間は、平和克復を求むることはあるまい。

二

英獨兩國の商業上の緊張した關係は或程度までは之を東洋特に支那市場ても認むることは出來る。我國が日英同盟の誼を重んじて、獨逸の東洋に於ける根據地てある靑島を包圍し之を破碎するのは、目的は勿論主として軍事上政治上にあるが商業上、經濟上重大なる結果を生ずることになるのてある。我國は單に戰爭上の名譽を得るのを以て甘んぜずに、東洋に於ける獨國の勢力の衰ふるに乘じて商業上の利益を獲得しなけれ

ばならないのである。我國が奮發して商業上の利益を獲得することを勉めなければ、其利益は必ずや他國の奪ふ所となることは疑を容れないのである。日英同盟の誼を重んじて起つた所で、夥多の尊ぶべき犠牲を出して居り乍ら、何等實質的利益を得ないといふのは餘りに腑甲斐なき話ではないか、我同盟國は一番先きに經濟上の利益に注目するのに、我國は之に重きを置かぬといふ理屈がない。故に我輩は玆に少しく支那市場に於ける獨逸の勢力を論じて、我國民特に實業家の奮發を促さんと欲するのである。

獨逸は近年支那市場に於て勢力を張つて來たのであるが、何しろ同國が支那市場に注目し初めたのは尚日の淺いことで、今日の所では未だ重要なる地歩を占むるに至つて居るとはいへぬ。試みに支那貿易表を採つて輸出入を調べて見ると西暦千九百十二年には

輸入（百萬兩ヲ單位）

英國並ニ植民地		二八〇
其中	香港	一四七
	合衆王國	一七四
	印度	四六
日本		九一
北米合衆國		三六
獨逸		二一

輸出（百萬兩を單位）

英國並植民地		一三四
其中	香港	一〇三
	合衆王國	一五
	印度	七
日本		五五
佛蘭西		三八
露西亞		三六
北米合衆國		三五
獨逸		一四

の數字を見る。支那から見て獨逸は輸入國の中では第四位にあり、輸出國の中では第六位にある。所で支那市場爭奪の問題は輸入貿易の問題であるから獨國は英國は勿論我國並に米國にも及ばないのである。所で、一派の論者の唱へる如くに假りに、我國が獨逸の從來輸入し來つた所を代り輸入するに至つた所で、其れ自身ではそれ程の價値を認むることが出來ない。寧ろ其よりは獨逸がこれから同市場に於て大活躍するを抑えて之に代はるといふのに大なる價値があると思はれるのである。其事は第一に注意し置かなければならぬ。

獨逸は今陳べた通り今日に於てはさまで著しき地歩を占むるには至つて居らぬが、他國が既に占めて居る所に無理やりに入り込むで兎角今日の地歩まで築き上げたにはそれは〱いふにいはれぬ苦心をして居るの

てある。其の遣方は時に或は惡竦で、道義の範圍を脱して居ることもあるが、其れ丈熱心てあつたことが知れる。特に膠州灣植民地の設備が完成するに從つて其活動は日ましに目覺しきものがあつた。一體獨逸人は仕事をするに豫め計畫を作りて、其計畫に由りて着々仕事をするのてある。其計畫を作るまてには御念入に研究をする代りには、一旦計畫が立つた以上は重大なる事由がない限りには之を變更せぬ、獨逸人に限らず歐洲人はこの氣風はあるが特に獨逸人に於て然りてある。是が獨逸人が經濟上長足の進歩をなし得た一原因てある。このことは同國の膠州灣の經營についても見ることが出來る。僕は同地に遊んだことはないが同地に遊んだ人の話に獨逸は同地の山といふ山に頻りに櫻を植え付けて何年かの後には東洋一の櫻の名所にしようとして居る。其調子ていけば何年かの後には櫻見物に吉野や嵐山などに行くものがなからうとのことてある。一事は萬事て同國の氣永く計畫に從つて經營してることが判る。其計畫が戰亂に由りて顚されて了ふてとは彼等にとりて辛いとてはあるが、競爭者にとりては難有いことてある。我國の實業家も政府も單に目前の小利などに注意せずして遠大の計畫を立てゝ着々として商權の擴張を計ることが敵の計を用ひて勝を制する所以てあるまいか。夫れから、獨逸人が外國貿易などをするに當つて稱すべきことは其需要地の消費の狀態を注意して研究することてある。このことは口ていへば何んてもないようてあるが、實際にやつて見ると仲々六ヶ敷ことてある。特に自分達の國に比べて文明の程度が低い國になると尙のことてある。それを獨逸人はよくやる。僕はこのことについては多くの實證を有つて居るが其一をいへば、チュッセルドルフ市の附近にクレフエルドといふ所があり其地に織物學校があるが東洋の絹織物や其流行意匠などの研究の行き届いてるには驚いたことがあつた。其調子で其需要地の嗜向や好尙に適應せしめ而かも進んだ技術て製造するのてあるから、久しからずして其土地の產物まて敗つて地盤を作る譯てある。我國ても此事に大分注意するよ

うになつたようであるが、益々之に注意することが肝要である。次に之に關聯してることではあるが、獨逸の商人は其需要地の風俗や何かに同化するし、又其土地の言語なども割合に早く覺えるのである。機敏に商業を擴げて行くことが出來る。其れに仲々惡竦の手段まで用ひて競爭者を苦しむることを辭さないのであるから、益々販路を擴げて行くことが出來る。之に加ふるに獨逸の政府なども少なからず保護をするのであるから益々樂である。獨逸では海外の貿易業者等に如何程位保護をするのであるか解らない。其れは豫算の上に見えない。皇室費の中から出るのであるから外國からは之を窺ひ知ることは出來ない。同國の學者の中で色々揣摩臆測するものがあるが、要するに不可解である、可成巨額の費用が之に充てられるのである。獨り政府許でない國民も一所になつて之を資けて居る。もう大分前のことではあるが麥酒の本場所のミユンヘンで麥酒の共進會があつたことがある。其時に靑島の麥酒會社から麥酒を出品したが、どうせ東洋で作つたものであり、向ふは麥酒の本場所のことであるから、正當に品評したら、中位か或は其下のものであつたらう然るに審査員は故らに之を第一等とした、他の麥酒會社も、我國ならば隨分苦狀をいひ兼ねまいが、其んな氣配も見えなかつた、其れは靑島の麥酒が優等の名を得ても自分達の商賣に關係もなからうし、其れが爲に東洋市場で獨逸製の麥酒の販路が擴がればよいと思つたからである。此事についても同國の商權擴張に勉めて居ることを知ることが出來るのである。獨逸が東洋市場に顯れてから日が淺きに拘らず着々勢力を張り來り他國が張目して恐れて居つたのは其所である。我國軍人が干戈を取つて敵の根據地を陷落せしめんとしてるのだから所謂商權は國旗に從ふて、我商人はこの機を逸せず、支那市場に於ける獨逸の商權を奪はなければならぬ。否獨逸は東洋諸國に於ては何れも相當に勢力を張つて居る、我國と印度とが其中最も多く支那濠洲之に次ぐのである。故に東洋に於ける獨逸の勢力が衰へたら、我國商人は少くとも之に代はる丈の覺悟で

商權を擴張しなければならぬ。之が戰爭の禍を轉じて福となす所以てある。其目的を達するには勿論我實業家は筆舌に盡せぬ困難と戰はねばなるまい、其困難は或は城砦を陷れる困難や港口を封鎖して敵をして出づる所を知らしめざる困難に比較して優るとも劣るまい。然し乍ら、商戰に當るべき實業家諸氏の奮發如何に由りては其目的を達し得られぬ道理はない、今が即ち千歲一遇の好時季てある。内地の市場に閉塞して不景氣などを喞んずる時てはない。十分に研究して、平和克復の曉には猛然立つて戰爭に從事し、其目的を達すべきことゝ思ふ。英國は那翁戰爭の時に隨分苦められたが、其實業家は困難を耐忍んで、徐ろに戰鬪の準備をなして置いて、いざ平和克復と聞くや猛然として打つて出て丶商戰場裡て大成功をしたのである。我國實業家も大に之に鑑むべきてある。こゝに檄して實業家諸氏の奮發を促すのである。

戰爭我觀

海軍中佐　水野廣德

一　曠古の大戰

一波動いて萬波狂ふ。去る六月廿八日墺太利領ボスニヤ州の首都セラゼヴォに於て、セルビヤ國の一兇徒が墺國皇儲並に同妃殿下に對つて放ちたる僅に二發の毒彈は、忽ち青天の霹靂となつて歐洲の天地に前古未聞の大波瀾を捲き起し、今や全歐の山河は血を以て彩られ屍を以て埋められて居る。顧みれば海牙街頭に建てられたるカーネギー平和宮殿の竣成したるは纔に昨年の事てある。當時筆を揃へ紙面を埋めて、世界の平

和と人類の幸福とを頌白したる列國の言論界は、殿壁尚ほ未だ乾かざる今日、已に早くも聲を嗄して血に叫び戰に狂ふて居る。虛欺なる平和人道の看板に擔ぎ上げられたる平和の神樣こそ誠によい面の皮で、今頃は定めし顏を背向けて泣いて居らるゝであらう。

歐洲を吹き荒む血腥き風は何時しか東洋に迄も波及し來り、日英同盟の義理合上、我が國も亦遂に戰爭の渦中に捲き込まれ、同胞幾萬の貔貅は既に海を越へて支那山東の一角に將に戰塵を揚げんとして居る。今日迄に於て已に戰爭に參加せる邦國は、片や獨墺の二國同盟に對し、片や英佛露の三國聯合で、之に日、白、塞、黑の四國が加つて居る。尚ほ最近の情報に依れば土耳其並に巴爾幹諸邦も盛に兵備を收め、動もすれば火蓋を切つて戰に走らんとし、嚴正中立を標榜せる伊太利も亦、浮氣や其日の風次第で、同盟側か、聯合側か、何れか强そうな方へ靡びかんとして居る。戰域は洋の東西に跨り、兵力は、陸上に於ては正規軍のみにても同盟軍約三百萬聯合軍約四百萬を降らず、海上に在つては聯合軍約三百萬噸同盟軍約百二十萬噸を越へ、其の戰場の廣き、其の兵力の大なる、洵に天地開闢以來の大戰爭である。

更に翻つて戰爭に參加せる人種に就きて見れば、我が大日本帝國の大和民族を始めとし、英のアングロサキソン人、佛のラテン人、露のスラブ人、獨墺のゼルマン人、ハンガリー人尚ほ之に加ふるにアルゼリヤの阿弗利加人、印度の黑人種あり。黃白褐黑、實に世界の人種戰とも言ふべきである。殊に其の武器に至りては、空中に飛行機飛び、水中に潛水艇進み、海上には一時に千七百貫の鐵丸を發射する三萬噸の戰艦浮び、陸上には彈長五尺の巨彈を放つ口徑四十二珊と云ふ怪物砲が現はれて來た。日露戰爭以來、バルカンの小ぜり合や支那、墨西哥の兒戲的革命戰爭の爲めに、少なからず威嚴を汚がされたる戰爭の魔神が、名譽回復の爲め俄に大猛威を發揮したのだから溜らない。今や中央歐羅巴では、萬物の靈長と自稱して權利義務のやかましき人間が、蟻の如く踏み潰され、草の如く薙ぎ倒

されて居る。短かき一生の中に斯かる大戰爭に際會したる吾人は幸か將た不幸か知らねど、兎に角國技館以上に見力のある勝負てある。

二　戰爭論

人間の性が善であるか惡であるか、將た又建設を愛するか破壞を好むかは、哲學の研究者に任かす外はない。併し日常卑近の事實に就き觀察すると、無心の小兒も老母の懷を痛めた折角の人形の首を捥つて悅び、有心の大人も燒打と聞けば箸を握つた儘飛び出すのが普通てある。之に依つて見ると「凶險にして亂を好む」者は、獨り日本外史て習つた武藏權守興世王ばかりでは無い樣である。而して人間は唯亂を好むばかりでなく、又頗る利を愛する動物てある。昔は梁ノ惠王孟子に問ふに國を利するの道を以てした。孟子之に答ふるに「大王何爲ぞ利を言ふ唯仁義あるのみ」と嘯きつつ、小人語るに足らずと王の留むるを聽かず、梁國を去つたと云ふことてある。併しながら所變はれば品變はり、時世が移れば道理も移る譯て、孟子の先生たる孔子樣も後世恐るべしと述べられた如く、今日に於ては學校の教科書に迄國利民福などの文字が麗々と載つて居る。地下の惠王も二千年後にして始めて我が知己を得たりと、ホヽ笑んで居るかどうかは知らねど、兎に角孟子の仁義一點張りては、利權爭奪の烈しき現代の國際間に於て生存し得ざるは明らかてある。元來國家が高い經費を拂つて、警察を設け裁判所を置く所以は之を要するに、動もすれば勃發せんとする亂を好む人間の獸心と、常に利を爭ふ人間の欲心とを拘制抑御するが爲めてある。今日如何なる文明國と雖ども、社會の警察を廢し裁判所を閉ぢた曉には、殺人强盜は到る處に發生するに相違ない。然るに此の凶險にして亂を好み、横着にして利を爭ふ人間の集團より成る國家と國家との間には、權威ある警察機關もなければ裁判制度もない。是に於て二國の間に一朝利害互に相反せんか、好亂心之に乘じて遂に實力の決鬪即ち戰爭が起らざるを得ない。彼の國際公法の如きは唯國家の道義心

に訴ふる口上一片の約束に過ぎないので、若し實力を以て之を破る亂暴者あるも、之に對して何等の制裁を加ふる機關が存在しないのである。故に苟くも人間にして亂を好む獸性と、利を愛する慾念との存する限り此世に戰爭は絕へないであらうと思ふ。今回の戰爭に於ても、墺國皇太子は何の爲めの犧牲と爲つたか、獨逸は何の爲めに劍を拔ゐたか、露西亞は何の爲めにセルビヤを助けたか、白耳義は何の爲めに獨逸の申込を跳ね付けたか、又英國の戰爭參加は單に白耳義に對する義俠心のみに因るのであらうか。かく考へ來れば何れも人間の敵愾心卽ち好亂心と利慾心との發動に外ならないのである。

　戰爭は隨分殘酷なものである。又悲慘なものである然らば戰爭なるものは百害あつて一利なきものかと言へば、一言にして「然り」と斷定することは出來ない。古來戰爭の利害に關しては、幾多の英雄、學者等に依つて種々の說が述べられて居る。乃ち其の或者は戰爭を以て人間最大の罪惡と非難し、或者は戰爭を以て人間極美の發露と賞讃し、又或者は戰爭は悲酸事にして人類の幸福と相反するも、時としては人類の墮落を防ぐ清涼劑刺戟劑として有効なりと言つて居る。其の孰れが是にして孰れが非なるかは暫らく措き、古來此世に戰爭が絕へぬが如く、戰爭を咒ふ平和論者なるものも亦常に絕へないのである。而して民族的に戰爭を絕體否認したるものは彼の猶太人である。彼等は戰爭を以て神に對して罪惡を犯かすものなりと妄信し、如何なる場合と雖も干戈を執つて他國人と血を爭ふことを避けた。乃ち彼等は戰爭を避くる爲めには、如何なる迫害にも耐へ、如何なる凌辱をも忍んだ。其の結果彼等は遂に二千年の昔、隣族の爲めに其の鄕國を逐はれ爾來今日に至る迄東移西轉、他國に寄生して悲酸なる放浪生活を送つて來た。人種あつて國土なきものは、今日恐らく猶太人ばかりであらう。斯くの如く猶太人は絕體に戰爭を嫌ふたが爲め遂に其の國土を失ひ、今に世界の穢多として到る處に侮蔑と憎惡とを以て遇せられて居る。併しながら更に一面より觀察すると、猶

太利人が世界の一民族として今日尙ほ其の祖先の血を保てる所以のものは、彼等が戰爭を避けて種族の保存を圖つた爲めかも知れない。斯うなると戰爭の利害が益々わからなくなつて來る。

三　平和論

世の平和論者なるものは概括して之を三種類に分つことが出來る。乃ち第一は戰爭行爲の殘忍を憎んで人道上より之に反對するものである。第二は軍備の不生產的なるを厭ひ經濟上より之に反對するものである。第三は政治的見地に立てる非國家的觀念即ち個人主義より之に反對するものである。而して第一は主として宗敎家並に哲學者の唱ふる古來通有の說で、道德的に成るべく戰爭を避けんと欲するに過ぎない。第二は多く實業家並に經濟學者の說く處で、軍備を撤廢して戰爭を不可能ならしめんと力むるのである。又第三は所謂社會主義者の主張する處で、戰爭反對と云ふよりも寧ろ兵役忌避論と云ふべきである。

是等の反對論中、今日最も論理的にして勢力ある平和論は、第二の經濟に立脚せるものである。兩三年前ノルマン、エンゼルと稱する英國人が、「グレート、イリユージョン」と題せる一書を著はし、(本書は安部磯雄氏に依り「現代戰爭論」と名づけ邦語に飜譯せられあり）將來に於ける大戰爭の無意味にして且つ不可能なるべきを力說し、一時歐米の思想界を賑はしたことがある。エンゼル氏は其の著書に於て、先づ各種の方面より戰爭の利害得失に就きて切論し、併せて從來の戰爭贊美說をば縱橫に辯難論駁したる上、結論として國際間に於ける經濟關係の相互交錯せる現代に於ては、强國間の大戰爭なるものは到底發生し得べきものにあらずと、種々の例證を擧げて論斷せられた。當時歐米の平和論者は此の書を得て、恰かも空谷の跫音の如く悅び、天來の福音の如く視し、或者は第二のバイブルと隨喜し、或者はルーソー以來の大思想と歎美したものである。經濟學に盲目なる吾人の如きも之を繙いて「成程こう言はるれば今後歐洲の大戰爭などは到底起

る氣遣はない」と殆んど信じて仕舞つた。從うて軍備に對する吾人の信念は頗る動揺を來さんとしたのである。

然るに今や事實は全くエンゼル氏の所期と反し、同書出でて未だ三年ならざるに、歐洲の天地は現に大戰亂の巷と化して居る。此に至るとエンゼル氏の名論卓說も事實に於て全く破壞せられた譯で、平和論者の爲めには更に一層有理有力なる論據を發見せねばならぬこととなつた。而して吾人は之に依つて人界の活事象は到底死學問で律することの出來ないものたることを一層深く感じた。

四　獨逸の疾起

今回歐洲大亂の隱れたる眞原因を繹ぬれば、或は人種的反感、或は歷史的怨恨、扨ては又利害の衝突、覇權の爭奪等種々あるべけれど、戰爭爆發の導火線となりたるものは言ふ迄もなく、ボスニヤに於ける墺國皇儲の暗殺事件てある。而して同事件の起りしは實に緣深く日長き六月二十八日にして、獨逸が決然劍を拔ゐて起ちしは八月の一日である。其間僅に一月に過ぎずして、局面展開の速なりしこと殆んど、疾電迅雷、日を塞ぎ耳を掩ふの遑なきの槪がある。之を從來の例に徵するに、近世文明國の戰爭なるものは、國際問題發生してより愈々砲火を開くまでには、常に多大の時日を費やして居る。日露戰爭の如きも、滿洲問題に關する交涉の開始せられたるは三十六年花の四月で、談判愈々破裂して我が聯合艦隊の佐世保發進は翌三十七年雪の二月であつた。乃ち約十ヶ月の長時日を外交談判に費やして居る。日清戰爭の如きさへ形勢逼迫後尙ほ一ヶ月の時日を經過した。況して世界の横綱たる歐洲列國が、愈々本場所の勝負を爲すに當つては、少くも化粧立の二三遍と「待つた」の五六度位はあるものと、豫めシビレを抗へて待つて居つたのである。然るに豫想は全く外れ、獨逸が猛然として「待つた」なしに飛び掛かつて來たのには、吾人ばかりてなく列國共に驚いたことてあらうと思ふ。

斯くの如く獨逸が猛突的に開戰を宣言したる理由は抑も何故であらうか。其の最大理由は軍略上の要求に基くものたるは素より言ふ迄もない。西には老いたりと雖も四十年來の宿怨尙ほ忘れざる佛の富國を控へ、東には七年前の屈辱を深く含める露の大國を負ふ。而かも與國墺太利は老弱殆んど賴むに足らず、獨逸如何に强大を誇ると雖も、同時に二國を相手として決戰を交ゆることは困難である。是に於て獨逸の基本作戰としては、境域尨大なる露國の動員尙ほ未だ完成せざるに乘じ、疾攻急擊先づ西隣の佛國を破り、然る後直に軍を東旋して更に露に當り、以て敵を東西個々に擊滅するの策、即ち所謂內線作戰とかを採るの外はない。之を以て獨乙の立場より論ずれば、既に戰爭を避く可からずと決心したる以上は、敵に戰備完成の暇を與へず、閃電の如く起ち、疾風の如く動かねばならぬのである。

　上記軍略上の要求は獨乙急起の最大原因たるに相違なきも、素人管見に依れば、尙ほ爰に國際經濟の關係に基く一大原因がある。去る一九一一年モロッコ問題に關して、獨乙と英佛との間に國際葛藤を生じ、事局は一時頗る緊張の狀を呈した。當時獨乙の橫紙破り的の行動に對して英佛の輿論は大に激昂し、兩國の資本家は獨乙國內に投ぜる自家資本の回收を始めた。之が爲め伯林を始めとし、獨乙の大都市に於ける銀行の破產するもの頻りに相尋ぎ、獨乙經濟界に大恐慌を惹起した、是に於て外交に對する非難の聲は盛に自國謝濫の內より起り、流石剛愎なるカイゼル陛下も遂に我を折つて英佛の言を容るゝの已むを得ざるに至つた。是れ最近に於ける獨乙外交の大失敗にして、由來負嫌ひのカイゼルをして切齒扼腕憤慨措く能はざらしめたのである。英佛財力の壓迫に依り獨乙をして遂に膝を屈せしめたるモロッコ事件は、エンゼル氏の所謂國際間に於ける經濟關係が戰爭を不可能ならしめたる好個の活例にして、獨乙は之に依つて多大の敎訓を得、外交談判に時日を空費するの不利を覺り、外國資本家をして獨乙經濟界に手を下すの暇なからしめんが爲め、戰

爭突發主義を採るに至つたのてある。由是觀之、國際間に於ける經濟關係が愈々密接するに從ひ、戰爭は益々突發的となるを免れないであらう。故に將來の軍備なるものは常に緊備充實して、何時にても戰爭に應ずる丈の準備を整へて置かねばならない。若し然らずして大砲や彈丸などは、外交談判が始まつてから後、緩る／＼製造しても間に合ふなどゝ、悠長な考へを持つて居樣ものなら、戰爭が始まつて後幾ら擧國一致て騷いだとて、再び取り返へしの付かない不幸を見るに至るてあらう。

五　實力の威

獨乙は開戰の劈頭先づ永世中立國として自ら承認せる白耳義の中立を犯し、遂に英國をして正義の師なる美名の下に蹶起せしめ、作戰の上に大誤算を招いた。之を獨乙暴惡の第一信とし、其の後の歐洲電報は獨軍の蠻行と題し、曰くダムダム彈を使用せり、曰く老幼婦女を殺戮せり、曰く無防禦の地區に爆彈を投ぜり、曰く無抵抗の市街を燒き拂へり、曰く占領地に對し軍用金を賦課せり、其他曰く何、曰く何と、頻りに獨乙の不法行爲を鳴して之を世界に訴へ、獨乙人を以て文明の假面を被むる猛獸とさへ呼んてある。若し之を事實とすれば明らかに交戰條規を破れるものにして、其の暴惡や責むべく、其の殘虐や憎むべきてある。素より交戰國の政府が堂々と聲明せる以上は恐らく事實に相違あるまい。然らば之に對して聯合軍の擧動は如何てあらう。吾人は獨乙側の通信を得ること困難なるが爲め其の實象を知ること能はざるも、聯合軍殊に英佛が使用するアルゼリヤ兵や印度軍の如きは、果して嚴格に交戰條規を嚴守し得らるてあらうか。○○戰爭中我國の新聞は筆を禿して○軍の蠻行を絶叫して居つた。思ふに同戰爭當時の○兵は矢張り今日の○兵である。英佛軍がダム／＼彈を使用したとの報は、旣に獨乙側よりも發表せられて居る。玆に至ると誰か烏の雌雄を知らんやと評するの外はない。又露國は墺軍の俘虜をば西比利亞に送つて鐵道工夫に使役するとの情報

もあつた。日露戰爭中露國俘虜をば外國觀光團の如く優遇したる吾人の耳には頗る意外の感がある。

公平なる見地に立つて觀察すれば、戰場に於ける軍隊の行動は其間多少寛酷の差こそあれ、敵味方先づ御互樣と云ふべきが至當の見解である。我が日本軍の如く、秋毫も犯かさず、一婦も辱しめずと云ふ如き、仁義の師は滅多にあるものでない。世の所謂文明とか人道とかの上より論ずれば、戰爭なるものが抑々已に大々的野蠻行爲である。非人道行爲である。此の野蠻なる非人道なる戰爭に參加する以上は、之に伴ふて生ずる禍害は豫め覺悟せねばならぬ。元來戰爭なるものは之を大にしては一國の存亡、之を小にしては一身の生死の岐るゝ處である。若し一たび敗れんか、國は亡び身は斃れ同胞の自由も權利も敵の爲に奪はるゝに至るかも知れない。故に最後の勝利を博して交戰の目的を達する爲には、國家も國民も全力を傾盡して之に從事し敵國並に敵國民の利害などを顧慮する暇はない。即ち目的の爲めに手段を擇はざるは古來戰爭の常である。是に於て戰爭より生ずる禍害をば成るべく輕減せんが爲めに、各國申合はせて定めたる約束が即ち國際公法並に交戰條規である。

之を以て道德上より言へば、一度び約束したる國際公法や交戰條規は必ず之を遵守するが至當である。併しながら此の國際公法や交戰條規なるものは、多くは彈丸のゥ鳴りも聞かねば白刄の閃めきも見ざる公法學者や政治家などが、ペンと紙とを以て机上で議定したるものである。左れば勝つか負けるか、死ぬるか生くるか、碧血川と流れて伏屍山を築く戰場に於て、敵愾の血は沸騰し、殺伐の氣は昂奮せる軍隊間に、果して能く此等の約束が恪守せらるゝや否やは頗る疑問と云はねばならぬ。彈丸を蹴つてはならぬ、眼を衝いてはならぬとは、相撲や柔道に於てこそ守ることも出來るてあらうが、敵を殪すか我れ死すかの果たし合に於ては到底守ることは出來ない。渴しても盜泉の水を飮まずとか、君子は人を厄に苦しめずとか、氣取つて居つては迚ても戰爭に勝てる目途はない。過ぎし普佛の戰

に巴里落城の際、佛國の記者は「巴里に一人の處女なし」と歎いたと言ふが、今回の戰爭に於ても巴里にして若し落城の不幸を見んか、四十年前の歎を或は再び繰り返へすかも知れない。併し斯く言へばとて戰場に於ける暴行を是認する意味では決してない。唯机上に於て定めたる約束は、實際の戰場に於ては嚴守され難きを說くに過ぎないのである。

頻々報せらるゝ獨軍の不法行爲も、若し獨乙にして敗れんか、物質的の損害に對する賠償は或は之を要求することも出來るであらう。併しながら縱令千萬金を積むも、一たび屠られたる嬰兒は再び蘇生せしむることとは出來ない。一たび汚されたる節操は再び淸むることとは出來ない。之に反し若し萬一獨乙にして勝ちたりと假定せんか、彼等の犯したる蠻行も暴虐も之を責むることも能はざるのみならず、更に數層の苦痛に泣かねばならぬのである。踏まれても蹴られても、敗者は絕對に服從せねばならぬのが戰爭の眞意である。

之を要するに國際公法も交戰條約も、若し實力を以て之を破壞する亂暴者ありたる場合には、己も亦實力を以て之を防ぐ外、他に救ふの途はないのである。即ち此等の法規は唯敗者を律するに過ぎずして勝者を律することは出來ないのである。つまり勝てば官軍で勝つた者は犯し德となるのである。之を以て我が國民たるものも、縱令戰爭となるも國際公法に依り、個人の生命財產は安全なりなどゝ太平樂を極め込むに於ては、或は飛んだ不幸を見ねばならぬかも知れない。殊に敗戰國に於ける婦女の節操の保たれたる例は古來絕へて無い處である。故に生命の安全も、財產の保護も强固なる國家あつて而して後初めて確實となるので、實力の威の偉大なる事を忘れてはならぬ。

六　力か富か

決勝の大戰尙ほ未だ行はれざる今日、交戰各國兵の優劣强弱を比較品評するは聊か早計に失するの嫌あるも、今日迄に判明せる戰鬪の經過に依りて略ぼ大體を推斷することが出來る。

先づ佛國方面に於ける戰況に就きて見るに、初め獨乙は開戰の劈頭佛國の戰備未だ成らざるに乘じ、一氣に巴里を衝かんが爲め進軍の途を中立國白耳義に借らんした。然るに眇たる白國頑として之に應ぜず、敢然リエージの要塞を固め、孤軍奮鬪、以て雲霞の如き獨の大軍を阻止すること旬日に及んだ。此間に於て佛國は着々戰備を修めて獨の侵入に備へ、英軍亦海を渡つて旗を大陸に樹て、茲に英佛白の聯合軍は白國ミユーズ河の天險に據つて、獨軍をリエージ、ナミユールの線に支へんとした。白耳義の頑抗に作戰先づ齟齬したる獨軍は、一部を以てリエージを包み、主力は更に其北方を迂回して鐵騎忽ち白都ブラッセルを衝いた。是に於て白軍は退いてアントワープの堅砦に籠り、英佛聯合軍亦其の左翼抵抗線を白佛の國境に却け、あはれ白耳義の南半は忽ち獨軍の蹂躙に委するに至つた。勝に乘じたる獨軍は洶湖の勢を以て直に聯合軍に迫まれば、最右翼の英軍先づ破れて聯合軍の足並漸く浮き立ち、リール、ベレンシエンス等の佛國大要塞も亦僅に一日にして守りを失し、四十年間恨みも深き獨軍の蹂躪は茲に復び佛國の山野に印せられた。爾來南風頗る振はず。「英軍は極めて勇敢なり」とか、「佛兵は甚だ優良なり」とか、英佛政府が互に樂屋內讃辭を交換せる間に、本尊の聯合軍は頻りに「陣地變更」、「退却占領」なる好名目の下に、引きも引きたり、逃げも逃げたり僅に八日間の間に所謂陣地を變更すること百二十哩に及んだ。嘗て普佛戰爭に苦き經驗を嘗めたる佛國政府は、早くも「作戰の自由」なる名義の下に、花の都の巴里を棄て、政廳を西陲ボルドーに遷し、今や獰猛なる獨軍の砲聲は已に業に「歡樂盡きて悲哀に滿てる」巴里人士の夜半の夢を驚かして居る。但し最近の情報に依れば、聯合軍は其の後の多數の增援軍を得たると獨乙數軍團の東方移送との爲め、戰勢俄に有利に轉ぜるが如きも、果して能く大勢を輓回し、二たび敵に汚されたる祖國の地を淸め、更に多年恨みの種子たるアルサス、ローレーンの故地を奪回し得るや否やは尙ほ大なる疑問である。諸種の情報を綜合するに、英佛

聯合軍と之に對せる獨軍とは、其の數に於て殆んど相伯仲し、兵器の精亦互に軒輊を見ない。然かも交戰僅に一個月にして、早くも巴里籠城の警を傳ふるものあるは何故であらう。訓練の差か、將た兵氣の盛衰か。想ふに傭兵制度にして而かも他國の應援隊たる英兵の强弱は別とし、近く三年兵役の制を採れる佛國としては、兵の訓練に於て獨乙と大差なしと見るべきである是に於てか獨佛兩軍の勝敗は一に之を兵氣の盛衰に歸せねばならぬこととなる。

更に東方の戰况に就きて瞥見するに、一時燎原の火の如く東普西亞を席卷したる露の一軍は、オスチロード附近に於て優勢なる獨軍の奇襲に遭ふて軍司令部全滅の大損害を蒙むり、爾來進軍遲々として捗らず、僅にケーニヒベルヒの攻圍に其の存在を示せるに過ぎない。之に反し東墺ガリシヤ方面に於ては、露軍連戰連勝已に州都レンベルヒを奪ひ、尙ほ最近の報に依れば決戰十七日の後遂に墺軍主力をトマショウ附近に包圍殲滅したとの事である。此方面に於ける露墺兩軍の兵力は未だ其の確數を知る能はざるも、察するに露軍は墺軍に比して甚だ優勢なりしが如く思はれる。元來墺匈國は世人の知れる如く、法律制度、言語、習俗を異にせる墺太利、匈牙利二國の寄合世帶にして國家の構成甚だ薄弱なるのみならず、其の國勢も亦恰かも現老帝と等しく、已に銳氣を消盡したる尨大の老衰國である。且つ其の軍隊の如きも、日耳曼人あり、匈牙利族あり、又スラブ種ありて、各々對國家觀念を異にせる爲め、到底强銳なる軍隊を養成することは出來ない。縱令兵數同じとするも、强毅比類なき露軍に對し勝算なきは明らかである。

是に於てか現代世界の列强中、兵の優秀なるものを擧ぐれば、東に在つては我が大日本帝國、西に在つては何人も先づ指を露獨の二國に屈せざるを得ない。近く行はれんとする此等兩國軍の決戰こそ、實に兩虎双獅の大決鬪にして、其の搏擊の壯、咬噬の烈、正に雲を卷き風を起し、古今無双の偉觀であらうと思ふ。今回の戰爭も此處まで行かぬと、我が國の爲め將來に於

て永き平和を見ることは出來ない。

由是觀之、佛國は他國の力を借るにあらずんば、到底獨逸に敵する能はず。墺國も亦他國の助を借るあらずんば、終に露國に抗することは出來ない。乃ち是等の兩國は自力のみを以てしては、迚ても隣强に對抗することが出來ないのである。乃ち他國の保護を受くるにあらざれば、完全なる獨立國の體面は保てないのである。已に他國の保護の下に生存する以上は、被保護國は保護國に對して相當の報酬を拂はねばならぬ。之を佛國に就きて見るに、隣强獨逸の野心に對し兵力を以て露國の援助を受くる代りに、財力を以て露國に酬ゐねばならないのである。換言すれば佛國の財力を以て露國の兵力を養ふてとゝなる。是に於て大國の壓迫を受る國は富を取るか、力を取るかの問題が生じて來る。

七　物力と氣力

陸戰に於て氣力の必要なるは今回獨佛の戰に依つて明らかに示されて居る。併しながら海戰に於ては聊か陸戰と趣きを異にするものがある。今假りに陸戰に於ては物力四に對し氣力六の割合とすれば、海戰に於ては物力六と氣力四の割合である。是れ陸戰と海戰とは其の戰鬪の方法に於て、根本的の相違があるに基因するのである。抑も陸戰に於ける戰鬪分子は有意識の人間である。然るに海戰に於ける戰鬪分子は無意識の艦艇である。乃ち陸戰に於ては彈丸雨の如く飛び劍戟電の如く煌めく裡に、喊聲一番、死を忘れて勇猛に突撃するは、一に將士各自の氣力に待つのである。若し彼等にして氣力旺盛ならざらんか、或は他人の後方に隱れて逡巡し、或は負傷と僞つて停止するかも知れない此場合唯彼等を律して前進を擬なくせしむるものは、無形の軍紀と指揮官の軍刀とあるのみである。故に氣力旺盛ならざる兵士より成る軍隊は、少しく難戰苦鬪に會せば忽ち潰走するを免れない。之を以て氣力盛なる少數の軍隊は、氣力劣れる多數の軍隊に打ち勝つことも出來る。是れ陸戰に於ては氣力が寧ろ物力よりも

必要なる所以である。之に反し、海戰に於ける艦艇の行動は全然機械の力に依るものにして、舵さへ定むれば如何なる强敵に對しても唯一直線に邁進するのである。其の乘員中或は死を恐るゝ卑怯者ありとするも、艦外一歩を逃げ出すこと能はず、縱令巨彈前に碎け後に裂くるも、決して自己の持場を離るゝことは許されない。既に逃るゝの途なく絶體絶命の境地に立てば、座して死を待たんよりも寧ろ進んで敵を攻擊し、所謂活を死中に求めんとするに至るは人心の常である。故に孫子も「圍師は必ず缺け」と云ひ、敵に逃げ路を殘すことを誨へて居る。否らざれば敵をして窮鼠の勇を振はしむるに至るからである。嘗て米國獨立戰爭の際英國の一商船は米國軍艦の爲めに捕獲せられ、其の乘員は米艦内に拘留せられた。然る處其後該米艦は英國軍艦に遭遇して、之と戰鬪を開始するに至つたが、戰ひ漸く不利にして甲板は碎け舷側は破れ、海水艦内に奔入して殆んど沈沒に瀕せんとした。此時先きに米艦内に拘留せられたる英船の乘員は、米艦の爲めに破孔を閉塞し、彈藥を運搬し、かくて米艦は遂に英艦を擊退したと云ふことである。歐米人の心理を以て直に我國民に擬することは出來ないが、自己生命の安全を圖る爲めには、敵兵を助けて祖國軍艦に抵抗することさへ厭はないのが人情の半面である。之を見ても逃げ場のない海戰に於ては、陸戰程に氣力の影響を受けないことが判かる。尙ほ反語を以て之を言へば、海戰に於ては平素氣力なきものも相當に氣力を有するに至るのである。併しながら右は唯海陸に於ける比較論に過ぎずして、海戰には氣力の必要がないと云ふ意味では斷じてない。物力相如く敵に對し克く勝を制するものは多く氣力に依るは明らかである。更に又陸戰に於ては軍隊の氣力と射擊の練度と彈丸の効率とが同等なれば、一中隊の步兵と一聯隊の步兵と銃戰を交ふる場合、兩軍の被むる損害即ち死傷者の割合(百分比)は必ず同一でなければならぬ。故に一中隊の兵を十二合すれば一聯隊の兵と對抗することが出來るのである。然るに海戰に於ては三千噸の巡洋艦と三萬噸の戰艦と相戰ふ場

合、縱令巡洋艦の乘員は氣力に於て又訓練に於て共に戰艦に優れりとするも、兩者の損害の割合は決して同一てない。乃ち巡洋艦の被むる損害は戰艦の受くる損害よりも必ず遙かに大である。故に三萬噸の戰艦一隻に對し、三千噸の巡洋艦十隻を以てするも、到底對抗することは出來ないのである。是れ其の大砲の攻擊力と艦體の防禦力、換言すれば彈丸の効率即ち物質力が異なつて居る爲めてある。尙ほ具體的に說明すれば、戰艦に備ふる十四吋砲の彈丸一發は克く巡洋艦を擊破擊沈することを得るも、巡洋艦の彈丸は縱令數百發命中するも、到底戰艦の裝甲を貫き之に致命傷を與ふることが出來ない爲めてある。氣力如何に旺盛にして總員敢死の勇あるも、不幸にして一發の魚雷に艦底を碎かれるか、數萬噸の大艦も忽ち沈沒若くは廢艦となつて、旺盛なる氣力も施すに途がない。是れ海戰に於ては物力が寧ろ氣力に優る所以てある。

今回の戰爭に於て獨軍の氣力は決して英軍に劣るものてない。而して獨の陸軍は英軍に對して屢々勝を制せるに拘はず、其の海軍は深くキール軍港內に蟄伏し開戰以來未だ力ある一擊をだに英艦隊に對して加へたることを聞かない。是れ爲さざるのであらうか、將た能はざるのてあらうか。思ふに獨乙の陸軍々人獨り勇敢にして海軍々人獨り怯懦なる道理はない。獨乙海軍に於ける平時訓練法の猛烈にして活潑なること寧ろ英海軍に優つて居る。加ふるに獨乙今日の境遇は海上權の獲得に向つて熱望せるは明らかなる處て、獨乙海軍たるもの當に萬難を排して活動すべき秋てある。然るにも拘はらず常に退嬰偸安の狀あるは何故てあらうか。

獨乙現在の海軍力は英國に比して約一と二の割合てある。陸戰に在つては氣力旺盛なる半數の軍隊は、往々倍數の敵に對して勝を制することがある。左れど氣力の効果前述の如き海戰に在つては、棄鉢にあらざる限り、斯かる無謀戰を行ふことを許さない。是れ獨乙海軍の容易に起ち能はざる所てある。

之を以て陸戰に在つては銃後の人を作ることが最も

必要てあるが、海戰に在つては人前の砲を用意することがより多く緊急である。我が國民の多くは、〇國の軍隊を以て單に鳥威しの案山子に過ぎずと云つて居る。其の陸軍に對しては或は可ならん。唯夫れ其の海軍に對しても亦、女小供を悦ばずに過ぎざるおもちや軍艦と思はば、是れ大なる謬見である。憂ふべき誤想である。

八　制海權

米のマハン大佐一たび海權史論を著はし制海權の必要を大呼してより以來、制海權の價値は俄に暴騰し海軍論者に對して百萬の援軍を與へた。凡そ海水に依つて國を衞られ、或は海外通商を以て立國の基礎と爲せる邦國に於て、制海權の必要なるはマハン大佐の言を待たずして明らかなる處である。四面環海の我國に於ても、制海權に對する國民の自覺近來漸く熾んとなり小學兒童の口に迄唱へらるゝに至つた。誠に悦ばしき現象と云ふべきである。併しながら百聞一見に如かずて、海軍論者が多年爛舌の說法よりも、今回の戰爭こそ一層痛切に且つ深刻に制海權の必要を國民に知らしめたてあらうと思ふ。

戰雲一たび歐洲の天に漲り、一時同方面貿易の中絕せんとしたる時、我が國民の狼狽恐慌は如何であつたか。學者は外國圖書の不入荷を憂へて、我が思想界の根渴せんことを悲觀し、賣藥商は外國藥品の杜絕を唱へて、不幸なる病者をして藥價の騰貴に泣かしめ、其他鍋釜の類より筆紙に至る迄價格の暴騰せざるものはない。而して是れ唯僅に歐洲貿易一部の杜絕に過ぎずして、米國、濠洲並に東洋方面の貿易は平時と大差なきのみならず、西歐諸國との通商も尙ほ繼續せられて居る。夫れて居て尙ほ斯くの如しとすれば、他日若し我國が制海權を失ひ、世界の通商より封鎖せられたる場合に於ける狀態は果して如何であらう。之を想像するだに慄然たらざるを得ない。我が工業界の幼稚を歎くも左ることなから、其の以前に制海權を確保するの途を講ずる必要があるではなからうか。

歐洲今次の戰亂に於て各交戰國中、損害の最も輕くして而かも最も多くの利益に浴するものは英國てある。同國は其の優大なる海軍力を以て獨乙海軍を其の軍港に壓迫し、世界の海上權を掌握して、多年獨乙が經營したる殖民地を奪ひ、獨乙が扶殖したる商權を收め、爲めに其の貿易は平時よりも却つて增加せんとして居る。而して戰爭が長引けば長引く程、獨乙の既得權を簒奪することが出來るのてある。縱令佛國て十萬や二十萬の兵士を殺したとて、英國に取りては少しも損は行かないのてある。英國が容易に媾和を承認せざるは當然てある。

之に反し哀れなるは獨乙てある。「吾人の將來は海に在り」と叫ひたるカイゼルの理想も今や全く水泡に歸し、殖民地は奪はれ、通商は破壞され、鋭意作り上げたる其の海軍は深くキール運河に潛伏して、一隻の商船さへも自國港灣に導くことが出來ない。左れば戰期の長引くに從ひ、獨乙は早晚食料軍需の缺乏を來し、遂に兜を脫いて降を請ふに至るやも圖れない。今日より之を見るに、戰時に際し自國通商の保護に堪へざるのみか、敵と一戰をだに交へ得ざる獨乙海軍の如き中途半派の海軍は、寧ろ有つて無きに如かないのである。獨乙が是迄海軍に投じたる經費を以て陸軍を擴張せしならんには、陸戰に於ても今日の如き苦境に立つことなく、西の方佛蘭西を滅ぼし、東の方露西亞を敗ぶることが出來たかも知れない。併し戰局の前途は尙ほ遼遠なり、獨乙海軍も今後或は如何なる驚天動地の活動を開始するやも計られないが、海戰の大局は今より略ほ推知することが出來る。

故に我が國の如きも、戰時軍港の番人に過ぎざる如き半派の海軍を作らんよりも、寧ろ之に要する經費をば他の方面に使用する方が或は利益かも知れぬ。其の代り制海權は最初より棄てて掛り、縱令食料缺乏するも決してひもじいと泣いてはならぬ。貿易杜絕するも決して不景氣を歎いてはならぬ。若し人並に腹が減つて空腹を訴へ、商買絕へて不景氣に泣く樣ならば、戰時に役に立つ如き海軍をば豫め備へて置かねばならないのてある。

（三年九月十四日稿了）

故人となりし十二偉人に代つて時局を論ずる書

△ニーチエに代りて現代獨逸の文明を罵る

中澤臨川

俺が死んでからこのかた廿五年、俺が發狂してからこのかた三十四年になるが、今日の獨逸は依然としてその儘の國情だ。へーゲルの文明からビスマークの文明に移つたまゝを、今のカイザルが段々と極端の方へ増長させたまでのことだ。俺が發狂したのも、實はこの文明に呪はれた結果だ。

俺の敬愛する父は謹直な牧師であつたが、プルシヤの國王フリードリツヒ、ウイルヘルム四世に大變寵遇を受けた。俺の生れた日が丁度その國王の誕生日に當つてゐたので、父は非常に喜んで、俺に國王と同じ名を附けた。

俺がまだライプチッヒ大學に通つてゐる頃であつたが、いよ〳〵ビスマークの政策が實行の庶境に這入つて、墺太利との戰爭が始まつた。俺達は毎日圖書館の窓から祖國の勝利の聲を聞いたものだ。俺は當時非常に愛國の情に燃えてゐた。

『道德のない自由の力よ！。いかに幸福て彼等があるかよ。如何に强く、心に迷はされない是等の純白な意志があるかよ。』

俺は當時恁んなことを日記に書きつけた。

するうち、國家ては壯丁が足りなくなつたので、丁度廿四歲の時に、俺も軍隊へ召集された。全體俺は若くから極度の近視眼だつたので兵役を免れてゐたのだつた。俺はナウンブルグの砲兵隊へ這入つた。俺は最もよく嚴格な訓練に堪えて、隊中でも評判者だつた。

俺の一生中でも、これだけ無邪氣で愉快な月日はなかつたらう。所が、俺は馬から落ちて側腹部に負傷したので、早速除隊になつた。

　それから丁度三年ほどしてから、今度はいよ〳〵普佛戰爭が始まつた。俺はその頃大學教授として瑞西のバールにゐたが、祖國の急に赴くために、その筋の許可を受けて、野戰病院附きになつて出征した。俺は直ちに戰掠したアルサスを横ぎつて、當時野戰病院になつてゐたメッツの方へ急行した。ストラッスブルグの側(がは)では炎々天を焦すやうな大火を見て通つた。俺が愛國の至誠から平生の感情主張を忘れて、所謂「人民」と同情し合つたのはこの時が初めでまた終りであつた俺はその頃、佛蘭西へ出征してゐた友人に恁んな手紙を送つた。

「然り、然り。我々が共通に持つ觀念は、今は火の試驗を受けた。僕も君と同様の經驗をした。僕にとつては、この數週間は、自分の主義の一つ〳〵が再認された時代として、一生忘られないであらう。僕は是等の主義のためには最う死も惜しくない……」

　俺と國家との直接關係の歷史は、先づざつと恁んなものだ。そこで此度の時局に對する俺の感想を話さう。

　俺の貴族道德主義や『權力意志』說は、繰返して說くまでもなからう。俺は英雄の崇拜者だ。俺はナポレオン一世の讃美者だ。俺は權力意志の必然の結果として、戰爭をも謳歌する者だ。俺には戰爭で自分の信念を確かめられた忘れえない經驗がある。俺は此度の戰爭の結果としても、徹底的な暴君(タイラント)の出現を望んでゐる然かし俺を以てカイゼルなどと同一に、物質的帝國主義の渴仰者と想つてはならない。俺は普佛戰爭の當時國民が戰捷に醉つて、祖國の偉大な精神的英雄ビートーベンの紀念祭を忘れてゐたことを、當時ワグナルと一緒に何れだけ憤慨したかわからない。

　然かし俺の戰爭觀などは、俺の主義を知る者には分りきつたことで、今更事新しく繰返すまでもなからう。それよりか、最つと今度の戰爭に就て適切な話をしよう。

俺も一時は愛國熱にうかされていろ〳〵狂奔したが戰爭が終つてからの獨逸國民の狀態を見てゐるうち、熱々彼等に對して愛想をつかして了つた。

野蠻人種、センチメンタルな癖にビスマークの物質文明に醉はされて傲慢ちきな國民、輕薄な唯物主義までを理想化して誤間かそうとする國民——俺はお前達に對して最つ先きに呪ひの聲を擧げた。

俺はお前達に恁う言つた。

「お前達はゲーテがエッケルマンに言つた言葉を忘れたか。彼はかう言つてゐるぞ——我々獨逸人はまだ昨日の國民だ。過古百年間我々は熱心に自分を開發しては來たが、まだ我々の國民が充分な智力と高級文明に達しうるまでには、尠くとも數世紀を要する。なぜなら我々は漸く野蠻から脫したばかりだからと。」

俺はまた恁ういふ意味のことを言つた。

「お前達は一度の戰捷に醉つて、もう慢心してゐるがよく〳〵お前達の敵を見るがよい。我々の文明は皆な佛蘭西から來たのだ。自國の哲學がどうの、音樂がどうのと言ふが、我々國民の文明の根底は矢つ張り佛蘭西文明の影響を脫せずにゐる。恁樣な強い敵を粉粹したと思つて得意がつてゐるお前達の氣が知れない。抑々お前達は、文明の意義から考へ直して掛らねばならない。眞個の文明とは國民生活のあらゆる表現を貫通する藝術的樣式の統一にあるのだ。唯だ多く知り多く學んだからとてそれが文明の表象でもなければ、文明に導く必然の手段でもない。寧ろ雜駁な學術技藝の隆盛は野蠻の一過程、生活樣式の薩摩汁を示すものだ。そんな雜物文明を以て一時の武力を誇り、佛蘭西のやうな統一した眞に生產的な文明を持つ國に長く對抗しようとするは、由々しき誤迷だ。純正の文明とは「等質的文明」のことだ。あらゆる國民生活の底まで浸み渡つた個性と生氣とを有する文化のことだ。お前達の敵を見よ、佛蘭西を見よ。」

然るに我々の國情は何うだ。永い運命を繼續しようといふ國民に採つて第一の不幸は、それが眞正の文明の意義を解しない癖に、既に自ら文明國民を以て自負

することだ。我々の國には近年になつてから、ビスマーク政策の餘德を受けて物質文明の産んだ不思議な一階級が加へた。それを俺は假りに『開化した俗物』と名けた。開化した俗物共は、雜物的知識に長じてゐるが、個性の確りした修養は零だ。官僚でも、大學でも新聞社でも、近年は皆なこの徒輩で充たされてゐる。彼等は國家や宗敎や道德や文學や結婚や家族制度や憲法や自治やに就て、不文の習慣を共通的に守つてゐるが、何一つに就て徹底した自發的の考へを持たうとは思はない。そして此の共通的なコンベンシヨンが、等質的統一文明の表象だと考へてゐるらしい。之は最も上手な猿眞似文明だ。然かし、生氣を缺いてゐるだけ眞個の野蠻よりも猶ほ惡い顯象だ。彼等が金科玉條のやうにしてゐる「輿論」とは何だ。あれは個人的怠惰を現はすほかには何の意味もない。

　俺は早くから恁ういふ考へを抱いて、現代の獨逸文明を呪つたが、俺の死後までも此の傾向は益々惡るい方へ爛熟した。俺はどうしても現代には佛蘭西文明に越すものはないと思つてゐる。それで俺は生前、獨逸魂に感化された佛蘭西人などを見ると癪にさはつて堪らなかつた。テーヌを御覽。ヘーゲルの感化を受けてから何れだけ惡い方向へ向つたかを。獨逸の影の附き纒ふ何處にも、俺は腐廢を感ぜずにはゐられなかつた。終ひには、自國民の影を見るさへ、獨逸人の理智といふ詞を想ふさへ、『俺の消化を妨げた。』

　俺の考へでは、ライプニッツとカントは、『歐羅巴の智的誠實を阻害した二大障碍物』だつた。折角起りかけた科學の眞精神を倒して古い理想に逆戻りさせた罪は彼等にある。音樂だつて獨逸に碌なものは一つでもない。獨逸の音樂家と言はれた立派な人達は、その實皆な外國人で、スラブ人や伊太利人や丁抹人や猶太人ばかりだつた。

　今考へれば少し言ひ過ぎたかも知れないが、俺はわざと自國民の傲慢心を傷けてやるつもりで、ゲーテをけなして、ハイネを獨逸第一の詩人だと言つてやつたそして『フアウスト』よりも、バイロンの『マンフレッ

ド』の方が餘程の傑作だと言つてやつた。

俺は何かにつけ獨逸人の理想化する癖が一番嫌ひだ第一、理想なるものは必然の前には、みな僞りではないか。

俺の死後廿五年。俺は今まで自分の説を變へる必要を見なくて來た。呪はれたる獨逸よ。

然るに今回はカイゼルの野心から遂々歐洲の大動亂を起した。俺も流石に自國民の敗滅を聞くに忍びないが、然かし將來の文明の爲めには、切に佛蘭西や、そしてドストエブスキーを出したスラブ族の捷利を祈つて已まない。

それに就けても想ひ出すことがある。それは俺が生前にして置いた豫言だ。俺は近い將來に歐洲に平呑的大動亂の起ることを豫言して置いた。そして國民的の區分を離れた『歐洲的文明』の勃興が必らず來ることも告げて置いた。その文明は統一的個性の貫通した眞正の文明でなければならない。然るに若し萬々一カイゼルの野心が貫かれて、協商側の敗けるやうなことにてもなれば、それこそ歐洲は再び野蠻状態を繰返すかも知れない。この際この時、切に俺は人道の爲めに『超人』の出現を望んで已まない。

△ピットに代てアスキスに與ふるの書

田中萃一郎

アスキ君足下、足下今や大英全土の輿望を負ふて大政輔弼の任に當る、君に向て閣下と呼ばざるは君に對しては勿論のこと、大英母國に對しても亦禮を缺くものなきにあらず、而も三寸息絶えて天國の上より見れば、人類はすべて平等にして、上下内外の別あるなし是れ僕が君に對して俗界の敬禮を守らざる所以の一なり。而してその二は僕が君の政治的手腕に敬服して、國事多端の際敢て一夕の欵晤を君に要めんとするの熱情已む能はざるものあるに出づ。且又宿醉未だ醒めず、ウエストミンスターの議場に於ける禮節を守るこ

とをも、猶且つ憾しとすればなり。

アスキス君足下、足下は遂に大英母國の國威と民權とを擁護するの必要に逼られ、奮然として干戈を執て新獨逸帝國の皇帝と輸贏を戰場に決せんとの大勇猛心を起されたり。僕の施政の晩年に方り佛國にナポレオンなるもの現はれて覇を歐洲大陸に唱へんとせしが、今やウイルヘルム第二世なるもの獨逸に君臨し、大陸の覇者たるに甘んぜず、更に海上に於て大英母國と相頡頏して下らざらんとす。僕は與國たる舊獨逸帝國の皇帝のナポレオンと戰ひて一敗地に塗れしを聞き悶々の情抑ゆ可からず、爲に痛く健康を害し遂に大英國首相の實權を失ひて天國に入りしが、時勢は一日も流轉して止まず、僕の瞑目せる後軈て滅亡したりし舊獨逸帝國の廢址より再び新獨逸帝國起り、その三代目の君主としてウイルヘルム第二世を出せり。而して今や君この第二十世紀のナポレオンに對してその横暴を懲さんとす、僕の君に對する同情の痛切なるは實に是れが爲なり。而して君が僕と同じく財政の整理内治の改革を重しと爲し、半生の事業を之に委ねしを見る時は、同情の念更に痛切なるものあり。君は墺塞事件の危機を告げしに際して、百方平和の解決に努力し、事情已むを得ざるに及びて初めて劍を拔て立てるが、僕も千七百九十二年の二月議會に於て財政の好況なるを報告するや、『歐洲の形勢より見て刻下の如く將來十五年間平和の繼續を期待し得可き時機は從來英國史上に存ぜざるものゝ如し』と斷じ、同年十一月スタッフォード卿に寄せたる私信に於ては英國の大陸戰爭に參加するを以て不幸なりとし、列强の交戰を中止し佛國をしてその内政に全力を注がしむるの方策なきにあらざる可しと述べ、當時毫も戰意無かりき。然るに佛國革命政府は數日にして從來閉鎖されたるエスコー河を開放して倫敦の貿易を打破せんとし、歐洲各國政府の現狀を打破して之を顚覆せんとするの決心を示し、遂に千八百九十三年二月一日我國に向て宣戰したり。君が白耳義中立侵犯問題の起るに及びて初めて强硬なる抗議を提出せしの苦衷は僕の深く察せざるを得ざる所なり。僕

在世の時一日友人數輩と共に、首相として最も必要なる資格は何ぞやとの問題に就て、談論を闘したることありしが或は雄辯なりと云ひり、或は知識なりと云ひり、或は努力なりと云へり。然るに僕は忍耐なりと思ふ。外交の上に於ては忍耐の殊に必要なることは、君の夙に會得せらるゝ所なるが如し。是れ僕の我が母國の爲に大に意を安んずる所以なり。

アスキス君足下、足下は開戰の後間もなく我國憲法上の慣例を破り、政黨員ならざる一軍人を擧げて陸相と爲し、之に國務大臣の椅子を與へられたり。キチナー元帥は埃及に南阿に百戰の勇將にして、而も軍政統率の行政手腕を具備せり。君の英斷は忽ちにして戰局の上に顯著なる効果を現す可き也。僕が初めて內閣を組織せし當時は所謂國務大臣は內外兩務に過ぎざりしが、佛國に對して開戰せる後、千七百九十四月七月僕は初めて陸相を置き親友ダンダスを之に任じたり。然れども我國の陸相は甚だ振はず、唯同年十二月海軍尙書と爲せるスペンサーの行政的手腕群を拔けるが爲他日トラファルガー戰勝の準備を整へ得たるを以て聊か心を慰めしのみ。君が徒に政黨內閣の主張に拘泥せず、有爲なる閣僚を失ふをも顧みず、一大英斷を行ひしは、僕の敬服措く能はざる所なり。君が擢用せる陸相は忍耐三年能く敵國を破り得可しと議場に明言せり然るに僕が開戰せる後二十三年にして、僕が親友の弟たるウエリントンは漸くにして佛國を威壓し得たり、實に僕の死後十年のことなりき。僕が首相たりし當時軍神の我國に幸すること少かりしより、僕と主義を等うせるマコーレーの如きも、僕を評して革命戰役の性質を會得せざるものなりと罵倒し、僕は須らく宗教、道德、財産、秩序、公法を擁護せんが爲に、神聖なる戰役を布告し、ジャコバン黨に匹敵するの精力を以て之に當らざる可らざりしに、この點を捕捉し得ざりしより、僕は施政初年の人望を損ふに至りたりと云へり新獨逸帝國を建設したるビスマークは、能くイムポンデラビリアの勢力を口にし、政治家は何人も冷靜なる打算のみにて歷史上の活劇の演出されざるを知るも、

僕は佛國の革命を恐れ且つ憎める英人の感情に動かされて開戰せるにあらず、又實戰に際してこの感情を利用するの意なかりき。墺普の帝王と異りて、僕は共和主義反對の十字軍を起せるにもあらず、又領土獲得の野心に驅られて戰へるにもあらず、開戰の目的は我國の國威民權を擁護するの外に出でざりき。思ふに君の意見もこの點に於ては僕と一致するならん。君若し平和主義者の空想に動され、プロイセンの武斷主義を剿せんと企て、戰勝の勢に乘じて獨逸の内政に干涉せんとせば、必ずや失敗に了らん。獨逸の内政は之を獨逸人に任せざる可からず。英人は何處までも自國の國威民權擁護の爲に戰ふものにして、主義の爲に空想の爲に戰ふことを好まざるなり。

アスキス君足下、足下の開戰後の措置に對しては僕は敬服信賴の念を强うすと雖も、而も僕は君に對して反省を煩はざるを得ざるものあり。是何ぞや、卽ち英國陸軍充實の問題是なり。君は南阿戰役の當時にありてはローズベリーを援けて、帝國主義自由派の爲に奮鬪せしにも拘はらず、バンナマンの内閣に入りて大藏總裁となり、次で首相となるや、寧ろ急進派の軍備縮少說に贊成し、殊に陸軍の兵備を縮少したり。若し君にして夙にロバーツの說を容れて徵兵制度を實施せば、開戰後一箇月にして英佛聯合軍の力を以て獨逸に致命的打擊を與ふることも決して困難ならざりしならん。更に一歩を進めて云へば、英國の陸軍にして大陸諸國と同一の程度に擴張されんか、今回の戰亂の勃發を見ずして止みしやも知る可からず。軍備費は眞に平和の保險料たり。然るに短見者流この保險料を吝みて、所謂兵備上低氣壓地帶を生ずるより、遂に國際上の大暴風雨を生ずるなり。勿論軍事費は莫大なる額に上る可きも、英人がスポートに投ずる金額の多大なるを知るものは、何人と雖も軍隊敎育とスポート敎育とその優劣如何の問題に逢着して容易に之に解答を與へ、直ちに國民皆兵制度論者たらんとす。然るに君は愛蘭問題社會問題等に腐心して軍備殊に陸軍に關しては十分なる施設を爲さず、ロバーツの熱心なる主張に對して毫も

耳を假さゞりき。僕は君が牛津大學在學中擬國會に於て初めて提出せし動議の徴兵制度採用の必要を主張せしものなるを思ひて殊に遺憾の情禁ずる能はざるものあり。蓋し獨逸が覇を世界に稱せんとするの野心は一朝一夕のことにあらずと雖も、殊に千八百九十八九年に於てその鋒鋩を現はせり。即ちビスマークの易簀せる後忽ちにして膠州灣を租借し、カロリネン群島を買收し、サモアを分割し、バグダード鐵道敷設の計劃を立て、葡領阿弗利加の將來に關して英國と協商したり。次て海軍の大擴張と爲り、モロッコ事件となり、ウイルヘルム第二世の活動は益その調子を高めしに、君は軍備問題に關して遺憾ながら熱心なりしと云ふを得ず。或は君が首相の位地を占めしより、獨逸皇帝は視て以て英國に戰意なしと速斷せしやも知る可からず。果して然らば君も亦這般大亂の勃發に對して責任なしと云ふ可からざる也。

アスキス君足下、足下が愛蘭問題に腐心せることは上に叙及せるが如し。而して大英國と愛蘭との合同は僕の政策の一部分の實行せられたるものなる、故、僕をしてこの機會に於て一言するを容されよ。僕の施政中愛蘭の舊教徒は佛國のジャコバン黨に應じて叛亂を企てしより、僕はその鎮定の後直ちに之を合同したり。故に愛蘭の合同は我國が佛國と開戰せる間接の結果なり而して僕は合同と同時に愛蘭の舊教徒に政權を與へて之を慰撫せんとせしに、この政策が國王陛下の聖旨に背きしより、僕が一度内閣を去りしは君の熟知せる所ならん。當時若し僕の政策をして悉く實施されしめば愛蘭問題は史上にその跡を絶ちしやも知るべからず、而も遺憾ながら其の跡を絶つを得ず、遂に君をしてグラッドストーンの遺志を繼承して、僕の事業を排斥せざるを得ざらしめたり。而してこの問題は最近數年間最も多く君を苦めしは、僕の君に同情せざるを得ざる所なり。但しウイルヘルム第二世との戰爭破裂以來の愛蘭人の態度は英人との間に存在せる惡感情を拭ひ去らんとするものあるが如し。僕は僕の施政當時の戰役に淵源せる愛二問題が、今回の戰役の間接の結果と

して圓滿なる解決を見んことを望んで止まざるなり。

アスキス君足下、足下は最早耳順を超ゆること三歲にして而も强健、壯者も及ばず、僕は身體羸弱にして四十八歲を以て仆れたり、而も僕は强敵の滅亡を見る能はざりしも、十五年間佛國と相爭て屈せざりき。君の强健なる敵國を屈服せしめずんば止まざる可し、首相として成功し、外交に於て成功したる君は、堅忍以て敵國に當り最後の勝利を得て國威民權の擁護を完うせんこと、僕の固く信じて疑はざる所なり。而も秋氣膚に逼るの候、足下幸に自重せられよ。

△ビスマルクに代て カイゼルを嘲る文

永井柳太郎

一

政治家は時代の變遷を知らねばならぬ。世間には十年一日の如く同一の主張を有する事を以て誇とする政治家もあるが、斯くの如きは毫も敬服するに足らぬ。元より他人の顏色を窺ひ說を二三し利祿に誘惑せられて、昨非今是を以て處するが如きは、苟しくも大丈夫の執る所に非ず、其の是なりと信ずる所は、諾し、全世界を敵とするも是を斷行するの氣節なかる可からざるは勿論である。氣節は飽まで一貫して高かる可し、然し政見そのものは、時代の進步するに從て進み、大勢の變化するに從て變化するに非れば、天下の疾患を醫し、世界文明を率ゐるが如き大政治家たる事は絕望である。現にビスマルクの如きも、ウヰルヘルム老帝に忠に、普魯西王國に節なる一心に至ては前後一貫したりと雖も、其の政見なるものは常に變遷し進化して止まなかつた。ビスマルクは晚年に至るまで殖民政策に關して反對した、夫は公が獨逸聯邦の統一に熱心なりしが爲めて、彼は先づ力を聯邦統一に集中し、帝國の實力內部に充實したるを俟ちて殖民政策に從事するに非れば、反て獨逸帝國の基礎を危うせんと信じたが爲めである。故に彼は獨逸帝國の基礎一度成るや、將に號ばんとし

て翼を收めたる巨鷲が蒼穹を翔るが如く、疾風迅雷の勢を以て四隣を併呑した。先づ一八八四年南西阿弗利加トーゴー、カメルン、獨領ニーギニヤ、ビスマルクアーキペラゴ、マーシャル群島等殆ど百萬方哩に近き殖民地を獲得した。ウヰルヘルム二世陛下は口に世界政策を唱ふるも、現獨領殖民地の內カイゼル自ら獲得し給ひたるは膠州灣サモア群島ソロモン群島カロライン群島、マリヤン群島等僅かなる三四に過ぎぬ。卽ち獨領殖民地の大部分は皆ビスマルクの建設したものである。彼が獨逸帝國の基礎定まるの後世界帝國の建設に着手した順序は明に觀取する事が出來る。而してビスマルクは又初め戰爭主義の政策を用ゐ後平和政策に腐心した。是れプロシヤを率ゐて歐洲の中原に雄飛するに足るの地步を占むるが爲めには止むを得ざるの擧てある。第一着に彼は一八六四年プロシヤを率ゐ墺地利を誘ひて丁抹と戰ひ、之に就いてスレスヰス、ホルスタインの所有權を爭ひ遂に墺地利と戰ひ、サドワの大戰に墺を擊破してゲルマン民族の號令權を奪ひ、一八七○年佛蘭西に戰を宣し、約半世紀間立つ能はざるの大打擊を與へた。この間ビスマルクは露骨に武斷政略を實行し遂に鐵血宰相の名を得たが、然し一度彼が歐洲中原に地步を占め、其の勢力を維持するの必要程度に達するや、急遽隣邦と同盟の必要を說き、平和を論ずる事切實であつた。先づ露國のアレキサンダー二世を伯林に誘ひ、モルトケ將軍をして之に答禮せしめ、更に墺地利のフレンツ、ヨセフ一世を說き伯林を訪問せしめ墺國皇帝はザルツブルグに於て獨帝に接吻するに至り遂に所謂 Drei—Kaiser—Bund. が成立するに至つた。昨日迄鐵血宰相として其の冷血を恐れられたる人が、今日は平和狂 Friedensfanatiker と呼ばるゝ程に急變した。是れビスマルクが時代の必要に應じ大勢に處するが爲めに、絕えず其の主張を進化し、轉變せしむるの用意を明白に示すものである。プロシヤが群雄割據の間に孤立し、よく其の命脈を保ちたるのみならず、一躍遂に全歐に雄飛するに至つたのは實に偶然ではない。

二

カイゼルの缺點は時勢を知らざるにある。カイゼルは常に自己の爲さんと欲する事のみを考へ、是をなす可き時代が如何なるものなるかを顧慮しない。ビスマルクが其の志を遂げんとするや、先づ其の時代を考察し其の要求に乘ずるを常とした、然るにカイゼルは時代の要求を無視し、常に自己の志す處にのみ是れ急である。カイゼルが口に世界政策を論じ、馬を列國に驅り、野心を伸さんとするも、常に失敗して益々窮地に陷入るのはこれが源因である。曩に南阿戰爭の起るや、クルウゲールに祝電を發し英國の反感を買ひ、黄禍を唱へて日本の同情を失ひ、自己の目的をのみ考へ、周圍の事情を顧慮せず、馬車馬的に事を行るの結果は遂に今回の如き大失敗を招ぐに至つた。ウヰルヘルム老帝がプロシャを率ゐて歐洲に臨むや、外交に於てはビスマルクに開き軍事に於ては大モルトケの扶けを乞ひ、一事を行ふに尠くとも數年の準備をなし初めて之を行ふの堅實なる方法に據つた。然るにカイゼルに至ては自ら用ふる事甚だ厚く、外交も之を自らし、軍事も之を自らし、ウヰルヘルム老帝とビスマルクと大モルトケとの事業を一身に兼ね、しかも前後を省みずして、其の野望を一氣呵成に行はんとする、是れ今回の大過失を生んだ所以てある。初めプロシャが佛蘭西と戰はんとするや、ビスマルクは佛以外の諸國とは豫め親密なる關係を結んだ。一八六八年ケーニヒグレッツの戰を決し、特にプロシャの大軍が墺地利の首府に迫らんとするや、ビスマルクはプロシャが佛蘭西と戰ふの近きにあるを知り、今墺の首府を蹂躙し、永久普墺の怨を結ぶは他日佛と鬪ふ曉、墺は必ず脊後より、佛を扶く可きを信じ、プロシャの軍隊が首府ウヰンナに入る可しと熱狂つゝある間に立ちて恐るゝ處なく媾和の要求に應す可きを主張した、ウヰルヘルム老帝すら其の意を解せず、今にして戰を避くるは臆病てあると謂はれたるに對して、ビ公は陛下若し強ゐて進軍を續け給はば臣は兵卒に伍して、臣の勇を示すが爲め戰場に臨むも辭せざらんと激語せしのみならず、士官の如きはビ

スマルクを暗殺せんと計りし程なりしも、彼は大抱負の前には天下を擧げて反對するも泰然自若、斷乎として平和を主張し僅かに四十萬ターレルの賠償金を收めしのみにて墺と和睦をした。勿論この結果獨逸民族に對する墺の號令權はプロシヤに移り、スレスキス、ホルスタイン、ハノオバア、ヘッセ、キャッセル、ナッフの諸州及フランクフォルドの自由都市は自ら獨逸の領有となつたが、墺は首府を蹂躪せられざりしを非常に德として直ちに舊怨を忘れて反てビスマルクと結びナポレオン三世を苦しむるに至つた。然れどもビスマルクは是に滿足せず、更に露國のゴルチアコフに交渉し同國をして暗に墺を牽制せしめ後顧の患なきを確めたる上猛然として全力を佛國に向て集中した、之れプロシヤが能く短日月に大勝利を收めたる所以である。當時普佛戰爭をなすまでにプロシヤは丁抹、墺地利と戰ひて彼等に余力なからしめたるが故に脊後を襲はるゝ危險尠なからしも、尙充分附近の障碍物に注意を拂ひ遺憾なきを期した。對佛計畫の外交の妙たるや實に嘆賞す可きてある。翻てウヰルヘルム二世陛下は、今日の大戰に處するに如何なる準備をなしたか。露佛同盟を成立せしめたるが如きは、抑も第一着の失敗てある。ビスマルクの在世中は露佛同盟は成立し得なかつた、全體佛蘭西は早くより露と結ばんとせしも、露は遂に是に應じ難き事情があつた。其の第一は露國はもと親獨主義の國である、露國の皇室は常に虛無黨を恐れ、これを放逐し、所罰したが、彼等は獨逸に逃れて陰謀を計る危險があつた故露國の皇室は常に是等の徒の監督をビスマルクに依賴したので、獨逸を敵とすることは皇室の同意を求むるに困難てあつた。第二は露國は君主專制の國で、佛蘭西は共和政の國であるから、是と同盟すれば共和政を是認することになり、露國の國體上よりしてこれに反對するものが多つた。第三は當時佛蘭西はチュニスを合せて伊太利と反目し、エジプトを保護せんとして英國と相好からず、從て佛蘭西と提携すれば多數の敵をつくる危險があつた。而してビスマルクが極力露佛同盟の成立を妨害し、これを計畫

するものを露國の宮室から放逐するように企てたので、露佛同盟は容易に成立しなかつた。然るに其の後露國の方にも同盟を必要とする事情が起たには相違なきもビスマルクの去ると同時にウヰルヘルム二世の對露の牽制力が弛んで忽ち露佛同盟が現はれた。爰に於て獨は腹脊敵を受け自ら安泰なる譯には行かなくなつた、此の間に處しては三國同盟を强國にすると同時に英國及日本を露佛同盟に接近せしめざるが最も要策であつた。

三

理想的に謂へば獨逸は日英兩國と同盟するが第一の要諦であつたらう。英國は海上の覇權を握り、獨逸は大陸の最强陸軍國にして、或る意味に於て歐洲の陸上權を有して居つた。この兩國が同盟すれば舊大陸に號令する事は困難でないが、然し露の大勢力を牽制するには尙極東の日本と同盟するが甚だ良策であつた。如何となれば露國が極東に於て日本及支那を壓迫せんとした時、獨逸は之を歐洲に牽制する義務を負ふ代り、バルカン地方に於て獨逸及墺地利民族が露のため迫害せられんとする時、日本をして之を極東に牽制せしむる事が出來る。殊に日本は日露戰爭後引續き露の復讎を恐れ、之を制せんことに苦心せるのみならず、日英同盟の極東に生じたるも元是れ露國に反抗するの必要より出でたるなれば、之に獨逸を加ふるは啻日英同盟の意義を擴張するに過ぎざる事となるが故に、決して異議を挿まなかつたらう。英國に對しては暫く海上に於ける野心を絕ち、製艦數に於て相互に制限する事の約束をなせば其の他の點に於ても、英も亦强ゐて獨と爭ふの不利益を感じつゝある事はバルカン問題及小亞細亞問題に於て近來獨逸に示したる態度に見るも明白である。若し舊來の三國同盟を擴張し、日英同盟と結び得たらんには、舊大陸の平和を獲得するに充分有力なる保證となるのみならず、遠き將來に於て人類が必ず到達せざる可からざる、新大陸對舊大陸の競爭に對する準備的行爲となるを得たのであらう。果してこの關係が成立し居たらんか、今回の如き大戰爭起る可し

とも思はれず、諾し、起るとも伊太利位が離畔するも何等の苦痛がなかつた。ウイルヘルム二世の思慮なき先づ三國干渉によりて日本の惡感を増加し日本人の親獨の機會を失はしめ、又英國に對しては、獨逸の將來は海上にありと傲然大語し、頻りに英の海上權を犯すが如き恐れを抱かしめたのみならず、露帝をレバル軍港に訪問し、太西洋の提督太平洋の提督の安否を問ふ、との如き無用の信號をなし、英人及日本人をして一層惡感を抱かしむるが如きは、外交上の未成年者に非ずんば敢て爲さぬ業である。

四

更に第三の觀察を放てば、今回の大戰止むを得ずと覺悟したる場合、何故土耳其を煽動して露を撃たしめ、埃及、モロッコ諸國に手を入れマホメット教徒に謀反せしめ、印度に聲援して謀反せしめ、更に大なる禍亂を惹起せしめなかつたか。人或は英國が戰に參加したのを目して、獨逸が白耳義の中立を犯したが爲めなりと云ふも、是れ頗る短見である。七月廿九日獨逸宰相ベートマン、ホールヰヒが英大使サ、エドワード、ゴーセンを通じて、英國政府に與へたる質問の內に、若し獨逸にして佛蘭西本國を犯す事なく、只其の殖民地を掠奪するに止めなば、英國政府は中立を守る可きやと謂ふに對して、七月三十日付を以て英國の外務大臣サ、エドワード、グレーは應へて獨逸は佛の植民地を獲得し終りたる後遂にその本國迄自由にし得る日の來る迄英國に傍觀せよと云ふに外ならず、斯くの如きは佛國を征服して軈て英國の本國に獨逸の軍隊の到るまで靜觀せよと云ふに同じと返電したるに見るも、英國は獨逸が佛國に對して戰を宣する以上機に觸れ、戰爭に參加するの意を表明したもので、白耳義を通過したると否とに關せず、英の戰ふとは最早この時は必然的の事實であつた。然らば寧ろ英國の殖民地に於ける回々教徒を使嗾し、大反亂を起さしめ、英をして自國を守るに暇なからしむるが最も上策であつた。是れビルマルクが常にポーランド人を以て露を抑へ、共和黨に味方してナポレオン三世を苦しめた故智を學ばざるも

の、その智略のビ公に及ばざるや、遙かに遠しと謂はざるを得ぬ。

五

尙伊太利をして三國同盟に反かしめたのは第四に數ふ可き大失敗である。全體三國同盟はビスマルクが墺をして露を牽制し、伊をして佛を制肘せしむる目的に出てたもので、海軍より謂ふも、陸軍より云ふも伊太利を失ふは十餘の戰艦十軍團の兵を失ふよりも大なる損害である。元より今回の戰は民族競爭である。即ちゲルマン民族に對してスラブ及チウトン民族が對立し居るが故に、佛と同民族にある伊を率ゐるは困難なりと云ふ可きも、元來伊太利を三國同盟に引き入るゝはより以上の難事であつた。全體人種より言へば、伊太利人は羅典人種であつて、佛蘭西と同一であるのみならず、佛蘭西は伊太利の統一を助け、伊太利をして墺地利よりベネシヤ及ロンバアヂの二州を回復せしめたのである。それてあるから寧ろ佛蘭西に味方す可きものが獨逸及墺地利と同盟するに至つたのは甚だ不自然てある當時伊太利には墺地利排斥黨と佛蘭西排斥黨とがあつた墺地利排斥黨に屬するものは北方人であつて、彼等はベネシア及ロンバヂアが墺太利に侵略せられたることを憤りて、常に墺太利に反感を持てをつた。佛蘭西排斥黨は重にロオマとかネエプルスとかシシリイとかいふ南方人て、彼等は伊太利統一の敵ともいふ可き羅馬法王がナポレオン三世の兵をロオマに入れて、舊教國の力によつて政權を回復せんとしたのを憤つて、寧ろ佛蘭西の敵なる獨逸に好意を有したのである。然るにビスマルクが三國同盟を思ひ立つた當時伊太利に總理大臣たりしはカイロソであつたが、彼は墺地利排斥黨と保守黨とを率ゐて內閣を組織し、ビスマルクに好意を持たなかつた。そこてビスマルクは伊太利の海岸なるチユニスの土地に於て伊太利人と佛蘭西人とが略々同數て兩國ともチユニスに野心ある事を観破し、先づカイロソを誘ふてチユニスを取らしめんとした、然るにカイロソはビスマルクに致さるゝ事を慮て是に應じなかつた。故にビスマルクは翻て佛蘭西を誘ふてチ

ユニスを取らん事を勸め、佛蘭西は一八八一年之を保護國としたのである、茲に於て伊太利人は大に激昂し、親佛黨たりしカイロツは顚覆し、親獨黨なるデプレチシが代て內閣を組織した。かくてビスマルクの宿望成り伊太利を三國同盟の中に引き入れ、以て佛蘭西を牽制せしむる計が成就した。斯くの如く外交其の宜しきを得れば、伊太利をして、其の不自然なる同盟をなさしむる決して不可能でなかつた。然るにビスマルクが造り上げたる三國同盟の一なる伊太利を逸し、其の用をなさしむる能はざるは實に遺憾と云はざるを得ぬ。要するにウヰルヘルム老帝がビ公と大モルトケによりて築ける、大帝國は、自ら以上の三者を兼ねると自信せるカイゼルの妄想によりて、其の根底より覆されんとするに到つた。重ねて謂ふ、彼れカイゼルは外交上の未成年者に非ずして何ぞ。全く未成年者である。

△「ネルソン」に代つて感慨を述ぶ

太田三次郎

余輩の時代には、今回の戰爭とは違つて、今の獨逸「カイザー」がまねやうとして居る拿破崙が、歐洲統一の業を成さんとして、西班牙和蘭等を糾合し、我英國に當つたものだから、余が率ゐた艦隊は、是等の諸敵國の聯合艦隊に當つたものだが、今度我英國は僅か獨墺兩國の艦隊に佛露兩國と共に當るのであるから、此の點は餘程樂な次第だ。余は世人の知る如く先天的に佛人嫌ひてあつたが、今日我英國は此の佛人と同盟して安危を共にしやうとするに至つたが、自分には隨分之れが奇態に感じられる。

それは偖措き敵の艦隊を其の港內に封鎖して、一歩も海上に出さしめず、以て我英國の通商に、寸毫の妨を與へざらしめやうといふことは我輩の時代も今日も異つた所はない。之れが爲余は佛國の艦隊を、二年餘も「ツーロン」に封鎖して居つたこともあつた。當時の軍

艦は今日とは異つて、帆前船で、左程大きくもなかつたから、糧食や飲水などに窮し、風波に苦めらるゝことも多かつたが、其の代り今日の様に敷設水雷とか、水雷艇とか、潜航艇とかいふものはなかつたから、敵の砲臺から少し離れて、敵の港に近く封鎖をして居つたものだ。、今日ではこんなことは出來ぬので、夜などは水雷艇や驅逐艦に其の位置を讓つて、味方の大艦は敵の水雷艇などに襲はれぬ様、洋中に其の跡を晦ますのだが、北海などで獨逸の艦隊を封鎖するには、大海封鎖といつて、大變な遠方で敵の艦隊を監視して居て出て來たら撃つといふことにするより外仕方がない。

世間では我輩は戰術が巧みであつたとか何とかいふふが、我輩には戰術といふ程のものはなかつた。只强を以て弱を撃ち、大を以て小に當ることを努めたに過ぎない。我輩の敵とせし所は、いつも味方より優勢であつたが、我輩は巧に之れを二つ又は三つに分割し、我全力を以て其の個々に當つたものだ。卽ち其の戰ふ所は、いつも强を以て弱を撃ち、大を以て小に當るといふことになるのだ。是れは陸で猛威を逞くした拿破崙の戰術と全く一轍だ。而して之れが戰術の原則であることは、陸に於ても海に於ても、古も今も變ることはないのだ。

而して斷じて之れを行へば、鬼神も之れを避くといふことがあるが、我輩の戰に勝つたのは、皆此の斷の一字にあるのだ。夫れ故我輩の戰爭はどれでも皆ンな非常に亂暴な様に見える。普通の人ならば負けそべきを我輩は斷じて行つたから勝つた様なものだ。殊に「コペンハーゲン」の砲撃などは自分で考へて見ても隨分亂暴であつた。「サウンド」海峽は今では迚も通れぬといふが我輩の時代でも木船で帆前船で、ノコ〳〵砲臺の下を通ることであるから、決して容易なことではなかつた。其れから又水路も善く判らぬ敵の水道へ乘込むのであつたから我輩は夜陰に乘じ、潜かに「ボート」て自から測量をして置いて行つたのだが、是れは今日敵の港口に敷設してある水雷を取除ける掃海事業と同じ困難だ。此の「コペンハーゲン」の砲戰の央(なかば)に於て、

迚も敗戰と見込んで我輩の司令長官であつた「パーカー」大將は、退軍の命令を下したが、我輩は片眼であるから其の信號が善く見えぬと戯れて、苦鬪を續け、終に「コペンハーゲン」を降服せしめたが、若我輩が其の命令を聽て踵を旋らさうものなら、其れこそ全軍の大敗であつたらう。どうだ、英吉利海軍の濟々たる多士の中で、今日これ程の果敢な人が一人でもあるか？あれば「キール」や「ウヰルヘルムスハーフエン」に引込んで居る獨逸の艦隊に對し、縱令艦隊で堂々と攻め入ることは出來ぬにしても、水雷艇とか潜航艇とか飛行機とかを運用して、少しは世間の人の睡眠を覺すやうなことをして呉れさうなものだ。

△ゴルチヤコフに代つて露獨國交の變遷を明かにす

煙山專太郎

ロシアの近世史上に於て似寄つた運命の下にあつた二人の外交家を見ることが出來る、それはイスヴオリスキーとゴルチヤコフとである。前者はオーストリアのエーレンタール外相と相撲とを取り、後者はドイツのビルマルクを共相手として共にそれ〴〵の時代の外交壇上の人氣力士であつたのである。所が不幸にしてロシアの外相は二人は二人とも三國同盟側の關取のために土俵際で以てうまく背負ひ投げを食はされたのてあつた。實にイスウオリスキーはエーレルタールの蹴蹶する所となり、ダツダネル開放の宿望を果さずに空しくボスニア、ヘルツエゴビナ二州をオーストリアに取られてしまつた。又かのベルリン公會に於て我は正直なる仲買人であると公言した所のビスマルクは直接にはドイツのためには何の獲物をも取らなかつたけれども、同民族のオーストリアに後援してロシアに衝り、大にドイツ民族の利益をバルカンに仲張し、爲めにゴルチヤコフをして憤怨のあまり病んで此世を早めしむるに至つた。故にロシアがこれまてドイツに出し拔かれた事は實に一再ならずと云ふべきである。今や

勸忍袋の緒は切れてスラブはゲルマンに對して挑戰し、積もる怨みを霽らさんとして居る。亡きゴルチヤコフにして若し靈あらば無量の感慨を以て今度の大戰を觀て居るであらう。兒供らしい虚榮心の強かつたゴルチヤコツフは果して世人のもてはやすほどの大外交家であつたや否やは余輩に取つては疑問であるが、今日の時局に際して交戰列強往時の政治家外交家を記臆に喚び起し來れば、何人よりも第一に此薄運なるゴルチヤコフその人を回想せざるを得ぬ。玆に余輩は彼ゴルチヤコフに代つて露獨の國交の變遷を明かにし聊か彼の遺憾を弔はんと欲するのである。

ロシアとドイツとの國交との移り變りは近時外交史上最興味ある事項に屬する。蓋し東ヨーロツパに於てスラブ民族を代表する所のロシアと、中ヨーロツパに於てゲルマン民族の代表者たるドイツの親疎遠近の關係は、直にヨーロツパ全體の國際政局に多大の影響を及ぼすものであつたからである。ドイツの國民的統一の完成せらるゝ以前に於てはロシアのヨーロツパに於て最も懼るゝ所のものはイギリスとフランスとであつたが、五十年前プロシアがドイツ統一の事業を成し遂げるに及んで、ロシアは大に警戒をその西境に加へざるを得ざるに至つた。

ドイツの方では又國民的統一の事業を完成するまでは東隣のロシアを敵に取るが不利益なる所からして、ビスマルク初めプロシアの當局者は勉めてロシアの歡心を求めんとしてプロシアの企てに妨害を加へしめざる樣にした。プロシアが東の方からの侵襲と云ふことをば更に念頭に置かずして先づオーストリアを破り次てフランスに大打擊を與へかくしてドイツ帝國を創建し得た所以のものはロシアがそれ等の戰役に於て常に中立を保つてやつた御蔭に外ならなかつたのである。已に統一の遂げられたる後に於てはドイツはフランス人が非常なる敵愾心、復讎心の目的物となつた所から西境の防備を思ふのあまりに東境に於ては、やはりこれまでの通りにロシアに親近し只管此國とフランスとがドイツを挾んで相結合することのない樣にと努めたのであ

つた。フランスをばヨーロッパに於て孤立の地位に立たせ東の方ロシアに親近すると云ふのはこれドイツのビスマルクの政策であつたのである。此政策の實行に都合のよかつた事は當時のドイツの帝室とロシアの帝室との間には最も親密なる姻戚的關係の存在せし事情であつた。ロシア帝ニコラス一世の妻にしてアレクサンドル二世の母堂であつた所のアレクサンドラ、フエオドロウチはカルロッタと稱して、プロシア王フレデリキ・ウイルヘルム三世の息女であり、即ち、ウイルヘルム一世帝の實妹であつたから、ウイルヘルム一世とアレキサンドル二世は叔姪の關係を有するものであつた。

ドイツフランスの大戰役後間もなくベルリンに於て催されたるドイツロシアオーストリア三帝の會合は蓋しビスマルクが此政策の發露であつた。ビルマルクは三帝國が社會主義の危險に對して共同の利害を感ずるものであると云ふことを口實として三帝の盟合を策し各國の急進黨をして恐怖の念を懷かしむるに至つた事恰も、ナポレオンの大亂の後に成立した同じ三帝國の神聖同盟の如き觀があつたのである。

三帝同盟の成て幾くもなくしてビスマルクの辣腕はドイツとオーストリアとの間にドイツがオーストリアのバルカンに於て其領土を擴張するを助くべしと云ふ條約を結ぶに至つた。これビスマルクの理想たるゲルマン民族大同盟の前提であつた。一面に於て三帝同盟に於てドイツがロシアに對して他意なきを標榜しながら他の一面に於てはバルカンに於てロシアと利害の相容れぬオーストリアと結び之に後援を與へたと云ふことは不信義の行と云はなければならんけれども、ビスマルクの眼中ドイツの生存發達のために區々たる信義も約束もないのであつた。明治十一年ロシアトルコ戰爭の結果としてベルリンに作られた關係列國の大公會に於てはそれだから、ビルマルクは一意專心同じゲルマン民族たるオーストリアに味方して之をしてボスニア・ヘルツエゴビナの二州を占領せしめ、以てスラブの南侵に對してドイツ人の勢力を東南ヨーロッパに伸張せんことを計つた。ドイツの此態度によつて三帝同盟は

破れてしまゐ、ゲルマンとスラブとはバルカン問題に於て相容れざるの氣勢を示すには至つた。ロシアにおけるスラブ民族統一主義者の排ドイツ運動の大に與つたのは實に此機會に於てであつたのである。ビスマルクが此共同の危險である所のロシアに對抗するためオーストリアとの間に同盟條約を締結したのも亦此際のことである。

ビスマルクの此政策は平常、甥御のアレクサンドル二世を愛して居られたドイツ老帝の甚だ慊らざる所であつた。かくて老帝はアレクサンドル二世からしてドイツのロシアに對して餘まりに沒友誼であることを泣きつかれてロシア帝を慰撫せんため、ビスマルクの不承知にも拘らず、明治十二年の初秋を以て單身ロシアの國境である所のアレクサンドロウオーに幸せられてアレクサンドル二世とこゝに邂逅し帝の他意なきことを示さんと力められたのであつた。

されど兩國君主の間に蟠れる親愛の情を以てするにも拘らずロシアとドイツとの兎角に相容れなかつたのは以上の如くドイツのオーストリアに對する政策のロシアのバルカンに於ける利益と調和しなかつた事情の外に、兩國の宰相たる彼れゴルチヤコツフとビスマルクとが公私共に反目して融和を缺いて居つたからであつたのである。けれどもロシアは四圍の形勢上、いつまでも執念くドイツを敵に取ることが出來なかつた。それは此國が外に於ては中央アシア方面に於てイギリスと折衝するに付て西隣の强國の好意を得て居なければならなかつたのと、内に於ては虛無黨の頻々たる兇行によりアレクサンドル二世すら白晝街上に粉碎せられロシアの皇室が枕を高くして眠ることが出來なかつたので、虛無黨鎭壓の必要上是非ともドイツの協力を得て置かなければならなかつたのである。ビスマルクの勁敵たるゴルチヤコフの死後ドイツ親近主義のジエールスが擧げられてロシアの外務大臣となつたのは此等の事情に因るのであつた。明治十七年の秋を以てロシア、オーストリア、ドイツの三帝が又もやポーランドの或都會に會合したのも此新政略の發現に外ならなか

つた。ビスマルクは之と同時にロシアのジエールス大臣との間にロシア、ドイツ相互中立の條約を締結したこれはドイツが敵（フランス）の侵襲を破る時に於てロシアが其敵を援けざる代りにロシアが其敵（イギリス）に襲はれたる場合、ドイツも亦其ロシアの敵を助くることのなかるべきを約するものであつた。此條約は六年を期限として結ばれた。此等の經過事情に照し合してロシアのドイツを畏れるとの以外に、いかにドイツがロシアを憚かつて居つたかをも見るべきである。オーストリア及イギリスとの間に三國同盟を結んで居りながら（此同盟の條約は此當時はまだ秘密に付せられて居た）、裏面に於ては其同盟條約に於て共同の敵として假想せられたるロシアと相互中立の條約を結び、自分の同盟國たるオーストリアには何喰はぬ顔てすまして居るなど云ふことはビスマルクならでは出來ぬ離れ業であると言はねばならぬ。ドイツは又ロシアの怒を招かんことを恐れて、兼ねてロシア帝の不興を被り、ブルガリア公の位を辭せざるを得ざるに至つたアレクサンドル公に嫁すべき筈のウイルヘルム一世の孫女（現カイゼルの妹、今のギリシア王妃）の縁談をまでも破談にしたほどであつた。

ビスマルクの執權の間はドイツとロシアとの關係はビスマルクの外交策能く功を奏して確然と相離れると云ふでもなく不得要領の間に過ぎ去り、従てドイツを恐るゝと云ふ點に於て其間の利害を有するロシアとフランスとも三國同盟に對して相結合すべくして未、結合するには至らなかつたが明治二十一年、現カイゼルがドイツ帝の位に即き、其鬱勃たる覇氣を以て建國の功臣たるビスマルクを放逐し、萬機を親裁するに及び列强はナポレオンの再來として少からず之を恐れ頻に之に向つて警戒を加へる様になつた。ロシア、フランスの同盟もこれがために出來上るに至つたのである。

カイゼルはバルカン方面に於ては一面に於てはオーストリアを尻押しし、他の一面に於ては親らトルコを懐柔し、小アジア、メソポタミアに於て新に第二のドイツを建てるの事業を起し、自然ロシアの其力をバルカ

ンに伸張するを得しめなかつたけれども、其代りにはロシアをして專心、極東經營に從事せしめんとし、日清戰後には黃禍論を叫んで支那の領土の一角にドイツの新なる地歩を占めた。而してロシアの極東政策が日本の反抗を買ひ、日露の間に大戰爭の戰はるゝに及んでは、二國同盟の勢力を弱めんとする計略の其圖に中つたのを好機會として、蹶然起て、モロッコに於てフランスの利益を侵襲し、バルカンに於てはオーストラリアをしてボスニア、ヘルツエゴビナを併合せしめた。ロシアは折角、戰ひには戰つたけれども極東に於ては旅順や東清鐵道を失ひ、近來ではボ、ヘ二州に於けるセルビア人たる同族をおめ／＼オーストリアに併されて泣き面に蜂のひどい目に遭はされたのであつた。ドイツの惡辣なる火事場泥棒主義にロシアの目は初めて覺めて、これまでドイツのために煽てられ、賣られ欺かれた數々の怨みは殆んど骨髓に徹するに至つたのである。

斯くの如き屈辱の歷史を有てるロシアは今や遂に蹶起し、茲いて歐洲全土の大戰亂は展開せらるゝに至つた。戰爭の結果は豫め斷ずることを得ないが、少くともロシアが積もる恨を霽らさん爲めにドイツに對して矛を執つたといふ事は地下のゴルチャコフをして十分なる喜悅と滿足との情を味はしめるであらう。

△カブールに代つて時局を觀る

茅原華山

一

私は伊太利の建國の英雄カブールとして現在の時局を論じやうとするのではありません、問題はもつと小さい問題、伊太利の外交政略家としてクリミヤ戰爭の一時期に於けるカブールとしてこの時局を見たいのです、私は國家の非常時に際して賢明にして大局を過らず、內外の事情に通じてゐると言はれてゐる當局者大限內閣の外交政策を是非するものではないのですが、若し現在の時局にしてカブールがゐたら斯うするだらうと思ふのです、然しながら誰れても苟くも文明批評

國際批評に一隻の眼を有してゐるものは、日本に一人のカブールもゐないことを知つてゐるのですから、何も心配する必要はありません

二

カブールは曾つてクリミヤ戰爭に對して"Italy act for herself"(伊太利は自分のために動く)と言ひましたこれは勿論伊太利が英佛二國の下に立つといふ意味で無いのであります、好機會を見て大に伊太利の意志を貫かうといふのです、この言葉は伊太利の運命に大なる關係があつたのです、そしてカブールはこの言葉を實行したのです、彼にはこの言葉を實行する大なる能力があつたのみならず、この言葉を實行する機會を失はなかつたのです、政治には時といふことが最も大切です、この時といふことは優れた政治家でなくては容易に捉へられないものであるが、文明史をよく讀み、國際史をよく研究し、國民雙方の生活を知つてゐるものには、三角形の三邊の長さが分つて、三つの內角が分明するやうにちやんと分るのです。

國際關係には昔から火事場泥棒といふことは流行してゐるので、民族の生活力といふものは何時の場合でも一寸の隙でもあつたら空巢をねらつてゐるものですが、その空巢が充分に空巢となつた時入り込むのが、空巢ねらひが上手といふものでせう、カブールといふ男は個人としては至極善良な紳士ですが國民の國際生活の代表者となると、この空巢の時機を見ることが非常に巧妙であつたのです、彼がこの時局に日本にゐたら矢張空巢ねらひは巧妙にやつてのけたらうと思ひます、他の政策ならばいざ知らず、若しカブールであつたら、決して火の未だ火の手の揚がらない中から、飛び出して色々な制限なぞはつけなかつたらうと思ひます、火事場泥棒といふものは火の手の盛んな時には何でも出來るものです勿論火の消えかゝつた時、顏を出してつまらないことは言ふ迄もないのです、若しこの時局にカブールが日本にゐたら、矢張り"Japan act or herself (日本は自分のために動く) と意張つて濟してゐて "Where about and when(何處へ、何時) と徐ろ

に考へてゐたてせう、所が日本はカブールの言ふごとく果して自分の意志て動いてゐたてせうか、どうてせうか。

日本人はそんなことは決して言ひません……決して言ひませんが、獨逸人――敵國の獨逸人は『日本の外務省はドウニング街にあると申します、若しカブールが日本にゐたらどうてせう、そんな惡口を吐かれるやうなことをしたてせうか

三

カブールはクリミヤ戰爭の時最後に英佛連合軍を救けました、これは明らかに機會を看てとつての上です、千八百五十五年二月六日チユリン議會て有名な演說した時は伊太利のために到來した好機會が彼の心胸に閃めいてゐたのてす、然し若し現在の日本にカブールがゐたならどうてせう、果して彼は日本民族の上に到來した好機會てあるとしてこの時局を見たてせうか、勿論彼は歐洲て開かれた大戰亂が日本人にとつて決して不幸な事件とは考へなかつたでせう、然し彼は心潛かに苦心したてあらうと思ひます、「我れの大なる自信力を以つて云々」といふやうな放言もなし得たか否かは疑問てあらうと思ひます、第一獨逸が若し露西亞を破つたとするならば、又露西亞はのし〳〵と極東に出て來るのてあるから是非とも露西亞を勝たせなければいかないてせうが、第二に英國が全然獨逸を破つた日には、日英同盟の條約に從つて青島を攻擊し制海權を限られて南の方に出ることを禁ぜられた日本は、全く大英帝國の屬國てあるとカブールは思ふてせう、また一方ては獨逸の勢力が全くなくなつた東洋ては、列國の力の平衡を失ふ大なる危險を考へるてせう、私は常々さう思ひます、若しカブールほどの外交家が日本にゐたとするなれば、必ず新たに起つて來た獨逸がその大な芽を叩き落されるよりも、蒼く榮えた大英帝國の傾斜して行く方に多大な興味を持つたてはなかつたてせうかと。それは兎も角も歐洲ては國際利害の關係の上から云つて、この度の時局には大なる國際上の弱點があることを發見するてせう。第一英國は獨逸と戰ふ

てゐるけれども海に海上の獨逸を破るのが目的で、陸に露西亞との兵力の平衡をとるために獨逸の陸軍の破れることを欲はない。第二、露國は陸に獨逸と戰つてゐるけれども、海に英國の海軍力平衡をとる爲に海軍の全滅することを希まない、斯ういふ處にカブールの得意の大なる手腕が振へるであらうと思ひます、何時までも英國と行を共にしてゐるやうなことはカブールの希望ではありますまい、彼のサルフエリノの戰の前には、彼は佛國を味方としながら、堅く心の裡にさう思つたと申します『ナポレオンなんか恃むに足るものか』と、日本の味方たる大英國にはナポレオン程の英雄もゐますまい、然しナポレオン以上の默つて自己の利益をはかる外交家は澤山居ります、それであるから日本の外交當局者は『英國は是非とも恃まなくてはならない』と思つてゐるのだらうと思ひます。

△ガムベッタに代つて時局を觀る

石川半山

君は日本の新聞記者で有るか、我輩はレオン、ガムベッタで有る、我輩も浮世に生活して居る間に、新聞記者の經驗を持て居る、ラ、レパブリック、フランセイは、我輩の機關新聞で熱心に書いた者だ、君が我輩を訪問した趣意は、君の發言を待たずして分ッて居る、今回の歐洲の戰爭に付て、我輩の所感を聞きに來たので有らふ、宜しい、モウすべて君の問ひたいと思ふて居る事も分ッて居る、君の訪問が無くても、實は我輩の所見をポアンカレイ及びデルカッセに暗示してやりたいと考へて居た所だ、幸ひに君の筆を以て「中央公論」の紙上に之を公表して、今の世界の後進の政治家に知らせる事が出來れば、それは却て我輩の幸福とする所である。

唯「愉快」の一語

一言にして我輩の目下の感情を表示するなら、誠に愉快である、我輩は千八百八十二年十二月三十一日を以て浮世を去ッたが、實は甚だ殘念であッた。ピストルで不意の怪我で死んだのだ、年齢は未だ滿四十四歳に過ぎなかッた、千八百八十二年と云へば、日本の年號では明治十五年だから、未だ十分に生存して居らるべき年だ、生存して居らるべき證據には、現に日本の内閣總理大臣たる大隈伯爵が我輩と同年で有る、大隈伯爵も元氣だが其の元氣に於ては、我輩も決して一歩を譲らなかッた者だ、此の千八百八十二年には世界の知名の人物が、澤山に死んだ、先づ我輩の親友なりし所の以太利のガルバルヂィが、我輩よりも半歳前の六月に死んだ、それから我が佛國の社會主義の泰斗ルイ、ブランが同年に死んだ、英國では進化論で有名なダルウヰンが死んだ、米國では詩人のロングフェローとコンコルドの聖人と謂はれたエマルソンが死んだ、何れも我輩と同年の死で有る、外の連中はドウだか知らないけれど、我輩に至ては肉體は死んでも、精神は決して死んで居らない、佛國人は我輩の肉體を葬むるに盛大なる儀式を用ひて呉れた、其の會葬者の行列が、二英里も連續したことは、我輩が深く感謝した所で有るが、然かしながら我輩はコンな事で瞑目することは出來ないのだ、アルサス、ローレンが獨逸領となッて居る間は、我輩は死んでも決して瞑目することは出來ないのだ、それ故に死後三十餘年の今日迄、我輩の精神は、一日も佛國を忘れたことはない、唯一ッだけれど大きな眼を怒らして、常に歐洲の形勢を睨んで居たのだ、我輩の左眼は君も御承知の如く十六歳の時から視力を失ふて居るが、右眼を以て睨んで居たのだ、而して我が佛國の子弟が、果して何れの日に於て、干戈を執て千八百七十年以來の綿々たる怨恨を霽らして呉れるかを期待して居たのだ、されば今回いよ〳〵獨逸に對して大戰亂が開始されたるに付ては、我輩は只「愉快」の一語を以て、我が感情を表示するの外はない。

ビスマルクの緩和手段

此の開戰に至ッたのは、誠に愉快に禁へない次第で

有るが、然かし實は佛國民に向て不平がないでもないが、我輩の死後三十年とは餘まり永く待たせ過ぎたてはないか、我輩が若し健全にして、佛國に居たならばコンなに便々と永く待たせては置かなかッた、我輩の訃報を聞て、ビスマルクもモルトケもホッ卜一息を吐いたと云ふ事だが、それに違ひない、實はビスマルクが我輩の生前に我輩の排獨運動を緩和する爲めに、極めて祕密に交渉して來た事が有るのだ。

それは千八百七十八年の八月の事だ、倫敦タイムスの大使と稱されたるブローヴヰッが、一書を寄せて面會を求めて來た、我輩は其頃は非常に多忙て、新聞記者の面會を求めるに對しては、大概謝絶した者だが、ブローヴヰッは其の數日前に獨逸から歸ッたと云ふ事を知て居たから、何か面白い話てもするかと思ふて、特に面會を許した、ラ、レパブリック、フランセイ新聞の主筆室へ來れと言てやると、彼れは指定の時刻に來た、談話を交ふること十分ばかりにして、我輩は直ぐに彼れがビスマルクの廻はし者て有ることを知ッた、彼れは一個の新聞通信員に過ぎないけれども、其頃は歐洲各國の政治家と交際して居て、色々の事件に關係し、無官の外交官の如き行動をした男て有るから、伯林へ往て居た間に、ビスマルクに何か依頼されて來た者て有ると感知した、彼れはビスマルクが我輩に逢ひたいと言て居ると言ッた、ビスマルクが彼れに向て「ガムベッタに面會しない間は死なれない」と言ッたさうだ、それはソウ思ふたに違ひない、我輩が滿腔の熱血を濺いて、佛國々民に「アルサス、ローレンを忘るゝ勿れ」と警告して居た事は、ビスマルクに取ては、氣味の惡るい音樂て有ッたに違ひないから、我輩に面會して之を緩和しない内は、彼れは獨逸帝國の爲めに瞑目することが出來なかッたに相違ない、ブローヴヰッは我輩に向てビスマルクとの面會を勸め、若し逢ふ積りが有るならば、彼れは巴里駐箚獨逸大使ホーヘンローエ公と共同して、其の機會を作ると言ッた、彼れは勿論我輩の所へ來る前に、ホーヘンローエと萬事打合はして居たのだ、我輩は彼れの勸告に對して「ビス

マルクが希望すると云ふ事なら、面會しても良いが、面會したならば必ず重大問題に付て相談しなくてはならぬが、其の結果はドゥなるだらふ」と言ッた、プローヴヰッは我輩の重大問題と云ふ事を早くもアルサス、ローレンの問題と感知して、それを問題にしてはビスマルクと我輩とが喧嘩分れに終局するに定まって居るから、「アルサス、ローレンの問題だけは、第一回の會見にはお控へになッては如何てす」と極めて巧なる辭令で勸めた、彼れは「第一回の會見はホンの序幕て、唯兩個の大人物の親交を訂するに止めては如何てす」と言ッた、然かし我輩も君も御承知の通り、火の燃えたる如き短慮の性質だ、アルサス、ローレンの問題を語らない程ならば、ビスマルクに面會する必要はないと刎ね附けてやッた、然るにブローヴヰッは尙極めて外交的に「如何てしようアルサスとローレンを引き分けて、アルサスの問題とローレンの問題を別々に話題になされては」と言ッたが、ソンな平凡な地理的談話をする必要はない、「獨逸は此の兩州を佛國へ無條件て還附したらドゥだ」と單刀直入にビスマルクに談判する以外、我輩が獨逸の大宰相に面會する必要はないのだから、それが制限される樣なら、面會は眞平御免だと言ッたら、流石のブロ・ヴヰッも我輩を持て餘まして引取ッたことが有る、それで我輩も此の冥土へ來てから、ビスマルクの顏を見たことが有るが、生前には終に一度も面會しなかッた。

フレシネーとの衝突

實を言ふと我輩が生前にフレシネーと爭ふたことが佛國に取ては多大の不幸て有ッた、實はフレシネーは我輩が千八百八十一年に內閣を作る迄無二の親友て、彼れは兼ねて我輩の內閣が出來る時には、陸軍大臣となッて、大に軍事の改革をしようと言て居たのだ、然るにいよ〳〵內閣組織の一段になッて、我輩の方に色々の都合も有ッたから、フレシネーに外務大臣を割り當てた所が、それが不服の爲めに彼れは我が內閣に入らなかッた、而して我輩の內閣が僅かに六十六日て倒壞した後を承けて、フレシネー內閣を作ッたから、我

輩も憤慨して彼れに反對して彼れの内閣を倒した、千八百八十二年の冬に死んでは、我輩もドウすることも出來なかッたけれど、それでもフレシネーと爭はず、彼れの希望の如く彼れを軍政の首班に置いてやらせたら、我輩の内閣も短命ならず、我輩も死ぬる樣なことがなくて濟んだかも知れなかッたのだ、而して我輩が大統領になりフレシネーを内閣總理にして協心戮力して政府の局に五六年も居て、軍政の改革を斷行したなら、復讎戰は必ずしも我輩の死後三十年を待たなかッたかと思ふが、然かし之れは今は言ふても無駄なことだ。

四十年間の進步

ソコで今回の戰爭だが、之れを千八百七十年の戰爭と比較することは困難で有る、何しろ此の四十餘年間に於ける進步は、兎ても想像も及ばぬ事だ、我輩共の如き冥土に在る者は、今の軍事上の事は殆んど分らない、千八百七十年の戰爭の後、獨逸が度々軍備擴張をした事は、我輩も目擊した所だ、七十四年の軍備擴張にはモルトケが「我等の武器を以て半年に贏ち得たる所の者は、之を失はざらんと欲せば、少くも半世紀は武器を以て之を守らなくてはならぬ」と言つた、此時步兵を四百六十九大隊、騎兵を四百六十五大隊、砲兵を三百中隊、技術兵を十十六中隊に增加した、それから八十一年に至て又もや軍備擴張をやつた、勿論之れは無理もないので、我が佛國でも復讎戰をやる爲めに、盛に軍備を擴張したから、彼れもウカ〱して居られなかつたのだ、モルトケが此の八十一年の軍備擴張案に對して、議會で說明して、「千八百七十年に佛國は八軍團で戰ふたが、現在は十九軍團を有し、千八百七十四年以後六個年間に、佛國の陸軍は其の數を二倍となした、佛國は今や平時四十九萬七千人の兵力を有するに獨逸は四十萬一千人に過ぎない」と言て獨逸の軍備を擴張した迄は、我輩の目擊した所だ、實はアノ勢ひで佛國が大奮發をすれば、復讎戰は確かに早くやれたのだが、我輩が死んで後グズ〱して居る内に、ビスマルクが墺伊に手を廻はして三國同盟をやる、軍備も

八十七年、九十年、九十九年と擴張し、二十世紀に入てからも、十一年にも擴張し、近く昨年も擴張案を可決し、佛國でも年々擴張をして、軍備擴張の競爭に三十年を空費した、而して僅かに八軍團の兵て、獨逸と戰ふた千八百七十年の戰爭と、今度の大戰爭とは、マルで比較にならない、兵數ばかりではない、兵器の進步が、兎ても我輩共の理解する能はざるほどの進步だ七十年の戰爭の時に、獨逸はクルップ砲の威力を見よと言て、大に之を誇り、我が佛國兵も之を恐れたが、實際我輩共が戰ふて見て、左程に恐るべき者でないことを知つた、萬事アノ時代の事は、今日と比較にならない、我輩が巴里から輕氣球に乘てツールへ逃げ出したので、世界の人を驚かしたが、アノ輕氣球は勿論今日の飛行機と比較にならない、アノ時の輕氣球は唯風を利用して走しつたのだから、至て不完全な者で、今日の飛行機の如く自由自在に飛行の出來るのとはエライ相違だ、ツールへ到着して我輩は陸軍大臣兼內務大臣に推されたから、フレシネーを參謀として、佛國を四大管區に分ち、リーユ、ルマン、ボールデユ、ベサンソンの四市を中心として、大に兵士を徵募したが、アノ時に若しもバザイン元帥がアンな失敗をせずに日本の名將の如き勇氣を以て働らいて吳れたなら、未だ最少し花やかな戰爭も出來たのだが、今となつてはそれも愚痴に過ぎない、

戰敗の原因は奈翁三世

然かし誰れを責めることもない、千八百七十年の戰敗の原因は、一にナポレオン三世に在るのだ、我輩は佛國の愛國者て有るが、ナポレオン三世には絕對の反對て有つた、彼れが帝位に即て、民望を失ひ、民心の統一が行はれて居なかつた所へ、ウヰルヘルムがビスマルク、モルトケを兩翼にして、協心戮力て押し寄せたのだから堪まらない、ウヰルヘルムは高齢七十三歲の身を以て、戰場に出て、或は食なきに飢へ、或は坐するに椅子なく、眠むるにベッドなく、兵士と艱難を共にした者だ、全く關ヶ原の戰に於ける日本の德川家康だ、然るに今回は前回とは聊か趣を異にして居る

佛國には不人望なるナポレオン三世が居らない、ポアンカレイが民心を率ゐて居る、而して敵の獨逸皇帝は彼れの祖父ウヰルヘルムの如き德望もなく、其の左右にはビスマルクも居らず、モルトケも居ない、名前ばかりは同じモルトケが居るさうだが、果して息子が父親と同じ器量を持て居るや否やは疑はしい、特に今度の戰爭には英露兩國の援軍が有る、弱小ながらも白耳義も聯合軍に加はつて居るから、七十年の時よりは餘程やり易いワケだ、然り、佛國に取ては大にやり易い道理だ。

今の佛國に欠乏せる者

我輩が今此の地下に在て、コンな事を言ては良くないかも知れないが、千八百七十年に有て今度の佛國に缺乏して居る者が唯一個有ると思ふ、それは外でもない、かく言ふレオン・ガムベツタだ、七十年には此のガムベツタが居て、此の大困難に際會して、此の隻眼**を光らして大勢を看破し、此の雷の如き聲を以て、三**軍を叱咤し、國民の元氣を皷吹して、其の愛國心を沸騰せしめた、現にポアンカレイもデルカッセも能く努力して居る事は、我輩も認めて居るが、如何にせん天分が薄弱だ、近頃英國のアスクヰスが雄辯だなどと云ふが、我輩の目から見れば、雄辯とはアンな者ではない、グラッドストーンでもビーコンスフヰールドでもアンな者ではない、先づアスクヰスとグラッドストーンとの差が、恰かも我輩とポアンカレイの差の樣な者だ、我輩をして希望せしむれば、此の時一人のレオン、ガムベツタが佛國に現はれて、國民を電撃する所の大獅子吼をやつて貰らいたいのだ、以太利からガリバルヂイの息子が、亡父の遺志を繼承して、佛國を助けたいと佛國へ申込んださうだ、其の志は如何にも父の子として稱賛に價ひするが、人物は兎ても父とは比較にならぬ、昨日もガルバルヂイに逢ふて此の話をして、「君の息子は君には及ばない、君ならソンな申込みをする前に、之を實行して居る」と言つたら、彼れも微笑して**「御尤もだ、不肖の子だ」と答へた、日本の楠正行**は志操だけは立派でも、人物も機略も親父の正成に及

はなかつた、總べて二代目は駄目だね、兵數は多くなつた、器械は進歩した、然かし敵にも味方にも、千八百七十年に活動しただけの英雄豪傑は見えないではないか、獨逸にビスマルクが居らず、佛國にガムベッタが居らない、チエールやマクマホンは君等はエラいと思ふて居るか知らぬが、實は凡物だ、彼等の胸には燃えて居る火が無い、我輩が自ら言ふのは妙な者だが、レオン、ガムベッタは滿身是れ熱誠で燃えて居た、愛國の火で有つた、故に我輩一たび口を開けば、佛國民は電氣に打たれたるが如く、一齊に愛國者となつて國の爲めに死を辭せなかつた、嗚呼、今の佛國に此の重大なる一の要素を缺いて居るのは、甚だ遺憾だ。

注意すべき一事

ガムベッタが茲に一の注意すべき事が有る、獨逸と露國と不意に握手する事だ、獨逸が露國に對して、其のアドリアチック海に出づることを承認する代りに、白耳義と和蘭を得たしと交渉し、露國が之を承知する様なことが有りはしまいか、若しもソンな事が起つたなら、それこそ英國も佛國も白耳義も日本も馬鹿を見るワケだ、其ても此際聯合軍て獨逸を叩き附ける事が必要だ、日本の立場から見ては別に意見も有るだらふ又之れは必ず無くてはならぬが、我が佛國としては是非共此の機會に於て獨逸を叩き附けて、少くもアルサス、ローレンを回復し、五十億フランの償金を取り戻さなくてはならぬ、此の以上の事はポアンカレイに一任するが、我れガムベッタの希望を言へと云ふなら、少くも此の際之れだけはやつて貰はないと、此の雙眼が瞑目することが出來ない、未だ大に話したい事が有るが、今閻魔大王から電話が懸て往かねばならぬから之れて失敬する Je vous demande pardon. ヒユードロ〱

△陸奥伯に代つて加藤男に同情す

横井時雄

家貧にして賢妻を知り國歩艱難にして偉人を思ふ、今や群小政治家の跋扈跳梁して徒らに時めき、稍もすれば國家の大事を誤らんとするに際し、陸奥宗光伯を地下に起たしめ時局を一覩せしめたらば如何。丸て常陸山が田舎の宮相撲を見物するの格であらう、陸奥伯は必ず三國干渉の恨深き獨逸が山東省より將に放逐されんとするに對しては快心の一笑を漏らすてあらうが、其笑は唯だの一瞬間、事局の現狀に對しては乍ち満面に憂憤の色を示すであらう、

陸奥伯は一代の奇才て、隨分飛離れた大業をやつたこともあるが、中々用意周到の人て、且つ責任の威念が强かつた、日清開戰に至るまでの外交は伯の花舞臺で紆餘曲巧に富み、苦辛慘憺でもあつたが、蹇々錄などに就き其行跡を尋ねれば少しも輕はづみの處がなく、少しも危ない藝當がなく、實に堂々たるものてある、當時國内の輿論は對外硬全盛の時に屬し伯の如きは伊藤公と共に外交軟派として攻撃せられ、議會は政府不信任の上奏案を可決すと云ふ紛擾の最中て淸國との開戰は人心轉換法として頗る妙であつた、然るに少しも之を急ぎ利用したるの跡なきは實に見上げたものだ、彼は能ふ限り何處までも平和に局を結ばんと苦辛し、其開戰と決心する時には既に何人が見ても事情止むを得ぬと云ふ場合てあつた、其經綸作用萬遍に行き渡り毫も遺憾なき上の事てあつた、近來我邦の政治家て稍もすれば國家の大事を内閣維持の方便に利用し、輕々忽々として開戰の冒險をさへ犯すを見ば伯たるもの果して悲憤熱涙を禁じ得るであらうか、今の所謂政治家輩の多くは伯に對し須らく愧死すべきてはあるまいか、

又た陸奥伯は大事に臨んて必ず立派な經綸があつた、大隈伯の條約改正大失態の後を承けて陸奥伯が條約改正の局に對するや、彼の態度は宛ら名將が三軍を叱咤して敵の聯合軍の主力を突破して二分し、之を左右別々に粉碎するが如き有樣てあつた、彼は利害の關係上より談判の最も困難なる英國を第一に説破して我國權回復に同意せしめたが故に、其他の列國に對して

は刄を迎へて解くの勢て、改正の業がバタ〳〵と出來上つた、何と云ふ燦たる手腕てあらう、之に反し何の遠大の作戰計畫もなく賤しむべき政略主義より大事件を打始め、行當たりバッタリ、某國には自由制限の證文を納れ、某國よりは言質を握られ、某國には少しも有難がられず、某國には千秋の恨を買ひ、僅かに潔白義俠の虚名を世間に賣らんとするを比較すれば實に霄壤の相違てはないか、

陸奥伯の外交は感情的てはない、何處までも實利主義て一貫した、馬關條約に際し清國全權大使李鴻章は畢生の雄辯を振つて日清前途の接近を說き清國の窮狀を訴へ遼東半島の割地を思止まらしめんと努めた、然れども極東の平和を維持せんとする遠大の見地に立つたる陸奥伯は伊藤公と共に李鴻章の哀訴歎願を退けた、彼は領土獲得を『賤しむへき』こととは思惟せなんだ、後ちに三國干涉の事ありて遼東を支那に還附するに至りしも、臥薪嘗膽の十年後に日露戰役を經て遼東を再び帝國の有となすに至りしは陸奥伯の經綸が空くならなかつた證據てある、

陸奥伯をして今の外相加藤高明男を評せしめば何んと云ふてあらうか、加藤男は舊と一代の秀才であつて、齡僅かに三十五六にして、日清戰爭の中央に際し陸奥伯に拔擢せられて駐英公使となつたのてある、伯をして加藤外相の今の遣り口を觀ナしめば果して大に賞賛すべきや否は少しく疑問てあるが、然しながら男の心事に對し其容易ならぬ苦辛と努力に對しては伯は必ず滿腹の同情を表すてあらう、大隈首相を初めとして閣僚總體の中ては加藤外相は確かに最も眞面目て、最も責任を知る人てあると思ふ、然るに彼れは現内閣中の不人氣男て惡まれ者てある、彼が無愛嬌の態度は終に外務省出入の新聞記者團より不信任決議を受けた、彼は外交上の祕密を打明けずと云ふので其部下の同志會員等より攻擊されて居る、然れども陸奥伯をして之を見せしむれば必ず加藤男に左袒すべきてはあるまいか、國家の大事を一膳の御馳走に譬へ只管世間の人氣を取るに腐心すると比較し無愛嬌な加藤男の心事は與

ろ諒とすべきてはあるまいか、耳に入れれて直ちに舌に出だす某國務大臣や某政黨の首領と比較せば加藤男の沈默は寧ろ同情すべきてあるまいか、過般の新聞紙取締に關する省令發布は策として甚だ拙てある、世間の攻擊に遭ふて乍ち解釋を寬大にする處など愈出てゝ愈拙てはあるが、是れも矢張加藤男の正直者てあることを證明するぞ、兎に角世界の外交通を以て自任する老大隈伯を上に戴き、稍ともすれば反噬を試みんとする黨員輩を下に率ゐつゝ今の至難の局に對する加藤男の衷情は必ず故陸奥伯の同情を惹くてあらう、昨今現內閣の同情者中に加藤外相排斥の運動頗る盛てあるやうてあるが、陸奥伯をして云はしむれば排斥せんとならば大隈を初め外の閣僚を排斥せよ、加藤は寧ろ憫然てある、も少し遣らせて見たらどうだと云ふてあらう、

△ナイチンゲールに代りて傷病兵を想ふ

西川文子

千八百五十四年の四月にクリミヤ戰爭は突發した。それは私の丁度三十四歲の時、今より六十年以前の事てあつた。英佛兩國が土耳古を援けて、露國と戰ふこととなり、當時は今日と違ひ、運輸機關の頗ぶる不完全なりし爲め、英兵の此の役に加はりしもの總數三萬に過ぎなかつたにも係はらず、輜重續かずして、糧食薪炭意の如くならず、戰ふて死傷する者より病魔に襲はるゝものゝ方が十倍の多きに至つた。其の上病者を世話する醫師看護婦共に甚だ不充分なりし爲め、クリミヤの陣內は忽ち一大疫病の魔窟となり、目も當てられぬ慘狀を呈するに至り、日々のタイムス紙上、其の慘狀を見て、三千萬の英人は皆其の心臓を衝かるゝ如くに感じた。私は立つても居てもたまらなくなつて、當時は婦人が兵士を看護すると云ふ前例が無かつたの

てあるが、そんなことに頓着なく看護婦として、戰地に派遣されたしと、陸軍大臣に向つて、請願するに至つたのです。

私が斯く請願したのは、一時の熱情からばかりでなく、私に深き〳〵自信もあつたからです。其の自信に就て云ふには、少し手前味噌になりますが、玆て自分の生立の話をして置かねばならぬのです。

私は今から九十四年前の五月十二日、英蘭(イングランド)デルビーシヤイヤの大地主ウキリヤム、イー、エム、ショーア、ナイチンゲールと云ふ人の子として伊太利のフロレンスに於ける其の別墅て生れたのです。私が普通の人よりも仁愛の精神に富む樣になり得たのには、第一に文學者や美術家の好きな伊太利のフロレンスに生れたと云ふことも關係がある樣に思はるゝに、其の生れ日が百花咲き亂るゝ五月であるのも、意味深いことてあると思ふ。私の名が丁度私の生れし頃花間に喃々して居たてあらうと思はるゝ黄鳥の名と同樣てあるのも意味深きことてあると思ふ。又父は慈愛の心篤き人てあり、母の父ウキリヤム・スミスは奴隷解放に盡力した人てあつた、實に斯樣な因縁が結合して、生れたものてす。

更に生れてから後のことを申せば、父は馬に乘るのが好きて、閑暇ある每に騎馬にて野外へ散策に出ることを樂しみとして居た。されば幼なき時より私にも馬に乘る事を教へ、私をつれて野外に散策に出かけるが常であつた。一日例の如く私は父と共に乘馬にて野に出かけし時父はふと草間に咲ける珍らしき草花を見付け、私をして其の花を根から掘り取らせ我家に持ち歸り、庭園の片隅に植ゑつけ置きしに、翌年の其の頃庭に其の珍らしい花は咲いた。此の事ありてより私は草花に趣味を覺え、夫れよりは、一人野に出てゝも草間を尋ね廻り珍らしき花を見出しては、掘り取り歸り庭園に植ゆるを樂しみとして居た。私の持つて生れた仁愛の精神は先づ草花に注がれ、草花を愛することによつて、愛の働きの最初の實習をしたのてある。

此の頃私は又犬が毀れし人形を喰へ行くを見付けて

之れを救ひしこともあるのです、之れも亦た私の愛の働きの實習の一つである。

此の頃のデルビーシャイヤは、羊飼の多く住居せる地方であつた。されば私は野に出る毎に、羊飼を見ざることなく、自然多くの羊飼にも懇意になつたが、殊に一人の老羊飼とは親密になつた。所が或日私が野に出て何時もの處へ花を尋ねながら行つて見ても、彼の老爺は居ない、怪しみながら他の羊飼に、老爺はと尋ねると『お孃さん老爺の犬が、小供に石を投げつけられて足に怪我をしたので、今日は爺さんは出て來ないのです』と云ふ。

私は之を聞きて驚き、早速爺さんを尋ね、犬の足を藥て洗つたり、繃帶をしてやつたりしたのです。私の愛の實習は花より人形に、人形より犬にと漸次進行して行つたのである。

十四五歲になつてからは、私は、父が時々近隣の貧民の子女を集め、之れに御馳走してやつたり、衣服などを與へたりするのを見て、其意味を解するに至り、自らも物を與へたり、看護の術を習ふて、病人ある家に手傳に行きなどし始めた。私はいよ〳〵其の愛の實習を人間に試みる樣になつて來た。

さて病人の世話をし始めし私は、病人の世話をすればする程、彼所にも是所にも世には如何にも多くの病人のあることが、目に付き始めた。而して又自然病院にも氣を付け、氣を付ければ付くる程、病院の不完全なることも知れて來た。されば私は二十一歲の時『病院改良が自分の天職である』と自覺するに至り、それより十二年、其の三十三歲に至るまでの間、英國中の、有りとあらゆる病院を廻り、更に大陸に渡り、巴里、伯林、ブルッセル、羅馬、コンスタンチーノープル、アレキサンドリヤ等の病院を見舞ひ、殊にラインのカイゼルウエルス病院には、永く足を止めて研究した。斯くして私は病院に關係ある一切の技術に熟練して倫敦に歸り、又一切の技術に熟練して倫敦に歸り、倫敦にて理想的の病院を建てんとの決心で居た所へ戰爭が突發したのです。

さて時の陸軍大臣シドニー・ハーバートは私の熱心に動かされ、又私の來歷も調べてとう／＼私を首長として數十名の看護婦を送らば、有効ならんと信ずるに至つたが、尙ほ經費の出所なき爲め躊躇してゐられたのを、私がさらば私費を投じてもと云ひ出したので、大臣もいよ／＼決心して千八百五十四年の十月二十一日に私始め外三十四名の看護婦を戰地へ派遣すとの布告を出された。此の布告の出た時は無論驚喜したものてあつたが、多數は婦人に兵士の世話をさすことは奇怪てあると云つて反對した。

けれども私等の一行は、十月の二十四日に倫敦を立ち海峽を渡り、陸路て佛國のマルセーユまで行き、それより船にてスカッタリの海岸に着き、直ちにスカッタリ野戰病院へ這入つた、私は此の病院の管理を托された。この時この病院には二千三百人の患者が居た。而かも到着の翌日インケルマンの大戰があつて、又新に英佛軍に四千三百餘人の死傷者が出來、續々入院して來るので、私等は實に食ふ暇も寢る暇もなかつたのである。其の上に衞生部員は私等を輕蔑し陰に陽に樣々の妨害をした。併しながら私は恐ろしき熱心と大膽と根氣とを以て事に當り、凡ての點に改革を斷行して、病院の面目を一新し、從來スカッタリの病院にて死者の割合は百に對する四十二なりしものを、僅かに百に對する二の割合に減ずるに至らしめたので、私等に對する輕蔑と反對が何時しか影をかくせしのみならず、患者一同は大に感謝するに至り、中には私が每夜ランプを片手に持ちて病室を見廻るのを心待ちにし、やさしき人々は、薄暗き壁の面におぼろにうつる私の影に接吻するほどにまで感謝さるるに至り、却つて自分の方が慰められて、今から思ふと自己の力では出來ない程長時間の勞働を張りつめた氣分て勤められました。

私は斯く働きつゝ戰地にあること殆んど二ヶ年にして我軍と共に歸國した。此の時有志の方々は五萬圓の金額を醵出して感謝狀と共に贈り下され、政府は又戰功の賞與として五十萬圓を下賜して吳れられたので、私は之れを基金としてセントトーマス病院に附屬せる

ー看護婦學校を建てた、之れ即ちナイチンゲール看護婦學校と稱せらるるものです。

私のクリミヤに於ける行爲は、英國政府を始め各國政府を刺激して看護婦の養成に熱心せしむるに至れるのみならず、又瑞西のハインリッヒ・デュナンを刺激して、萬國赤十字同盟を起さんと決心せしむるに至つた。彼は五萬フランクの私財を投じて七年間運動を續け、各國政府に遊説して目的を達し、遂に千八百六十四年八月八日十六ヶ國の代表者をゼネバに會せしめて、萬國赤十字同盟を成立せしめた。爾來此の赤十字は長足の進歩を爲してゐる。さればクリミヤ戰爭當時に比すれば、今日は戰場の傷病者に對する救護人の方法は、洵に進歩してゐて、雲泥の差があると云つても、敢て過言ではない。

併しながら、今回の大亂とクリミヤ戰爭とを比して、其の戰鬪に加はれる人數の如何に相違し、又其の傷病者の數に如何ばかりの相違あるかを見て、私は先づ、看護の力の進歩に比し、破壞の力の數十倍、數百倍も進歩せるに驚かざるを得ないのです。

クリミヤ戰爭に加はりし英、佛、土耳古、サルヂニヤの兵數は合計十七萬餘に過ぎざりしが、今回の大亂に加はれる英、佛、露の兵數は四五百萬の多きに達して居る。傷病者の數は各國共に秘して公表しない爲めに、知るに由なきも、戰場より來たる斷片的の報道を見ても、露國では故トルストイ伯の未亡人まで看護婦となり、戰場に出でんことを出願され、英國の女權論者ミリタントの首領、パンクハースト孃が同じく看護婦となりて戰場に出でんことを出願せしことなどより想像しても、其の慘狀の程が分る。私も地下から身を起して、再びクリミヤ當時の元氣に歸り、戰場へ向はねばならぬ。けれどもそれと共に看護の力よりも、破壞の力の進歩の甚しきに驚き、更に大なる愛の心よりして、斯くの如き慘禍を世界より根絶する、萬國平和の運動に渾身の力を盡さねばならぬことを、しみ〴〵感じます。私は戰後に萬國平和の運動者として起ちて働からと思ふのである。噫こゝまで行かねば私の使命

が完結せぬのであつた。

△チエールに代つての歐洲時局觀

林　毅陸

チエールに代つての歐洲時局觀を言へとは頗る面白い註文である。チエールは此前の獨佛戰爭の際、七十の老軀を提げて、英露墺伊間に遊說し、列强の干涉を求むべく種々努力し、次て歸り來るや、ヴエルサイユに於て講和談判の任に當り、記憶すべきヴエルサイユ假平和條約に調印した人である。又彼は國防政府の行政長官となり、又第三共和國第一期の大統領にも擧げられたのである。此人物にして今日の時局を見るならば、今昔を比較して、感慨甚だ深からざるを得ぬのであらう。試みに彼に代つて二三の所感を述べて見ることにする。

第一に千八百七十年の獨佛戰爭の際は、佛蘭西は決して擧國一致ではなかつた。チエールの如きは、即ち開戰に反對した一人である。此場合の戰爭たるや、ナポレオン三世自身の帝冠を護るが爲に、餘儀なくも起されたものである。帝室の擁護上、開戰を必要とし、少數識者の反對にも拘らず、砲火を開くに至つたのである。今回は眞に擧國一致であつて、同じ戰爭を爲すにも、非常に氣持の好い譯である。

此前に戰爭破裂の動機となつたのは、西班牙王位候補問題であつたのであるが、此問題に就ての普魯西王に對する佛國政府の談判は、決して宜しきを得たものて無かつた。當時のエムス談判の事は、茲に詳說し兼ぬるけれども、兎に角當時の巴里政府は、狼狽度を失するの醜態を示し、普王に對して無理なる要求を爲し、自ら進んで戰を宣し、表面の形式上、挑戰者たるの惡名を受けざるを得ざるに至つた。是は外交上の大失敗として知らるる所のものである。然るに今回は獨逸の方で驕慢至極の態度を取り、獨逸の方より突然白耳義の中立を破つて、佛蘭西に侵入し來り、挑戰の責任

は全然獨逸に於て負ひ、佛蘭西は唯正當防禦上、已むを得ず應戰することゝなつて居る。是れなれば、チエールと云へども、滿腔の熱情を捧げて開戰に贊成すべきは、勿論である。

次にナポレヲン三世は、大野心家なりとの故を以て、列國の疑惧を招き、引いて佛蘭西をして不利なる地位に立てしめた。佛蘭西が勝つならば、更に何事を仕出すかも知れねとの疑念は、列國の人々をして寧ろ佛蘭西の敗北を歡迎せしめたのである。今回は事情正に顚倒し、當年ナポレヲン三世に對して抱かれたる疑惧以上の大疑惧が、獨帝フリードリヒ二世の野心に對して抱かれて居る。獨帝にして佛國を一蹴し去らんには、其の他國に及ばずの危險此上なしとて、孰れも獨帝の飽く無き野心に恐怖を感じて居る。斯くして前に孤立なりし佛蘭西は、周圍より同情と援助とを與へられ、前に國際上有利の地位に立ちし獨逸は、今列國呪咀の的となつて居るのである。

實に國際關係の相違を比較すれば、局面の變化の甚だ大なるに驚かざるを得ぬ。チエールが祖國を救ふべく努力した其時には、佛蘭西は全然孤立であつた。敵國普魯西に對し、當時の露西亞は同情ある中立を守り、ビスマルクとゴルチヤコフとの間には、自ら情意の相通ずるものあり、ゴルチヤコフは寧ろビスマルクの成功を助けたのである。ナポレオン三世がセダンに於て大敗を取りたるの報、露都に達したる時、露帝アレキサンドル二世は、特に祝宴を張つて普王の勝利を祝したのである。而して英國の如きも、傍觀の態度を守り、チエールの列國遊說も徒勞に終つた。始め佛國政府は墺伊をと同盟するの計劃を抱き、餘程之に屬望して居たけれども、開戰初期に於ける佛國軍勢の不振は、忽ち墺伊して逡巡するに至らしめ、普に恨を抱くの墺も、佛に重恩ある伊も、共に中立を守るに決した。また當時佛人は南部獨逸を普魯西より引離し、先づ之をして傍觀的態度を取らしめ、次て出來得べくんば、之を自己の味方とならしめんと考へ居たるも、其れも失望に歸した。要するに當時の佛蘭西は孤立無援、憐むべきの狀

遇にあつた。軍事上に於ても、準備不完全なりしと同じく、外交上に於ても實に準備を缺ぎ、徒らに愚なる空望を抱きしことを悔ゆるの外は無かつたのである。

然るに今回の戰爭に於ては、獨逸は正に當時の佛蘭西に似たる地位に居る。同盟として墺を有するも、其の代り敵は露佛英の三國である。否、日本も其の敵となつて居る。列國は獨逸を第一の敵と見做し、其の孤立の勢は明々白々である。四十四年前には、伊太利は中立を守つて佛蘭西を失望せしめたが、今や獨逸が此失望を感じつゝあるのである。又獨逸は英國をして中立を守らしめんとの空望を抱いて居たやうであるけれども、英國は斷然佛露に加盟し、獨逸の失望と驚愕とを惹起したのである。獨逸は四十四年前の佛蘭西に比し、軍事上には準備遙に整ふて居たけれども、外交上の無準備は、寧ろ當時の佛蘭西以上とも言つて善いやうである。

第一、英國の中立を希望しながら、白耳義の中立を犯すとは何事である。白耳義に關し、如何に英國が痛切の利害を感ずるかは、過去の歴史の證明する所である。此前の獨佛戰爭の際にも、英國は開戰早々第一着に、普佛二國政府をして白耳義中立尊重の約を結ばしめた程である。斯程に英國の重要視して居る其の白耳義の中立を犯し、而して猶英國の中立を望むとは、虫の善いにも程のある事である。乾坤一擲の大戰爭を爲さんとするに當り、斯くも外交上の注意を缺き、斯くも外交上の用意を怠り、唯鐵砲のみにて雌雄を決せんとしたのは、如何に武斷主義のフリードリヒ二世とは云へ、餘りに無謀なる振舞である。要するに是れ獨帝の驕慢增長が然らしめたのである。之をビスマルクがナポレオン三世との開戰前に取りたる細心なる外交的注意と比較し來るならば、チエールならずと云へども、感慨無限ならざるを得ぬ次第である。

ヴエルサイユの講和談判に、萬斛の悲痛と幽憤とを深く骨に刻せられたるチエールは、復讐の時機漸く來れるを喜ぶことであらう。夫の思出多きエルザス、ロートリンゲンは、多分此機を以て取り返へし得らるる

であらう。今回は佛蘭西に於て列强遊說の必要なく、第二のチエールは、獨逸に於て其の必要を見んとして居るのである。知らず獨逸のチエールたるべきは、何人であらうか。思へば多少氣の毒の感も催さるのである。

又是れは愚痴の嫌もあるけれども、英露にして四十四年前に援助を佛に與ふるを辭せざりしならんには、今日の如き大騷動を見るに至らなかつたであらう。當時露も英も普魯西膨脹の危險を感知せず、佛が悲慘なる大敗を爲すを傍觀し、怖るべき獨逸帝國の崛起を默許したのである。何ぞ圖らん此獨逸帝國は、遂に露をも英をも脅かすの大禍源となり、今や佛露英三國相提携して、其の驕慢を懲らすを要するに至つて居る。四十四年前、露英にして佛國の哀訴に耳を傾け、普魯西の跋扈に相當の制止を加へて置いたならば、今日の如き大てきを惹起さずに濟んだことであらう。當時のゴルチヤコフや、グラッドストーンや、又グランヴィルやは、先見の明か無かつたと非難する譯ては無きも、兎に角思ひ來れば、何となく憾み深からざるを得ぬ。是れは愚痴らしくも見ゆるけれども、チエールにして今日に在らば、必ず此感想を起すに相違無いと思ふ。

△那翁に代りてカイザーを嗤ふ

五來素川

人は現時局に於て獨乙皇帝キルヘルム二世と那翁とを比較することを好む、然り此二人物は或る點に於て類似して居ないことはない、其活動的て食事の時間の短いことや、其演說の旨いことや、其やり口が亂暴なことや、可なり似よつた點のないことはない、されど是等外形の些事を除いては、兩者の技倆には大なる徑庭がある、自分は玆に二つの點、一は外交上から、他は軍事上から、兩者の地位才幹を比較し、以て事局の將來をトして見たいと思ふ。

那翁の天才は事に當つて明眼鋭く其眞相を摑み、其應急の處分を取るに一刻を爭ふことてある、從て捕へ

可きの時機があれば決して之を逸したことがない、必ず將來の趨向を察して、適當な時に適當な處置を取る、所がキルヘルム二世の外交は此點に於て大なる遜色がある、自分は此度獨乙が開戰したと云ふ報を聞いて、到底信ずることが出來なかつた、其後戰爭が可なり進行した報を得ても、尙調停の見込があると思つた、何故なれば、獨乙皇帝が左迄外交上時機を見るの拙なることを信じ得なかつたからである。

從來現獨乙皇帝は其好戰的外形に似ず、平和的政治を愛せらるゝ人と見做されて居た、佛の有名な外交家アノトー氏の如きは、是に就て獨帝最近親者の所言を以て屢之を立證した位てある、然し是は全く過つた觀察であつた、若し是が過つた觀察であつたとしたら、獨乙皇帝は何時か開戰の適當な時機を覗つて居たとする外はない、そうすると今よりもつと適當な開戰期がなかつたらうかと云ふことが疑問となる、云ふ迄もなく是には容易に返答が出來る、それは日露戰爭の終結して、露國が全く疲弊した時が尤も其適等の時てあつた、今よりは遙か適等の時てあつた、此時代は佛國の戰備は未だ全く成らず、殊に國家宗敎分離問題て國內の統一を缺いて居たし、殊に英佛は接近した者の未だ其協商の程度が、戰時に相救援しやうといふ程度に達して居なかつた、唯僅に千九百四年四月の協約で、埃及を英の專屬とし、モロッコを佛の專屬とするといふことが定まつた位てあつた、若し此時獨乙が迅雷疾風の勢て佛國を討つたならば、埃は無論のこと、以太利も亦風を望んで立つたに違ひなく、敗餘の露國殊に、佛國に對して感情を害して居た當時の露國は唯指を啣えて見物するに過ぎなかつたてあらう、然らば佛國は唯三國同盟の處分するが儘て、今日の如く獨乙が世界を相手として戰ふ如き危險はなかつたのである、獨乙帝は此點に於て明に開戰の時期を失したものと云ふことが出來る、是が那翁の如き烱眼なる政治家の決してなさゝるの愚である、獨帝の失敗は啻に日露戰爭後開戰せざりしことに於てのみならず、亦其後の外交上の態度に於て甚しく味噌を付けた、即ちモロッコ問題で佛國

の弱身に乘じて之を苦めたのは善がつたが、其やり方が甚だ拙い、先づ千九百五年地中海廻遊と號して其ヨットであるホーヘンツォルレルンに乘じてモロッコのタンガールといふ港へ行つて、其國の當路者と會見して一方に彼等に佛國に反抗を勸め、一方に佛國に對して、何故に自分に無斷でモロッコを取るか、獨乙の同國に於ける經濟上の權利を如何して呉れるかと云ふて威嚇し佛の外相デルカッセ氏を免職さした、佛は當時露國敗戰の後であつたので、凡て獨乙の云ふことを聞いた、然し世界は獨乙の暴狀を怒り、佛國を憐んだ、若し獨乙帝に日露戰爭の結果を利用して、佛國と戰ふ意がないならば、何故にもつと外交上の禮節を守つて奇麗に手際好くモロッコ割讓を求めなかつたか、此後七年間續いたモロッコ事件に依て獨乙は其無法なやり口に依て唯世界の同情を失ひ、佛國民の愛國心敵愾心を挑發した大損を招いて、唯僅に亞弗利加のコンゴー殖民地の一部と云ふ小利を得たに過ぎなかつた、是が失敗にあらずして何てあらう、開戰するなら開戰する、文明的にやるなら文明的にやると、既に日露戰爭が濟んだ當時に決定すべき筈ではなかつたか、是が那翁等の到底なさゞる、不決斷、無方針の政策と云はねばならぬ、

若し亦獨帝が日露戰爭當時には未だ戰意がなかつたのが、其後の行き掛りて戰爭をする樣になつたと云ふならば、其行掛りなるものは彼れ獨乙帝が獨り自ら造つたのである、即ちモロッコ問題で、さん〳〵佛國を苦めて、遂にコンゴーを取つたは善かつたが事が濟むと、佛國からの報復が恐しい、殊に千九百十二年のポアンカレー氏愛國內閣の成立は遂に彼をして自ら軍備擴張をするの已むなきに到らしめた、亦墺を煽動して千九百八年にボスニヤ、ヘルゼゴビナを併合せしめたこと及びバルカン戰爭に於ける露に對する墺獨の橫暴なる態度は、遂に露をして軍備大擴張（三十八軍團を四十五軍團とする計畫）を盡するに到らしめ、爲めに其成るに先ちて、獨が劍を拔かざる可らざるに至つたのである、さすれば是も亦彼れ獨帝が自ら其成行を作

つた責任者たるとを免れないのである、是等は凡て那翁の如き大外交家と甚だ其手腕を異にする所である、

次に軍事上から獨乙の態度を見ると一寸那翁戰爭の千八百八年から千八百十二年迄の形勢に似て居る、當時那翁は獨立を欲する西班牙の國民軍を討滅しやうとし西班牙は英國の助けを借りて、那翁の侵入を防いだ、是が今日の佛國が擧國一致で英國の助けを得て、カイザーの侵入を防いで居るのと髣髴たるものがある、然かも當時の西班牙人の『神と、國と、王の爲めに』といふ意氣込で那翁に反抗したことは宛も現今佛國人がカイザーを文明の敵とし、獨逸の軍國主義を平和の仇として、奮闘しつゝあるのに酷似して居る、殊に面白いのは西班牙を助けて奮擊突戰した英將ウエリントンは、其武勇と性格とに於て甚だ現今佛人と馬を併べて戰つて居る英のフレンチ將軍に類似して居ることである、當時ウエリントンが甚しく佛國の苦手であつた樣に、今のフレンチ將軍も獨逸を苦むること甚しい、當時那翁は馬を西佛の國境に立てゝ、西班牙侵入の諸軍を指揮して居たが、遂に其手ぬるさに堪へ切れずして自らピレネー山を踰えて其軍を進むるに到り、僅に二ケ月半にして西都マドリッドを陷れた、カイザーは今獨佛の境マインツにありて、佛國侵入の諸軍を督して居らるゝ、彼れ果して自ら馬を陣頭に進めて、萬軍を叱咤するの勇ありや否や、今や獨逸の利あらざること、當時の佛軍の振はざるが如し、若し彼れにして那翁の雄略あらば、必ずや、當年の佛帝を學ばねばならぬ筈である、

那翁は西都を略し、英軍を追擊した後で千八百九年の一月直に馭を廻らして佛國に還つた、是は露墺の大軍が後を覘ふからである、然るに仝年の七月にはワグラムの大戰で全勝を博し、墺都ヴィヤナに於て城下の盟をなさしめて居る、此の如き機敏な働きが克く今のカイザーに出來るか何うか、是も一つ見物したい、近頃の噂では、白耳義で獨逸聯邦の國王會議を開き、盛に儀容を張つて、露國に出陣するとのことである、然しリエージの戰勝では、那翁のワグラムの大勝とは少し懸

隔があり過ぎる然かも小國白耳義の皇帝は、未だ城下の盟をして居らぬでないか、カイザーたるもの若し那翁の蹟を學んで、馬をモスコーに進めんとならば宜しく先づ佛京巴里を攻略し、白帝アルバートを擒にするの概がなければならぬ、

唯吾人が確かにカイザーが那翁の蹟を學ぶことの出來ると思ふことは、露國と戰ふて大敗し、遂に其爲めに帝位を失ふに到るべきことである、然し那翁の如きモスコーの大敗の如き華々しき戰功を收め得べきや否やは、吾人の保證する限りではないが、モスコーの火事の起る前に、露國を撤退せねばならぬ樣になることは爭はれぬ所であらう、兎にも角にも、那翁が一方英西兩軍と西班牙で激戰して居る中に、他方露國の爲めに決定的失敗を取る樣になつた如く、カイザーが一方英佛聯合軍と戰ひつゝある間に、一方露國の粉碎する所となるのは明白である、

若し今日那翁ありてカイザーの運命をトしたならば定めて其拙劣を笑ふと共に、其運命の類似に對して一滴同情の涙を濺ぐであらう、

△トルストイに代つて人間の迷妄を慨く

（杜翁が若し生きてゐたら）

魯庵生

"War again!"

と慨然として長大息するだらう。ボア戰爭が鎮まると間もなく日露が砲火を開いたので、戰爭を以て人間の最大罪惡とする杜翁は"Again war!"と太い息を吐いた。が、日露戰爭以後伊土戰爭ありバルカン半島戰爭あり、内亂としては支那及び墨西哥の革命戰あり、終に此歐洲の大動亂となり、殆んど戰爭の連續であつた、若し各國殖民地及び邊疆の小戰鬪を數へたなら、"Again, again, again!"世界は戰爭の休止する間が無かつたであらう。

トルストイが若し生きてゐたなら、人に知られない何處かの山の中にても隠れて全く世間から杜絶し、ヨリ一層哲人的に或は禪僧的に行ひ澄まして最早世界の大事件に就て沈默して何事も語らぬであらう。が、避けても避け切れない巡禮者の口から此大動亂が耳に入つた時は、渠の窪んだ眼は沈欝の光を放ち、渠の銀髯の尖は細かに戰いて「オヽヽヽ！　神の道に背くものよ、罪に汚れたる者よ！」と悲んで、先づ人殺しの藝術を保護するカイゼルを呪ひ、親愛なるザールの爲めに泣き、渠の數多の弟子を有する英吉利と佛蘭西との爲めに祈るであらう。

『期は滿り神の國は近けり爾曹悔改めて福音を信ぜよ、若し悔改めずんば爾曹は皆亡ぼさるべし』と、渠は何度も繰返すであらう。日露戰爭に於て渠は日本をのみ罪しなかつた。露西亞をも等しく罪した。渠はザールが善良なる正しい民をして何等の怨みも無い、且何等の害をしない、曾て顔を見た事も無い他の國民を殺さしめ、而して多く殺せば殺すほど稱揚して成るべく多くを殺すべく皷舞激勵するを神の榮光を瀆すの最大罪惡とした。且啻に帝王のみならず宰相將軍も亦人殺しを以て最善なる國民の道德とし、新聞記者操觚者までが人殺しを稱勵するを國家に對する義務とし、上下揃つて汲々として人殺しを聲援するを少しも耻ぢない行爲を以て人類の根本道義に戻つた發狂として呪つた。

渠は神が平等に各民族に共有せしむべく與へた土地を己れ一箇の私有物とする爲め多くの罪の無い人を殺すを肯てするカイゼルを憎むであらう。が、戰爭の罪過を釀すものは一人では無い。一方の對敵者が正義であつて他の一方が不正義であるといふものでは無い、戰ふものは惣て皆不正義である。カイゼルが此動亂の點火者であつても英佛露の元首は各々皆五十歩百歩の同罪者である。否、一歩と進めていふと、元首の罪といふよりも國家の敎ゆる道德が根本の罪囚である。

『例へば居酒屋で酒を飲んでる二人が喧嘩を初める。何方が惡いといふ事は出來ない、兩方が惡いのであ

る。が、兩方が惡いといふよりは酒が惡いのである、居酒屋が惡いのである。今日國家といふものを民族の重大な牆壁とし、此牆壁を固くして他の國家との間に踰越す可からざる嚴重な分界線を築き、互に其分界線を嚴守して互に力汗を出して睨み合ふを國家的概念と稱し、左も人類の保全或は幸福に必要なる要件のやうに思つてゐる。而して此概念を生長させて他の國家を嫉み呪ひ敵視し、自分の國家の利益の爲めには他の國家の幸福を犧牲にするの不善を肯てするの心を愛國と稱して恰も人間の最大美德なるかのやうに考へてゐる。此の誤りたる思想が人間をして戰爭といふ惡事を行はしむるので、丁度國家といふ惡い居酒屋が愛國といふ惡酒を提供して、人をして此酒毒に醉はしめて喧嘩せしむるのである。』と渠は云ふてあらう。

神は人間を平等に愛して異教徒をも亦憐れみ給ふた。神の子イエスは『爾ら相愛せよ、爭ふ勿れ、抵抗する勿れ、爾の敵をも愛せ、爾に罪を犯すものをも許せ、七度までとは云はず七十七度までも許せよ』と仰せられた。神の前には露西亞人も佛蘭西人も獨逸人も英吉利人も日本人も無い。イエスはピラトの前に立ち沈默して十字架に釘付けされた。『露西亞人よ、獨逸人よ、汝等も亦神の僕ならずや。悔悛ためよ、福音を信ぜよ、』とトルストイは復たしても同じ訓戒を繰返さねばならないのを悲みつゝも亦繰返すであらう。

國家といふものは本と人類の棲息する地理的關係と其安寧秩序を保つ統治上の便利の爲めに出來た一つの集團を稱するので、互に相爭ふ爲めの城保では無かつた。然るに人間は惡魔の智恵に昧まされて他人の土地を奪はんとするか、或は之に等しい侵害を他に加へ、侵されたものは更に報復する爲めに同じ暴虐を仕返し、終に集團と集團との間に拔差し出來ない反感を結んで戰爭の聯續を繰返すやうになつた。夫故に、戰爭なからしむるには先づ己れが國家をのみ依愛するを正當なりとする誤りたる國家的概念を取らなければならない。勿論、總ての物體は相合するか相離れるかてあつて、相合して種々の形體に變移するのも物體の性

てあるし、相反して分裂して離るゝのも亦物體の性てある。人類も人類の集團も此通則を免るゝ事が出來ないから社會は常に人間の凝集性と反撥性とに由て幾度か反覆變轉しつゝある。夫故に戰爭といふも人間の性質の缺陷が生ずる免る可からざる病であるかも知れないが、此病は人間の禍ひてある故、此禍ひなからしむる爲めに神は『相愛せよ、』と宣り給ふた。然るに人間は神のお思召に背き、國家といふ障壁を强て益々固くして人類相愛する代りに相敵するを以て當然の道德なるかのやうに考へ、此の相敵する概念の强いのを愛國と稱して尊重してをる。

帝王も此病に取憑かれてゐる、宰相將軍は最も此病の大患者てある。が、渠等の病は誤りたる國家的概念の罪である故是非が無いとしても、最も許し難きは神の敎へ、人類の福祉を傳へる宗敎家てある。渠等は誤まつて邪路に迷へるものを救ふて正しい道に導くが神に仕へまつる務めてあるを忘れて、益々人間をして神を冒瀆するの罪を重ねしめる。『爾等は相愛せよ、爾の敵をも愛せよ、』といふイエスの簡單なる敎へを强て强辯して、人を殺すの戰爭を以て決して神の御旨に忤ふもので無いと稱し、人類相敵する邪惡を養ふ愛國を煽動して、屢々『人を愛せよ』と敎ゆべき敎會に於て『人を殺す』の戰ひに行くものを讃美し鼓舞し、多くの敵國人を殺して得たる勝利を神の恩寵として感謝を捧げて居る。帝王や宰相將軍は神の敎へを知らざるが爲めに罪を犯すのであるが、宗敎家は神の敎へを矯めて自ら僞り人をも欺いてをる。"Bethink yourselves!"とトルストイは屢々繰返した。國家よりも祖國よりも杜翁が人類に取つて尊いと信ずるのは神の王國てある。少くも基督敎徒は祖國よりは神の王國を信じ、國家の命令よりも神の掟に從はねばならないと、堅く把つて動かない信仰を屢々反覆した。

杜翁は『愛國と政府』なる論文に於て忌憚なく直言した。曰く、『獨逸の執權者は渠等の人民の集團の愛國心を鼓舞して終に此の如く昂上せしめた、十世紀の後半に於て全國民は盡く兵となるべき法律が布かれ、惣

ての人の子、人の夫、人の親、學者も敬神家も人殺しを學び、渠等が際會する高級軍人の服從的奴隷となり、渠等が殺すべく命令された何者をも殺すべく絕對的に準備し、强壓されたる敵人は本より己れの權利の防衞の爲め起てる同胞勞働者は愚か、時としては現在の親なり兄弟なりをすらも、有らゆる帝王中の最も厚顏なるカイゼル・ウヰルヘルム二世に由て嚴命せらるゝ時は必ず殺すべく强制された。此の如く惣ての人間の最善の感情を虐げて最惡の風儀とする此恐ろしい政策は愛國の勢力の下に何等の物議もなく獨逸の人民に由て默從された。之といふが畢竟佛蘭西に勝つた爲めであつて、此戰勝が愈が上に獨逸の愛國心を煽り立て、漸次に佛蘭西、露西亞、其他の强國に及ぼし、大陸各國の惣ての人は總兵役の施行即ち古代の奴隷よりも一層例へやうも無い悲慘な自卑屈從に墮した奴隷の狀態に服務すべく何等の抗議なしに屈服した。此以後、人民が愛國の呼聲に卑屈にも默從して以來各國政府の不法、凶惡、狂亂は際限なく窮まる處を知らず、亞細亞、阿非利加、亞米利加に於ける他人の領土の橫奪の競爭が半ばは出來心に、半ばは功名的に、半ばは貪慾心に由て行はれて各國政府間の不信反目を益々大ならしめた。』と。

杜翁は愛國の美くしい方面を認めたか或は全く認めなかつたか知らないが、愛國の弊は屢々數へ立てゝ其論策の隨處に垢罵した。曾て露國の艦隊がツーロンに入港し、佛露兩國民が交歡の極度に熱し、美くしい佛蘭西の少女が鬚ムシャクシャの汚くろしい露國の水兵に噛りついて接吻し、花やかに飾り立つた高貴の貴婦人が垢つきたる仕事服の水兵と抱擁して踊る款待を氣違ひ沙汰と評し、愛國は人間を狂亂ならしむるマニヤだと云ひ、此のマニヤが個人としては意趣も意恨も無い他國民を殺して其血を啜るを何とも思はないやうにする。平生は正直な善良な蟲一匹殺す事の出來ない善人が愛國の名の下に殘酷な殺生をするを少しも罪と思はないで却て善事と考へる、人の道に外れた惡事を耻ぢないで却て譽れだと信じてると云つた。

杜翁の愛國論は別として、軍國主義が領土の貪慾心を長じ、列國が競ふて未開の土地を占領するが爲めに益々列强間の敵意を募らせるといふは眞理の一面であつて、此軍國主義を現代の各國政府に共通する罪惡とし、此罪惡を釀した第一の發頭人を獨逸のカイゼル・ウヰルヘルムであると彈劾した。

其のカイゼルが歐洲大動亂の口火を點火した。シカモ渠は傍若無人に恰も文明の爲めの十字軍を起したかのやうに宣言した。シカモ又弱小なる白耳義の中立を侵し、都市を蹂躙荒掠した上に巨額の軍費を强壓的に賦課し、建築史上著名なるルーバン市を燒拂ひ、剩つさへアルサスの婦人小兒を陣頭に立たしめて敵の砲火を防ぐの楯とし、死骸を以て溝渠を埋めて其上を砲車を牽き、近くは敵の死骸を山と積上げて掩堡を築くなど中世紀の戰爭にすら聞かざる殘酷を敢てする。此戰亂は最初の砲火を開いて以來まだ僅に月餘であるが、死傷者は既に數十萬人に越えた。此の大殺人の罪案簿を一々に繰返したなら、最初の導火線を作つたセルビヤ人にも罪がある。一人の子を殺された恨みを返報する爲めにセルビヤ全土を屠るべく脅かしたフランツ・ヨセフにも罪がある。此不法なる壓迫の手から救ふべくセルビヤ人の爲めの正義を名としてスラブの國を我が領土とすべき野心に驅られたツァールにも罪がある。が、併し乍ら惣ての芝居の興行主となつて役者を操つッたのはカイゼルである。五十歩百歩の同罪であつてもカイゼルの罪は百歩である。抑も此の如き有史以來の大動亂を生じた當初の大原因は列國の軍備の競爭であるが、此軍國主義の發頭人はカイゼルであつて、此大動亂の點火者も亦カイゼルである。杜翁が若し生きてゐたなら神の敎への爲め人の道の爲めに義憤を發せざるを得なかつたであらう。

「カイゼルよ、爾は爾の臣民たるハーゲンベックの野獸を訓練するを見ざるや。理智も感情も無い猛獸すら愛の手に由ては柔順に馴れて、獨り飼養者になつき親むのみならず猛獸相互に和して少しも鬪はざるに到る。爾は神の寵光がカイゼルに在りと稱しつゝも神の

教へを知らず、神に背きて血を流すを王者の道と思ふ。爾は野獸の王たるハーゲンベックにだも如かざるなり、焉んぞ人間の王たるを得んや、』と渠はカイゼルを咀ふかも知れない。

が、杜翁は生きてゐたとしても隱遁者である。人間と絶縁した杜翁の熱憤は冷かであらねばならない。渠は最早日露戰爭當時の如く義憤を世間に洩らす事はあるまい。渠は唯周圍に集まる巡禮者に對して氷のやうに冷たい警語を以てカイゼルとツアールとを冷殺するであらう。

『爾らは皆亡ぼさるべし。泡の如き功名に悶ゆるカイゼルとツアールよ、愛國に狂亂する渠等の信仰なき民よ。戰へ、戰へ、最後の一人の亡びるまで戰へ。呪ふべき文明の終りは近づけり、爾らの砲火を以て罪に瀆れたる全歐羅巴を燒き盡せよ。コンドルよ、來つて渠等の死骸を啄めよ。ラインの水よ、ドナフの流れよ、溢れて渠等の血を流せよ。斯くして後、大旋風大雷雨は全大陸を淨めて新らしき神の王國は創造せらるべし、』と杜の翁窪んだ眼は冷やかな鋭い光を放つて死人の微笑が血の枯れた唇に浮ぶであらう。

經營三十年本邦唯一の信用を博せり

早稻田大學

校外生募集＝新學年開始＝入學最好機

▼軍國の青年は今や一層奮勵智力の增進に努め以て列强國民を凌駕するの覺悟を要す

政治經濟科講義

法律科講義

文學科講義

中學講義

日本第一の完全なる講義錄

早稻田商業講義

本年春季を以て學期を開始せり
希望者は何時にても入學せしむ

各科十八ヶ月卒業　貳年卒業

◀(十月初旬各科講義錄第壹號發行)▶

●申込次第見本つき規則書直に送呈●

東京牛込早稻田　早稻田大學出版部　振替東京一一二三

(由付一の二)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

文學博士 森林太郎序、伊國ロンブロソー氏原著
醫學博士 吳秀三先生序、森源一氏譯

天才と狂人

特價壹圓拾錢 送料八錢

四六判上製正價壹圓五拾錢

天下の奇書出

人間を解剖し、天才を以て狂人の一種なりとの奇說を公にして天下を驚倒せしめし、ロンブロソーの代表的著書―アレキサンダー大王もナポレオンもダアウヰンもゲーテーも其他の英雄偉人天才をすべて狂人なりと斷定せし大膽なる著書＝而も立證を生理學醫學、心理學、骨相學等凡ての科學的理論上に採り、讀者をして殆ど其奇說名論に啞然たらしむ。本書は世人の久しく其出でざる疑はしめたり。今や流暢なる譯筆を以て此天下の奇書を吾讀書界に紹介されたり、爲めに洛陽の紙價の高からんことを何人も之を疑はず。

四拾版出來

英語自由自在

●前田文學士著○本書に依れば全くの初心者にても僅かに五拾日間にて、日常の會話、作文、讀書等自由自在に使用し得る程度に熟達せしむ本書空前の賣れ行きは僞らざる內容の證明者也 內容見本進呈す

正價貳圓六拾錢 特價金貳圓 送料十二錢

發兌 東京本郷區大學正門前 文成社 振替一九四六七番 電話下谷三二一〇番

（中付一の四）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



美人通信（其二）

東京日日新聞記者 小野賢一郎

戀の照葉

私は嘘は書かない。

新橋にゐた照葉は私がいちばん好きな美人である。

藝者としての照葉ぢやない、個人としての照葉が好きである。最も新聞の記事を賑やかにする點に於て、また最も話に面白味があつて波瀾がある點に於て、又この「美人通信」の原稿を書くに一番興が乘つて一番書くのに樂な點に於て。――それ許りではない、彼が美人で美くしい物語に富む點に於て、而もヤケのやんぱちで命がけの戀をする點に於て。

私は嘘は書かない、あてずッぽうは書かない。但し修辭はない、ナマのまゝである。

照葉を知つたのは私が「日日」に「戀の照葉」を書いた時に始まる。今春死んだ「大阪毎日」の早川花汀君が照葉の戸籍しらべには骨を折つてくれたが、その通信を讀む間に私の胸は張り切れる許りの興味に躍つてゐた。書かねばならぬので書くのではない、書きたくつて〳〵て書くのである。私が書いた貧しい創作の「溝」よりも此「戀の照葉」のナマな材料をその儘書く方が油

が乘つてゐたやうに今でも思つてゐる。

筋書は簡單なのがいゝ。

一、八千代の妹

照葉の實父は高岡末吉といふ、母は小田つる、大阪市南區上本町筋二の二二で生れた。――寫眞帖をしらべてゐると照葉の戶籍謄本と萬龍の戶籍抄本が出てきたが――生年月は明治廿九年四月廿二日、本名をたつといふ、父の末吉は鍛冶職でいつも醉つ拂ひである、母のつるは照葉のたつが二歲の時死んだ。照葉が七歲の時奈良の公園の掛茶屋に叔母がゐたのでお茶くみの加勢をする事になつた。――夏は氷、秋は澁茶一ぱい召上れ、かうして茶くみ女にして置くのは惜しいものだと、おためごかしに世話をする者があつて五代目菊五郎の愛妾大阪南地の辻井お梅の處へ見習にあがる事になつた。

照葉が十四の夏、大阪名代の富田屋の男衆で常公事橋本常次郎が照葉の顏に惚れ込んで一肌ぬいだ結果、名妓八千代の母である貸座敷加賀屋の養女になつた。二百五十圓が身代金。

八千代が仕込むのだから藝は人に耻ぢないまでに仕込んだ。――照葉が十四の時、いよ／＼店出し、何から何まで京都風、髮まで京都に結ひにいつた。照葉といふのは東京にきてからの名、大阪では千代葉といふ名で出ると一ヶ月に三千五百本といふ線香の賣れ高、奈良の縣會議員Fは隨分千代葉につぎ込んだが千代葉は買つて貰つた品物は朋輩にお菓子をくれるやうにやつて了つた。

そのうちに照葉の千代葉には命ちがけの戀人が出來た、それは大阪一の蕩兒音峰といふ者である。これまでにも隨分いきさつはあるが筋書は短い方がいゝ。

音峰といふのは東區北久寶寺町の小間物商である。巨萬の財がある、而もひとり身の放蕩のある限りをやつた男、千代葉を一ヶ月も揚げ詰にして果ては、京都までも遊びにゆく、秋月桂太郎、林長三郎などは、いつも取まき、その間にFの壓迫がある、千代葉は嫌ふ、Fが三千圓かけた衣裝は川の中へ投げ込んで了ふ、奈

良へ逃出して富田家はじめ南地一帯を大騒ぎをやる、彼の熱情はいよ〱募つてきた。

そのうちに音峰は關節炎を患んで別府温泉の品子旅館に宿つて保養をした。戀に狂つてゐる千代葉はもう盲目だ、甘い戀に酔ふて死にたいと念じて許りゐた。海岸を散歩すればいつしよに死んでくれと音峰に手を合せる、どうした譯だと聞くと、たゞ美くしい夫婦と言はれたいと云ふ許り。後には剃刀まで出して心中をしてくれと泣き縋つた、彼は心中を戀してゐたかも知れぬ。

兎に角音峰は彼をなだめて大阪へ歸つた。

二、生々しい小指

とう〱彼は指を劈つた。

正月の二日の晩、多喜の家で音峰と會つた。彼には随分辛い事がある、また音峰の浮ついてゐる心がたよりない。目の色が變つてゐる、血走つてゐる、音峰はそつと隙を見て球突のリンキ亭へいつた。

彼は音峰が便所にいつてゐると思つてゐたが一向歸つてこない、聞くと今球突にいつたといふ。彼は欄干に倚りかゝり乍らいろ〱の事に思ひ耽つてゐた。

その夜の十時頃、音峰はリンキ亭で彼の訪問をうけた、彼は四季總模樣の重ね衣裝に朱地に金龍の模樣の帶をしめ厚化粧して左の手を内ふところにいれてゐた。

「あんたはんに渡したいものがおますさかい、受取つておくんなはれ」と、半巾に包んだものを渡した。受取るとぢめ〱してゐる、何かいたづらでもするのだらうと開いて見ると半巾一面ぬら〱と血汐の花、その中に生々しい小指の肉片があつた。

音峰は口も利けなかつた。彼が「そこに書いてあるものを讀んでおくれやす」といふからをづ〱見ると斯ふ書いてあつた。

旦那はんに命をあづけるによつて印までに指きつた
ふたりは行末かはるまじ

正月二日　たつより

若旦那さま

早速近所の醫者につれていつたが、彼は指を剪つたまゝ手には何も捲かずにぽたり〳〵と血が垂るのを、正月の晴着に突込んでゐたので、晴着は血で洗つたやうになつてゐた。

「彼は多喜の家のおかみに向つて指をきつた時の事をかう語つた。

「球突に行かれたと聞て私は棄てられたものと思つて了つた。いつそ二階から道頓堀の川に身を投げやうと思つたが、考へると若旦那が戀しい、ふと昔の女の心中立、指を切るといふ事を思ひ出して、二階にあつた鏡台の抽斗から剃刀をとり出した。一思ひに！と思つて剃刀を左の小指の上に置いたが日がくら〳〵する、手が慄へる、こん度はと決心して三味線の糸を引切つて小指の根もとからキリ〳〵とゆひて血どめをすると指がしびれてくる。此時だッ！と思つて剃刀をあてたが剃刀の刄が光つて氣が怖ぢける。これではならぬと指の上に剃刀を置き、其上から半巾を指も剃刀も見えないやうに被せて一思ひに發止！力いつぱい剃刀を叩きつけた。

ぱつと半巾が赤くなる、だが不安心、まだ切れてはゐまいと二度も三度も叩きつけてソッと手を引て見ると爪がない、やれ〳〵切れたかと其儘内ぶところに入れて指を半巾に包みました……」

多喜の家てしらべてみると剃刀は指を切つて猶机の上に三分許り刄がくひ込んでゐたさうである。

三、戀人への手紙

彼はとう〳〵大阪にゐられなくなつた。指きりの一件が餘り評判になつたからである、三千圓の借金を新橋の清香が拂つてやつて、東京につれてきた。照葉が東京にきてから香峰にやつた手紙十通、それが私の手に入つた時は私は息もつかずに讀んだ、照葉の戀ごゝろは文を飾らずして而も美くしう讀ませる、編輯局ではそれからそれへと其手紙が手わたりして讀まれた、みんな手紙のうまいのと照葉の眞情に動かされた。

そのうち一二通をこゝにぬく。すべて原文のまゝであるのは斷るまでもない。

この間は手紙にて失禮な事を申上げました、お許し下さいませ、一寸さる舞子はんから聞きましたら若旦那は此頃多喜の家で毎日藝子はんや舞子はんをしらして面白く遊んでゐやはりますといふ事

これはてつきりお代りができたのにちがひないと思ひまして、よしない事にあなた様をうらみ申して居りましたが昨日多喜の家の兄さんからの手紙で安心しました

しかしあなたが浮氣をなさらぬといふ事は信用しません、あなたこそきれいな人を澤山よんで遊んでお出でになつたら、さぞおもしろいでしような、まして私がおそばに居りませんからどんな人とどんな事をしておいでになるかもしれませんから

私は毎晩きうくつなお茶屋へ許りいつて用事を手傳ひながら見習にいつて居ります、今さらこんな事をいふてもしかたがありませんが、片時もあなたの事を忘れた事がありません、ねてもさめても、それにこちらの向ひに朝と夕方とにバイオリンのお稽古をするのがよく聞えますので、あなたとお別れ申す時吉ふさへ電話をかけましたあの時、バイオリンをひいてお出でになつたのが電話でよく聞えました、それが耳のそこに殘りまして、朝夕かなしいのが一そう心ぼそくなります、又前便で知らぬが佛と申しましたのは、私が何も知らぬと思ふてどんな事をしても分らぬと思召し、うれしい人ができたのにちがひないと氣をまわしていふたのでございます

燒餅をやく權利もないくせに余計な燒餅を燒きまして失禮しました、お許し下さいませ。——

照葉が指を切つたのが十五歳の春、この手紙は其年の六月の事である、十通の手紙の中には色んな文句がある、毎日上野の地藏様へ參詣する事や、大阪まで長距離電話をかけて音峰の聲を聞いた嬉しさや、東京の新聞にはやされた事や、お座敷で大阪のお客にあつて音峰の事を話して泣き出した事や、照葉といふ火のやうな女がよく出てゐるが、筋書は短かいがいゝ。——だがモウ一通うつしてみたい。

四、怨みの手紙

一昨日は電話でお忙しい中を誠に失禮しました。お話したい事は山程ありましたが余りの嬉しさに云ひたい事もあとや先、たゞ夢のような氣がしてあなたのお聲が手にとるやうによう聞えますので御顔があり〳〵と見えるやうでした、電話をかけましたら何だか急にあひたうて〳〵お座敷へ出ても其事許り思ひまして人から何を云はれても耳にはいらずたゞボンヤリしてをります。

一昨夜も余り氣分が悪かつたので、十時頃築地の新喜樂といふ料理屋から一人でぶら〳〵とあなたの事を思ひ乍ら西の方ばかりながめて歩いてゐました、其時はちようどお月様がさえ渡つて何となくさびしいようなかなしいような氣がしました

昨年の今頃はいつも二人でながめてゐた月が、今は一人でさむしく照されてゐるのかと思ふとお月さんがうらめしくおもひました

御座敷もいつもいんきてすから飲まれないお酒を無理にやけ酒をのみます、さめぬうちはよろしいが酔がさめると又ぼんやりして人から何をふさいでゐるのとたづねられると悲しくなつてくるのです

そのかなしくなるといふ譯を申し上げます、電話をかけた日、うれしくて〳〵いつもに無い愉快な氣がして御座敷へ威せいよく出てゆきました、そこでお客さんに色々あなたの事をのろけ半分に云つてゐましたが、今度はお客さんがお前はかあいさうだといふンでせう、私もしやくにさわりましたから何がかあいさうですかと聞きますと、お前がいくら音峰を思つてもだめだよ、大阪の新聞では此頃は石川の菊葉と仲がいゝさうだと云ひました

これを聞た時は胸がはりさけるやうに思ひました、くやしくつて〳〵辛抱しきれませんから、はゞかりにいつてウント泣きましたらお客さんは大騒ぎで私が見えぬといふので八方さがしてゐられます、私があんまり血相かへたから急にお客さんも變つて、それはうそだとか色々取消文句をならべ立てましたが

サアそれからはドウしてもうそだと思へません若旦那うらめしうございます、ほんとうにうらめしうございます

内へ歸るとひとりのおしやくさんが髪をゆひにいつたら髪結さんが此の新地の人てそこの家へ赤新聞がきてゐましたつて、それにも音峰と菊葉とがさうだと書いてあつたと云ひますしモウ〳〵たまらなくなりました、そのおしやくさんにも毎日私はあなたののろけを云つてゐたので、何だかきまりが惡くてなりません、別にりんきする權利はありませんがモット音峰ともあらうものが藝者らしい藝者といゝ仲になられてはいかゞてございます、あの菊葉さんとおつしやる方は立派な藝者さんてゐらつしやいますが、あなたには釣合ません、もうこれだけ云はせていたゞけばとく心いたします。

十月にはきて下さい、國技館の菊人形に私の似顔が出ますから、余り見たくもないてせうが兎に角うちの淸香姐さんは開けた方てすから心配なしにきて下さい、いかゞてす、すこしは江戸ッ子になつたてせう、てすが大阪言葉はなをりません、おたより待つ〳〵〳〵

五、照葉の戀がたき

私が照葉を知つたのはこれからである。座敷て彼を見ても、いつも默つてしとやかに坐つてゐる、他の客はすまし込んてゐるとか、又は氣どつてゐると誹つたけれども私は何とも云はなかつた。彼の手紙をよんてゐた私には戀人を一心に思ひつめてゐる彼の心を察して何とも云へなかつた。

私はある日照葉の抱主の淸香から葉書を受取つた、それは故人になつた伯爵後藤猛太郎氏に就て淸香に會ひたかつた、その都合を知らせてくれたので、私は新叶家にゆかなければならなかつた。

新聞記者になつてから藝者の心中や、いろんな事件て藝者屋にいつた事はあるが、さてなか〳〵あの格子戸ががら〳〵と開けられないものである。これが新聞記者になつて一番辛い仕事だつた。新叶家にゆくと私

の行く時刻が分つてゐたので二階も片づけられてあつた、私が階段をあがる時に照葉がちらりと顔を見せた、藝者屋に新聞記者、どこでもけむつたがられるものだが清香だけはさうでもなかつた。

後藤伯の大額、ゆかしい床の幅物、香が焚いてあつて、清香は病後だのに座蒲團も敷かずにしとやかに坐つてゐた。新橋の名妓清香は後藤伯があつた爲めの清香である、彼は伯の事を主人と呼んでゐた。

「主人は今入院中ですがさう申してゐましたよ、新聞に自分の事を書くなら主人自身が話したいからッて、さうあなたに御事附してくれと申してゐました。そして何だか昔の事を聞かれると若返つたやうな氣がするね、と申して笑つてゐました」清香はつゝましやかにかう話してゐた。

後藤伯は天下の放蕩兒である、あれ程男らしい遊蕩をした者はなく、又伯ほど數奇を極めた生涯を送つた人は少い、また伯程頭のよかつた人も少く伯ほど趣味を何事にも持つた人は少い。――清香は伯の思ひ出をそれからそれへと話した。

「照葉もお蔭様でどうやら流行ますが、私はどこぞ、しつかりした處へお嫁にやりたいと思ひましてね、近頃はあれも小野鵞堂さんのお手本で手習ひをして居ります」こんな話も出た、また

「ひとり美人が參りましたの、私は照葉より美人だと思ひますが、その女が或る所で非常に有名な女でしたの、たいへんな財産家を瞬く間にすり潰した位の女ですが、もう藝者はふつ〳〵イヤになつたと云つて、女中奉公をのぞんでゐますがね、今ある大きなお茶屋さんへ見習にあがつて居ります」こんな話も出た。

この頃は照葉は健康を損ねて余り御座敷に出てゐなかつた、箱根にいつたりして家にゐたりした、そして照葉の戀敵菊葉は大阪から而も新橋に出てゐたのである。

六、向島の香浮園

その後、新橋の花月で女將と話してゐる時に不圖清香の話を思ひ出して、其事を話しかけると「しッ」と女將が制して、小さな聲て

「その女はうちにゐるンですよ、今呼びますから」といつた。

おみきといふ女、なる程照葉と同じやうな顔だちてはあるが照葉より脊もあり大柄てもあつた。

「私はドウも不思議に思つてゐますよ、あれ程のきれうをもつて女中奉公しようといふのでせう、何か仔細がありさうに思へますの、女中に使ふのは勿體なくてこつちが氣がひける位美くしいぢやありませんか」

おみきが立つていつた後、女將は後姿をみてから云つた。

また夫れから暫く立つて向島の香浮園から電話をうけた。香浮園は後藤伯の別莊だつたのを清香が貰つたものである、電話の主は清香て、大水の爲めたいへん弱つてゐる、兎に角水害見舞の御禮の廣告を廣告部に出すやうに頼んでくれとの事だつた。そしてから云つた。

「それはいゝ景色ですよ、私の庭が水に浸つてずうッと向ふを見ますと水神の森が泉水の中の島のやうに浮いてみえますの、景色を見にゐらつしやいませんか、照葉も二三日前から來て水ぜめにあつて居ります。なんなら私が撮つた寫眞がありますが差上げませうか、伊井(蓉峰)の處の弟子やら藤井六輔などが水車をふんで私の處の水を出してゐるのやら色々ありますよ」

其頃清香も照葉も寫眞熱に浮されてゐた。寫眞をとる爲に自動車て旅行したい、箱根も平凡だから遠くへ出かけたい、富山の共進會にはマサカ自動車では行けまいから四五日泊りの處てドコか選んでくれないか、との相談を受けた事があつた。

そこて箱根を汽車て越して沼津附近を自動車て飛廻るか、左もなくば成田から更に筑波山を廻るか、但しは碓氷峠を運んで信州を自動車て乘廻し善光寺參りをやるか、私は幾つも日程をこしらへて送つた事がある。ところが此自動車旅行もお流れになつて了つた、今から思へば此頃から照葉の身の上に變動が起つてきつゝあつたのである。

それから後、私は向島の香浮園て清香にあつた。席

い庭園は水に荒されたので、多くの職人が入つて手入れをしてゐた。

その頃の外務大臣牧野子爵が水害視察のかへりに一寸御飯を食べに立寄つた、自動車でこられたが水の爲に船で渡してあげるなど大變な騒ぎをしたと話してゐた。その翌日だつた、私のいつたのは。

おみきの話が出た、ところがおみきは花月を出て今香浮園に居るといふ事を聞いた、玄關で頭を下げた女をチラと見たが先方で笑はれてこちらが面喰つたが夫れがおみきであつた。

「どうしても藝者にはならぬと申しますから堅氣のしつかりした處へ之れもお嫁にやりたいと思つて居ります」と、斯う云つてゐた。

私が照葉の事について相談を受けたのは夫れから一二ケ月經つてからの事である。

七、裁判所の呼出し

その時は社としての用事もあつた、而も急な用事だつた。香浮園に電話をかけると三十分もしたら出掛なければならぬ、それでないと四五日會へないとの返事だつた。社の用事といふのは其日から是非書き出さねばならぬ記事のことである、丸の内から向島の外れまでどんなに急いでも三十分で行ける氣づかひはない、そこで自動車を呼んで大急ぎに駛らせた。

香浮園の前の橋が普請中なので途中から自動車をかへして香浮園の門を入つた、廣い庭園の小徑を辿つて玄關につくと、おみきが待つてゐた。いつもの座敷でひろ〳〵とした庭を眺め乍ら待つてゐると清香が出てきた。たしか九月の末だつたと思ふ、庭の草木の色はもう秋らしかつた。

大急ぎで私の用事だけ片づけた。すると清香は山くじら(猪)が珍らしくきたから是非たべてくれといふ、風呂ふきもお自慢ですといふ、急ぎの筈だつたがと聞くと、いやもう用事は見合せるやうに電話をかけましたといふ。

「ついては一つ御相談があるのですよ、今日私が出掛る用事といふのもそれでした」といふ。清香が私に相

談があるなんか珍らしい、兎に角話して御覽なさいといふ事になつて私は尻を落つけた。

相談といふのは照葉の身の上に就てゞあつた。一つは照葉が裁判所に呼び出される事、一つは照葉の一身上の事であつた。裁判所の方の事件は何でもない、照葉の繪葉書が余り賣れるものだから、繪葉書を複寫して賣る者が現はれて今訴訟になつてゐる、そこで照葉は證人として呼出されて、どちらから撮影を頼まれたか、その鑑定をすればよいのであつた。

「何度も呼出しにくるのですけど、照葉は裁判所にゆくのを嫌がりませう、それに照葉としてどつちがいゝといふ事も云へないぢやありませんか、みすみす人を負けさせるンですもの、どうしても出なければならぬものでせうかね」――私は無論裁判所の呼出しは應じなければならぬ、と云つた、又一方が惡いのだから、そこはハッキリ云つてやつた方がいゝとも云つた。次に淸香が心配してゐるのは、照葉が裁判所に出たといふ事を裁判所にゐる司法記者や又は寫眞班に見られたくないと云ふのであつた。何にかうまい工夫はないかといふ相談だつたが私はどうにも夫れは詮方があるまい、私は默つてゐても詰切つてゐる記者團に見られたら直ぐ照葉といふ事は分るだらうから、成行に任せる外はないと云つた。またさうしなければ、どうにも仕方がなかつた。(これは區裁判所だつたから幸ひそつと出廷してそつと歸られた)

八、照葉の小說

次に第二の相談である、これは私は書く自由を有しない。といふのは淸香から斯う私は釘をさゝれてゐる。

「あなたを信用ある新聞記者として、また主人(後藤伯)の信じてゐる方として御相談するのですから誰にも御話下さつては困ります、書く事は無論ですが‥‥‥‥‥」と斯う釘をさゝれてゐる、相手が藝者であつても秘密を打明られては男として又新聞記者として明らさまに話し又書く譯には行かない。併し私の常識で判斷して差支のない處だけはいゝだらうと思ふから、若し危くなつてきたら、そこは○○にする、之れは豫

め断つてをく。

「實は照葉の事については意地があります、今時意地などいふと時世後れだの江戸ッ子がるのと云はれますが本當に意地があるのです、初め三千圓で照葉を引とつた時に私はつく〴〵照葉が音峯を思ふ眞情にほだされましてね、モウ金づくや算盤づくではない、音峰さんが本當に女房にすると云つて貰つてくれるやうだつたら照葉は無報酬で失禮ながら熨斗をつけてあげやうと思つたのですよ、そのうちに音峰さんが東京に來ましたから、私はまじめに話しますと其返事がいゝぢやありませんか、照葉は遊ぶ女で女房にする女ぢやない、と斯うなんです。かうなると私も意地ですから、さうですか、それぢやァ照葉は立派な處へお嫁にやりますと引下りましたが、夫れからといふものは慾得づくではなしに照葉の爲めに隨分一生懸命になつたのです。照葉はあの通り悧巧な女ですから指まで切つてやつた男から見捨られても愚痴もこぼさず、心ではドウ思つてゐるか知りませんが音峰の話が出ると口では褒めて決して惡口を云ひません、全くあの妓は思ひ込んだら深いンですからね。處が今度私の思つてゐる通り或る○○が○○して…………といふ譯なんです。私も前の意地がありますしね、又照葉も近頃はすつかり落ついてきましたし自分でもまじめに考へてゐるやうですから私は思ひ切つて……………………………と思ひますがドウでせう」

話によると清香は慾得を放れて照葉の爲めによかれと思ひ、又照葉の爲めに多くの金を捨てなければならぬやうだつた、私は大いに贊成して清香のさつぱりした俠氣を褒めてやつた。

「ところがさうすると茲で芝居がいりませう、其御相談ですよ、照葉は永らく病氣で休んでゐますが、十月の一日には妹分の染葉をつれて出先を廻らせやうと思ひますの、其時にドウしたものでせうかね…………………………………」どうも書き辛くて困るが兎に角此日照葉の身の落つけ方について私も意見を述べたし清香も打あけて話してくれた。

「ほんとうに照葉のやうな身の上の女は少なうございますね、私は少しひまになつたら小説に自分で書てみやうと思ひますよ、ほんとうに！此事が片づきましたら」

九、二階で燒香

後藤伯が病氣重態の事が傳へられた。ある朝社に出てみると黒板（ボールド）に「小野様へ清水様より電話、後藤伯今朝薨去との事附」と給仕が書いてゐた。

私はびつくりして清香へ電話をかけると通夜して今疲れて寢てゐるとの事だつた。私は數奇を極めた「猛さん」即ち後藤伯の生涯を記事にして色々感慨にふけつた。

それから暫くすると清香から電話で、昨夜棺前で最後のお別れの碁會があつた、日本で三盤しかない名高い碁盤を置いて、本因坊や有名の碁客が集つて一石毎に南無阿彌陀佛を唱へて夕方の七時から朝の七時まで打つた。非常に床しかつたからお知らせすると云ふ事だつた。

其後私はまた香浮園で清香に會つた。それは「大阪毎日」で男性美の研究をしてゐた、東京の名士にも説を聞いたが誰か代表的の藝者を選んで其一つに加へたいと云ふので、評議の結果清香といふ事になつた。

「こんなおばアさんを今時引張出すのはかあいさうですよ」と云ひ乍らも話した。よく覺えてゐないが斯ういふ一節もあつた、羽二重の羽織は誰にでも似合ふが縮緬の紋付羽織が似合ふ男といふはない、ドウも男が着るとダラリとにやけてゐるやうである、處がたつたひとり見た、夫れは徳川慶喜公であつた、慶喜公のお座敷には何度も出たが、公が縮緬の羽織を着て正座に座つてゐられると、いかにも男らしく而も床しい品があつて、ちつともだれた處がなかつた、流石は將軍様ですね、といふやうな意味だつた。

「時に主人の位牌を二階に祭りましたから、あなたも線香をあげて下さいませんか」と云ふ。私は清香のあとからついて二階にあがつた。八疊の間の正面に後藤伯の位牌があつてお供物は處狹きまでに飾つてあつ

た、大きな蠟燭の灯はあか〳〵と點つて蠟涙がぽた〳〵と落ちてゐた。

私も線香を焚いて合掌した、淸香も祈念をこらしてゐた。

「棺を蓋ふて定まるとか申しますが、主人がなくなられてから始めて主人の値打が分つたやうです、主人が一代あんな放蕩をしたのも流れ歩いたのも今になつて見るとア丶しなければならぬやうに其頃なつてゐたのです、ア丶して世間から落ちて世間の笑ふま丶にしてゐた主人の大きい處が漸く今日人に判りかけたやうでございます」

いろ〳〵の話が出た、私も何度も手紙を伯から貰ひ乍ら寢坊の爲め面會時の午前六時に行けず、とう〳〵會はずに亡くなられた心もちを話した。

「あ丶モウ陰氣な話はよしませう、今日はお富士さんが見えますよ」と窓をサッと開けた。富士は夕雲の上にくつきりと美くしい姿を見せてゐた。

「川合玉堂さんが、こ丶のお富士さんは形が變つて見えて面白いと仰言つて、十日も通つてスケッチなさひましたよ」女中頭は富士を仰ぎ乍らから云つた。

水神の森には灯が見える。

十、照葉の行衞？

さて照葉はドウなつたか。

私はドウしても之れを語ることができない。淸香の家にゐるか？何とも云へない。そんなら噂の如く朝鮮の山の奧に住んでゐるか？これも何とも云へない。それでは大阪に歸つて噂の如く宿屋をして音峰に見せつけてゐるか？これも何とも云へない、但しこれだけはマア噓と云へやう。それではドウしてゐるか、東京にゐるか？これにも答へられない。

ては生きてゐるか死んでゐるか。これは生きてゐて相變らず美くしいといふ事を答へ得る。生きてゐるならドコで生きてゐるか、サアこれには困つて何とも云へない。敵は○○方面に在りとも書けないではないか。

甚だ苦しき立場にあつて、甚だ書きにくい。然しこれは偏に寛容を乞ふて、美くしい照葉の爲めに、照葉

が生きてゐて世間のドコかに喰ひ込んでくる準備の爲めに、又照葉の熱情と清香の俠氣と清香の苦衷を買つてやる爲めに、暫く見のがして置いて貰ひたい。そして照葉の爲めに暫く安らかに呼吸をつゞけさせて置きたい。

私はとき〴〵照葉の小指を思ふ、白い布を卷いて人に見せじとしてゐるが、切れた小指の先が、寒い時に痛む事はないか、むづ痒いやうな事はないか、其度に戀人とありし昔を思ひ出しはしないか、まだ〴〵花ならば盛りの廿歳、むざ〳〵と此まゝ埃の中に葬つて了ふのは惜しい。

照葉はドウしてゐるか、出て來ない歟、照葉は默つて答へない、彼の未來は謎である。

――次は　漂泊せる美人――

空中戰の研究と批判

未成

航空船と飛行機との空中戰

航空船（飛行船。自由氣球。誘導氣球。）に對して、絶大の速度を要求する爲には、强馬力の發動機を備へなければ成らぬ。然し之が爲に必要な發動機重量と燃料油重量との增加は、「氣嚢の浮力」の制限に對して過大となるのである。また一方には發動機と推進機とによつてのみ前進し、砂（或は水）の投下と瓦斯の排出とによつてのみ昇降し得る航空船に對しては、此の「氣嚢浮力」の制限を增大することも容易には期し難い。速度の强大と共に、敵の好目標に餘計に成り易いからてあ

る。之に反して飛行機は速度の増加と共に飛揚量（發動機の重量を含む）をも増加し得るのであるから、航空船は何うしても、飛行機の速度には敵し得ない。

夫でも、速度の要求からして、獨逸ツエッペリン式には二萬三千立方米の氣嚢容積の尨大を忍むで、一時間に八十吉米の標準速度を具へてゐるのが有る。また三隻のツ式姉妹航空船として有名なもの、ヴイクトリヤ、ルイゼ。ハンザ。及び、ザクゼン。は氣嚢容積一萬九千立方米内外で、速度は一時間六十五乃至七十五吉米を有つてゐる。

然し其等の優秀な航空船に對しても、佛蘭西の裝甲機は、友軍騎兵及び砲兵の搜索勤務に供せられる一人乘のが百二十吉米。參謀勤務偵察用の二人乘のものが百吉米。自働銃と機關銃とを裝備してゐる航空船驅逐專用のものが百二十吉米の速度（各一時間の計算）を有つてゐて、優にツ式航空船の如上速度を凌駕してゐる。更に、全く鋼鐵鈑を以て被覆せられてゐる「航空機擊碎飛行機」とも謂ふべきものは、一時間に百三十吉米を出し得るし、此の他に固有速度一時間に百四十五吉米の記錄のも有る。

斯の飛行機の速度の超越は、航空船に對する戰鬪に於て、優勢を贏ち得べき唯一の性能なので、航空船の上界に昇騰して爆彈投下の快擧に成功し得た「佛紙は報じて曰く、佛蘭西飛行機はシヤトウ、サリンソを飛行中、二隻の獨逸飛行船と遭遇し、爆彈を投じ之を破壞せり」と言ふのも「佛國々境上に一獨逸飛行船現はれたるが、ナンシー守備隊附一佛國飛行家（ペラン氏？）は、直に右飛行船の上に飛行し、爆彈を投下したるに、美事飛行船に命中して、之を粉碎せり」といふのも、飛行機の速度の超越した効果を證したものであり、又、露西亞のソロウィヨフ飛行中尉が、墺の航空船に追及して、夫を捕獲して來たなどゝ言ふのも、正しく速度差が齎した成果である。

斯の卓越した强速度を以て、杳かなる天際から某昇騰角を維持して、僅かに仰起しながら、驀然と航空船の上方に接迫してくる飛行機、或は地上の一角から、

著大なる一定の仰角を以て、螺旋形にぐんぐんと飛揚してくる飛行機に對して、航空船は籃内に裝備する六挺の機關銃を以て、飛行機關部と操縱手とを目標に集中射撃を行ひながら、多量の砂嚢を許す限り投下して、極大の昇騰力を發揮しつゝ、頻りに方向を轉ずる。其の前方の突球部を昂起した尨大なる航行船は、一分間六百發を發射する機關銃六挺の烈しい音と、各百八十五馬力を有する六個の飛動機の爆鳴と、一分間に五百三十回を旋回する六對の推進機の響とを、天空に波動させて奔騰する。飛行機は其の絶大の速度を徐ろに發揮して、機の安定を保有しつゝ、巨大なる敵の昇騰角と速度とを觀測しながら、敵の成し得る限り上方に、機頭を指向すると共に、確乎たる決心を以つて最う無二無三に神速なる發揚能力の極度を盡す。射手は左手に爆彈を把り、右手に自働旋銃（佛のベネット銃は叉狀の旋回軸上に裝著されて、四十五度の仰俯角、三十度の左右覘視を成し得る。無煙無光て反撞は無い。レヰイス銃は一分間に七百五十發を發射し得る。其の重量は十一吉瓦半。）の銃把を握つて、敵の舵機、發動機、吊籠室に向つて發射する。

反抗して相動く兩者の射撃は、共に命中公算が少い。殊に飛行機に對して、航空船からする射撃効力は期し難く、また縱ひ航空船の偉大なる氣嚢（硬式ツ式氣嚢内部は十六乃至十八個の瓦斯室が、アルミニユームの框の隔壁の間に挿入せられ、瓦斯質自身は空氣摩擦と光線の感應とを避ける爲に、銅を飽和した綿布を以て掩はれてゐる）に命中しても、致命傷は與へ得られない。

多くの場合に於て、斯の時機に於ける彼我の空中射撃は、偶中彈の有る他に相互の輸贏を決し得ない。然も、隼敏限りなき飛行機は、漸く敵の航空船を瞰下し得て、其の熾烈なる響鳴を聽きをろしながら、愈々緒黄色なる全長約百五十米、中心幅約十五米に亘る敵の脊表面を視る。其の脊の天蓋の頂上に裝備せられたる四挺の敵の機關銃は、こゝに新しく旋律した響を發して、我が飛行機の超過飛騰を妨害しやうとする。

夫ても、昇騰の爲にも同一高度の飛揚の爲にも著陸降下の爲にも、終止缺くべからざる砂或は水及び炭化水素(一時間に百二十吉瓦)と油(一時間十吉瓦)の一定量を常に豫備しなければ成らぬ航空船は、猶更に速度の寡弱と、方向變換の遲緩との原因から、竟に飛行機の爲に、下方に餘儀なく制壓せられる。爆鳴を收め、射擊を中止し、白旗を掲げて、捕獲されるのは斯の時が最後てある。

然らずんば、飛行機上の光榮ある射手は、眼下に搖蕩する一大目標に爆彈を投下すべく照準する。操縱手は縱横に旋回しつゝ、氣嚢爆破の爲の波動を受けざるべき高度にまて、敵の銃丸を回避しつゝ、得々と飛揚する。

時は宜し。掌を離れたる全重量約百吉瓦の爆彈は、先づ下尖の鐵桿を以て氣嚢を刺突する。次いて其の彈頭の衝力と共に、雷汞—炸藥—彈筒の爆發を來す。勃發する爆音と火焔と濃煙と相散ずる時に、雲と我との他に一物なき天界の捷利を全く占めて、唯我獨尊の飛行機は凱旋飛行の爲の方向を選定する。

然しながら、操縱手ばかりが坐乘し得る輕飛行機を以てしては、夫自身を犧牲にする他に、航空船に傷害を與へ得ることは、不可能てある。其は專任の一人が操縱ばかりに全努力を傾注するのてあるから、(操縱手が偵察を兼ねることは、不可能の事でないけれども、飛行機戰術の原則としては、分業に服務すべきが現今の本旨に成つてゐる。)殊に戰闘手段をも兼ねて遂行し得ることは全く不可能だからてある。また單乘飛行機は裝甲されても攻擊的には武裝されない。ローラン、ギャロー(彼は民間飛行家の一人てあるが、佛蘭西ては、民間飛行家は動員に際して直に現役軍に編入せらるべき宣誓をした後に、軍事飛行を習得する爲に、每年若干時日は飛行隊て練習する。其處て特別の課程を與へられて、戰時の要求を充足し得る如く敎育せられる)が、ツエッペリン式航空船と犧牲を交換したのも、其のツ式の無敵な航力(航續二十四時間。每時八十吉米速度、メッツ要塞から巴里までの距離を威力半徑に

して、一夜にして往復し得るのであるから、エッフェル塔に開戰當初から探照燈を旋轉させてゐるやうな）に對して、ギャロー操縱の單乘飛行機が、全く餘儀なき最後の一策を敢行したのであらう。

斯くの如く述べたてゝも、飛行機と航空船との戰鬪に於て果して何れに常に有利なるかを決して判斷することは能きない。兩者とも其の式と型と裝備と武器とに依つて、能力に夫々格段の差異が有り、天候其他の影響は、また著しく利害關係を異にするやうな、交錯した勝敗の原因を齎すからである。

航行船相互の空中戰

航空船同志の戰鬪は、今度の戰役では未だ起生してゐないといふのは、今年の一月に、佛蘭西の上院で討議せられた航空機問題に就いて、議員のレイモンの質問と、之に對する陸軍卿の答辯とを綜合してみるならば、佛の航空船は獨のに對して、著しく劣勢なものであり、從つて佛軍の航空船は常に戰鬪を回避してゐるのだらうと判斷されるからである。

また實際に、佛の航空船が嘗て戰鬪以外に於てすら活躍した一例をも打電されてゐない。

其の上院の討議といふのを拔萃するならば、「獨逸は現在（本年一月）大航空船の十四隻（ツエッペリン七個。ニーメンス、シニッケル一個。パルセバール六個）を有し、其の總容積二十萬三千立方米に達するに反し、佛蘭西は小航空船七隻を有し、總容積五萬四千立方米を算ふるに過ぎず。（然れども、現下容積二萬四千立方米の軟式大航空船七隻を註文中なり）（硬式航空船の研究を必要と認め、容積三萬立方米のものを若干新造するに決し、近く其の製造費を議會に要求せんとす）また獨逸は航空船格納庫三十個を有し、伯林と國境との間に於て、三線（伯林附近。ポツダム＝ゴータア線。ハンメエ＝ストラースブルグ線）に配置せられあるも、佛蘭西は僅々十一個を三線（モーブージュ＝ベルフォール線。シヤロン＝レイム線。聖シール＝イッシイ線）に配置するに過ぎず」と言ふのであるから、佛の航空船の勢力は全たく悲觀すべき傾向に有るものと推斷され

る。

更に、彼我兩軍の航空船が互格の勢力を具へてゐるとしても、價値多き其の存在を賭してまて、其の相互が搏ち交はすことは、餘りに犧牲が大である。即ち將來に連續して絕大なる偵察并に對地上戰の威力を收得する爲には、航空機同志の交戰は寧ろ戒愼すべきが得策である。況や其の數に於て、決して多くは無く、また容易には造出され得ない、價格の大きい貴重品を、無造作に損失することは、御互に不利であるから、斯の戰爭の爾後と雖、斯種の戰鬪は無いものとも推斷せられる。

飛行機相互の空中戰

巴里市街の郊外の空は、獨佛飛行機隊の相互戰を演出して、獨の二つは墜落したといふ。然し、其の戰鬪に參與した機の總數や種類等に就いても、また墜落した原因に就いても、報道せられてゐない爲に、其の戰況の想像すらも着かない。

獨飛行機の巴里威嚇に對して、佛のが夫を防遏しやうとした爲に、戰鬪上未だ何等の接觸を來さないうちに、獨軍が退却したものとしても、蹉躓多き飛行機の性質上、其のうちの二つが、何等かの天然或は人爲の故障か過失の爲に、墜落したのかも知れない。彼我決戰したものとしては、二個の損害は餘りに少い。

白獨國境空中戰に、白の飛行機が獨の夫を中央から破碎して、墜落させたといふのも、既述の「航空機擊碎飛行機」を以てしたならば、決して有り得ないことでは無い。其の機能は、三分間四分の三以內に、五百米高度に達し得て、離著陸の所要距離は百三十五米（是は稍多い）を超えず、乘組員は二名、其の一人は爆彈と爆裂彈との投下に任ずる、全部鋼鈑に被覆せられて、一時間百三十吉米の固有速度を有つてゐると言ふから威力は大きい。

然し、此の飛行機若くは航空戰の相互の空中戰に就いては、私は英國のバーク大尉の所說を引きたい。

――飛行機は自己と同樣の使命を有する敵飛行機に邂逅することあるは、素より免れざる所にして、此の

時に於ては、直に攻守の方法を取らざるべからず。換言すれば、敵飛行機に對して、豫て攻守の方策を講じ置かざるべからず。然れども、之を以て直に近き將來に於て、空中戰を現出すべしと期待する如きは、尙早し。要は唯だ從來に於ける獨立騎兵の衝突に處するが如き手段を兩者の遭遇に際して、講ずべしといふ意義に他ならず——（獨立騎兵は偵察の本任務の爲に、多くは戰鬪を回避する）

自働旋銃を以て武裝した二個の獨逸飛行機が、佛飛行機を追撃したけれども、佛のは何の損害を受けなかつたと言ふのも、電文は簡單ては有るが、飛行機相互の空中戰に於ける一の實驗として納めなければ成らぬ。

空中對地上戰

高空から地表面を絶斷なく凝視して行く機上の人を戰慄させるのは、六十度乃至七十五度の最大仰角を與へられて、ずらりと天を仰いでゐる砲口の列である。斯の『空中射撃砲隊』は、自働車（全量三千二百吉瓦）に裝備せられて、其の自働車は約十二度までの傾斜地ならば、一時間四十五吉米の速度を以て、會釋もなく朦々たる砂塵に包まれながら、天上の航空機に追隨する。垂直軸の周圍を二百七十度まで自在に旋回し得る空中射撃砲の砲身は、忽ち天界の目標に指向せられると、一分間に二十五發の射速を發射する。各砲口は一齊に爆煙に掩はれて了ふ。

殆ど垂直に近い其の彈道は、絶えず彈丸が噴出する濃灰色な火煙の爲に、鮮かな條を空に描いて、砲口の初速一分間に六百二十米（クルップ三十五口徑六珊米半）或は六百米（エーヤハルト三十口徑五珊米榴彈）若くは四百五十米（同上榴霰彈）の速度を以て、凄じく空界に抛げ出される。

之が榴彈の信管は、航空船の氣嚢瓦斯に觸れるや否や燃燒すべき白金製の雷管を有つてゐる。件の雷管は燃燒すると共に榴彈内に塡實せられた强烈な炸藥に導火して、彈丸は輙ち悉く爆發する。命中——爆發——發火——氣嚢は内部の隔壁ごとに瞬時に爆裂して、猛火と化

して、墜落する。

斯の威力ある「空中射撃砲」の口徑は七珊米半、或は十珊半にまで擴げられて、初速一分時に七百米を有つてゐるのもある。射距離はと言へば、六珊半口徑のものは五千五百米高度に、七珊半口徑のは七千四百米高度にまで向上し得ると言ふから、此の活辣極まる砲に對して、航空機は全く脅迫される。全速力を發揮して、方向と高度との交互轉換によつて、唯だ／＼砲の射界外に懸命になつて回避するより他に一策も無い。

野戰砲、機關銃、小銃の火力に對しては、航空機の速度が、比較的安全に飛行を保障する。即ち、夫等の銃砲は航空機の速度を制壓し得るほどの、迅速な射撃速度と、短い照準時間と、十分な運動性と、强大な彈丸の速力とを有つてゐないからである。

航空機は之れ等の銃砲火に對しては至大の速力を以て、頻繁に方向と高度とを交る／＼變換して、大半徑の圓を描きながら偵察するので、其の安全界は、

區分	航空船 高度(米)	航空船 距離(米)	飛行機 高度(米)	飛行機 距離(米)
野砲に對して	一、五〇〇	四、八〇〇	一、五〇〇	三、六〇〇
歩兵銃及び機關銃に對して	一、二〇〇	一、八〇〇	一、〇〇〇	一、八〇〇

と言ふことに成つてゐる。

斯の安全界の範圍を犯して、冒險飛行を試みるにしても野砲（六千米射距離）が五百米高度以上の彈道を有つてゐる部分は、砲口から二千米と約四千四百米の間の距離であり、更に低く三百米以上の彈道高を有つてゐる部分は砲口から千二百米と五千二百米の間に介在してゐるのだから、航空機が一分間に一吉米の速度（一時間に六十吉米）を出しさへすれば、前者の危險界は二分三十秒に後者の危險界は四分間に飛びすぎて了ふ。況や一時間に航空船は八十吉米、飛行機は百二十吉米を出し得るのだから危險は極めて少い。

强いて畏しいものを擧げるならば、彈道が高く曲つてゐて、射撃速度も餘り遲く無い野戰輕榴彈砲である。ヌーボー式な鈍い重砲などは、航空機の爲には寧ろ爆

彈投下の好い餌になる。

機關銃と小銃とは、其の多數を以て一齊に射擊する。そして束に成つた彈道(集束彈道)を、機關銃は連續して、小銃は短切に反覆して、空中に拋射するのだ。然し、確實な命中は殆ど期し難いといふのは、航空機の速力に追從し得べき彈道の移轉を計る爲の、照準距離(照尺)を、神速に改めることが難しいからで、また斯うした技能は構造上、機關銃と小銃とには、夫程精確に造られてゐない。實際機關銃や小銃や、或は野砲にしても、本來が空中射擊を目的にしてゐるもので無いから、夫を以て、航空機に對抗させやうとするのが根抵から矛盾してゐるのである。從つて資質上、空中に對しては効力の少いのが本當なのである。

獨逸の九八年式小銃に、S彈を裝塡して、垂直距離に二千三百米高度まで、彈丸を到達させ得たといふやうなのは、精巧なる小銃の單純な能力を示したばかりなので、空中に對しては其の能力を利用すべき器械的裝備が無いのだから、航空機に對する實際の威力は期し難い。

膠州灣で、我が海軍の飛行機は十五發の命中銃彈を翼に受けた。實際射擊した敵の總射彈は必ず夥しいもので有つたに相違ない。其に比べて十五發の命中彈は、非常に小數であると想はれる點からしても、小銃射擊=或は機關銃射擊の効力の少いことが察せられる、同時に反對に殆ど無効力と判決せられてゐる銃彈射擊を以て、能く十五發も命中させ得たものとも驚かれる。そこで我が飛行機は餘程低く飛むだのであらうとも推斷せられる。低く飛行したゞけに、公報のやうに其の偵察は重大な價値を必ず齎したに相違ない。

銃彈射擊の爲の空中距離と高低角とを測定する爲にツアイス商會で「實體眼鏡距離計」とも謂ふべき測量器を發明してゐる。然し、發明以來殆ど四年間、其の効力に就いて、何も證示されてはゐない。現在の歐州戰ても銃彈ばかりの爲に致命傷を受けた航空機の有つたことを聞かず、また此の戰の將來に於ても、然うした効果は擧示されないであらう。

白耳義のリエジュ要塞からの射擊の爲に、獨逸のツエッペリン式航空船が地上に墜落して、全く破壞したといふのは、恐らく其の要塞の備砲であつた前述の榴彈砲射擊の爲に、主要部分を毀碎せられたのであらうと想像せられる。(空中射擊砲を以てしたのならば、猶何かの烈しい文字が電文の何處かに示されるものと臆測せられるから)アントワープでも砲彈に氣囊を貫かれたツ式が降下して、十五名の乘組員が捕へられた。然し其の白軍の砲も乘組員の生存してゐた上は、やはり地上戰の砲であつたのだらうと想はれる。

佛蘭西の軍用飛行機の一つが獨逸國境を偵察中に、獨軍から砲擊せられて、一彈に偵察士官を傷けられ、一彈に翼を貫かれたのが、無事に佛軍の陣地に降下したと云ふのは、偵察用としては、飛行機の方が有利である原則を證示したもので、即ち其の速力の卓越と、體積の極少とから來る隼敏と同時に敵の照準困難、及び敵の燒夷彈に對して極めて危險な氣囊を有つてゐないのと、機翼の貫通は飛行能力に毫も支障を來さない安全とは、飛行機が偵察の爲に至大の價値ある所以なのである。

斯くの如き飛行機も、偶々其の機關部に命中せられるか、或は自由操縱が可能な程度にまで、機若くは人員に損傷を受けるならば、勿論墜落か不意の降下かを免れることは能きない。四名の獨逸の飛行家が露軍に砲擊せられて、飛行機と共に墜落して慘死したのは前者の一例であり、また獨逸の飛行機が佛軍の砲擊の爲に、國境に降下して二名の飛行將校が捕虜に成つたのは、後者の一例で有る。

故に、既述の飛行機の安全程度と雖、地上からの砲擊に對して、(航空船に比較しては有利であつても)、決して完全に近いものでは無い。

更に、爆彈投下か、或は機上の自動旋回銃などを以てする地上との戰鬪は、其の彼我の射距離の差が甚しく、一方には命中効力は彼我殆ど同一の不確實な程度から言つて、地上の對空中武器に對して航空機の優勝は期し難い。即ち、空中からする攻擊は、殆ど無抵抗

な地上に對しては、安心して然も有利に成し得るのであつて、既述のやうに、野砲、機關銃、小銃に對する危險は極めて少いと言つても、決して夫を無視することは能きないことに成る。

故に航空機だからと言つて、一概に絶大の戰鬪威力を具へてゐるものと思ふならば、夫は過つてゐる。

以上の空中對地上戰の相交錯した懸案は、今や尊き實驗に依つて、確切に試驗せられ、解決せられんとしてゐる。然し何れが果して優勢なるべきかに就いての結論を下すことは、未だ早い。籍甚の興味を以て、現在する斯種の戰鬪報告を待つべきてある。最後に、機上から投下する爆彈の構造と威力とを附記して、青島要塞上を翺翔する、帝國飛行機の武運を祝福しよう。

但し時節柄、軍機保全の喧しい際に、玆に述べるのは、獨逸のヨハン、ハニカ中佐の說と、獨逸兵事週報百二十八號所載のもの及び其他總て外國の出版物に依つたことを明記して置く。

或る一種の爆彈の彈體は長さ三十珊米の圓筒で、中軸に細條の雷汞を貫通する。其の外圍にダイナマイト炸藥が塡實せられ、更に夫を綿火藥が二百個の彈子と共に圍繞してゐる。雷汞の上部には金屬製の詮が有り、下部には鐵桿を垂下して彈體の下に長く突出して居る。彈體の外被はアルミニユームの薄皮である。

この他に珠形で鋼皮を有つてゐるのも有る。佛蘭西の一將校が新しく發明したのは、重量一オンスに過ぎない纖長な水雷形のもので、二千三百呎高度から投下するならば、三百三十呎の落下速度を以て、完全な殺傷力を備へてゐる。輕量の爲に、飛行船には乘組定員の外に、千ポンド即ち一萬六千發を携行し得るのであるといふ。

ツエッペリン式航空船は餘程まへに、實驗として六百吉瓦重量の爆彈裝置を投下したけれども、船體には何の損害的影響を來さなかつたといふから、夫が戰時に千米以上の高度から投下せられるならば、確かに戰慄すべき効果が示される。

ツエージユ要塞がツ式航空船からした爆彈の爲に沈

默させられたのは眞實てあらう。

戰爭直前に、機上裝備の銃から發射せられ得る爆彈が成功してゐた。命中精度は勿論、技術上の困難も之が爲に芥除されるのてあるけれども、其の詳細は現在之を使つてゐるとしても、戰後の研究に待たなければならぬ。然し、不動目標に對する爆彈投下の正確な効力と技術上の可能程度は殊に航空船からするものに就いては最早戰爭前から論難されてゐなかつた。嘗て希臘のミエチュイス飛行中尉がダーダネルス海峽を横斷して百八十吉米の飛行をした時に、土耳古艦隊の碇泊する海峽を俯瞰しながら、ガリポリ半島のマイドス市上に飛翔して、同地の造兵廠に對する四個の命中爆彈を投下した實例があり、伊土戰爭の時にも伊軍の航空船は土人の陣營や市街やに命中させてゐる。

今度の戰役にも、既述のリエージュ要塞に對するものを始め、佛飛行家はメッツ要塞のツ式飛行船の格納庫を粉碎して、飛行船を破壞してゐるし、アントワープ市は家屋六百數十個をツ式の爲に破壞されてゐる。

青島要塞に對する帝國飛行機の爆彈投下の黑煙が、落下中或は著突した爲に、爆彈自身から迸發したもの許りで無かつたならば、其の効力は少からぬもので有らう。

動目標に對する投下法は、砲兵の射法のやうに、諸種の方式が有り、また未だ研究中てあつた。殊に速度の大きい飛行機からするものは、機自身の不安定をも來して、精確を期し難い。獨飛行機がリュネーヴィルて三個の爆彈を投下したのと、佛國々境に投下したのも、悉く無効てあつたと傳へられる。

記臆すべきは殊に昇騰或は飛行力の關係上、航空機の携行し得べき重量に制限の有ることてある。航空船には二百吉瓦の爆彈が（佛軍の諜偵によると五千吉瓦を携行し得るといふ）平均十五個、飛行機には平均三個てある。（倉庫、船渠、船橋、輸送船等に對しては、通常七十五乃至百吉瓦の爆彈て十分てあると判定されてゐる）然し、目標の種類に依つて彈種と投下法とを選定變化させる等の研究は、專門家の間にも未だ定論

は無いらしい。
斯の點に於ても、帝國飛行機が東洋の一角に於て、現下の大戰に於ける、世界的記錄を擧げ得ることを祈らねばならぬ。（九月十日稿了）

ショウと余とショウ夫人

野口米次郎

テームス河畔のクレヲパトラス、ニードル！千八百七十八年に一萬磅も運賃を掛けて遠く埃及から持つて來た方尖塔今じや眼の前走る電車の野暮な郊外主義（サバーバニズム）（倫敦などでは電車嗚呼しみつたれて見られたものじやありません、向ふては野暮臭いのを郊外主義（サバーバニズム）と云つてます）の爲め折角の風致を臺無しにして不見目だ、一體全體英國人は無風流至極、巴里などでは美術に對する態度が倫敦とは違つて水際立つて居ます結局英國人は實物さへ握つて居れば滿足なので凡て飾付け方などは念頭に無いてすな、こんな不平を持つて居る余が或日アデルヒ、テレスのバーナード、ショウのフラットーフラットですから一軒立の家で無い某建物の三階の一床全體を借りて居るのです、此の横町は云はゞ藝術家の巢なので畫家ペンネル或はバーカー俱樂部を擧げるとサベージ中々俗を拔いた變物揃です、このショウのフラットからクレヲパトラス、ニードルを見た時は全く見直したてすよ。重々しい灰色がかゝた紫色の正月の霧が一面外を覆つて嬉敷いのは對岸に大く出て居る何かの廣告て蘇格蘭の兵隊キルトと云ふ短い袴見たやうなものを着けて風笛（バツグパイプ）を吹いて居る繪が見えぬことて、天下に有名な方尖塔は暗明の中から寂い超然たる姿を見え隱れに顯はして古昔ヘリヲポリスの大神殿前に立つ

て居たとなど想出さしました。現實離れをして夢の如くて、トムソンは倫敦を土臺にして『恐る可き夜の都』長篇を書いて居るが何んだか舟にでも乘つて三面は園庭で取捲き其園庭にはエーッ一流の炎の樣に踊るといふ仙女連が永住して居る『麗はしき夜の都』へでも行くのじや無いかと思はれました、こんな工合であるのですから身はショウのフラットに居てもショウとか彼の新しい時代を考へることは出來無かつたです。

室内では火が贅澤に燃えて居る二面の壁には繪が樣々懸けられて居る書棚には別に讀む爲めとは受取れぬ特製仕立の本が行列してます二枚折の屛風或は椅子或は長椅子が順序正しく置かれて居る床は見事に艶布巾掛けられて居るし敷物も見事だ、實際はショウの宅でしやうけれども自分は何うしてもショウのフラットとは受取れ無かつたですショウと云へば慣例習格や似非議論を呪詛する男じやありませんか、此の家は云はゞ普通の住宅だ、大な机の上にはロダンが製作して有名なショウの半身像があります其半身像でさへ余をして此れがショウの宅だと信ぜしめる丈けの力が無つたです、ショウのフラットで無けりや誰の家だ、云はぬでも知れてるじや無いか此の宅は則ちショウ夫人のである、夫人といへば愛相の良い五十二三であらう眼は愛耳蘭人特有のものだと云へば知る人は知ています眼の邊には笑つて居る樣な縮緬皺が浪打つて居る此の部屋(應接間ですよ)と夫人との調和の良いことと少々申分が無い、麗はしい物好きの女の性質通俗ではあるが女らしい少い藝術的の移り氣さへ此の部屋で表現されて居る、余の此處へ來た時ショウは外出中で宅に居無つたが居無いのを結句喜んだです、此處はショウの家と信じたく無い、ショウが今に歸宅するといふことであるがショウが來るなら自分と等しく夫人の欵待を受けん爲め客人として來てもらいたいと希望しました。

希望通りでしたショウは見るから客人、客人といふものは芝居で云ふ登場を面白くせん爲め半時間ばかり後れて來るものだがショウが部屋へ入つて來た樣子はそうゆう客人よろしくでした、自分がショウを見るの

は此れが初め、ショウは色淺黑く峻嚴過ぎて何處か隱され無い皮肉が顏に顯はれて居るといふのが余の想像でしたが其想像は失敗でした、夫人の眼と一樣にショウの愛耳蘭人的の眼は語らざるに先づ笑つて居たです。赤ら顏で色の薄い髮の毛が樂觀的快活を彼に添へ居ます、部屋の中へ入つた時は色變りて造つたトウヰードのサックを着た瘦せぎすな背の高い身體を心持程前の方へのめらせて亞米利加の芝居で猶太人の身振だつてよく遣る型ですね兩手を二三度揉んだり握合つたりして、劈頭彼は呼びました。

『サボイ座へ行つて眞夏の夜の夢の稽古を見物して來た大變なものだ、馬鹿〳〵さ加減は類が無いね然し馬鹿〳〵しい中から何か點頭かせるものを掴出すのがグランゼル、バーカーの伎倆だ。』

聞いて居る我々の顏をじろ〳〵一渡り見廻はしたショウは談話上手の男が一寸話しては遣る慣用手段を心得て居るのですね、火の方へ歩いて來たかと思ふと机の上で自分の半身像が剝製の鷲のやうに小首を傾けて居る邊へ後づさりをするショウは何と無く氣が落付ねといふ樣子でした、こうゆう彼の特調とか彼の奇癖とかいふのは至極眞似易いのですから倫敦市中丈けでも一萬のショウ有りと聞いても驚くに當ら無い役者などがショウの芝居を遣るとショウの箇人的特調を十人が十人舞臺に出そうとするが間違ひですね、ショウの亡後遠き將來役者が本だけを便りにするやうに成つて初めて彼はジャスチファイされるだらうなど〻思つたです、余は倫敦へ著してから氣の毒なショウだなと餘計な事を口癖にいふ惡い習慣を得たので今も所構はず一ッ云はうとする折柄奇麗な前垂掛けたショウ夫人の宅に相應しい下女が午飯(ランチヨン)の用意出來ましたと知せて來ました、皆なの客人、自分と美術的寫眞師として知名のコーバーンいやショウ其人は勿論重なる客人、打揃つて食堂へ入つたのですが食堂の飾り付これ又ショウ夫人の趣味を代表して居ましたです。

余は右と左にショウと夫人を目八分に見て座つたです英國では實際款待するのは招いた主人の側じゃ無く

て客人の方なのてす、詰り客人が主人側を持成すのてす、余は主人方てある様に落付はらつて居るとショウは重なる客人の責任としてスープが半分濟んだ頃話し出しました、スープの半分濟んだ頃は正しく談話を初む可き時てす、ショウは頭を一寸抑けて長い顔を眞向にするかと思ふと前の方へ身體をのめらして直く又後の方へ揺上げて今度は兩方の肩を上下に動かし余の顏を見乍ら話出しましたてす。

「日本人はだね美術國だとの風光明媚だのとの云はれて居るじや無いか、夫れに何んぞや米國なんて有らゆる野蠻人が集つて居る國なんぞへ出掛ける理由は何處にあるね。」

彼は余の返事を聞こうともせず語繼けましたてす。

「ある日本人が嘗て倫敦の演壇に起つたと思ひ玉へ其日本人が種々述べた自國人の美質なるものは不幸にして余は常に忘却し度く思つて居る所のもの斗りてあつたから驚いたね、日本人が果して斯かる惡質を一身に集め居るとしたら天下の痛嘆事だ、余は日本人を排斥するね嫌はざるを得無いね、講演者の説の如き美質いや惡質だらけの日本國は英國の屬國と成るの一事あるのみだ憐む可きじや無いか余が持つて居た日本の夢は破れてはる〱訪問したい氣は無くなつたよ。」

余は嘴入れて、「君が日本行を恐れるもつと大なる理由がありますよ、日本へ行こうものなら惡評された自分の本や不恰好に演ぜられる自分の劇を見せ付けられちや散々てすからね。」

「自分の劇と云へば此處ても不出來の點じや負けないね」とショウは叫びました。

ショウ夫人はナイフとホークを持つた手を止めて余を見上げて、日本の劇に多少興味を持つて居るのてしやう余に尋ねました。

「日本ては今じや實際の舊劇は見えませんかね。」

余は過去三十年間、賢愚の問題は別としてクリエートした藝術的狀態其は段々純日本が西洋の侵入の爲めに退却するものと見て大なる間違の無いのを意味するので、ショウなどゝといふ連中は日本攻撃の總大將株

てあると語つたてす。

「ショウは厄介な男てすね」と夫人は笑つたてす。ショウは默つて皿の上の野菜を忙はしげに食べて居る菜食論者などゝ吹聽したつて多分自分自身て製造した神話位に思つて居た余は證據を握つて喜んだてす、然し油切つた品物て人間の弱點を刺戟するには都合の良さそうなものを不體裁を極めてぱく／＼遣つて居る自分を顧みると一種の耻辱を感じてショウが急に純白に見えて來て神々敷くも受取られるやうに成りまして天下に又とショウ程寂寞を極めた人格は有るまいと思ひました、彼は如何にも多辯てあるが其多辯なる譯は自分の寂しさを隱さん爲め、彼の場合ては多辯（勿論いつも利口な多辯てあることはショウとても不可能てす）其物は彼が殘酷なる世界と鬪ふ最後の武器てあるとさへ思つて來たてす、そう成ると彼の多辯を彼此批評したり嘲笑したりする權利を誰が持つて居ます？　彼は急に一箇不幸なる犧牲者て彼は人を樂ませんが爲め存在して居る彼の心は最も柔和なもので、其柔和といふ點が彼の誤解せられる所てあると思つて來ましたてす。

一座が白け渡つたのを見て取つた彼は此のショウ夫人の午餐會ての重なる客人の責任として談話に花を咲せにやならぬ所て彼は例に依つて頭を仰むけて愛耳蘭人の眼を余の方角に向けて、肩を一搖二搖もしてから云ひました、「文藝て日本ては飯が食へるかね我々の英國ては全く駄目だ、それに出版者といふ出版者は皆な惡黨て一人ても正直な男は無いからね。」

ショウは今追回的心持（レミニッセントムード）に成つて來たのてしやう、我々は幸てしたよ、彼は落付いた聲て語りだしました、「僕は靑年の頃は十七世紀あたりの佛蘭西文學を愛讀したもので其當時てはボルテイヤなどは至極樂に了解し得たものだ、自分の小說は全然英語イデヲム拔きて、佛語か露語の小說の英譯のやうに單純な文句て書かうと決心したのだそうゆう本なら無敎育な連中てもすらすら讀めるだろうと思つた、僕は大決心て小說を書いたね、其中の一冊の如きは中々長篇てバニチー、フエ

ア位有るのだ、所で出版者が見付から無い如何しても出版しやうとする男が無い、永年苦心の結果は今尙ほ机の引出に隠れて居る、僕は文學に從事してから最初九年間といふものは一仙も儲けたことが無つた君九年間の長日月だ、十年目にやつと百磅貰けることが出來た英國で文學で飯を食ほふとするのが間違ひだ、英國人は我等に一文も支拂ふに及ばずと思つて居るのだね、所で僕は最初の大決心を止めて文體思想を變へた其の變へた結果と云へば君等の今見る所だ、僕は時々僕にスタイル無しと酷評される然しスタイルは學んで得られるものぢや無い、僕には僕のスタイルが有ると思つて居る世人は盲目で畢竟見ゝ無いのだね。』

デザートの血が卓上に上る頃に成つた少い奇麗な圓い藁で造つた莚の敷物が並べられる中々見事なので一寸賞めるとショウ夫人は其れは愛耳蘭の百姓女が作るので余の前に置かれた莚の敷物は女優レナ、アシユウエル嬢の意匠に依つたので女優の好きなのであると云添へられたてす。

余が十一二年前米國から倫敦へ渡つた時ツリー一座が杜翁の復活(レサレクシヨン)を遣つて居た其一座の立女優がレナ、アシユウエルで自分も陰乍ら孃を景慕して居たものだ今計らずも孃の意匠に成つた莚の敷物の上でデザートを食ふ機會を得たのを喜んだてす。

食後我々一同は喫煙の爲め以前の應接間へ引上げたショウはロダン(『驚く可き大家』と云つていたてす)が彼の半身像を製作せる時のロダンの顔付きを遣つて見せて『こんな眼付きで見詰められるのだから餘り心持は良く無いさ』などゝ云つて笑つたてす、ショウは双手をヅボンの中から曳出して以前の様に揉手をして猶太人の眞似をしてつか〳〵と余の前に立ちはだかつて云ふのには、

『英國は愚鈍で千年立つても變化せぬ心を有つて居る憐れむ可き英國だ、こんな所へ君遣つて來たとて更に學ぶ所が無いじや無いか、變化せぬ心どころじや無くて心なるものを持つて居るか否やが先づ第一の問題じやからね。』

「實際人間らしい心が見たけりや愛耳蘭へお出なさい」とショウ夫人は言葉を挿さんだてす。

　ショウは何んだがそわ〳〵し出して時計を上衣から出して見て「午後は會議に列せなくちや無らない」と獨語しました、彼は興味ある顏をして居る其顏を余へ向けて叫んだす、

「君は日本人て日本に居れるとは不思議な男だね、僕は愛耳蘭人て愛耳蘭には兎ても住め無い、左樣なら又會ほふ。」

　ショウは大風の如く戶をどたはだ遣つて立去つたが何處かへ行つて人を樂ませせん爲め犧牲者の責任を盡すのてあらう、ショウといふ重なる客人が去つてからは室內が急に靜かに成つて皆のものが氣拔したやうてあつた、余も失禮しやうと思つて居るとショウ夫人はホルバインのミラン侯爵夫人の肖像とて有名な英國民美術館の畫の復寫を見せ廻つて話しました、

「此の形て假裝會へ出ようと思ふのですが如何でしやう。」

　余は其れは至極名案だと思つたてす靜かて寧ろ寂しそうな侯爵夫人、細い首と手首には黑い線て緣を取つた襞(フリル)のある黑色繻子の着物を纏つたミランの貴婦人はショウ夫人には注文通りぴつたりと嵌まる夫人も自分には何んなのが適當だかの難問題を解決する力のある一種の藝術家だと思つたです。

　夫人の好意を謝して應接間の入口の戶の側て振向くと遠方に見えるテームス河上大膽に虹の如く兩跨を擴げて居るウオタルー橋は余に左樣ならを云つて居るやうに見えたてす余は對岸に高く揭げてある廣告用電氣仕掛けの蘇格蘭の兵隊か何にかゞ夜に成ると點火さられるそうだが晝間此處へ來たのだから嬉敷くもそんな物は見ずに濟んだのを喜んだのてした。

探訪奇譚「男の面影」

松崎天民

一水兵の老父

瀧田樗陰君足下、「富嘉川」の納涼臺で淺酌したのみて、あれから暫時お目にかゝりませんが、相變らず汗ダク／＼のお忙しい事でせう。あの晩は酒も美味かつたし、料理も不味くはなかつたし、それに衆議院書記官長林田龜太郎翁が、例の浴衣がけの雲梯居士然として、突如と御入來遊ばされたので、興趣なか／＼に盡くべくも覺えませんてしたが、何時になく大醉して、失敬して了ひました。

私は彼の翌々日から今日まで、六日間と云ふものは社を休んで、寢ては食ひ、食うては寢てばかり過しました。最初の一日は一週に一度の定休日、次の三日は二週間の暑中休暇の殘り、昨日は朝から頭痛と腹痛で病臥し、今日は亡妹睦子の一周忌で墓參りと云ふ風で、折角の休日も臺無しにして了ひました。貴君と一所に東京近郊の宿屋の二階で、初秋の一夜を心ゆくまで飲み明さうと云ふ豫ての計畫は、何時頃實行出來ますことやら。身體には休暇があつても、心に一日の安靜も得られない樣な事では、民友社物の「オイケン」一冊を讀破するのも、並大抵の苦勞では無いと思つて居ます。

亡妹の一周忌と云へば、私の一家が大厄難に罹つたのも、恰も去年の今頃からのことで、斯うして居ても一種の不安な感に堪えません。それに毎日、新聞社へも出勤して居ると、仕事が有つても無くても、四邊の騷然たる活動的氣分に同化されて、何一つ原稿を書かずに歸つた時でも、人並に働いた樣な氣持がして、多少安んずる處もありますが、宅にばかり引籠つて居る

と、なか〳〵左樣な譯には參りません。僅四五日の短い間にしろ、世間と云ふものと交渉を絕つて、斯うして寢そべつてのみ居ますと、何だか世間から捨られた樣な氣持がしたり、明日から新聞社へ出ても、もう探訪も出來ねば文章も書けない樣な氣がして、一種の不安と心細さとが、ヒシ〳〵と胸に迫つて來ます。私などは能く口癖の樣に、都會生活は面倒臭くて不可い、金があれば田舍に宅地でも購つて、理想の住宅を建築して住みたいなどゝ申しますが、こんな風では靜寂な田園生活は愚か、人と人との接觸多い新聞社を退いただけでも、閑散されて了ひさうに思はれて仕方がありません。

斯うして、活きた世間に觸れなくては、一日も安んずることが出來ず、一日に一度は電車に乗らなくては、生きて行く心地のしない私が、六日の間宅にのみ引籠つて、亡妹の一周忌を迎へたのですもの、何んなに悄氣て何んなに沈んで居るかは、改めて申上げる迄もありますまい。況んや賑かなカフヱーへ行つて、一杯のド

ふに舌皷打つ程の興趣も無い今日此頃、一切萬事が悲觀的に流れて、昔の思ひ出にのみ耽つて居るのも、決して不思議な事ではないと思ひます。

楞蔭君足下、六日間宅に引込んで、斯うした心持に惱んで居た私が、妹の墓參とは云ひながら、久し振に電車に乗つて、活きた世間に觸れたのですから、今日は生れ變つた樣に氣持が好くなりました。身體は豚の樣に肥滿つて居ても、心は鳩の樣に弱い私などは、何うしても引込て居ては駄目だと思ひます。

お約束して置いた「男の面影」も、今夜あたりは夜を徹して、一氣に書き終へさうな氣持がします。そこで一寸お斷り申して置きますが、實は今度も何だか面倒臭いので、貴君に宛た手紙風にして書き初めました。文章の目先を變へると云ふ事に就いては、平生から相應に苦心して居る私が、同じ樣な形式の下に、同じ樣な事柄を書かうとするのは、隨分智惠の無い話ですけれど、まア大目に見て貰ひませう。今度のは前の「女

の面影」の女が、男と云ふ字に變つたのみで、探訪奇譚的色彩に乏しい事に至つては、重ねてお斷りする迄も無からうと、一人で納つて居ます。

　さて私は今日の午後二時頃、青山四丁目停留場から、久し振に九段兩國行の電車に乘て、小川町に亡妹の良人なりし人を訪ねました。亡妹と親しかりし婦人や、亡れ遺兒などが集つて、去年の今日此頃を思ひ出に浮かべながら、再び電車に乘つて大塚辻町まで行き、其處から徒歩で雜司ヶ谷の墓地に參詣しました。嘉納塾前の坂を登り切ると、東京も最う田舍になつて、午後三時頃の秋の日が、煎り付ける樣に汗を絞りまた。去年の今頃は妹の墓の近所は、廣々とした軟土ばかりでしたが、一年振に今日行つて見ると、向三軒兩隣は勿論のこと、前後左右にも新らしい墓場が出來て、中には文壇に聲名を馳せて居た、柴田流星君の墓標が立つて居ました。活きた世間の電車も賑かで宜いが、死だ人達が隣り合つて居る墓場の眺も、詩や散文に現れるほどに、淋しく陰氣ではないと思ひました。三十やそこらの若い身そらで、不幸不運の間に病死した妹の事などは、別に思ひ起しもしませんでした。

　久し振に電車に乘つて、一年振に妹の墓を展して、同じ道を大塚辻町の方へ歩いた途中で、私は一人の老人に逢ました。白縮みの腰卷に袖の無い白木綿の襦袢を着て、豐島ヶ岡裏の石垣前の門外に立つて、黐の附いた竹竿を持つて、五六人の子供を相手に、何か面白さうに騷いで居た姿が、妙に私の心を惹きました。私がこゝにお話し樣とする一場の思ひ出話とは、何の緣も因も無い老人ですけれど、私は四五人の子供の中に立つて居た老人の姿に依つて、忘れて居た十年の昔、日露戰爭當時の一幕を思ひ起すことが出來ました。

　考へて見れば探訪奇譚でも何でも無く、强て云へば「探訪記者の印象」とでも云ふ類の話ですが、まア辛抱して讀んで下さい。人は何時何んな所で、何んな事が動機になつて、忘れて居た「過去」を思ひ起すものか知れないと、實は自分でも其の突拍子もない心理作用に、少しは吃驚して居るのです。

樗陰君足下、黐竿を持つて子供の群と戯れて居た老人は、其の姿こそ下卑て居たれ、身の丈五尺五六寸もあつて、鼻下から顎へかけて霜深い長髯を垂れて居る様は、隱者の氣品がありました。功成り名遂げた老將軍が、市塵を避けて田園に隱遁し、幸福な餘生を送つて居るとも見られて、何となく奥床しく、言葉をかけて見たい様な氣持がしました。

私は妹の良人なりし人と歩きながら、其の老人に似た人を誰か某かと求めて、先づ第一に故人になつた幸堂得知翁を得ました。或る年の涼み芝居に、眞砂座の棧敷で席を隣したのを最後として、遂に幸堂翁とは此の世で相逢ふの機緣を失ひましたが、得知翁を少し若くして、背を少こし高くしたのが、何の事はない其の「黐竿の老人」だと思ひました。それでも私の思ひ出は、有名な幸堂得知翁へは動かずに、ズッと十年の昔へ飛んで、日露戰爭時代の「生活悲劇」に登場した無名の一老人の上に馳せました。幸堂得知翁は「忘れ得ぬ人々」てすけれど、其の老人は「思ひ出の人々」の一人として、何となく一種の哀思をそゝります。

其の頃の私は、大坂朝日新聞に居て、社會部に屬する一探訪記者として、「出征軍人の家族」を書いたり、戰死將校の遺族を訪問したりするのが、殆ど受持の仕事になつて居ました。林鳥海艦長の未亡人、軍神廣瀬中佐の遺族、福井丸の機關長、生還した鷲特務曹長など、數多い人々に接觸して、隨分「國家の爲め」の雄々しさを傳へましたが、思ひ出はそんな有名な人達ではありません。「黐竿の老人」に似た男を求むれば、幸堂得知翁の外にも、二人や三人は思ひ起せませうが、私は誰よりも先づ十年前の一老人を思ひ起しました。歐洲大戰亂に日本の宣戰布告、膠州灣頭に飛行機のプロペラの響、一世を擧つて戰國の氣分が滿ち渡つて居る時節柄、私が十年前の「軍國の生活悲劇」を思ひ起して、その一齣に登場した一老人の姿を尋ねるのも、決して不思議な事ではないと思ひます。

三十七年であつたか八年であつたか、何でも軍艦吉野か何かゞ、敵の敷設水雷にかゝつて、沈沒した事件がありました。乘組將卒の多くは雛に斃れて、底の藻屑となりましたが、その中に大坂市出身の水兵も七八名はありました。遭難者の詳しい住所氏名が判つたのは、夜の十時頃でしたが、早速其の遺族を訪問して、翌日の新聞に書かうと云ふので、居合せた三四人が手分けをして、訪問することになつたのです。私の受持は東區で二人、何れも機關兵や水兵の名も無い者の遺族ですから、住居を探ね歩くには骨が折れる、時間は經つ、氣が氣では有りませんでした。

やつと探し當たのは本町邊の路次の中、その頃私は自轉車に乘つて居たので、セイ／＼と呼吸ははずむ、汗は流れる。姓も名も忘れてしまひましたが、「水兵誰某さんの宅は此方ですか」と入口の戸を開けた時、「はい」と答へて出て來たのが、こゝにお話し樣とする「黐竿の老人」に似た一老人なんです。

楞陰君足下、平生でも左樣ですが、殊に戰爭當時のさうした場合には、出征軍人の遺族などよりは、新聞社の方が早く種々の新事實を知ります。その老人も私が狹い入口に腰掛けると、「倅に何か變つた事でもおますかい」とばかり、未だ軍艦沈沒の事も、一人の息子に異變があつた事も、何も知つて居ない樣子が見えるではありませんか。

探訪記者はこんな時に限つて、緣日商人の樣な嘘を吐くものです。「いや別にその……異變はありまんが、出征した人達の事を種々と調べて置きたいので……」なんかと最初は護魔化して掛りました。相手の老人は私を區役所の書記とでも思つたのか、「東區役所の方で、何も彼も判つてますやろが」と云ひながら、奥に居た女房を呼出して、小い風呂敷包を持て來させました。「この頃に何かたよりがありましたかいな、寫眞があると拜借したいのですが……」と云つた時、老人は初めて「あんたはん、どちらからで……」と、不安らしい面持をして、私の樣子を凝視めました。

　私は此の時、「朝日新聞の者ですが」と云つたのみで、何のために聞くのかは說明せずに、履歷やら逸話らしい事やらを聞いて、最近の手紙と寫眞とを借受けました。人の惡い話ですが、先に要領を得て置きさへすれば、後は何うとも宜い位に考へて、「實は軍艦吉野が沈沒したと云ふ電報が來ましてなア、乘組員も大分戰死したらしいのです。お宅の息子さんは助かつたか何うか、未だ詳しい事は判りませんけれど、萬一の事がおましたらなア、新聞に書かんならんよつて、お邪魔に來た樣な譯です。明日の朝になつたら、何も彼も判るやろと思ひますので……」と、そんな時に限つて、大阪辯を混ぜて使ふ癖のある私が云ふと、その老人は默つて聞いて居ましたが、「吉野が爆沈、そやつたら最うあきまへんわ、へい、倅も死にました?、死んだに違ひおまへん。軍艦と一所にやつたら、助かりさうなことあらへん、なアお前……」と、傍に居る女房の顔を見て、ジッと斯う兩手を組みました。

「實は息子さんも戰死されたと云ふ電報が、社の方へは來たのですけれど、未だ眞僞のほどが……」と云ふと、老人は「間違やおますまい、朝日に來た電報やつたら、最うあきまへんわ……ア、宜う死んでくれました。國家の爲めやつたら、火の中でも水の中でも厭やへん、決して女々しいことしてくれるなとなア、よう云うて置きましたが、へい、左樣ですかいな。よく死んでくれました、なアお前、何事も國家の爲めや、天子樣の爲めや……。これで私の家も武士になれましたわ」と、一滴の涙もこぼしませんでした。

　それでも女親はさすがに柔しく、私の顔を怨めしさうに眺めては、さめ〴〵と泣きました。「泣く奴があるかいな」と云つた老人の眼には、遂に一滴の涙も見ませんでしたが、痩せた淺黑いその顏面には、强て悲痛を隱さうとする樣子が、漲り渡つて見えました。

　樗蔭君足下、十年の月日が經つて居る上に、名も無い一水兵の父ですもの、姓も名も忘れてしまひましたが、其の夜の姿は今も尙、明かに思ひ起す事が出來ま

す。今日端なくも「釣竿の老人」を見て、「一水兵の老父」を思ひ起したのは、一滴の涙もこぼさずに、「國家の爲め」だと云つた、その雄々し氣な様子が、「釣竿の老人」にも眺められたからでせう。

その老人は「釣竿の老人」の様に、長い白髯も生して居なかつたし、餘生を樂む隱者らしい風貌も具へては居ませんでしたが、二人の間には何となく似通うて居る點があります。その時の言葉の調子では、四國も土佐の人らしく思はれましたが、金持の住む東區でも路次の中で、水兵を息子に有つて居る様な身分では、生活も不如意勝であつたでせう。働き盛りの息子を戰爭に召されては、忽ち迫る其の日の糊口も、心細いと云つた風の身の上でありながら、老人は「國家の爲め」だと云ひました。釣竿こそ持つて居たれ、白髯長く垂れた老人に聞く方が、相應しかるべき「國家の爲め」を、路次の老人が云ふ世の中であつたのです。

私はこゝで、面白い事實を語らうとするのでは有りません。當面の戰爭そのものも、種々の意味に於て、悲劇であり慘劇でありますが、戰爭に依つて起る側面裏面の「生活悲劇」には、戰爭よりも悲痛にして慘虐なる様々な舞臺面のある事を、力強く絶叫したいと思ふのです。「國家の爲め」だと云つて、涙一滴こぼさぬ父親の心も眞實でせうが、また戰に死んだ息子の上を思ふて、さめ〴〵と嘆き悲しむ母親の心も、眞實である事を承認したいと思ひます。そして、戰に死んだ父子兄弟のために嘆き悲しむことを、女々しと嘲り、男らしからずと笑ひ、不忠と罵る様な「人情の虚僞」を、新聞の雜報面から奪ひ、戰爭談の插話から根絶したいと思ひます。「死」そのものに種々の理由を附けて、人情自然の流露に加減乘除を爲すが如き不眞面目さを、「死」の絶對事實の前から除去たいと思ふのです。

亡妹一周忌の墓參に依つて、飛でも無い思ひ出に耽りましたが、全く死んでしまへば「國家」も「個人」も有りません。纍々たる墓標の下、「柴田流星」も無く、「亡妹」も無く、貧愚貴賤老若の差別も無く、皆同じ様に大地に歸つてしまうのだと思ひます。國家のために死

だ人にも、不幸不運にして死んだ者にも、「死」の手は同じ樣に冷たいものを、泣いては不可ない死と、泣いても宜い死との差別が何處の世界にありませうぞ。「死」と云ふ事實の前に對しては、私等は常に眞卒にして敬虔なる態度て居たいと思ひます。

時代は繰返して、また樣々の軍國悲劇を見ねばならぬ世の中となりました。一水夫の老父の樣に、「國家の爲めに死んだのだから、名譽てこそあれ、決して悲しくは無い」と云ふ樣な、雄々しい氣の毒な人達を、今度も到る所て見聞せねばならぬことてせう。

火葬場の一夜

樗蔭君足下、九月十五日夜も十時を過ぎると、四邊が最う冷りとして、煽風器は寒いほどになりました。風呂に入つて、烏龍茶を一杯飲て、さてこれから第二の思ひ出を話さねばなりませんが、今夜は何うした譯か、萬年筆が思ふ樣に滑らぬので閉口して居ます。

これも探訪奇譚てはありませんが、若し私が今日までに遭遇した事件の中て、「最も忘れ難い印象として殘つて居るのは何か」と尋ねられたら、それは「社會主義のために死刑に處せられた、内山愚童の死顏てある」と答へるのに躊躇しません。妹の一周忌に墓參りへ行つての今夜、兎角話が陰氣になりますけれど、これも何かの供養だと思つて、暫く御辛抱を願ます。斯うした秋の靜夜には、華やかな世界を追懷するよりも、陰慘な思ひ出に耽る方が、何の位誂へ向だか知れないし、何の位相應しいか知れないと思ひます。

新聞記者になつて足掛十五年、殊に社會部の探訪として過した大阪時代には、男や女の樣々の死態を目撃しました。毒殺された紳士、縊死した老婆、井戸に投げ込まれた幼兒、慘殺された勞働者、裸體の死美人、沈沒船の屍體、池中の溺死體、無理心中、轢死など。詳しいことは「探訪記者の見た樣々の死態」と題して、拙著「人生探訪」の中に書きましたが、今は最う何も彼も忘れてしまひました。たゞ斯うして漫然取止めもなく、探訪記者としての接觸を思ひ起して居ますと、柱

公爵も出れば乃木大將も出る、川上眉山も出れば雷小僧も出る、菅野須賀子も出れば露探殺しの今村も出て來ます。けれどもこれ等の人達は思ひ出の上ッ面をサッサと素通りするに過ぎませんが、單り「内山愚童の死顏」のみは、追懷の底深く食ひ込んで、他の人達の樣に、容易に通り過ぎさうに見えません。

公判から刑の宣告、獄中生活の模樣から最後の死刑に至るまで、社會主義者一味の事件は、重大にして且つ好奇心を滿すに足る大事件として、當時の各新聞紙に取扱はれました。公判廷での中心人物は、何と云つても幸德秋水と菅野須賀子、一は事件の首領として、一はたゞ一人の女性として、雜觀子に寫されましたが、こゝに云ふ「内山愚童」も亦、愚堂と云ふ名に依つて、人々の記臆に殘りました。私は當時「愚童」の名を思ふ毎に、如何にも人を馬鹿にした、僧侶的の名前だ位に思つて、滑稽的に扱つて居ましたが、それが遂に最期の死顏を見る樣な事に成行きました。

忘れもしない寒い星月夜、東京監獄で死刑を執行された一味數名の棺桶が、監獄の不淨門から擔ぎ出された時、私等數名の新聞記者は門外に立つて、「逆徒の遺骸」を眺めました。粗末な四角な棺桶が一個二個と運び出されるのを見た時には、時が時なり所が所なり、決して好い氣持はしませんでしたが、然し何とも云へぬ一種の好奇心は湧いて居ました。

樗陰君足下、「社會主義」と云ふ四字に對して、全社會が興奮し切つて居た頃の事ですから、監獄の門を出た「逆徒の遺骸」にも、其筋の取締は嚴重でした。棺は五個か六個、幸德初め首領株のが人夫に擔がれて、市ヶ谷から落合火葬場へ向ふ途中にも、警察の提灯は人魂の樣に從いて行きました。

堺枯川氏や大杉榮氏など、生前親しかつた人々が五六人、それに報知新聞の毛呂君と私とが、「逆徒の遺骸」の前後になつて歩きました。外の新聞記者達は、監獄の門外で失敬したのですが、私等二人は火葬場まで行つて、この事件の大團圓を結ぶ積でした。所々に殘ん

の雪を見ぬ寒い晩て、二人は途中から棺桶の一行と分れ、人力車に乗つて一足先へ落合火葬場へ行つて、一行の着くのを待受けました。棺桶の傍近く歩く枯川氏等は、警官から追拂はれた様ですが、それでも天下の大道を濶歩して、棺桶と共に火葬場へ着いて、先づ休憩所に入りました。

落合火葬場には、既に警部や巡査や私服が五六人居て、一々私等を誰何しました。寒い冬の一夜、殊に火葬場は闇に閉ぢられて、何とも云へぬ屍臭が漾つて居る中を、警察の提灯のみ右往左往して、巡査の佩劍が四邊の寂寞を破りました。火葬場の中に運び込まれた棺桶は、白木綿で卷いた上を十文字に括つたのみて、如何にも寒む相に眺められました。日本全國を騒がした叛逆無道の大惡人も、最うこゝまで來れば一切無差別、極樂へ上らうが地獄へ落やうが、佛様と同じ様なもの。外套の襟を立て提灯擕げた若い巡査も、默つて棺桶の傍に立つて、氣味惡る氣にして居るのみてした。休憩所では枯川氏等が火鉢を圍んて、和服巡査の問に答へて、笑ひながら住所姓名を名乘つて居ました。中には死者の近親の者も居たと見えて、「最う死骸になつたのですから、お手柔かに願ひたいものです」など、云つて居ました。

その内に一人の青年は、火葬場の中へ入つて、「幸徳さんの棺は何れですか、これを棺の中に入れて貰ひたいのですが……」と云つて、新約聖書らしい書籍を一册出しました。火葬場の人夫は老人てしたが、「えゝ宜うがすとも」と答へて、「幸德傳次郎」と貼紙のしてある棺の網を緩めて、上の蓋を捻ぢ開けました。青年は「あゝ幸德先生だ」と云つて、さも感慨に堪えぬ様な面持て、その書籍を棺の中へ入れると、人夫は手早く金槌てたゝいて、その棺を竈の方へ運んで行きました。暗夜の火葬場は寂寞として、咳一つしても、それが木精の様に消魂しう響いて居ました。

その時また一人の男が來て、「内山愚童としてあるが、間違つては居ないか知らん。お骨を拾ふのだから、間違つた人が入つて居ては大變だ。僕は中を改めて見

る、ほんとの兄が入つて居るか何うか、棺の蓋を取つて見よう」と云つて、「内山愚童」としてある棺の蓋に、兩手を突いて四邊を見廻しました。

椰蔭君足下、斯うなつては詰合の警官達も、一脉の醒氣に襲はれてしまつて、默つて立つて見るより他には仕様がありません。私は社に歸つて書くべき記事の内容がいよ〳〵豐富になつて來るのを、心窃に喜びながら、背景と云ひ科白と云ひ、容易に眺められぬ舞臺面の展開を、好奇の眼で凝視(みつ)めました。

「幸徳」の棺桶の蓋は、容易に開きましたけれど、「愚童」のは容易に開きません。件の男は有合ふ金槌の柄て、蓋の側面を上の方へたゝきましたが、激しい音が響くのみて、何うしても蓋が取れません。この時火葬場の人夫が來て、「こいつは堅いや」と獨語しながら、蓋の一方の隅を打ちますと、一方が一寸ほど開いたのて、そこへ手を突込て、メリメリと半分ほど壞した蓋を持上げました。件の男は「それて宜しい」といひながら、棺の一隅に頭を垂れて居る愚童の顔を窺き見て、「あゝ兄だ、兄に違ひない、好い佛様になつて居る」と云つて、ハラ〳〵と落涙しました。

巡査も人夫も新聞記者も、居合せた總(すべ)ての人は皆默然として、變り果た内山愚童の姿を窺き見ました。件の男は愚童の弟と見えて、何か昂奮し切つて居ましたが、「間違ひさへなければ宜い。死刑に處せられても苦しくはないのか、大往生を遂げた人の様だ」と云つて手早く棺の蓋をしました。陰森凄愴たる火葬場の一夜、大きな金槌で棺の蓋を壞した物凄い響と、薄暗い燈火の下に眺めた「内山愚童」の冷たい死顔と、それを何うして忘れる事が出來ませうぞ。五六個の棺が悉く竈の中へ運び入れられた時、更に一人の警部が來て、貴君方(あなたがた)は何うか退去して下さい、それてないと新宿署まで同行せねばなりませんぞ」と、劍をガチャ付かせました。火葬場に於ける大詰の一幕は、既に其の科白の高潮を過ぎて、魔の様に聳え立つた黒い烟筒からは、慈母や孝子や逆徒の煙が一所になつて、寒い落合の天地に漲

り流れて居ました。

社へ歸つて、この記事を三段餘書いて、其の日の市内版を締切つたのは、翌日の午前二時頃でありました。新聞に掲ぐべき雜報は、事實の直寫をのみ主として、さうした時の心持なり感なりを、十分に書き現すことを許されませんが、それでも相應に心持だけは書きました。折柄病臥中の故石川啄木君から、「僕は今日までに多くの雜報を讀んだが、あの火葬場の一夜の記事ほど、深い感銘を刻まれたものは無い」との端書を貰つたのも、「愚童は何んな顏をして居たい」と度々聞かれたのも、其の當時のことでありました。

其の後幾年、私等の仲間にも、背が底くてクツ／＼と肥つて、頭を五分刈にして居る男があると、能く「愚童／＼」と揶揄つたりしますが、棺の一隅に蹲居(うづくま)つて居た愚童は、二度と再び見る事が出來ますまい。天地容れざる大逆徒でも、死ぬれば性は善に復つて、佛々した蒼い顏が、宛然御經でも唱へて居る樣に、その夜の刹那には眺められました。

楞蔭君足下、以上の話には何の意味も無く、たゞ思ひ出したのみを、雜とお話したに過ぎませんが、「火葬場の夜」と云ふ特種の舞臺で、棺の蓋を壞して死人を見たと云ふだけでも、既に普通の出來事では有りません。況んやそれが大逆事件に連座した一人で、死刑に處せられた屍體だと云ふに至つては、決して平凡な有觸れた出來事だとは云はれますまい。

「内山愚童の死顏」を思ひ起すにつけても、端役の樣にちよい／＼思ひ出に浮かぶのは、同じ事件に連座した多くの男の中に、たゞ一人の女性として異彩を放つた、管野須賀子の姿です。初めて逢つたのは、彼が大阪の黄色新聞記者を勤めて居た頃、宇田川文海翁の宅で、誰かに紹介された時で、其の後は私が新聞に「東京の女」を書いた時、一度逢つて話をして見たのみでした。三度目に逢つた時には、既に大逆事件の被告として、所も大審院の大法廷で、幸徳や愚童等と同列の

端に、平然と構へて立つて居ましたが、其の充血した面貌には、少しも囚人らしい様子が見えませんでした。

公判廷で見た須賀子の態度には、この事件に連座した唯一人の女性であることを、如何にも誇りかに得意とする様な景色が見えました。裁判宣告の日、「死刑」を言渡された刹那でも、彼の女は平然として、四邊をキョロ〳〵眺めて居ました。多くの男が頭を垂れて、愼み深い様子をして居る中に、須賀子一人のみ惡びれもせず、テキハキと擧止して居たのが、何となく小面憎く見えました。内山愚童の如きは、死刑の宣告を受けた一刹那、身體をブル〳〵と慄はせて、僧侶にも似合しからぬ態度をしましたが、須賀子は心持顔色を更へたのみで、廷外に出る時には、「皆さん失禮します」など丶云ひました。新聞記者の仲間では、「いざとなると、女の方が度胸が据はるのだね」など丶噂し合ましたが、それほど須賀子は膽が据はつて居たか何うか。兎に角「たゞの女ではない」と云ふことだけは、雜觀子仲間でも相場が極りました。

死刑を宣告されても、シャー〳〵と構へて居た女の須賀子よりは、内山愚童の方が何の位可愛いか知れません。愚童は死て火葬場に送られても、兄思ひの弟が、居て、棺の蓋を破つてまでも、最後の別れをして貰つたが、須賀子は女でも顧みられませんでした。死んだ者には罪なし、何も須賀子を貶すのではありませんが、斯うして當時の様を思ひ起して居ると、須賀子の姿は電光の様に、去來するのみですが、内山愚童の顔は一所に安定して、何か人間の眞理でも私語きながら、大きな聲で笑つて居る様にも思はれます。

詰らぬ事を書いて居る内に、最う夜が明けてしまひました。厭な思ひ出ばかりを話して、自分ながら詰らないと思ひますが、今日は妹の一周忌、死、火葬場、墓地に縁があるのも、何かの回向だとお許の程を願ます。久しく世間に觸れないで居ると、祿な事は思ひ出に浮かばず、ほんとに厭になつて了ひます。

——九、十五——

號外。

黑頭巾

其一

●號外！號外！吾輩、膠州灣占領の號外を待つこと久し。膠州灣占領の號外は、吾が民族的生活に於ける、頗る意義あるものとして、吾輩は期待しつゝあり。

●吾が新日本が世界の進運に聯絡を保持しつゝ、開國以來、著々、地歩を占め來ること約五十年、自から進んで大勢の先頭に立つは、膠州灣攻擊を以て初とす。是までの事は、將來の吾が大使命に比すれば、未だ言ふに足らず。今日の事、外交の議す可きもの、少からざる可しと雖も、今、此に言はず。唯だ吾輩は、吾が日本民族が、歐洲列强、大勢變轉の樞機に與つて力ある運動を爲すに足れるを自覺し、吾が國民が自强して、以て、つねに世界進運の先頭を壓して進むに至らん事を期待せずんばあらず。

●這般の意義に於て、膠州灣占領は豫定の事實たりと雖も、占領の號外は、吾等の希望を確實にするものなり。およそ豫定の事實といふもの、悉く、既定の事實となるに至つて、始めて、愷切に、之を豫定の事實たりしといふを得可し。吾輩は、膠州灣占領の終に、豫定の事實たる可きを疑はず。然れども、占領の號外に依つて、豫定が既定となれるの欣喜を享受せん事を希ふものなり。

●人生に於ける豫定が既定となるの絕對に、確實、不可疑ものは、曆と、人間の死といふ二の事項の外に在らず。曆に於ける豫定の日時は、必らず既定となる。人は生るれば必らず死す。此の二のものは、大地を打つ槌は外るゝとも、必らず外るゝこと無し。天下の事、豫定の確實なること、此の二者の如くなる時は、則ち、始めて既定の絕對に確實なる可きを疑はず。吾輩は、膠州灣の占領は、其の確然不可動、必らず此の二者に匹敵す可きを疑はず。

●新年の來る可きは、舊年の時に於て、疑問の餘地ある事無し。然れども豫じめ賀正の式を擧ぐるを得ず。膠州灣の占領は、縱令、其の來ること、新年の來るが

如くに確實ならんとも、未だ、今日に於て、占領の號外の鈴聲に依つて感受する精神鼓動を味ふを得ざるなり。

●或は、吾輩の、膠州灣占領の號外に期待するは、譬へば、劇の大切を待ちつゝあるが如き乎、劇の筋書は豫定の事實なり。然れども其の大團圓に到達するの前、必らず幾多の順序と波瀾とを經過し、其の順序も波瀾も亦た共に、當然、豫定の事實なる可くして、豫定の如く、大團圓が既定の事實となるを致すが如きなり。

●大團圓が劇の終局の事實、大團圓ばかりを見れば、則ち、劇は終れりとなして、當初より、一切の順序と波瀾とを省略して、以て、大團圓ばかりを見る事を得ず。大團圓といふは、便宜を以て言ふ、稍、語弊あり。最後の幕を意味するなり。

●書卷の最後には、必らず大尾の二字あり。豫定の如くに、書卷を讀破するものとせば、讀んで大尾の二字に到達す可きは、又た豫定の事實たらずんばあらず。然れども、當初より、先づ此の二字だけを讀んで、以て、吾、此の書卷を讀破せりといふ事を得ず。

●吾輩は、膠州灣占領の號外が、吾輩の耳朶を打ち來るの既定の事實となる可きを疑はず。然れども、今に於て、未だ占領の氣分を樂むを得ず。實は、其の號外の出るを期待しつゝある間こそ、曲折あり、希望あり、光明あり、感慨あり、思索あり、而して藝術ある也。

其 二

●昨日、吾が上陸軍、膠州を占領し、本部は即墨に次するの號外に接す。膠州を得るといへども、青島は猶ほ遠し。即墨の二字は頗る吾輩の感興を動かす。

●即墨の二字は、字面に雅趣あり。即墨の名、吾が國人の耳に熟す。昔、田單、火牛を放つて敵を破るの地。今、儼然として吾が軍の占領に歸す。吾輩、少時、十八史略を讀む。十八史略は、尤も多く日本人に讀まれたるの書、邦人、東洋史の一班を知るは、此の書に待つこと多かり。而して此の書は、興味ある史實の記事本末的に、聯綴せられたるもの、尤も人の記憶に便に、書中の顯著なる史實は、則ち、吾が國の普通知識と爲るを致す。即墨の火牛の如き、其の一なり。則ち即墨占領の號外の、吾が半生の智識、興味の、現實せられて、飛んで吾が掌中に入れるの感無くんばあらざるなり。

●號外は、ヒントなり。極めて簡にして、無數の聯想を惹起する時に、興味饒し。即墨といへば、則ち、八

の心頭に領解す。唯だ、即墨占領の四字あれば足れり。則ち、萬人の熟知せる地名、人名、事實が主題たる時に於て、號外は詩なり。

◉翌日の新聞に於ける號外再錄及び、詳細の說明記事は、讀者に、智識を供給するに過ぎず。智識ある者は讀まざるも亦た妨げず。號外は則ち讀まずんばある可らず。而して智識の階級如何に係らず、感興は、號外に存す。

◉即墨占領は、吾輩、唯だ、其の一例を擧ぐるのみ。感興ある地名の號外は、悉く、這般の感興を惹起せざるはあらず。而して膠洲灣占領の聲は、則ち、這般の感興を、極めて廓大したるものならずんばあらず。

其　三

◉今日、秋晴、輕風、微涼を催ふす。單衣を著け、海岸の樓上に、卓に倚つて、筆を奔らす。東京灣の美觀言ふ可らず。

◉筆を把つて、望眼を放てば、水平線、遠く東南に開けて、房總の山、婉蜒として、藍色の繪具を並べたるよう。此の繪具の脊中より、直ちに白雲漲り湧きて、綿を千切つて、縫衣に置けるようなる雲の峯、重疊して、碧空を捧け出す。而して水平線を劃りて、帆影、或は明、或は暗、前後、錯雜、布置して以て遠きより近きに到る。遠景は帆影、甚だ密に、近きは白帆甚だ疎に、偶、欄干を掠めて、櫓聲、軋々、水を穿ちて過ぐ。

◉畫趣の東京灣は、宛然、一大パノラマを描き出す。遠景、近景、雲影、帆影、眼中の景物、すべて動かず。近舟の泊するもの、舷を叩く音、聞えて、人物悉く指點すべし。則ち遠景は畫にして、近景は實在なるを感ず。

◉吾輩は、パノラマの東京灣に向つて、倦かず眺めつつあり。吾が書樓の、城市に僻在するが爲めにすべて號外の鈴聲を聞かず。海の彼方に、大戰局あり。此のパノラマを透して、すべて風雲の變を感ぜず。時を經、見るに隨つて、知らず識らず自から畵中の人となり畢る。強ゐて、戰爭ありと思へども、畫景に對して、吾が心、陶然として、畫趣に溶解しつゝあり。譬へば、人間の純潔なる血が、試驗管の中の、モルモットの血の試驗液に溶解し去つて、光明、莊麗なる薄桃色を爲すが如し。自から其の快美の感覺に醉ひつゝあるなり。

◉吾輩は、今、パノラマの東京灣に對して、畫趣に依つて、暫らく戰時の感激を忘る。吾が一身、今、「號外の興憤」を拭ひ去つて、痕跡を留めず。然れども、此の如きは、又た畢竟、戰局の畫趣ならずんばあらず。

而して吾輩は、「號外の興憤」を草するの筆を措いて、此の書趣を樂みつゝあるなり。

其四

●豫定の事實の實現を待つの心は、則ち、豫定の號外を待つの心あり。待つの一事、藝術の氣分を涵養す。豫定の實現を待つの間に、藝術の發揮も享受もあるなり。

●膠州灣占領の號外を待つの間に、戰局精神の藝術美は發揮せらるべし。譬へば、角力を觀るが如く、勝敗の燦然たるよりも、其の立合の氣合、角逐の技術に、藝術美、或は、之に依りて藝術氣分の涵養を得るが如きなり。

●花は半開に看るといふは、未だ盡さず。破蕾の前に於て、半開より滿開に至り、遂に、綠葉、蔭を爲して、實を結ぶに至るまでの間に、藝術美と氣分との醱酵しゆくを見る。

●『馬に、鞍置け、花咲きぬとの山里の使は來れり』といふは、使の來れるは、則ち、趣味の號外なり。花の藝術美は、則ち、花信の來る前に、涵養せられつゝあるなり。

●膠州灣は終に、必らず、占領せらる可き事、江流の大海に朝宗するが如し。其の河口に至る時、則ち、占領の號外の時なり。千溪萬水を合せて、樹下を潛り、大野を潤らし、汪々、洋々として大觀を致すまでの間、則ち、到る處に、藝術美の發揮せられ、感興の橫溢して、人をして、拍手喝采を禁せざらしむるもの無くんばあらず。若し政局の進展なりせば、まさに號外を發行す可き箇所なる可し。

●或は、豫定の大團圓を待つの趣味は、落語を聽くにも譬ふべし。落語の終局は、つねに豫定されて在り。然れども落語の興味は、進行の中程に存せずんばあらず。

●待つといふは、一面に於ては、つねに進行なり。此の進行無くんば、豫定の目的に到達することなし。則ち待つ間の進行は、豫定の內容が時々刻々に既定に近づきつゝあるならずんばあらず。

其五

●號外！號外！、膠州灣問題の號外は、吾が國民をして、未だ嘗て知らざりし一種の興憤を味はしめたり。興奮の由來するところは實に二十年前に在り。然れども二十年前未だ今日の號外の興味を豫想したる者有らず。

●遼東還附以來、二十年。吾が國民は今日あるを待つこと久し。二十年を維新以來に比すれば、約、其の半に近かし。此の長き間を、吾が國民は臥薪嘗膽の中に

暮らしたるなり。今日の一擧、勿論、未だ全く、積年の鬱懷を一掃したりといふには足らず。膠州灣の事、日、獨の間、他人混せずの戰に非ればなり。吾輩は、他日、日、獨が、列國環視の中に、世界の大々舞臺に、一騎打の決戰を試みるの日、到來せんには、號外の興味、また今日の比に非ざるを期待しつゝあるなり。

◉遼東還附の事、三國干渉に由て成ると雖、露、佛は從にして獨は主なり。膠州灣に關する最後通牒は、日本一國の名を以てすと雖も、實は、英、佛、露聯合の大勢に乘ずるなり。

◉夫れ報復戰は堂々たらずんばある可らず。聯合に酬ゆるに、聯合を以てするは、必ずしも卑怯には非ずと雖も、獨力單行して、以て、其の志を逞しくするの痛快なるに若かず。

◉曾我兄弟は、十六年にして、報復せり。吾等は、二十年にして、雪辱戰の一擧に出るを得たれば、曾我兄弟よりも臥薪嘗膽、四年の長きに及ぶ。當年、英姿颯爽たりし軍人も、今は、白髮の老將となれるも多からん。白髮となるとも、鞍に據つて、顧眄し、以て、舊敵を睥睨するを妨げず。吾が國民は、唯だ一片、膠州灣占領の號外を以て、二十年の苦辛に酬ゐんとするなり。

◉一言の爲に、一身を擲つに足るものあり。膠州灣占領の號外、一片紙の爲に、此の身を殺すは、吾が將卒の志なり。而して吾輩も亦た、筆折れ、腕挫けて、尙ほ已む可らざるものを有す。

◉二十年といへば、此の報復戰に、現役の兵役に入る者は、當年、遼東還附の號外を搖籃の中に聞きたる者ばかりなるを以て、彼等は、膠州灣占領の號外に向つて、一種、不可離の宿命を有するものならずんばあらず。

◉彼等の前半生は、則ち、號外に生れて、號外に活き、屈辱に生れて、雪辱に活き、先天的に報復の人として斯の世に來れるならずんばあらず。彼等は、他日、自傳を、家に藏するの時、須らく、遼東還附と膠州灣占領と、前後、二枚の號外を貼付す可きものなり。

其六

◉吾輩は、昨夜、吾が書棲に、故障ありたるの故を以て、則ち、六條山人と共に、「五厘の渡」を渡り、湯衣に、宿屋の傘に、足駄を穿ちて、五人男の殘黨のようにして、雨を衝いて、有樂座の新時代劇を觀る。六條山人は、岐阜の市外の人、熱心に地方自治を研究しつゝある青年なり。

◉彼の村は、岐阜より七八町。純然たる郊外なり。然

れども地方に在つては、市の新聞の號外は、配達、必らず郊外に及ぶをつねとす。唯だ購讀者に配布するを原則とし、配達夫は鈴を鳴らさず、疾走もせずと聞く。

●吾輩は、田園生活を理想とし、身は都門に在りと雖も、吾が心、つねに、此の頃の「蕎麥茫々花似レ雪、牧童吹レ笛上二高邱一」の處に向つて馳せつゝあり。山人の話を聞けば、畑に沿ひて、柹の木など、錯落して、耕作道の、ところ〳〵に、青き槇の生牆に、沿ひて曲がり、茅屋の出沒するあたり、赤蜻蛉を追ひて、子供の走る間を、法被（ハッピ）を著けざる新聞配達夫が、一束の號外を手にしつゝ、悠々として、農夫と伴ふて行く光景の、歴々然として、吾が眼中に浮び來る。

●今、此の章を草するの時、遠く號外の鈴聲、吾が樓前、軌々の櫓聲に交りて聞ゆ。既にして、鈴聲の相生橋を渡るらし。何等の號外なる可きや。

●抑も號外を以て、大都會と地方とを象徴するを得べし。號外夫の鈴を鳴らして、號外を、奔り且つ賣るは大都會なり。號外を奔らず、且つ賣らざるは地方の事なり。

●奔りつゝ、號外を賣る者は鈴聲あり。奔らず、賣らざる者は鈴聲無し。則ち、此の鈴聲は、大都會と地方とを區別する所以なり。昔は驛路の鈴聲と云ひならはしたれども、今は、都會の鈴聲ならずんばあらざるなり。

其七

●吾輩、近來、「大隈伯」評論を完成し、且つ、「大將東鄕」を起稿しつゝあるを以て、此の、海岸の書樓に屏居し、日夕、筆研と海光とに親しみつゝあり。本稿約束の期限、至るを以て、則ち、宿構を披瀝して、稿を成さんと欲す。故障百出して、篇を成さず。文章、魔多きものなり。

●吾輩、既に、一たび稿を成すの後、頗る、吾が意に滿たず、乃ち其の大半を廢棄し、再び、鉛筆を新たにして、稿を續く。則ち、此の稿の大半や、元と、吾輩の豫期以外の勞作に屬し、吾輩に在つては、所謂號外ならずんばあらず。

●吾が起草の號外に於ける、期限の切迫するものあるが爲に、事は早急なるを要し、其の輕敏を條件とすること、新聞の號外に讓らざるもの在りて存する也。思ふに、世間、文壇の人、また時に、號外的綴稿に忙殺せらるゝもの、少しとせざる可きなり。

其八

●吾輩は、今、新佃島に在り。號外の鈴聲を聞くこと

甚だ稀なり。大概、號外の、新佃島、月島に來るは、三に一なるべし。是等の町は、東京の新領土にして、東京とはいへども、其の文明は、寧ろ舊郊外に及ばず。

◉號外は、郊外に普及せず。行くことありと雖、悉くは行かず。然れども、地籍上、郊外に屬するところと雖も、猶ほ、號外の普及するものあり。郊外には東京の號外無しといふ可らず。實質の東京を論ずるは、地籍を以てするは、既に、野暮なり。宜しく「號外の領域」を以て、東京となす可きなり。

◉郵便は文明の機關なり。然れども郵便の領域は、必ずしも文明の分布を表現せず。郵便の配達は、嚴密に、地籍に據る。故に、東京と郊外との兩家、軒を並べて、而して郊外の家、文明の進みたりとも、郵便は、郊外を疎遇す。

◉新聞は、郵便よりも、猶ほ一層、確實に、文明の分布を表現す。然れども新聞よりも、新聞の號外は、尤も、正確に、文明の分布を表現す。東京といふ最高文明の尤も密集したる地帶を象徵するものは、則ち、號外ならずんばあらず。

◉東京研究に從事する者は、宜しく、此の際に於て、「號外屋の領土」を、確實に測定せん事を要す。其の結果は、東京の行政及び各種の研究者に、頗る趣味ある參考材料を提供せずんばあらず。

◉號外屋の眼中より見れば、東京の地圖は、稍、現狀を打破すべきものあらん。則ち、郊外にして、東京に編入す可きもの、東京にして郊外に移轉せしむ可きものと。

◉號外の分布に由つて、見たる東京の地圖は、購買力の東京を表現す。購買力には、智識慾と財力との二の要素あり。今、總じて之を指すに購買力を以てす。購買力の東京は、則ち、文明の東京ならずんばあらず。

◉號外に依つて見たる東京の文明圖は、其の効用、東京の人口統計と相待つて、發揮せらる可きものたり。而して人口調査は、實際に於て、必ずしも其の正確を保す可らざる事情あり。號外の地圖は、公々然、白日、十字街頭に調査せらる。隱匿の餘地あること無し。是を以て、號外地圖は、割合に、正確なるものを得ん事、難しと爲さず。

◉東京人は、「屋」の一字を以て、其の專門を表彰す。既に、「新聞屋」あり、今、『號外屋』あり。號外屋は、新聞配達夫とは、必ずしも一致せざるを以て、新聞の號外なれども、新聞屋の外に、號外屋あるなり。

◉官吏は專門なれども、官吏屋とは言はず。官僚に「屋」

無し。「屋」は民間を象徴す。則ち、「號外屋」は、文明の東京地圖を測定しつゝある民間の技師ならずんばあらず。

其九

●東京に、唯一の無線電報の新聞社あり、加島斌、これを經營しつゝあり。外國航路の吾が汽船に向つて、無線電信を發し、船中に於て、新聞を發行するものなり。今日、獨逸軍艦の海上に暴行するの危險あるの時、無線電信は、屢打電せらる可く、太平洋上、水天一碧の波上に、或は、號外の頻々として、發行せられ、萬里鵬程の旅客をして、緊張の眼を以て、水雲を注視せしめつゝあるならん乎。

●彼等、太平洋上の過客の接手する號外は、或は、東京の場末(バスエ)よりも速かなる時もあらん乎。凡そ、彼等は、東京と大海を隔てゝ在りとは雖も、其の大部分は、智識階級に屬し、新文明の最新交通機關を利用して、世界の最新報道に依つて東京と連絡しつゝあるを見れば、彼等は、身は海上に在りと雖も、また以て東京人たるを失はず。

●太平洋上、無線電信の號外を東京より接手しつゝある東京人は、東京の地籍の外に、東京を樹立しつゝあるものにして、また是れ、『文明の東京地圖』の離島に編入す可きものならずんはあらず。

●伊豆の大島は、行政區劃の上より、嘗て、東京府に屬せし事あり。然れども文明の大島は、東京に編入す可きに非ず。太平洋上、無線電信の號外を接手しつゝある汽船こそ、「文明の東京圖」に於ける『動きつゝある島』ならずんばあらざるなり。

●實を言へば、地上に於ける「東京の文明圖」も、時々、刻々に變遷しつゝあり。然れども地上を匍匐して進みつゝあるを以て、其の變遷、人目に著はれず。文明圖に於ける離島は、則ち、非常の速力を以て、東京の中心に、遠ざかり、或は近づきつゝあり。而して無線電信の號外の領海の外に脫出する時に於て、始めて「文明の東京圖」より抹殺せらるべし。

●「文明の地圖」に動きつゝある島ある事は、文明圖の趣味、豐富なる所以ならずんばあらず。而して尤も嚴密なる意味に於て、唯だ、號外を以て測定する場合に於てのみ、這般の感興多き、最も進步したる文明圖を作成するを得るなり。

其十

●今、暮色漸く近づく。房總の山、强烈なる色彩を以て、太く描き成せる油繪の線のように、水平線を劃り、

薄紫の雲烟、淡く、其の上に涌え出てゝ、薄く立ち騰りて、散りて消えて、天上に一雲無く、薄青の空に、秋の日暮の光、漂へり。頃刻の前、天際に滿ちたりし無數の白帆、冥茫の裏に沒し去り、遠帆、近帆、帆々、投げるが如く、吾が眼前の河口に向つて近づき歸り來る。吾が欄干に接して、白帆、山の如く、三隻、四隻、櫓聲、水聲、筆を奔らせつゝある吾が行の手に映ず。

●吾輩は、「東京の文明圖」に於ける離島は、啻に、海上のみならず、陸上にも存するの事實ある事を知る。吾輩、暫らく一例を擧げて之を言ふ。這般の例證は、各種の東京新聞にもある事なるべし。

●東京日々新聞は、信州に於ては、尤も勢力ある東京新聞の一なり。彼は、上田町に於ては、殊に、密集したる讀者を有するを以て、支局を置き、東京より電話を以て、時局に關し、號外を發行せしむ。

●此の如き町、此の如き號外、東京の附近に於て、必ずしも上田町に於ける東京日々新聞とばかりと限らず。凡そ、這般の情態に在る町は、これを以て、號外に依つて作成せらるゝ「文明の東京圖」に於ける離島の一たるを失はず。

●吾輩は、「文明の東京地圖」は、法律上の地籍に限定せられず。其の範圍及び其の伸縮も亦た、必ずしも地籍に準據せざるものなるを知る。此の如きは、今日、號外に依つて、發明されたる地圖にして、號外の未だ無かりし時の昔人の、嘗て夢想するを得ざりし、趣味深き新地圖ならずんばあらず。

●這般の議論を推廣して言へば、電信、電話の、理想的に發達し、新聞の競爭の、いよ／＼激甚、燦爛たる情態に達する時、東京の號外の領域、ます／＼進みて、大なる東京を現出するに至る可きなり。

其十一

●暮色、潮と共に到る。天地蒼茫として、水天、皆青し、遠く、一帆の白きと、近く、小舟の一漁夫を載せたると、書齋に於ける吾輩と六條山人とが、潮聲の中に點在されたるのみ。

●吾が國に於ける新聞の發達を論ずる者、江戸時代の瓦版の『讀賣』を以て、其の前身と爲すものゝ如し。『讀賣』は、新聞の先驅たるに相違無し。然れども今日に於て、嚴密に、之を論ずる時は、『讀賣』は新聞といふよりも、寧ろ、緩漫なる號外なりきといふを以て、妥當と爲さずんばあらず。

●『讀賣』は、或る特別、緊急の問題に限り、臨時に、

之を發行するを以て、其の發行の性質に於て、號外たり。發行の時、即ち、速かに、之を頒布するの手段に於ても、亦た相似たり。唯だ『讀賣』は、徐ろに立ちで、讀賣すれども、號外は則ち、僅かに標題を絶叫するのみなり。

◉『讀賣』は、節、面白く、歌ふに類し、悠長にして音樂的なるあり。號外は則ち『公開せる電報』ともいふべし。また以て、「讀賣」と號外とは、鎖國の舊日本と、世界的の新日本とを象徵するに足る。

◉抑も、號外の發生、及び其の發達は、また以て、最近の新日本の進展を徵す可きなり。日刊の新聞にて足らず、則ち、號外の必要を生ず。既に號外を生じたる今日の新聞に於ては、號外を出さゞる新聞は、新聞に非ず。而して新聞の新聞たる所以の、尤も、鋭敏なる神經作用は、則ち號外に由って表現せらるゝなり。

◉今日、時勢と號外との相應的發達の趨向に徵すれば將來、或は、號外ばかりの號外新聞の發生を見るに至らん乎。事、此に至らば、また新聞界に於ける、尤も進歩したる分業の一法たらずんばあらず。而して號外ばかりの號外新聞は、其の存立を失はざるのみならず普通の新聞と相對峙して、互に、其の利權を、相侵すこと無かるべし。

◉現在に於て、大新聞と雖も、號外に對する經濟上の負擔は、甚だ輕少ならず。若し。號外を分業とするに至らば、普通新聞の發達に於けるも、却つて裨補するあること少しとせざるべし。

◉號外新聞の組織は、今に於て、尙ほ理想に屬す。必ずしも其の詳細を縷說するを要せず。其の大綱に於ては、獨立の號外新聞社を建設するも可なり。譬へば、東京に於ける大新聞社が一のトラストを作りて、號外發行の專業に任ずるも亦た可なり。

◉號外新聞、創立の期ありとせば、其の時機は如何。世運と新聞との急速なる進歩は、實に、這般の大勢を促進しつゝあり。而して吾輩を以て見れば、吾が國の社會組織の上に、一大進展を見、一町一村、便宜の區劃に於て、『飯』を炊きて、各家に供給す可き分業制度の成立する時、或は、其の以前に在るやも知れず。

其十二

◉吾輩は、最近十年に於て、號外、其のものの興味ある發達を爲せるを見る。新聞は世變に依りて進む。而して世變は、一回毎に、號外の發達を促がす。十年來の世變の大なるもの、頻々として踵を接して來る。

◉今より十年前、ポーツマス談判の時、日比谷に國民大會の騷擾あり。此時、吾輩も亦た、此を經過して其の實情を目撃するを得たり、號外が群集の大渦中を飛ぶこと、秋田の螽の亂飛するにも似たり。而して此の時號外に、廣告を利用せしものを見ず。

◉此の如きは、事、突嗟に出てしに依る可けれども、號外の發達、未だ今日に比す可きものあらざりしなればなり。今日に於ては、號外の裏面、前面、ともに、かねて準備して廣告を印刷し、號外が、有力なる廣告機關の一となれるは、人、皆、怪まず。

◉號外は廣告を掲載するのみならず、また併せて本紙の新聞を廣告す。廣告眼より見れば、號外自から既に廣告たるの意義あり。

◉新聞の呼賣は、近時、東京に於ける、著るしき發達を爲せるものゝ一たらずんばあらず。其の組織と、普及と、月々に進展しつゝあり。而して其の服裝に於て最近、紅衣を著け、一目、以て容易に、其の存在を認めしむ。號外は、則ち鈴聲と鉢巻との外、未だ特徴の服裝を爲さず。吾輩は、宜しく絢爛たる一特色を擇びて、繁華場裡、速かに號外屋の存在を顯著ならしむべき一工夫ある可きを思ふ。

其十三

◉趣味の號外は、又た「趣味の人」を多忙ならしむべき條件の一たるを失はず。吾輩は、想ふ、世變、或は大事實を記念す可きは、號外に若くものあらず。號外は、其の事變に關し、讀者が、尤も神速に、且つ的切に、自から深く印象を得たる記念物たるのみならず、また兼ねて、最も簡易にして高尚なる材料たらずんばあらず。吾輩は、世上「趣味の人」感興殊に多き號外を保存し、之を綴り込みて、後日に傳ふるあらんには啻に、趣味の記念品たるのみならず。併せて、最近活社會史の好材料となす可き也。

◉號外には、號外の聯想を伴ふ。號外は、號外の背景を印象せしむ。號外には、世情の尤も活潑なる光景、紙上に深く浸蝕すること、恰も蓄音機のレコードに於けるが如くならずんばあらず。レコードに依つて、原音の還原せらるゝが如く、一たび舊るき號外を出して見れば、當時の背景、歴々として、一時、吾が心頭に湧き來るべし。啻に、號外の鈴聲の、吾が耳に、髣髴として聞ゆるのみにあらざるべし。

◉號外は、年時に、特徴を有するのみならず、新聞、また各、其の特色を有す。而して各新聞が號外を發行

する態度も亦た一々異なるあり。則ち、號外を、多年に渉りて、多く蒐集、保存して、一の綴込をなす時は時勢の變遷と、併せて各新聞の色彩とを見るに足る。

●號外の、將さに發行されんとするに先だち、新聞社の前を經過せば、號外屋の一隊、社前に群集し、或は立ち、或は踞坐して、まさに一大事實の發生す可き氣勢あり。而して印刷場に於ては、輪轉機の必死に回轉して、印刷したる小紙片を吹き出すこと、秋風の銀杏樹を揮ふが如し。此の如きは一大新事實の、まさに、世人の耳朶を打たんとする刹那の光景なり。山雨まさに來らんとして風、樓に滿ち、號外まさに飛ばんとして、號外屋、新聞社前に滿つるものなり。

●號外屋の急馳する、或は、新聞を名乘り、或は名乘らず。一口咄に、行客、何の號外ぞやと問ふ。號外屋答へていふ、「ナニつまらぬ號外です」、彼はツヽ馳せ拔けて、鈴聲凛々、叫びつゝ奔る。號外！號外！

●號外は、譬へば辻占の如し。豫め、其の内容を語る可らず。號外屋は、時、唯だ是れ金なり。行客に問答するの閑暇ある可らず。

●號外屋は一秒一金、號外は則ち一字千金なり。其の文章の概ね極めて簡單なるのみならず、其の原料は、外國電報にせよ、或は内國の特種にもせよ、實に、時に、莫大の費用を投ずることあり。唯だ一枚の刊行物にして、其の貴重、且つ神速なるに於て、一字千金の價値あるものは、尤も振へる一枚の號外の外に有る可らず。

●膠州灣の問題突發せし以來、吾輩、電車に乘るに、ポケットに、つねに一錢の二三枚を携ふ。時に夕刊を購ひ、時に號外を求む。事の急爲るに當りて、ガマ口を繙くの暇あること無し。號外時節。人は宜しく一錢貨を準備せずんばある可らず。

●此の頃、夕刊を呼び賣する者、「號外再錄の夕刊、々々」と呼ぶ。今に於て、號外の二字、如何に、人心を刺激し、挑發し、以て、戰局の氣分を醱酵せしめつつあるかを徵すべきなり。

●最近十年來に於て、「時局の氣分」を涵養するものは號外なり。憲政擁護も、政薩内閣の崩壞も、政變も戰局も、皆、これに依つて、人心を鼓舞作興しつゝあり。今日に於て、吾が國民の敵愾心を振作しつゝ、遙かに膠州灣攻擊軍の後援を爲しつゝあるものも、亦た號外の鈴聲ならずんばあらざるなり。

●吾輩も亦た號外に於て、自から一箇の追憶を有す。先年、公伊藤の晩年、公伊藤、伯大隈の二人を、法學

博士に推選す可きの議あり。此の時、吾輩は、所屬新聞社に於て、號外の發行を提議し、準備全く成るの時、議、中止に歸す。當時、若し、此の議をして成立せしめば、吾輩の號外は、また一の記念と爲るを得可かりしなり。

其十四

◉吾輩は、膠州灣占領の號外の鈴聲が、吾が東京、八百八街に響き渡るの時、吾輩は、如何なる情態の下にこれを接手すべきやを、今より想像しつゝあり。

◉回憶す、明治三十八年の正月二日、吾輩、浦和に越年し、東京に歸り來り、直ちに、本鄕座に、高田、河合一座の「不如歸」を觀る。新聞記者に扮したる佐藤歲三、技の進行中、突如として、舞臺の中央に立ち服部谷川といふ小男を率ゐ、帽を脫して、滿場に一禮し、『極めて痛快なる號外を、諸君に報告する光榮を有す』と一揖し、乃ち號外を捧げて、朗讀す。旅順口の陷落、及び包圍軍司令官大將乃木の電奏せるステッセルの開城條約なり。此の時、滿場の拍手歡呼、爆然堂を震撼し、吾輩も亦た感極りて、淚落つ。當時の光景、尙ほ眼中に在り。吾輩の一生、また忘るゝの時無かるべし。

◉此の時、服部谷川、次いて一步を進めて、敬屈し、留別の挨拶を演ぶ。彼は小男なれども豫備の步兵曹長なり。召集令に應じて、明日より滿洲に行かんとするなり。彼は、舞臺の勇氣を、戰場に、ロスキイの前に實現せしむべしと叫び、觀衆の喝采する儘、感慨に、油の乘り來りて、手を揮り、足を揚げ、挨拶は演說となり、演壇無き演說を、獨舞臺に、踴躍しつゝ爲せりなり。

◉膠州灣占領は、旅順口陷落以來の感興ある、豫定の大事實たらずんばあらず。其の實現の日、旅順口の號外は、吾輩に於て、紀念あること此の如し。知らず、膠州灣の號外は果して、如何ならん。吾輩は、吾が讀者が、各人各樣の感興を以て、膠州灣號外の接手の刹那を、今より、一步、一步に、期待しつゝあると思ふ。

◉此の稿を草し畢るの時、夜色蒼茫、數點星光、微に天に在り、唯だ櫓聲と水聲と、海氣冥々の裡より來るを聽くのみ。筆を措いて、欄干に倚り、空を仰いで見れば、偶、西北の天、流星一條、光芒、遠く、長く、地に向つて流る。

此の稿を草するの時、六條山人、吾輩の爲に、勉强して校正の勞を執れるを謝す。彼は、其の父、大和の志貴山に祈りて得たる子たりといふ。彼や、質實以て、將來、地方自治に貢献するあらは、縱令江湖に名を成さずとも、また以て、神慮に副ふものといふべし。

黑頭巾再記

人物評論（五十三）

中澤臨川論



△酒好き運動好きの中澤君

押川春浪

▲中澤臨川君は吾輩の最も親しき友人で、天狗倶樂部の事やら、日本運動倶樂部の事やら、樣々の深い關係もあるから、餘り賞め立てるのは多少憚るが、氏は全く非常に良く出來た人間である、珍らしいほど道理（わけ）の分つた人物である、その頭腦は造物主の特別製品と云つても宜からう。

▲中澤君が日本電氣界の一權威者で、同時に北歐文學、殊に露西亞文學の精通者である事は何人も知つて居るが、その以外總ての點に於て極めて趣味の深い、何事にも道理の分つた人であると云ふ事は、餘程長く交際つた人でなければ一寸氣付かぬだらうと思ふ。

▲一見すると氏は、極めて内氣な、温和一方の人物のやうにも思はれるが、なかなか以て左樣ではない、何處かに非常に强い精神と、燃えるやうな義氣とを有して居る快男子である、平生は平々凡々の風をして居るが、いざとなると隨分思ひ切つた事をする。氏は其外見の温和に似ず、徒らに物に恐れるとか、無益の遠慮をするとか云ふやうな事は決してない、是と信ずる事は何者にも憚らず、如何に自己の不利益になつても、ドンドン遂行する勇氣を持つて居る。

▲中澤君ほど複雜せる性格を有し、さまざまの矛盾せる思想を抱きつゝ其等の思想を巧みに調和させて、卓越せる人生觀を抱いて居る人は餘り多くはあるまいと思ふ。

▲中澤君は碁とか花合せとか、斯かる種類の坐つてグズグズやつて居る勝負事は大嫌ひであるが、角力、野球、庭球、柔道、端艇等、活氣ある運動競技に對しては多大の趣味を有して居る。現に各校出身運動健兒の集團なる天狗倶樂部の頭領株で、自己もバツトを打揮り、又は褌一本で土俵へ飛出す事も度々あるが、無論角力では必ず出ると負け、野球では頗る下手なる吾輩よりも、更に下手であるとの一般の評判である。玉突も少々はやるが、故國木田獨歩君の好敵手時代から、今日に至る迄で更に進境がないと云ふのだから、此點に向つては天才が無いのだらう。勿論氏は妙に氣取つた奴や、輕薄才子流の徒は見るのも可厭だと云ふ性質だから、その可厭な奴の兎角多い玉突屋などへは餘り行かぬやうだが——。

▲趣味の廣い中澤君は、此他に最も犬を愛し、又た自ら温室を造つて四季の花を咲かせて居る。花は何人も歡ぶ處であるが、氏が犬を愛する熱度は一寸尋常人の想像も及ばぬ程で、何時も氏の家には二三匹犬の居らぬ事はない、曾て數百金を投じて買求めたブルドツクが夜逃げをした時など、流石に物惜みをせぬ中澤君も、頭から蒸汽を立てゝ捜し廻つたなどは一種の悲哀なる滑稽である。

▲先年氏の家に一頭の猛犬が居つた、なかなか立派な牡犬で、恰度その頃吾輩の家にはポインター種の牝犬が居つたので、種を取る積りで中澤君の猛犬を數日間借りて來た、處が煩惱の犬その本能を發揮して、猛犬先生すでに職務を終つたが決して牝犬と別れやうとはしない、數回中澤君の家へ連れて歸つたが、如何なる鐵鎖でも斷ち切つて、數十町の道を飛ぶやうに吾輩の家へ舞戻つて來る、迚も仕末に行かぬので、その猛犬は到頭ズルズルベツタリに吾輩の家の牝犬のお婿さんになつて仕舞つたがその時中澤君嘆じて曰く、『犬の戀路も馬鹿に出來ない』と、甚しく悄氣て居た顏は今でも眼に見える樣である。

▲中澤君の酒好きである事は多くの人が知つて居る、又た氏が平氣で蕩者の類を無茶苦茶に揚げた過去を見て、如何にも氏を放縱主義の人物

のやうに誤解して居る人もあるが、決して左様ではない、氏は酒好きと云ふよりは、寧ろ酒から來る趣味を樂む人である若し酒仙と云ふものが現代に在りとすれば、大町桂月君や、和田垣博士や、中澤君などは其中に數ふべき人であらう。

▲中澤君は女性に對しても左程の厭味もない、如何にもアッサリして居る。新橋や柳橋第一流の美人面をして來た奴でも、少し生意氣な奴や、厭味のある奴は、一喝を喰はして追ひ歸す事なども度々ある。四疊半式は氏の性格には全然合しないやうだ。吾輩は隨分長く中澤君と交際して居るが、氏が一人で旗亭などへ行つた事は一度も知らぬ、行く時は必ず友人と同伴である、而して酒の趣味と、酒席に於ける友人間の趣味とを樂むので、美人が十人居つても二十人居つても、其樣な事には關せず焉で、醉ふとゴロリと横になつて其場に寢て仕舞ふ、寢たが最後、自分で起る迄は唯が起したつて起きる事ではない、やがてムックリ起上ると、俥を呼んでプイと歸つて仕舞ふ、その態度が如何にもスッキリして、豪傑的であるから面白い。

▲氏はまた如何に醉つて居つても、酒の上で相談した事を忘れるやうな事はない出來る事でも出來ない事でも、力の限り盡すと云ふ男らしい精神を有して居る。羽田に數萬坪の大運動場の出來たのも、酒間中澤君の一言が因を爲して居るのである。吾輩は近來酒を斷ち、中澤君も餘り多く飲まぬやうであるが、先年迄は二人とも浴びるやうにやつたものである。或日某所で盛んに抑つて居ると、座には早稻田出身の運動家なども數人居つて、いろ／＼快談の末吾輩が「東京にも學校の運動場以外に、公共の運動場を造つて一般人の體育も奬勵したいものだ」と云ふと、酒盃を持つて呑氣さうに笑つて居つた中澤君は、「ヨシ、僕に少し考があるから、改めて相談しやう」と云ふので、後日いろ／＼熟議の結果、當時中澤君は京濱電車會社の電氣課長をやつて居たので、羽田に六萬餘坪の會社の空地のある事を知つて居り、例の無口にも似ず、隨分雄辯であつた會社の重役等を悉く說伏せ、數年間に數萬金を投じて、遂に彼の廣大なる運動場を建設するやうになつたのである。

▲その頃中澤君の苦心と勞力とは一通でなかつたと思ふ。不幸にして羽田は其位置の餘り偏して居た爲と、其後中澤君は京濱電車會社を去つて仕舞つた爲に、此頃では東洋一と云はれた羽田大運動場も唯だガランとして居るばかりであるが、一時は早慶野球試合とか、對外人戰とか、全國各倶樂部の優勝戰とか、マラソン競走豫選大會とか、隨分日本の體育運動會を唸らすやうな競技も屢ば行はれたものである。多くの人は何も知らぬが、其爲め中澤君は如何に多く犧牲的精神を以て盡力し、自分のポッケットモネーもどれ程多く費したか分らぬ程である。日本の運動界は中澤君に對して大いに感謝する處があらねばならぬと思ふ。

▲中澤君は時々破天荒の豪遊をやる事もある。友人知己や部下の者を集めて、一夜に五六百金もフッ飛ばして平氣な顏をして居る事もある。一個月間に一萬圓だけ飲んでやらうと企て、首尾よく飲んで仕舞つた事もある。然し今では其樣な呑氣な事もせぬだらう。何か或る大事業を企て

て居るやうに思はれる。而して氏は他に知らせず、自分に餘裕のある時は、有爲の青年や友人等を助けて密かに喜んで居る事もある、隨つて中澤君は隨分金も儲けるが、その財布は空氣のみを以て滿されて居る場合が多いやうだ。

▲中澤君が僞善事業や意氣地のない人間を嫌ふ事は人一倍である、だから中澤君を金持と思つて、自分の口を糊する慈善事業の寄附を申込んだり、女々しい泣言を並べて金を借りに行つたりする軟骨漢は、必ず見事に撃退されて仕舞ふ。要するに中澤君は意氣の人であるから、意氣投合せざれば如何なるものに對しても容易に動かぬ性格を有して居る。

▲一種の天才ある中澤君に就いては、まだ述べたい事もいろ〳〵あるが先づ此邊で筆を止めて置いた方が宜からうと思ふ。

△僕の觀た中澤臨川氏

相馬御風

▲中澤臨川氏が今のわが評論界で、最も尊敬すべき學者の一人である事は、今更云ふまでもない事であらう。

▲僕が評論家として中澤臨川氏に向つて最も顯著に親しみを感じ初めたのは、明治四十一年四月に出版された『二十八人集』中の同氏の『ツルゲーネフの自然觀』と題する一篇に接してからである。丁度その頃僕はツルゲーネフの作品を耽讀して居て、ツルゲーネフに關して書かれたものと云へば、手あたり次第探し求めて讀むと云ふ風であつた。併し日本の人の書いたものでは、國木田獨歩氏が「早稻田文學」に寄せた一寸した感想の外には、たゞの一篇として僕の心を動かす程のものがなかつた。いづれも單なる記述的紹介か、さもなくば大ざつぱな抽象的な批評だけであつた。ところが中澤氏の『ツルゲーネフの自然觀』は、それらとは全く異つて「眞實の味はひ」から這入つて行つた感想であつた。しみ〳〵とした心持でツルゲーネフの作品そのものを味つた人でなければ、到底掴む事の出來ないものが攫んであつた。當時の僕には何より中澤氏の其の鑑賞の態度が嬉しかつた。而もそのやうに「味はひ」から入つて行く事に努めながら、中澤氏はその味ひのうちに攫んだサムシングを、更に今一度理智の眼を以て客觀する事を忽せにしなかつた。個人の生活内に流れて居るところのものを、文明全體の行程のうちに置いて吟味する事を忽がせにしなかつた。その當時の僕にはそれが更に一つの驚きであつた。

▲當時文壇を風靡して居た所謂自然主義思潮の無自覺にして淺薄な太鼓叩きの一人にしか過ぎなかつた僕、徒らに空虛な誇大な抽象論を繰つて顧みなかつた僕にとりて、當時の中澤氏の評論は「味はひ」の尊さを深く思はせてくれたばかりでなく、文明史的觀察の意味を考へさせてくれた。此の意味に於て評論家としての中澤臨川氏は、僕自身の鑑賞眼、批評眼を開いてくれた一人の恩人である。而して此の一事は僕自身常にひそかに同氏に對して深い感謝の念を捧げて居る次第である。

▲少なくとも僕一個にとりては、批評家としての中澤臨川氏の特色の最

もよく現れて居る評論は明治四十三四年頃の「早稻田文學」に掲載された「自然主義汎論」であると思ふ。生活鑑賞のデリカシーに於て、理解の範圍の廣さに於て、歷史的觀察の確實に於て、中澤氏の評論中此の一篇の右に出づるものはないと云つてよい。

▲自然主義思潮に關しては、明治四十年前後に於て幾多の評論がわが文壇に提供された。併しその多くは藝術觀上の考察、乃至個人生活觀上の主張なり考察なりに限られて居た、自然主義思潮を廣く近代の文明全體の上から、乃至廣く近代生活全體の上から、理解しようとした評論は、中澤氏の「自然主義汎論」を以て第一としなければならない。そこでは文藝、政治、宗敎、科學、哲學、凡そ近代文明の產物と稱すべきほどのものを悉く一つの大きな近代生活の流れのうちに集めて、之れを味はひ、之れを考へる事によつて、直に近代生活乃至近代思潮そのもの丶中樞に觸れようとした大膽な企てが企てられて居る。僕は中澤氏のその態度がうれしかつた。そして中澤氏のその態度に努めてならはうとした事も事實である。

▲かくの如くして僕は批評家としての中澤臨川氏の態度を、ひそかに讚美して來た一人であつた。たゞ併しそれは態度の人としての中澤氏に對する讚美であつて、その態度を裏づけて居る中澤氏自身の生活內容に對しては、僕はまだ眞に僕の中心生命を動かすべきものに觸れ得ないのである。何となれば前に述べた如き態度を以て近代文明を理解しようと努めて居る點では中澤氏は今の文壇に於て僕の最も尊敬する批評家であるけれども、その理解の程度に於て、又その理解の上に立つて更に何等かの新らしき生活を創造しようとする人としては、中澤氏は今の文壇に於てさまで顯著な効績を示して居ないからである。云ひかへればアプレエーターとしての中澤氏の態度は實に堂々たるものであるけれども、クリテイックとしての中澤氏の生命はさまでに鮮やかだと思はれぬからである。此の點では氏はブランデス氏に似て居る。テーヌに似て居る。つまり中澤氏も亦それらの大批評家と同じく窮極するところ一個の懷疑家である。

▲以上は主として二三年以前までの中澤氏によつて得た僕の印象であるが、最近の中澤氏——卽ちトルストイを論じ、ニイチエを論じ、ジエームスを論じ、ベルグソンを論ずるやうになつた最近の中澤氏については僕は一層明らかに懷疑家としての氏を觀るのである。わけても最近に於て公にした吉江孤雁氏を論じた一篇を讀むに及んで、氏の現實觀が著しく主觀的の色彩を帶びて來て、やゝともすると十九世紀の自然主義者等の陷つた一種の神秘主義にまで入つて行きはしないかと思はれるのである。ずつと以前に出た「トルストイ論」にすら既に〱そのやうな傾向がかなりに著しかつた。それと同時に嘗ては氏をして最も鮮やかな批評壇の人として居た文明批評家的色彩が、漸く氏の主觀的高調の蔭に消え去らうとする傾がある。

▲かう云ふ氏が最近の傾向に對しては、僕は——少なくとも一個人としての僕は、甚だしい不滿を感じないわけには行かぬのである。つひ近頃

公にされた死についての感想や、戰爭についての感想などに至ると、更に〳〵その感が深い。それは此の二三年ひどく氏の健康狀態が害はれて居ると云ふ、それに因るのかも知れない。健康の恢復と共に再び以前のやうな積極的な氏に接する事が出來るのかも知れない。併し少なくとも今のところ氏の鑑賞家としての態度も、批評家としての態度も、以前に比べて頗る退嬰的であり、個主觀的である事は事實である。

▲僕にはそれが物足らないのである。

△臨川プラス獨創

岩野泡鳴

中澤臨川氏はその文藝的言論に於て熱もあり、切實の風もある工學士である。然し熱あり、切實あることが必らずしも言論の獨創を證據立てるとはきまつてゐない。

たとへば、渠が曾てその友人——寧ろ渠が先輩として尊敬した——國木田獨歩の葬式に臨み、棺に向つて弔文を朗讀した時、痙攣の發作があつたかのやうに、ぶる〳〵とからだを顫はせ、僅かにその役目を果し得たのであつた。友人若しくは先輩の死に對した情は左こそありもしたらうが、さうあつたことが形の上に於て決して唯一の人情ではなかつただらう。この場合、渠の顫え、をののきは渠としては全體では無く、渠の狹い一部分の發表であると見えた。そしてかかる部分は、やがて渠の發想器盤となつて、渠の研究や思想を盛るのだらうと、その時僕に思はれた。

然し渠の切實とか熱烈とか見える點は、僕から見れば、まだ渠の發想器盤にしかなつてゐないやうだ。それと同化して盛られるべき肝心の情想または獨得な思想が、まだ、渠には、十分の醱酵をすませてゐないやうに見える。僕は渠の『トルストイ』を讀んだ時、渠に手紙を送つて、忠實には書いてあるのだらうが、渠自身の研究と云ふよりも、他人(外人)等の研究の綜合たるに過ぎないやうな感があるのを恨むと云つた。

次ぎに、僕は渠のニイチェ論に對して、簡單だが(本年一月の太陽に於て、)僕の意見を發表した。それは渠のトルストイ研究と同樣、なかなか骨を折つたものとは見受けられる。今の文學に從事してゐるもの並に今の文學研究者等の間に在つて、比較的によく理解とまとまりとのある文學研究を發表し得て、この一工學士に及ぶものは、恐らくあつても少なからう。けれども、そのトルストイ論に於て既に見えてゐた缺點は、このニイチェ論に於ても推察出來ないことは無い。乃ち、殆どすべてが外人の諸研究の紹介くさくッて、獨創の見に乏しいことだ。かの帝國大學出の文學士等の斷片的紹介や、金子筑水や島村抱月諸氏の、たッた一つばかりの書物を讀んで、それを二度にも三度にも轉表し、そして該博らしい議論家のやうに見せるのに比べては、そりやア無論、數等以上の忠實さが見えないでは無い。が、紹介は矢ッ張り紹介に過ぎないのである。

わが國では、まだ外國文學者や外國思想家等の研究に於て標準とすべき著書がないから、勢ひ外人等の研究書を賴りにするより外はないではないかと云ふものがあるかも知れない。然しなぜ外國文學または外國哲學を自分で直接に研究若しくは批判するものが出ないのだ？　トルストイやニイチエに限らず、その他に關しても、わが國にまだ標準的研究若しくは批評書がないから、僕は却つて早くその標的を拵らへて貰ひたいのである。中澤氏は――もッと奮發して呉れれば――この日本人としての標的を拵らへる人々の一人にきッとなれる。から思ふと、僕等が渠に對して一層遺憾に考へられるのは、――現今のやうに讀書に不精な、そして智識の狹い文界をばかり相手にして、その範圍で研究上の忠實と獨創とを混同せられてゐるのに、渠が滿足してゐるらしいことである。

　で、忌憚なく云へば、紹介なら紹介でいいから、出來るだけ澤山、外國の誰れそれに據れば斯うだ、なにがしに從へばああだと、はッきり引用して貰ひたい。さうすれば、またそれで、讀者等はその後の調査や研究の便利を得るから、納付もしよう。あの程度では、、然し、『ニイチエの哲學は心の貴族にのみ說かれた哲學である』云々と云ふやうなうまい云ひ振りなどがあつても、誰れか外人が云つた言草だと思へば、直ぐその場であの長論文の權威が半分以上失はれてしまうものだ。で、僕等は、渠に對して望みを屬してゐるだけに、今一層渠の奮發を必求し、かの厨川白村氏のやうな殆ど無定見の紹介者や機械的咀嚼者で終らずに、日本人としての定見ある外人評家並に外國文明批判者になつて貰ひたい。時代が、もう、そこへ逆してゐる。と註意した。

　それから熱烈に傾いた器盤を持つてるものにあり勝ちで、而も餘ほどそれを身づからでも注意してゐなければならぬことは、――他でもない――感情におほはれて、あり振れた理論にも矛盾を來たすことだ。これも僕が既に渠の爲めに一度（時事新報に於て）云つたことだが、――渠は『批評の批評ほど無意味な事業はない』と、公けに云つたことがある。これがちよッと僕の氣にかかつた。あれだけ一方には頭腦の明晰な人でありながら、こんな分らないことを云ふのは、どうしたことだらうと僕には疑はれた。一つの批評が出て、それを受けた者がまた答へとして反駁をする。また、本人が反駁しないでも、他人がこの反駁と同樣に當る理論若しくは確信を述べる。これがいやな手段の爲めでは無く、各自評論家の立ち場を發揮する所以であつたら、決して無意味なことではない。渠はこれを『嫌ふ』とも附言したが、嫌ひと無意味とは問題が別であらう。つまり、渠がそんなことを筆に口走らせたのには、その時、何か不純な感情が渠を盪らせてゐたのだと見なければならぬ。

　渠が吉江孤雁氏の得意な方面を殆ど最上級の語法で推賞若しくは紹介したのにも、ただ同郷、同志と云ふやうな根據から、前項で僕が指摘したやうな感情的分子が少なからず這入つてゐるやうだ。で、あれを本統に讀まうとするには、相馬御風氏の小川未明論に於ける如く、餘ほどの割り引きをしてかからないではゐられまいと思ふ。

以上の意味が今の中澤臨川氏にプラスになれば、きッとわが國に獨創ある外國研究家が一名ふえる、否、寧ろ出來るわけであらう。

△中澤臨川氏

吉井勇

私が中澤臨川氏の名を知つたのは、『髮華集』の著者としてが始めてである。今からもう十數年も前になるであらう。國木田獨歩氏の『武藏野』などを耽讀したのと同じ時分のやうに記憶する。その時分私はまだ十七八の少年で、この書物はずゐぶん愛讀んだものだつた。『忘れえぬ人々』を讀んで感動した私は『見ぬ戀盲目の戀』を讀んで同じやうに感動した。『髮華集』は二百頁足らずの小册子ではあつたけれども、その時分の私の渴いた心を、どの位癒して吳れたか知れなかつた。ポオル・エ・ヴヰルジニヰの美しい物語の梗概なども、その中に語られてゐたことを覺えてゐる。

それから六七年の時は過ぎた。その間私は中澤臨川氏の名を殆んど見ることが出來なかつた。私は時々『髮華集』を取り出して、少年の時分を懷しむばかりで、長くその力强い含蓄のある文字に接することが出來なかつたのである。しかしそれから間もなく、小山内薫氏の編輯に成つた『新思潮』の誌上に、氏の飜譯されたブランデスの『露西亞印象記』が連載され始めた。不幸にして『新思潮』は數號にして廢刊されたけれども、私はたとへ斷篇なりとも、氏の筆に接することが出來たのを喜ばずにはゐられなかつた。

私が始めて氏と相見るの機會を得たのは、今から四五年前のことであるけれども、何時何處で如何して會つたと云ふことが、今全く記憶に殘つてゐないのを悲しむ。或は縱談橫議の席であつたらうか。或は紅燈綠酒の間であつたらうか。過去のことは茫として知る可らず、漫に時の逝くの早きを歎ぜしめる。それから僅か數年を經過したばかりであるのに文壇の變りやうはずゐぶん激しく、この間に於ける氏の努力もかなり目覺ましいものであつた。さうしてその第一の收穫は一册の、『トルストイ』となつて世に現はれたのである。

それから後のことは、未だ讀者の目に新しきことであるから、別段私の言葉を要しないであらう。『トルストイ』より『ニイチエ』へ、『ニイチエ』より『ベルグソン』へ、氏の研究は次第に新人の上に移つて往つた。氏はもう單に『狂熱する工學士』ではなかつた。日本文壇の評論家として、無くてならぬ人であつた。

閑話休題、私はこんなことばかり叙べるのが目的ではない、それでは一體何を書いたら好いであらうか。私は氏に就て評論を試みることはとても出來ない。私は唯氏に對して感想を語ることにしよう。

氏は眞摯なる學者にして、且熱烈なる詩人である。それは『髮華集』を讀んでも、『トルストイ』を讀んでも、直ぐに分る。『髮華集』を小曲とすれば、『トルストイ』は一大叙事詩である。よしそれが梗概若くは紹介

であつても、讀者は直ちに媒介者自身の高まりたる感情に打つ突かることが出來るであらう。『ポオル・エ・ギルジニ牛』でも『アンナ・カレニナ』でも、傳へらるゝ時は既に氏自身の靈魂の中を通つて來たものである。讀者よ。誤解する勿れ。それは氏の創造が加へらるると云ふことではない。媒介者の心が原作者の心と融け合ふ爲に、最も眞實に最も熱烈に傳へらるゝと云ふことを意味するのである。

私は氏に接してからもう數年になるけれども、氏の高邁なる人格は容易に慣れることが出來ないやうな氣がする。心持體を前屈にして、叮嚀にして慇懃な言葉で話し懸けられる時、私は一種の敬意（それは少し道德的ではあるが）を呼び起されたのである。私はかなり汎交である故、多くの人を知つてゐるけれども、氏の外にかう云ふ心持を強ひられる者は一人もない。

しかし氏にして一度杯を手にしたならば、私はこゝに又異なつた氏の姿を見出さなければならぬ。氏は最初は靜かに滿を引いてゐるけれども、稍耳熱し興熱して來る頃になると、そこに忽ち『狂熱せる』氏の姿を見ることが出來る。さうして多くの人はかう云ふ時には罵倒を試みるものであるけれども、氏は寧ろ讚美を試みる時の方が多い。國木田獨歩氏、島崎藤村氏、田山花袋氏、正宗白鳥氏——常にかう云ふ時に讚美されるのはかう云ふ人々である。その中でも國木田獨歩氏のことは屢その口に上る。かくて氏は直ぐに醉つてしまつて杯を傾けて酒を零し、やがて横になつたかと思ふと、もう既に黒甜郷裡の人なのである。或る社會の者は氏のことを『神様』と云つてゐる。それは、氏が直ぐに醉ひ、直ぐに眠つてしまふからであらうが、氏の人格に對してさう云ふ社會の者も、又敬意を持つてゐるのである。

田山花袋氏は氏が北原白秋氏の短歌を罵つたり、山田檢御氏の批評に憤つたりするのを見て、『狂熱せる工學士』の面目がよく現はれてゐると云はれたが、單にかう云つてしまふのは私には不滿である。斯の如きことは氏の極めて僅かな一面である。これを以て氏の面目がよく現はれてゐると云ふのは、稍輕率な言葉であると云はねばならぬ。

氏は最早『狂熱せる工學士』ではない。今は『眞摯なる文壇の指導者』である。否、『聰明なる社會の先驅者』である。

私は猶語るべき多くのことを持つてゐるが、あまり長くなるからこれで止めやう。妄言多罪。

△今后の人

正宗白鳥

トルストイ論にしてもニーチェ論にしても、中澤氏は彼等の作品を熟讀した上で筆を執つてゐるから、あやふやな所がない。しかも社會問題や文藝に關する評論家としての氏の伎倆を今批評するのは早過ぎるやうに思ふ。氏が多年蓄へてゐる學識も鑑賞も今後續々現はれるのだらうから

私はそれを待つてゐる。

△中澤臨川君

吉江孤雁

◎中澤君は熱愛と感激と靜思とに生きてゐる人である。そしてその熱愛と感激と靜思とを表白し實現する力を十分備えてゐる人である。熱愛とは最も深い友情を意味する。總てのものを通じて流れてゐる最も根本的な強い生きた情緒は友情である。他の樣々な名前をとつて、人間なり自然なりの深い關係を表はすに用ひられてゐる情緒は、要するに友情の別名に過ぎない。今こゝでいふ友情とは廣い意味に於てゞあることは勿論である。その友情の中で一つの生が他の生と接觸して發する火花が感激である。その感激を自己にまとめる姿が靜思である。靜かに自分の世界として眺めることとである。中澤君はそれを明かにしてゐる人である。

◎この友情といふことを國木田氏の常用した言葉で言ひ換えれば「深酷なる同情」である中澤君の人生に對し藝術に對しての態度は飽までもこの深酷なる同感から出てゐると思ふ。燒き付くやうな熱愛と、その熱愛の中に包んだものに對して烈しい感激を交はしつゝ、その間にそれに對して遺漏なき觀察と洞察とを怠らないのである。愛するが故に克く知り、知るが故に一層克く愛するのである。中澤君の以前にはよく熱罵があつた。併し中澤君の罵倒には決して冷笑はない、嘲笑はない。彼は涙を浮べて人を熱罵した。恐らくそれを眞正面に受けた者て、その燒き付く力を身に感じない者が何人があつたであらう。彼に深く愛せずしてはものが言へないのである。

◎中學時代にはよく中澤君からゲーテの話を聽いたものであつた。やがてユーゴーを、そしてトルストイを。殊にトルストイの「復活」などは中澤君の大學の學生時代に愛讀した一つであつた。メエテルリンクに讀み耽つた時もあつた。ダヴィンチを愛讀した時もあつた。ベルクソンを、ニイチエを、實際中澤君の讀書は隨分廣い。然かもそれが一つを飽まで極めて他へ移るやうにしてゐるので、決して卒讀や濫讀ではない。忙しい間の汎讀のやうに何人かゞいつたやうに覺えてゐるが、それは中澤君を少しも知らない人の言葉である。彼はいやしくも事をする人ではない。早卒に書を讀む人ではない。それは中澤君の文章を見ても判る。彼の文章には一字一句、句點の末までも彼の慄える感激の通つてゐないものはないではないか。綿密な用意の行き亙つてゐないものはないではないか。

◎實際中澤君の書くものは感激の充ちた、感興の溢れた文章である。恐らく書くに當つて、時とすると彼は如何にその感激を抑えんか、如何にその感興をしづめんかに苦心してゐることもあらう。彼の文の陰には彼の慄える呼吸の響きがある。たぎり落つるやうな感激の勢を彼はしづめつゝゆつくり徐かに筆をすゝめてゐる。この感興とそれを抑ゆる力、そ

こに彼の尊い情緒の豐けさと、强い意思と、明晰な思考力とが表はれてゐる。冷淡な批判や解剖や、ものを遠くに置いて、彼方からも此方からも眺めやつて、フオルト、フアインデインクの眼をして、そのもの丶周圍を繞つてゐるやうな間接的な對稱的な比較的な態度やは彼には求められない。彼は自分の定めた目標に近づき、それを抱き、それと交はり、それを愛せずにはゐられない。

◎併し彼には明晰な批判力と、嚴正な撰擇性とがある。彼は盲働的に愛しはしない。彼は自己を尊重する如く、他を尊重する。物をして處を得せしめ、安住せしめる。謙遜な心と、確かなる實行とが常に伴つてゐる。盲動は彼の最も嫌ふところであり、また事實彼の行動には毫も盲動がない。極めて明晰である、活達である。即ち飽まで男らしい。この男らしい愛情が彼の文章の氣品であり、姿であり、味ひである。

◎獨歩氏はより多くとゞまつて考へ、一點に光を集めて照らさうとする。中澤君はより廣く抱き、自在に燒えようとする。共に人生を深く愛する點は同一である。獨歩氏の皮肉と中澤君の熱烈と、その中には涙の溢ひが籠つてゐる。愛の光が包んでゐる。飽まで眞實の姿を極めようとするリアリスチイツクな要求と、その姿を包むアイデイアリスチイツクな潜在力との間から彼等兩者の本性の閃めきが窺はれる。皮肉がユウモアとなり、熱烈が愛宥となる。たゞ前者が比較的集注性に富むが故により多く所謂詩人的氣質を持つようになり、後者が發現性に富んでゐるが故により多く人生に對するレポリウシヨニストの傾向を帶ぶるに到るのである。

◎獨歩氏は屢々「中澤君の見識」と言つた。實際中澤君は他の文藝家等と共通の境地を有する以外に、特殊なフイールドをもつてゐる。それだけ中澤君の見地は廣い。中澤君のこれまで發表せられた評論によつてのみ中澤君を考へてゐる人々でもこの獨歩氏の所謂「中澤君の見識」なる言葉の意味が十分理解せられてゐることであらう。併しレボリウシヨニストの傾向といふ言葉に對しては、多少怪訝な眼を向けられる人があるかもしれない。併しそれは中澤君の周密なる用意と、つゝまやかさとがする仕業である。若し中澤君が一層自由に、日常眼前の事象に對して忌憚なき意見を吐露せられる時があつたとすれば、その時はこの言葉に對して一層多く同感せられる人があるに違ひないと信じてゐる。

◎評論の創造力、それを私は望んでゐる。論者が抱く創造の天地の中で、幾多の事象が、人物が生き動いてゐることである。ブランデスの博大はアツプレシエシヨンといふけれど、それは要するにブランデスの創造する天地の中で幾多の人間が生きて動いてゐることに過ぎない。解剖分拆を事とする惡魔のメスのやうな論評ではなく、その論評の呼吸を感じて人物事象の生動することを要求する。所謂描寫の筆をかりないでも、劇の形式を用ひないでも、論者の抱く世界の中で人が生きて行けない理由もない。姿を現はして來ない筈もない。所謂韻律を用ひないでも論者の生命の詩が人に傳はらない譯もない。エマアソンの論文が一種のポエトリイであるといつても一向差しつかへがないと私は信じてゐる。メエテ

ルリンクの論文でもさうである。中澤君の書かれるものが所謂劇でないからといつて、所謂詩歌でないからといつて、世の人の知つてゐないやうな人間を取材にしないからといつて、そしてそれを描寫しないからといつて、その人を單に所謂評論家であるとして片付けてしまひたくはない。藝術家がその創作の材料を何人にも聞こえてゐるやうな大きな思想家に探つてはならない筈もない。寧ろさういふ人物を自己の創造する天地の中で生かし得る人こそ眞の藝術家と言はるべきではあるまいか。人の所說を批評するのに、その所說の缺點を見出すことは必ずしも、その人以上の優れた思想を抱かずとても出來ることである。いや批評者その人に如何なる定見がなくとも出來ないとは限らない。それよりもその缺點を見出すと同時に、その人に他と異ふ特色を見出して、その點でその人を生し得る批評家こそ、生し得て、而してその人を成長せしめ得る批評家こそは、眞の生きた力を持つた批評家ではあるまいか。其場合の感激とは、即ち發見の悦びである。發見と同時にそれを生長せしむべき力を與え得る即ち創造の悦びである。この發見と創造のなき創作家は、この發見と創造の悦びなき批評家はあまり今日では要求したくない。それを要求した時代はもう過ぎてゐる。――この意味で私は中澤君を眞の意味の藝術家であるといひたい。

◎恐らく國木田氏の作物に最も早く共鳴を感じたその一人は、中澤君であらう。國木田氏の作物が何人にも推稱せられない以前にはやくそれを認めたのは中澤君であらう。松岡國男氏の詩についてもさうである。また恐らく田山氏に對する幾多の批評のある中で、その批評の底を貫いて、最も確かに田山氏その人の藝術家としての姿を摑んでゐる人の一人は中澤君であらう。私は中澤君の具體的な「田山花袋論」を早く要求したいと思つてゐる。最もよき理解と、最もよき批評と、田山氏その人にとつて最も親しき知已の聲とが聞かれるに相異ない。

◎私の知つてゐる範圍では中澤君は最も勤勉な人の一人である、倦む事を知らない勤勉家である。人生に於ける努力の價値を十分理解してゐる人である。隨分無理だと思はれるほどに勤勉せられる場合もあらう。常に新しい感じを抱き。常に新しい問題を考へ得る人は學者としても生動してゐる人である。その感じが人に暗示を與え、その問題が人に何者かを告知するならば、その人の努力は實際尊い努力である。價値ある努力である。常にこの意味の努力を說かれ、そしてそれを實現してゐる中澤君に對して、私はいつも尊敬を拂はしめられる。

◎負け嫌ひな山國人の氣質は、中澤君に認めることが出來る。廣く鑑賞し深く蓄積する氣風もまたそれである。信州の氣候風土は南北で餘程の相異がある。中澤君の生地の伊那は地勢が南に向つてゐて竹の多く生える。山にも野生の棕梠のある、そして雲の白い南信濃である。天龍川が諸々の水を集めて南へ流れ、駒ヶ岳が北西の木曾の境界に聳えて、麓には廣い高原を敷いてゐる。信濃としては餘程暖かい明るい爽かなテーブル、ランドである。中澤君の明るい堅實な氣質を思ふ時に、私はこの空氣の鮮かな山國の高原地を聯想せずには居られない。若し山國の高原地

に他と異つた多少でも特色があるとすれば、その好き方面のテンペラメントは中澤君の素質の中に求られるであらう。

△見て居た丈けで心持よい人

田山花袋

◎中澤君と初めて會つたのは龍土會でゞした。最も其以前よく國木田君から噂は聞いてゐました。「中澤と云ふ男は實に面白い男だ、是非逢つて見給へ」から云つてよく國木田君は勸めたものです。

◎中澤君は只にこ〳〵笑つてゐました。別に議論も吐かず、又勿論先生の得意と云はれる「馬鹿野郎!」などをも出さず、大人しくにこ〳〵笑つて靜かに人の話に聞き入るといふ風でした。會が濟んで、外に出てから柳田君に向つて私は「中澤と云ふ人は只見てゐた丈けで感じのよい人だ」と云つた事を今でも覺えて居る。

◎先生が醉ふとよく「馬鹿野郎!」を連發すると云ふ事は有名なものだが、アレは多分少數の人との宴席に於て大醉した時にやる丈けでせう龍土會に於ても、又我々が一所に飲んだ時などには、そんな風が餘り見えませんでした。何にしろ極めて謙遜な、善良な、友情に富んだ、當世には珍らしい人物と思ふ。

◎先生にはなか〳〵悧巧な點も勿論あるでせう。然し「一點の卑しい所の無い人」と云ふ事が私の氏に對する總評である。

◎中澤君の評論は今の文壇に於ける極めて意味多きものゝ一たることは固より云ふ迄も無い。作家や作物を研究するに當つては、先づ一つのものに熱中して、それを極め盡し、味ひ盡してから他のものに移つて、又其移つたものに熱中すると云ふ風だから、只上つ面丈けで評論して了ふと云ふ事はない。其代り熱中の餘り、其作者や作物のよい方面のみが見えると云ふ事もないではないが、あの位熱もあり力もある評論をやる人は先づ外にはあるまい。

◎中澤君の昔の評論には、只其作者なり作物なりを其儘に紹介したと云ふ風のものが、多かつたが此頃では餘程先生の主觀が加はつて來て、作者及作物と中澤君との間に心の共鳴を感ずると云ふ風のものが多い。之は先生の爲めに歡ぶべきものと思ふ。只慾をよくいへば最う少し實際の事實と考へ合はして細かい所まで深く入つて行くやうになつたら更らによからうと思ふ。然し之は先生が追々に行き着くべき道で、先生の今後の發展は餘程目覺ましきものがあるだらうと信ずる(十八日談)

△私の知つて居る中澤

中村秋三郎

◎私が初めて中澤を知つたのは仙臺の高等學校に於てゞある。當時中

澤は工科、私は理科で、共に二部に居り、そして恰度僕の机の前に中澤の席があつた。僕は其頃よく何か西洋の本を讀んで居つたが、中澤は餘程熱心に藤村の詩集を愛讀してゐた。殆んど暗誦する程であつた。之について今から大變面白いと思ふのは、當時は藤村氏との間に大變の距離を置いて到底近くべからざる人と考へて居つたらしい中澤が、其後非常に藤村氏と懇意になつたさうである。

◎高等學校時代の中澤は今とは丸で違つた人であつた。雜誌『日本人』の愛讀者で、飽くまで燕趙悲歌の士、忠君愛國の信徒であつた様だ。無論西洋文學には多くの趣味が無かつたやうに思はる〻。私は別に文學趣味があつたと云ふ譯ではないが、其頃少し許りゲーテの「ウエルテルス、ライデン」とか、トルストイの「アンナ・カレニナ」とかなどを讀んで居つた。又基督教に趣味を持つて内村鑑三氏の「聖書の研究」などを愛讀して居つた。處が不思議にも私と鹽澤――（其頃中澤は鹽澤と云つて居つた。中澤と云ふのは其後先生が養子になつてからの姓で、つまり實家の苗字である）――とは非常に意氣投合して、烟草を貰ひ合つたり何彼(なにか)と打明け話をしたりする仲となつた。いはゞ吉利支丹バテレンと高天原との如く趣味は違つて居つたのであるが、非常に仲が善くなつた。

◎それから中澤もポツ〱西洋文學を讀み出すやうになつたが、先生は殊に熱心に耽讀するものだから高等學校の一年の末頃になると、私等は却て中澤の方から物を聞くやうになつた。然し中澤が殊に文藝の方に入つて來るやうになつた機縁ヶ作つたものは恐らくユーゴーの力であらうと思はれる。中澤のユーゴーを愛讀した事は非常なもので「ミゼラブル」の如きはあの厚い本を三回も四回も反讀したものだ。初めの時などは知らない字には一々假名を附けて讀んだ。何でも本が悉皆毀れて二三度新らしく買つたやうに覺えて居る。中澤の書いたものには大抵社會的感激（？）――と云ふよりは平等主義。それより一層適切に云へば眞實、友愛平等の思想が深く浸み込んで居るのは、恐らくユーゴーの如きヒユーマニストのアートの影響感化を蒙つて居ることが少くなからうと思ふ。

◎中澤のユーゴー熱は其後久しく續いて、ユーゴーの書いたものは大抵讀破したやうである。大學に來てからは自分の感心した短篇や章節をよく譯して居つたものだ。確か「九十三年」の中の「セダンの回顧」などは非常によく譯してあつた。又牢屋の中で男と女とが戀愛に陷る話などは僕等は數回聞かされたものだ。

◎ユーゴーの次ぎに中澤の愛讀したものはトルストイで、大學に來てから、益々文藝の方面に深入りし、一般の西洋文學、殊に露西亞文學について深甚なる研究を初めたのは矢張りトルストイからだらうと思ふ。中澤が露西亞文學を好む第一の理由は、勿論露西亞人の赤裸々て眞面目で、熱情に富んだやうな所が、中澤の性格と似通つて居る爲めもあらうが、一つは又現今の家庭制度に對するイヤナ思想に對する反抗などもあるやうに考へらるゝ。

◎露西亞文學殊にトルストイ ツルゲネーフ等により人生の赤裸々な、眞摯な、活きて居る人生を知りはじめた彼は、ユーゴーから根本的に得

たものがあると同時に今更の様にあのクラシックな、一寸用の足さない文學と少く共だん／＼遠からざるを得なくなつた、丁度此時彼れは一方メーテルリンを讀みはじめた、之れが彼れの思想にシステムをつけ哲學的趣味を與へたものであつた、彼れが今日評論壇上にあるの大體の經過は大體コンナモノだと思ふて居る。

◎中澤が非常に酒を飲んだり、藝者買をやつたりするやうになつたのは、大學を卒業してからの事で、之には前に云つた家庭問題の不平もあつたらうが、先づ、地位も出來たし、金の融通も出來ると云ふやうな事から始まつたらしい。然しイクラ酒を飲んでも、藝者を買つても、中澤は多くの道樂者などとは違つて決してデレデレするやうな事がない。心は何處までも眞面目で、しつかりして居る。然しこんな事は僕には何の用もなく又た彼れから云ふも些の意味があるものでない。

◎中澤の友情に篤い事は驚くばかりで、吉江孤雁君などは中學時代からの親友で、其交情の密なることは今の世に珍らしい。又學生時代にもよく孤雁君の事を言ひ出しては感慨に耽つて居つたものである。

◎大學時代までの中澤は實に神妙な學生で、前に云つたユーゴーやトルストイの外にメーテルリンクやツルゲーネフ、其他一通りのものなどは非常に讀んだものである。

◎友人としては餘り中澤の事を褒めるのも如何と思ふから差控へようと思ふが、中澤の如く眞面目な、友情に富んだ、人格の高い人物は先づ當世に珍らしいと思ふ。又文藝上に於ても今まではいはゞ片手間仕事の觀があつたが、大いに乘り出すのは今後にある。要するに彼は今人生の第一歩に入つた許りである、其努力、面目、成果等凡て之れからである、だから、所謂「之れからの人」を御同様過去の事で彼此批評するのは、よくない事であると思ふ、先づこんな話で御免を蒙りませう。御取捨はよろしく願ひます。

好評如湧 十月號 十一月一日發行 二大雜誌

雄辯

秋季特別倍號
紙數六百餘頁口繪豐富
定價六拾錢 郵稅四錢
本郷駒込坂下町四八
大日本雄辯會發行
口座東京三九三〇

▲男子に愛好せらるゝ女▲男子に嫌惡せらるゝ女▲現代婦人問題の論評

女

少壯青年數十名執筆

●乃木大將夫妻埋血の地……有馬祐政
●乃木大將と雄辯……服部鈍雄
●乃木大將と傭賃……大川白雨
●戰外とは(戲曲)……平木白星
●キール通信……寺田四郎
●名士の雄辯……永川俊美
●上院の雄辯……西野生
●米國の政爭……鶴見祐輔
●英國の内閣……住默鳴

男

名流婦人の男性觀

●風雲乘ず……松波博士
●獨墺敗れんか……南木摩天樓
●帝國の獨立を期せよ……谷本博士
●獨逸と獨帝……鵜崎鷺城
●對歐雜感……吉野作造
●青年の木鐸……村井知至
●武裝の豫言……尺秀三郎
●西郷南洲……黑頭巾
●人格と哲學……中澤臨川

●義經の人格……中村孝也
●下腹物語……岡柳
●永井柳太郎論……大觀
●帝大法科の神樣……莫哀
●秋風(和歌百首)●野分(和歌)……
●大島の人情自然……稲永晩歌
●如是我聞……銀雨
●辯論部月旦●演説會記事●青年の代表的演説數篇●青年雄辯集

●現代名士處生訓名士五十餘名
●秋草(感想)……中村孝也
●三縁山(史傳)……笹川臨風
●好運の武士(歴史小説)……仰天子
●忠孝兩全(史實小説)……奴の助
●隱れたる誠忠誠義……安藝愛山
●彼女の運命……松崎天民
●三賢甌後日譚……古川青堂
●楠氏(史傳)……田中畑亭
●陸奥宗光……望月紫翠
●それ球(小説)……中村星湖
●秋の都(翻譯)……敬天學人
●壓力(對話)……磯萍水
●田沼間守の死……古井勇

講談倶樂部

第四卷第拾貳號 定價廿五錢 郵稅二錢半
本郷駒込坂下町 口座六六二九
講談社

●八百比丘尼妙椿(新講談)稻岡奴の助●女俠梵字お萬(新講談)大河内翠山●和田平と度々平(落葉)

四百圓特別大懸賞募集

■女髮結の仇討(講談)洞殿司■朝霧の鍔(講談)松林圓照■藤井右門(講談)玉龍齋貞陵■遺恨(活動寫眞)倶井生■丁字風呂(落語)●民諸物語…諸の人●藥罐の七兵衞●橫八の最後●武士の情●九星運氣●奥田行高●武林唯七●收獲漫畫●演藝評判記(東京大阪名古屋)六名執筆●勝田新左衞門(浪花節)東家小樂燕●落日紅(少女小說)冬湖學人●金色姫物語(傳說)小澤愛圀●天晴才次・武田御天子●戀の光秀・夢想兵衞

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

●日本のレクラム●博士學士百餘名擔當執筆●毎月十篇内外逐次刊行する

(中付二の四)

アカギ叢書

定價 均一 各冊 金拾錢

ポケット形百頁 一頁字數約四百

郵税各冊金二錢 朝鮮臺灣樺太同

發兌 東京市麴町區三番町五十番地 赤城正藏

電話番町二二八〇 振替一〇四三三

■世界學術の淵叢■

持色

一 紳士の當然知り居るべき程度たる事を標準として取材解説せり。

二 廉價簡明平易に解説し天下に説讀み難き物無からしむ

三 古今東西の名著の紹介は簡にして其精髓を失はず。

既刊目錄御入用の御方は往復端書にて御申込を乞ふ

紳士の標準智識

■最近分發表■

- (38) ショウ作 武器と人(チョコレート兵隊) 島田青峯篇
- (39) イブセン作 鴨 村上靜人篇
- (40) 神話と傳説 小林愛雄篇
- (41) ズーデルマン作 マグダ 葛西文學士篇
- (42) ドストイエフスキー作 虐げられし人々(上) 加藤朝鳥篇
- (43) ツルゲーネフ作 初戀 栗原古城篇
- (44) 西洋演劇史 小林文學士著
- (45) フロオベル作 サラムボー 畑文學士篇
- (46) 日本淨瑠璃史 小山文學士著
- (47) モーパッサン作 ピエルとジヤン 半田文學士篇
- (48) ダヌンチオ作 死の勝利 日野月文學士篇
- (49) シエンキウイツチ作 何處へ行く 桑山文學士篇
- (51) ドオデエ作 サフオ 黒田文學士篇
- (53) ハウプトマン作 日之出前 山本有三篇
- (55) ゲーテ作 ヘルマンとドロテア 佐々木文學士篇
- (54) ホフマンスタール エレクトラ 村上靜人篇
- (56) イブセン作 幽靈 香西敏篇
- (57) ゾラ作 女優ナヽ 村上靜人篇
- (58) ヘツベル作 マリア・マグダレエヌ 黒田文學士篇
- (59) ウオーレン夫人職業 島田青峯篇
- (60) フロオベル作 マダム、ボバリー 村上靜人篇
- (61) 新文明の源流 魚澄總五郎著
- (62) 日本の彫刻 佐々木文學士著
- (63) シーザー傳 齋藤文學士篇
- (64) 幻の海(附イエーツ評傳) 栗原古城篇
- (65) ズーダーマン作 名譽 山本有三篇
- (66) 近世社會運動 佐藤正篇
- (67) 源氏物語(上) 小山文學士篇
- (70) 春の目醒 筑紫文學士篇
- (72) バルカンの風雲 時野谷文學士篇
- (73) 飛行機講話 倉富砂邱篇
- (75) 最近の歐洲 葛西文學士篇

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

評論

文藝時評　中澤臨川

畫の期節來る

秋が來て、また美術の期節が近づいた。

上野公園のとある廣い一棟の建築は幾つもの部室に分たれ、各室の壁には大小さま〴〵の畫が懸けられる。

入口で目錄を買つて這入ると、快晴の日には推し合ふほども男女が場に溢れて、急はしさうに眼を走らしてゐる。ある畫の前には殊に夥しい人だかりで、それは世間で評判の高い傑れた作を見遁すまいとするのであらう。奇麗な若武者が緋縅の鎧を着て弓矢をとつた歷史畫、陽春行樂の風俗畫、現代風の美人畫――それ等は每年の常例でありながら、流石に人を牽き附ける力があると見える。そつと隅の方に自分の好きな畫を見出して人知れず立盡す青年もある。稍や廣い部屋の中央に置かれた腰掛には、自然に瞼の重くなつた見物がぎつしりと詰めてゐる。日本畫を見終つて西洋畫の部屋へ來ると、其處はまた趣の變つたいろ〳〵の色彩や形態の天地で我等の視覺を醒ましてくれる。アカデミー風の肖像畫、裝飾化された自然、印象派擬ひのスケッチ、裸體畫、巴里歸りの美術家の異國土產、林檎と銀皿、野心家の大膽な試み、驛路、船渡場、牛、瀨戶內海、赤い娘、花と女……。

誰も彼も目錄を唯一の案內人として、作者の名と畫の標題とを探す。そして好奇心から必ずその定價にも眼を通ほす。彼等は目錄の數字の示すまゝに、此方の

壁から彼方の壁へ行く。かうして、幾千の色彩に散々疲らされた眼をして漸く戸外へ放たれる。

場內で思ふさま蒸された頭が、戸外の清涼な空氣に蘇るとともに、彼等はもう一分間前の出來事に就て何もかも忘れた形に復る。或る畫の前で無意識にうけたちよつとした初發的の刺激をも、他の畫の前で微かに浮んだなつかしい過去の想ひ出をも。彼等は一事に得るとも損するともなくて場內を一巡し、そして戸外へ出た。忙はしい者は慌てて店へ歸り、閑くりした者は夕飯のことを考へながら歩いた。

何の爲めに彼等は此處へ來たのであらう。或者は見物人を見物するために、或者は流行に後れまいとする用意から。彼等の中には三越をひやかすと同じ心持で此處へ這入る者が多かつた。

今日の觀覧人が畫に對する態度はいろ〳〵である。第一種の人達は、宛ど色の着いた寫眞を見るやうな氣で、自然の忠實な模寫を望んだ。彼等の畫家に對する希望は精々巧妙なアーティザンとしてに過ぎなんだ。繪畫は唯だ彼等の肉的視覺を喜ばせるだけで充分であつた。また第二種の觀客は畫の直接効用に注目した。普通に取扱はれる肖像畫、教育用としての歴史畫といふやうな狹い意味だけにとつて、所謂 drawing を重んじた。第三は黒人筋の人達で、デッサンを氣に掛けたり、是は南畫の方則に背くとか、あれは印象派の筆致を模ねたのだとかいふ風に見る。今日の畫家自身は多くかうした趣味の鑑賞家である。從て彼等の製作も亦この精神の赴く範圍を出でない。最後に最も忠實なそして正統な鑑賞家と見做されてゐる一群でさへ、美術の中にカンディンスキーの所謂 "Stimmung" (感情)を捜さうとする人達である。

自然の中に至上崇高な『藝術的情緒』を感受して、之を形像色彩に現はしうる者が眞の藝術家である。彼等は一代に一人をうるさへ難いほど撰ばれた人達である。從てまた彼等の作から、その崇高な情緒を直接に授からうとするとも決して容易な業ではない。それには困難な精心的鍛錬を要する。で、多くの人はこの試

驗に堪へないで、別に間接なそして低級な『感情』を是等の製作の中に搜す。眞の藝術品は凡らゆる方面に感染的であるから、彼等は自分の趣味の分度に應じた如何なる感情をも說明をもその中に發見するとが能きる。然かし、幾人が山の頂きまで攀ぢ上つて『靈的諧調』の宮に詣でたであらうか。

キイランドの短篇に『枯葉』といふのがあつて、その中にかういふとが叙してある(前田晁氏譯『キイランド集』)。或る展覽會の一室の片隅に一つの畫が掲げられてゐた。それは晩秋暉日の庭園を背景として、葡萄の樹て蔽はれた吹き晒しの亭の側て、若い戀人同志が諍をした所を描いたものであつた。落葉は四邊に吹き散らされてゐる。裸かの枝には小さな野鷄が茶色の胸を向けて、春からの歌を途切れ〳〵に歌つてゐる。常春藤が躾のいゝ悲哀のやうに獨り青々と畫面を染めてゐた。この畫は何等人を感動させるやうな物ではなかつた。形からいつても、徒らに人の好奇心を喚び起すほどに大きくも小さくもなかつたし、又そのコンポジションに於ても、色彩に於ても、これといつて並外れな所も認められなかつた。『にも拘らず、人々が其處を通るときには、誰も彼も、思ひ遣りのある目附きでちらりと見て行つた。といふのは、一つはそれが、柔かな一種の感じを與へたからでもあらうが、一つはまた、その描かれた事柄がよく人に知られてゐて、何人にも容易く會得されたからである』。誰も、かうした他愛のない諍ひを思ひ出して微笑した。而も、この繪は幾多の人々の目を惹いて、自分獨りだけの小さな無彩な『私有陳列場』の中に取り入れられたと。

これが繪畫に對する最も一般の stimmung である。

ウォルター、ペーターが『文藝復興』なる著述の中で、『ジョコンダ』の畫を評した一節は有名なものである。『水の側に奇しくも現はれた此の像は、幾千年間人間の憧かれて來た物の表象である』といふ書き出しで、希臘の獸的主義も、羅馬の淫慾も、精神的な中世紀の冥想も、パガニズムも、ボルヂャ家の罪も、その他世界のあらゆる思想や經驗が彼女の表情に沈澱されてゐる

ことを言ひ、最後に、『貴女リザは、確かに、古き空想と近代理想の象徴である』、といつて結んでゐる。

この見方には猶ほ stimmung の分子がある。況さへ、觀念に墮してゐる。

私は『感情』を目的とした繪畫、『感情』に囚はれた鑑賞を非議しようとするのではない。コローの觀た自然の中には言ふに言はれない豐かな感情がある。ミレーの描いた畫には敬虔と悲哀の崇高い詩がある。かやうな『感情』は人の心を淨める眞靈の祈禱である。然かし藝術の天地には、もつと自由な、もつと囚はれない、それ自らの實在郷がなければならない。藝術は生活の爲めにも宗敎の爲めにも、そが手段ではない。『藝術的情緒』は生命の喜悦として、創造の表象として、本然の直接性を有してゐる。

之を疑ふ者は、ロダンの『ヴィイナス』を讀むが可い。彼は彼の深き天才を以て斯の古代希臘の一彫刻に於て、『生命の偉大な幾何學的磁力的描線』を發見した。そは『肉體の魂ひの靜かな生命』であり、或は『波立つ身體の深き生命に呼吸する形の魂ひ』である。そはまた、『諧調的必然の免るべからざる論理に從つて相互に呼び合ひ溶け合ひ、相互に命を借り合ふ形』である。換言すれば、そは『ただ眞理の結晶である』。『この世には眞理を措いて何の强き物も何の美しい物もない』。

理解の法悅郷よ、永遠なる靑春の誇りよ、藝術の齎す至上の歡喜よ。然らば我等は如何にしてかやうな境地に達しうるであらうか。我等はロダンの經驗を聽かう。

『何物も忍耐强い勉强に代りうるものはない。唯だ之にのみ生命の秘密がそれ自身を打明ける。人生を理解する爲めには、刻苦して熱心に汝の身を捧げろ。若し汝がこの理解に達しえたら、何たる拾ひ物ぞ!。汝は永久に悅びの光輪に取卷かれるであらう。

『理解することよ、觀ることよ、眞に觀ることよ!。若し彼が自分の前途に理解の幸福を豫知しながらも、それでも猶ほ必須の努力の前に、避けがたい修練の前に、志を折られる者があらうか。設しそれが何れだけ

長くまた困難であらうとも。

『理解することよ！。それは――死を免れることてある。

『人間は彼の幸福の鍛物師てありうる。』

ミサンスロピー

強い信念の上に立つた眞正の厭世觀なるものは稀れに見られる顯象である。一般に行はるゝそれは、misanthropy 即ち厭人觀である。

たゞ無意識に盲目に、世間と阿附雷同して行かれる人間にとつては、勿論問題は起らないのであるが、少しても精神的に眼の醒めた者にとつては、この厭人觀が最も怖るべき敵である。ニーチェは思想家の敵は憐愍であると言つたが、憐愍の前に先づ厭人が弱い者の打擲かれる第一の敵である。

この厭人觀は知らず〳〵の間に、執念（しふね）く人の心を腐らす。そしてさま〳〵なデカダンスの形で世に現はれる。

今日の文壇て、どれだけ「生命」や「努力」の强い燥（はし）やいだ聲が叫ばれたにしても、その基調は、一般の空氣は、怖ろしいほど重も苦しく沈衰した厭人的空氣てある。この空氣の中ては、青年も直（ぢ）きに老人化される。我等は今日何處に若々しい熾んな聲を聽かれるか。

八十幾年の失敗の生涯にも懲りずがに、ます〳〵人類を愛したトルストイの偉大さよ。

オイツケンに就ての感想

この秋はオイツケン博士が我邦に渡來される筈てあつた。われ等はまのあたり博士を迎へてその講筵を聽くことが能きるものと思ひ設けてゐた。然るに、思ひがけなく突發した這回の大禍亂の爲めに、この貴重な計畫も中止された。從て私が此號て詳から と思つてゐた博士を迎ふる辭も無駄となつたわけてある。たゞ此際を利用して博士の一面を紹介するのも徒

勞てなからうと思ふ。

私が博士を迎ふる辭て書きたいと思つた要旨はざつと次のやうてある。勿論博士の述作は大本に於て人類全體に共通した永久の眞理と言ふべきものを目的としてゐるが、その一面には現代の獨逸國民を相手として書かれた所がある。その事は博士も處々で公言してゐる。博士の眼に映つた獨逸人の短所は過重な理智主義（インテレクチユアリズム）てある。『概念の手細工』を喜び弄ぶその國民の弊風は、特にヘーゲルの鋭どい鋒先に當てられてゐるので、之を矯正する爲には他の極端へ走らなければならない、博士の意見ては、ヘーゲルは獨逸よりも寧ろ亞米利加や英國て讀まるべきものてある。博士が晩年に自己の哲學に冠した『活動主義』といふ名も、これまた特にその邦に於ける最近流行の萬有神的ローマンチシズムに對抗する爲めに冠されたものであるといふ。然らば博士の敎義（私は特に敎義と謂ふ、なぜなら博士の哲學は、彼自身告白してゐるとほり、新しい範疇の建設てなくして、新敎化の宣傳てあるから）が今日の日本の國情に照して、何ういふ關係に立つかといふことは、一考を要すべき問題てあると思ふ。

ベルグソンの直觀哲學が最初流行し出した頃、どの學校ても、その學生等が科學の敎課――ことにそのうるさい實驗――を怠けて困つたといふ話がある。て、彼の重ね々々の辨明にも拘らず、その風潮は可成長く續いたといふことてある。今日でも勿論左樣な傾向は廢むまいと私は思つてゐる。先覺者の至當な敎も周圍の事情に由て誤解されること此の如くてある。そこて、今若しオイッケンの敎義がその儘我邦に移入されるとしたら、何う言ふ結果を來すてあらうかといふに、私はその九分九厘までは歡迎するつもりてある。殊にその新精神主義、活動主義の說が、皮相な得意氣な今日の物質文明に何れだけ好い刺戟劑てあるかを思ふものてある。然かし設し誤つて、或る目的の爲めに特に極說されたその反理智主義のみがわが邦で更に誇大に紹介されるやうなことがあつたら何うてあらう。我國の歴史は言ふまでもなく、純粹思索の分子の殆んど全く

缺陷してゐた歴史であつた。形而上學らしい哲學も、科學らしい科學も有たないのが我國民である。偶ま明治になつてから、外國の文明を輸入して見た結果は、日本人が理智的能力に於ても決して無能者でないことを證明することが能きた。たゞ鍛錬の日の淺いために、輙やともすると、我等は純粹思索を棄て勝ちである。我等は獨逸國民のやうに極端に陷らざる限り、最つとその方面に遺傳的習慣を附ける必要があると思ふ。斯様な點からみて、オイッケンの紹介者は特に意を致すべきである。

ベルグソンは理智の排斥者ではない。彼は理智の能力に正當な制限を附けようとしただけで、或る點から見れば理智の稱讃者である。なぜなら、彼ほど近代科學、殊に生物學や實驗心理學に其哲學の確固たる基礎を置かうとした者はないのであるから。此の點から言へば彼はウィリアム、ジエームスと同じ意味で『根本的經驗論者』である。然るにオイッケンは彼等と異となつて根からの反理智主義者である。自からの態度の

無理性(イラシヨナリズム)を承認し、殊更に心理學を無視しようとするほどの靈感主義者である。(この事は彼が英國に於けるる彼の優れた紹介者のギブソンに與へた書簡で明かである)。斯様な點から見て彼は根本の態度に於ての、先天的の行爲主義者(プラグマチスト)であると謂へる。理智を疑ふ點からは一個の神秘家であるとも謂へる。個人的精神經驗を力說して、顯象界の影を薄く見る點からは一個の理想家であると謂へる。水壓器械にかけて搾つた彼の獨逸氣質の水氣が、またその機械の割目を見出して舊(もと)へ戻つて來たやうなのが、彼の理想主義である。

哲學及哲學者の定義を何う見るべきかは問題であるが、私は尠くともベルグソンを哲學者と呼ぶ意味でオイッケンを哲學者と呼ばうとは思はない。後者を形而上學者と見做したくない。前にも述(さき)べた通り、私はオイッケンを一個の偉大な宣敎者だと思ふ――――その深い、そして何よりも先づ廣い健實な人格に於て、その人格の上に立てた適(よう)はしい敎義に於て。

私はある處でも述べたが、ベルグソンにはどうしても佛蘭西特有のéliteと言ふ所がある。世を超越して思ふまゝに高い思想の世界を飛揚する「選ばれた人」の面影が見える。何物を以てしてもその人の思想の自由と態度の冷靜とを害ふことが能きないといつた風がある。「佛蘭西人の言葉の自由を束縛する力は世界の何の端てにもない、丁度、地の中や穴の底へ太陽を埋めることの能きないやうに」といふその邦の古諺を思ひ出さすやうな自由思想家がベルグソンである。彼の思想の健實性はいつも斯樣な點から疑はれる。ハーバート大學のサンタヤナ博士は、彼が自分の根據として取扱ふ博ろい材料の何れに對しても、充分の尊敬と同情を有してゐないことを攻擊してゐる。斯樣な點からオイッケンを見ると、彼はベルグソンとは反對で、高い純粹冥想界に飛揚しない代り、深く自分の人格に根ざした思想の開發に努めてゐる。彼には英米の哲學者に見られるやうな地味な健實性がある。殊に彼がその稀有な廣い同情心を以て古今のあらゆる思想及思想家を取扱つてゐる態度は、最も顯著な特質である。彼は本能的にいかなる反對性のものにも其美點を發見した。そして之を採入れて自分の思想の包容力と彈性を增さうとした。それで一種の綜合哲學を組み立てようとしたかに見える。だが、彼の思想を以て創意を缺いた、古來の諸體系の集成品であるかやうに貶なすのは誤りである。なぜなら、それ等の諸材料が一個の人格に於て融和されてゐる限り、その取材の範圍の廣ければ廣いだけ、その人格の包容力の偉いさを證明するものであるから、ニーチェのエクセントリックな性格が彼のエクセントリックな思想と合致してゐるといふやうな特殊の意味でなくて、眞の普遍な意味に於て、オイッケンの思想と人格とは稀に見るほど洵に好く調和され鍛錬された。

オイッケンはバール大學で暫くの間ニーチェと一緒に教鞭を採つてゐた。當時のニーチェに就て彼が話したことがある。その頃、彼はニーチェと二人で言語學の本業試驗委員をしてゐたが、ニーチェの試驗の爲振が至極變つてゐた。口頭試驗で學生が間違へた答をすると、

ニーチェは氣が氣てなく、『お前は斯う〱思つてゐるのだらう』とか、『斯う〱言はうとしたのだらう』とか注意して、逐々本當の解答を學生に敎えて了ふことがよくあつたと。

この一挿話は餘事てはない。なぜなら、これはニーチェの性格の隱れた一面を談ると與に、如何にもチャーミングな調子て、自分とは全く相容れない思想家の美點に話し入るオイッケンの性格をも同時に闡明してゐるのてあるから。かくて彼はバール大學てニーチェと友とし良かつたやうに、エナ大學ては今もヘッケル博士と机を並べてゐる。之を見ても、彼の抱擁力の汎いことが窺はれる。

建築家フイッシエルの設計に成つたといふ新しいエナ大學は、新獨逸精神の權化てあるとさへ謂はれてゐる。そのうちの一番廣い第一講堂がオイッケン博士に當てられてゐる。講義のある日の朝七時には既う其部屋の半分以上も塞さがつてゐる。男子の間に混つた女子の聽衆も可成にある。時間になると間もなく、頑丈な足音が戸口に響いて、白髮の博士の姿が現はれる。其足が講壇に着くか着かないに"Mein Herren und Damen"といふ聲がして、流暢な强い音聲の講義が始まる。一分は一分より其聲の高まると與に、博士の顔には熱心の表情が現はれて來る。博士はその胸に手を當てたまゝて、時を忘れたやうにして、または分秒をも惜むやうにして講義を續ける。偶まにはちよつと腰を椅子に下して沈思默考することがあるかと見ると、直ぐまた立上つて、今度は一倍の熱心を以て、手を擴げて或る見えない物を攫むやうな身眞似て机にのし懸りながら、一段と聲を絞り出す。その部屋の中には"Geistesleben"の空氣が滿ち、博士自身が"Aktivismus"の權化てあるやうに見えると。

オイッケン博士夫妻がその家庭や別莊て心持好く許多の客を引く態度を想見すると、丁度晩年ウイリアム、ジェームスが住つてゐたアービング街の居宅の有樣が思ひ出される。彼等が長い生涯の冥想と刻苦から得た結果を博い學識に照して、而かも單純な形て、著作に

談話に態度に舉動に、直接之を相手の心に透滲する有樣は、世に類ひのない、充ち溢れた道德の活教訓てある。根のある花はたやすく萎まない。

オイッケンは教授である以上に宣教者てある。彼は世界（ウエルトアンシャウング）觀を組立てる思想家てなくて、人世（レーベンスアンシャウング）觀を說教する哲人てある。彼の哲學は『自我實現』の福音てある。唯だ玆に一つ私の遺憾に思ふのは、彼の文章のやゝ生硬に失する嫌ひのあるらしく、ジエームスのそれのやうに、至て自然にまた大膽にその思想が具體化されてゐないことてある。然しこれは獨逸語の罪てあるかもしれない。

凡そ我等の精神生活に三つの階段がある。第一は人間を自然と同一の水準面に置き、感能と常識の指導のもとに營まれる生活て、之は殆んど精神生活の名に値ひしない生活てある。第二は消極的なディス イルージョンの生活て、精神の獨立をば認めるが、同時に理智鄉の誘惑に足を踏み入れて、其處に「絕對」に對する情緒（エモーシヨン）を樂しむと謂つた生活てある。斯樣な生活は、及び難いそして孤獨な、貴い相を具へた生活てはあるが、世を離れ過ぎてイゴイズムの香ひが附き纏つてゐる。第三はオイッケンの稱へるやうな積極的精神生活て、前者の如く精神の獨立を認めると與に、更にその信念から自己の人格を擴大して外部にまで推し及ぼし、宇宙の精神的改容（トランスフイギユレーシヨン）に協力するのてある。即ちこれは精神的努力主義または『活動主義』て、自己に即しない眞の自由鄉てある。第二の階段を靜的または理智的精神鄉と呼ぶならば、第三の階段は動的または靈感（或は直觀）的精神鄉と名けることが能きる。

古來の――況しても獨逸の――哲學者は、高く理性の德を孤負して、そが與へる絕對鄉に一種の慰樂を味ふのが常てあつた。私の考へるには純粹思索には、丁度形像藝術の與へるやうな靜的な情緒（エモーシヨン）が伴ふ。そのことは近頃有名な『藝術論』の著者のクライブ、ベルも述べてゐる。斯樣な情緒は眞面目な科學者は渾な味つてゐることと思ふ。その最も近く且つ好い例として

私は牛津大學の若き哲學者ベルトランド、ルッセルを擧げることが能きる。彼は數學に就て斯ういふことを言つてゐる。「數學は世間的（フューマン）な境地から絕對必然の世界へ我等を運ぶ。然かし斯樣な世界にも矢張一種の習慣が伴ふ。……て、理性の發見する斯樣な世界に所屬する我等の絕對獨立性を十二分に諒解する時に於て、我等は初めて滿足にその美の深い意味を體得することが能きる」と。彼にとつては數學の與へる情緒は實に宗敎や藝術のそれの如く貴といものであつた。彼はまた斯うも言つてゐる。「喜悅、昇天（エキザルテーション）の眞精神、即ち人間よりはより以上であるといふ感情――それは最も高い優超の程度の試金石である――は、詩歌に於ける如く、數學に於ても亦確實に見出される」と。

數學は理智の根帯である。その與へる情緒の正しく理智全般の特性を代表してゐることは說明するまでもない。て、古來の哲學者は多く斯樣な孤獨優超の世界にかくれて獨りを樂んでゐた。デカルトでもスピノザでもカントでも皆なさうであつた。私はここにカントを例に引いて見よう。常に新しい驚きと畏れを以て彼の心を充たしたといふ那（か）の星空と彼の心とは、二つの無限の世界として彼の思索を樂ました。その世界は唯だ「理性にのみ現はれるもので」、彼の身を『眞の萬有的必然の一致鄕に結び附ける」ものと認められた。斯樣な世界に於て、「私は孤獨である、私は自由である、私は私自らの王である」と彼は言つてゐる。

何といふエクスタシーの境であらう。それは世間的の何物を以てしても破壞し難い精神の三昧境である。然かし斯樣に高貴な心境を孤り樂むのみが、或はその存在を知らせるのみが哲學者の任務であらうか。左樣な孤立自由の世界のみが我等の精神活動の全部であるだらうか。我等には最つと動的な意識の世界がなかつたらうか。所謂理性以外に、『萬有的必然鄕』以外に、もつと流動し變移する一段の自由の天地が求められなんだらうか。今一度言ひ易へれば、我等はかの孤獨の獨立自由を守り立てる天地以外に、廣い生命の中に個性を沒入し鍛冶する精神的能力を缺いてゐたであら

うか。

斯様な消極的な自己の王國から踏み出して、積極的能動の精神界を求めようとするのが現代の哲學の特徴である。前に述べた第三楷梯の世界と言ふのが斯様な境地をさしたものだ。それが前者の消極的、靜的であるに比べて、積極的であるが故に、從て努力的、經驗的、活動的である。ベルグソンは斯様な世界を形而上學的に闡明し、オイッケンは實踐的に説明した。

昔の哲學は生命から遊離する哲學であり、今の哲學は生命を抱擁する哲學である。

在來は哲學の體系を區別するに、その採用した方法から經驗派と唯心派、その結論から現實派と理想派、といふやうにするのが常例であつた。然るに最近の哲學者は、ジエームスでもベルグソンでも、オイッケンでも、上述の範疇に當めはまる者は一人もない。我等は更により廣い範疇を造るべく餘義なくせられる。今設し在來の理智哲學者を總括して理性派と稱するならば、如上の哲學者は生命派と言はるべきであらう。或は理論派と行爲派、抽象派と具體派——そのほかいろ〱な名目が附けえられることと思ふ。然かし何れの分類でもが充分ではない。何時かは哲學が範疇を絶する時期の來なければならない。

新刊批評と紹介

△自修論　安部磯雄著　廣文堂發行

記者は吾現在の如き社會に於て安部磯雄氏の如き所謂ゼンツルマンの存在をあらゆる意味に於て歡びとし誇とし又心強しとするものである。幸福なる生活をなす事が氏の理想であつてそれが爲に人間の諸能力を發達せしめるといふことが本書の眼目である。所謂人として圓滿完全なる發達を遂ぐるの謂である。本書は氏の眞摯なる生の一面を窺ふを得ると共に吾等が修養の模範として吾國のすべての階級を通して必讀せしめたき物である。(定價金壹圓八拾錢)

△四人叢書　生活の朝　現代社發行

本書は若月紫蘭、佐藤緑葉、小野秀雄、鈴木悦の四氏が藝術的努力の結晶として戯曲、小説又は評論を共同出版したものである、中には創作あり、飜譯あり、各一册に顔を並べながらそれ〲各自の面目と態度とを異にしてゐるところが面白いと思ふ。(定價金壹圓)

△**新聞記者生ひ立ちの記**　郡山經堂譯　新聲社發行

此書の原著Samuel G. BlytheのThe Making of A Newspaper Manであつて著者は新聞記者を以て人生の最も有爲の事業としてゐるものらしい。文筆の人として著者が縱横自在の筆を弄して自己の新聞記者生活を忌憚なく描寫したものである。遠慮や氣兼ねや義理や人情から離れて自由自在に活躍する所謂米國新聞記者氣質が窺はれると同時に吾國の新聞經營にも參考すへき所を見るであらう。(定價金八拾錢)

△**吉田松陰**　(定價金七拾錢)　伊藤痴遊著　東亞堂發行

△**第四快傑傳**　(定價金壹圓)　伊藤痴遊著　東亞堂發行

痴遊氏の講演は普通のそれとは違つて一種此の主義の間を抱負の一端が窺はれる所に普通この種の書物に見ることの出來ない興味と價値が見出されるのである。

△國史叢書**古今武家盛衰記**　黒川眞道編　國史研究會發行

△國史叢書**源平軍物語**　黒川眞道編　國史研究會發行

△國史叢書**土佐物語一**　黒川眞道編　國史研究會發行

△國史叢書**石田軍記及仙道軍記**　黒川眞道編　國史研究會發行

△國史叢書**室町傳物語及外二篇**　黒川眞道編　國史研究會發行

本叢書發行の趣旨は、現在を明にし未來を究めんと欲せば先づ過去を審にせざるべからず、過去を知らんと欲せば卽ち歷史に依らざるを得ず、眞の吾日本歷史を知らんと欲せば須く根本史料たる當時の記錄に依らざるべからずといふにあり。其意味に於て今前記の叢書の發行せらるゝは吾人の意を得たるものにして此書に依つて歷史研究者に興趣を加ふべきを思ひ本叢書全部の大成を待つものなり。(定價各册金壹圓)

△家庭和洋**割烹辭典**　東京割烹研究會發行

本書は和洋兩様の料理法を實際的に詳述したるものにして、家庭の主婦にとつては重寶なるものたるべし。(定價壹圓八拾錢)

△**アカギ叢書**　赤城正藏發行

アカギ叢書が僅に現代一部の嗜好と需要とに應じたものであることは到る所に歡迎せらるゝに依て證せられる。左に發行所名を列記しておく。定價各金拾錢。

△**武器と人**　島田青峯編

△全譯**ヂヨバンニ**　日野月文學士編

△**父**　村上靜人編

△**虐げられし人々**　加藤朝鳥編

△**神話と傳説**　小林文學士著

△**オイケンの宗教思想**　佐藤正編

△**皇帝ネロ**　黒田文學士著

△**サランボー**　畑文學士著

△**西洋演劇史**　小林文學士著

△海の夫人　村上靜人編

△ワンダーブック　板垣文學士編

△喜劇新聞記者　齋藤文學士著

△ルボン氏群衆心理　葛西文學士譯

△プラグマチズム　中島文學士編

△絆　島田青峰編

▲石臼のへそ　福本日南著　東亞堂發行

本書は嘗て讀賣新聞紙上に連載せられて世の歡迎を受けたるものにして、著者のいかに社會百般の事物に興味を寄せ犀利なる觀察の眼を放てるかを知るべく、其文の硬軟自在到る處として可ならざるなき、誠に一代の珍品といふべし。(定價金壹圓拾錢)

△同棲十三年　松崎天民著　磯部甲陽堂發行

本書は著者が同棲十三年にして三人の愛兒を遺して空しくなりし氏が夫人に對する愛と同情と、悔と悶と痛恨と懺悔と慟哭との遣る瀬なさに「亡き妻の骨を抱いて」萬斛の涙を拂へるもの、氏が才筆と相俟つて讀者をして同情の涙に咽ばしむ。(定價金八拾五錢)

△十七の頃　佐藤紅緑著　鳳鳴社發行

本書は四五年前に本誌に掲載せられたる「十七の頃」と「戀二題」とを纏めたるものにして、かの自然主義全盛時代に於ける氏の油の乘れる作物にして、多少新演劇的の嫌ひあれど、才氣の潑剌たるものあるは爭ふべからず。(定價金六拾五錢)

△相合傘　泉鏡花著　鳳鳴社發行

「五大力」「片袖」「第二菎蒻本」「歌仙調」の二篇を收む、常に變らぬ自得の態度を發揮して冐さるるなく、眞に氏の獨擅塲を濶歩せるものといふべし。(定價金壹圓拾錢)

△世界名著物語ホーマー物語　松山思水著　實業之日本社發行

△世界名著物語アーサー物語　内山舜著　實業之日本社發行

△世界名著物語ゲエテ物語　谷崎精二著　實業之日本社發行

世界的名著の梗概を一般に知らしめんとする目的に出でたるものにして、鷗外抱月兩氏の監修に成る。我讀書社會一部の飢餓を滿すに充分なるべきを信ずる。(定價金四十錢)

△次の一戰　一海軍中佐著　金尾文淵堂發行

日米果して戰ふか。そは一に兩國々民の自制と自覺とに俟たざるべからず。狀勢此くの如くんば或は矛を執らざるべからざるや知るべからず。されど我等は戰を欲するものならず。即本書は大局より觀て國民生活の眞の自覺を促さんとするもの、文章雄健思はず快哉を叫ばしむ。(定價金壹圓二十錢)

△校舍の窓より　佐多愛彦著　梁江堂發行

醫學博士としての著者が社會事物の觀察に成る結晶物也。空論をさけて實際的實用的の智識を尊重せるは素より科學者としてはさもあるべき態度といふべし。(定價金三拾五錢)

△ケルン氏佛教大綱　立花俊道譯補　東亞堂發行

本書の原本は和蘭の Keinich Kern の "Manual of Indian Buddhism" にして、佛教に關する問題は餘す所なく、網羅してゐる。印度哲學殊に佛教の研究には最も緣故ある日本人の手に依つてよりは、緣の遠い歐米人の手に依つて斯くの如き精到なる研究の出づるは日本人としては誠に遺憾なる現象であつて讀者は本書によつて、よく感奮する所あるべきであらう。(定價金壹圓八拾錢)

△財政經濟と生活問題　實業之世界社發行

財政經濟と生活問題とに就いて日本有數の學者の論文を網羅せるものなれば一見して代表的意見を知るを得べし。(定價金壹圓貳拾錢)

△增補縮刷樗牛全集(第一卷)　博文館發行

一代の才人高山樗牛氏の文は今に至つて尙不朽の價値を有す。本書は例の第一卷、「美學及美術史」を縮刷增補して取扱ひに便じたるものなれば無論人の重寶とする所たるは疑はず。(定價金壹圓參拾錢)

△愛子叢書第四編八つの夜　與謝野晶子著　實業之日本社發行

愛子の爲めに特に選擇したる讀物なれば、いかなる子供に讀ませても無論差支なく興趣ある物語也。(定價金四拾錢)

△光の巷　佐藤紅綠著　菊屋出版部發行

通俗小說作家中に於いては道がに異色を放てる著者が「光の巷」「人の子」二篇を收む。(定價金九拾五錢)

△義太夫新論　羽鳥八十六著　東京堂發行

義太夫の流行は遂にあらぬ邪道に入らんとする弊を生じ、我義太夫界の爲めに眞に痛嘆すべき事となす。著者は眞に義太夫を愛する者にして、能く其事情に通じ、又斯界に貢獻する所尠からず。此の書義太夫を愛する者の爲めに諄々ととして教ふる所、洵に肯綮に當れるもの多し。義太夫愛好者に一本を薦む。(定價金九拾錢)

△女の運命　彥坂本輔譯　東亞堂發行

本書は波蘭土の女流作家 Eliza Oreszko 夫人の小說 Marta を稍日本人向きに譯したるものにして、國境を問はす讀者は必ずや何等か或物を感得する所あるべしと。(定價金九拾五錢)

△元祿四十七士(上篇)　村上浪六著　至誠堂發行

浪六一流の才筆を以て動使下向より元祿四十七士の列傳に及ぶ。又面白き讀物の一たるを失はじ。(定價金壹圓二拾錢)

△吐雲錄　和田垣謙三著　至誠堂發行

教訓あり諷刺あり比喩あり諧謔あり滑稽あり駄洒落あり、一讀多趣多樣なる博士の奇才に飜弄せらるの觀あり。洵に天下の珍品。讀んで大に敎へらるゝ所多く、又愚にもつかぬ事無きにしもあらず。(定價金壹圓廿錢)

△英雄の信仰　長沼賢海著　實業之日本社發行

所謂英雄豪傑と稱せらるゝ者の心理作用は興味ある研究題材たるべく、今此書英雄と信仰の關係を審かにして三十六項、正確なる史料に依つて、研究せるものなれば、其間の事情を明かにして得る所少からざるべし。(定價金壹圓)

△心身修養療法(定價金七拾圓)　檜山鐵心著　研精會發行

△不老の死(定價金五拾錢)　田中亮一著　警醒社發行

本社直接購讀者諸君に告ぐ

本號は記事意外に輻輳致し隨て頁數の増加を來し候に付止むを得ず本號に限り

特價金參拾五錢　郵税貳錢五厘

と相定め候に付御拂込相成居候前金の內より

金拾錢宛

繰上け候間御承知置相成度此段報告致候也

十月一日　中央公論社庶務部

名譯無想庵氏のサニン縮刷出づ

植竹文庫第一編

アルツイバシエフ作
武林無想庵氏譯

縮刷 サニン 全譯

本文庫は世界的の名著中、雄編大作のみを收め、是れを六號に縮刷す

新形總布極美本 三百數十頁 一頁一千字詰

定價八拾錢
郵稅八錢

■讀賣新聞評

アルツイバーセフの傑作サニンの飜譯である、原著者が多年心血を絞り得たこの勞作の効果が惜しくも露文壇に於て發賣禁止の厄に逢つた程、人間の自然の性情性欲を忌憚なく描破し盡した一代の傑作たることは今更めかしくいふまでもないが今無想庵氏の翻譯によつてこの快作が日本の文壇に移植されたことは慶賀すべきことである。氏の譯この間の機微な消息を遺憾なく流露し得てその内容よく生動しさながら原作の情調に接するの觀がある。

■時事新報評

原著は露西亞文壇の巨匠アルツイバシエフ氏の傑作にして結構の幽微描寫の精妙共に幾多の大陸文學を壓倒しその深大なる虛无思想は露土の曠原を抱擁して尙餘りあるところ譯筆亦盡銳辭句の辛辣精細にして叙述の確的なる原作の俤を髣髴せしめ讀者をして殆んど卷を措く遑なからしむ。

無比の廉價!!!

本書一頁は優に菊版二頁に匹適す

續刊

▼植竹文庫第二篇▲ロンブロゾオ作 辻潤氏譯

全譯 天才論

（原稿約一千枚の大作寫眞版十數ケ挿入）

十一月一日發行 定價九十錢（約）

▼植竹文庫第三篇▲ドストエフスキー作 生田長江 生田春日 共譯

全譯 罪と罰

（原稿紙約五千百枚の大作）

本卷一月發行豫定 壹圓三十錢（約）

發行所 神田區佐久間町四ノ二十三 （振替東京一二九五三 電話下谷三一四九一） 植竹書院

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

南北社創立三周年紀念

大特賣

特價期間は九月一日より十一月三十日まで

──(圖書目録請求次第送呈)──

書名	著者	定價（錢）	特價（錢）	郵税（錢）
新道徳論	法學博士 浮田和民著	一〇〇	八〇	八
婦人と道徳	エレンケイ著 本間久雄譯	八〇	五六	八
第三帝國論	茅原華山著	一〇〇	七〇	八
南洋を目的に	南洋王江川薫著	一〇〇	七〇	八
殘飯（新青年道）	早稲田大學教授 永井柳太郎著	一〇〇	八〇	八
智慧と運命	メーテルリンク著 大谷繞石譯	一〇〇	七〇	八
生の要求と文學	早稲田大學教授 片上伸著	一二〇	九〇	八
此の人を見よ	ニーチエ著 安倍能成譯	九〇	六三	八
ルソーの眞髄	松本雲舟 原正男 共譯	一〇〇	八〇	八
人間としてのトルストイ	メレジコウスキー著 桂井當之助譯	九〇	六三	八
モンナヴンナ	メーテルリンク著 島村抱月譯	七五	五六	八
サロメ	オスカーワイルド著 中村春雨譯	六五	四二	六
小説 別れたる妻に送る手紙	徳田秋江著	前九〇 後八〇	各六〇	各八
小説 誘惑	モウパッサン著 前田木城譯	八五	六〇	八
禮義作法精義	大日本禮節學院長 松崎雙葉著	二〇〇	一八〇	一二

發兌元 東京牛込 （振替東京一九一四番） 株式會社 南北社 賣捌 全國到る處の書肆

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

（中付三の二）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

佐藤紅綠先生四大傑作發賣

光の巷 上編

石井滴水先生畫口繪



菊版箱入裝幀美爽

定價金九拾五錢

郵送料金八錢

中篇近刊

家庭小說

谷底

全二冊

時事新報に連載して大好評を博したる(四版出來)

總クロース、菊判箱入美裝前、後、定價各金九拾五錢、郵稅各八錢

紅綠脚本集

再版出來 帝劇女優新派俳優舞臺コロタイプ九葉

裝幀極美箱入

定價金九十錢 郵稅八錢

目次—日の出 母 あきらめ 姉と妹 癡馬

家庭小說

嵐

全二冊

時事新報連載大好評 再版愈出來

前篇總クロース菊判箱入美裝、定價九拾五錢郵稅八錢 後篇出來

(中付三の三)

發賣元 **菊屋出版部**

電話番町四八五六番
振替東京二七四三六番

東京牛込區早稻田鶴卷町二百六十番地

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

第一高等學校教授 文學士 速水滉先生著

忽再版

現代之心理學

菊版函入美裝 四百餘頁 定價壹圓五拾錢 送料拾貳錢

東京朝日評 心理學に關する著書頗る多しといへども一般心理學の要領を述べたるに止まり現代心理學の各分科的方面を概括して其の成果を簡單に說明したる本書の如きは未だ之を見ず即ち上編には心理學研究の歷史より變態心理學動物心理學兒童心理學個人的心理學社會心理學及民族心理學生理的心理學及實驗的心理學應用心理學並びに心理學の將來について其の要を提示して能く大綱を捉へ得たり下編には一般約に精神機能の概畧を示したるが 其說明の踏襲的ならず機械的ならずして如何にも能く手に入りたるはかゝる簡畧の敍述の間にも明に看取せられたり著者の自ら言ふが如く所謂專門家の爲めに非らず 心理學的知識の普及の手段として著はされたるものとしては甚だ其目的に相應しき好著述として推さざるを得ず

京大教授 文學博士 藤代禎輔先生著

文藝と人生

再版

文藝の意義及價植、演劇の社會的地位、性格と作物との關係、文藝史上戀愛問題の消息、鄉土藝術の使命、ファスト劇の合著、室町文學の精華、謠曲の新解義、最近獨逸劇壇の實況其他著者が實歷談感想錄及飜譯小說

四六版函入上製 定價壹圓參拾錢 送料八錢

高島平三郎先生著

心理と人生

三版

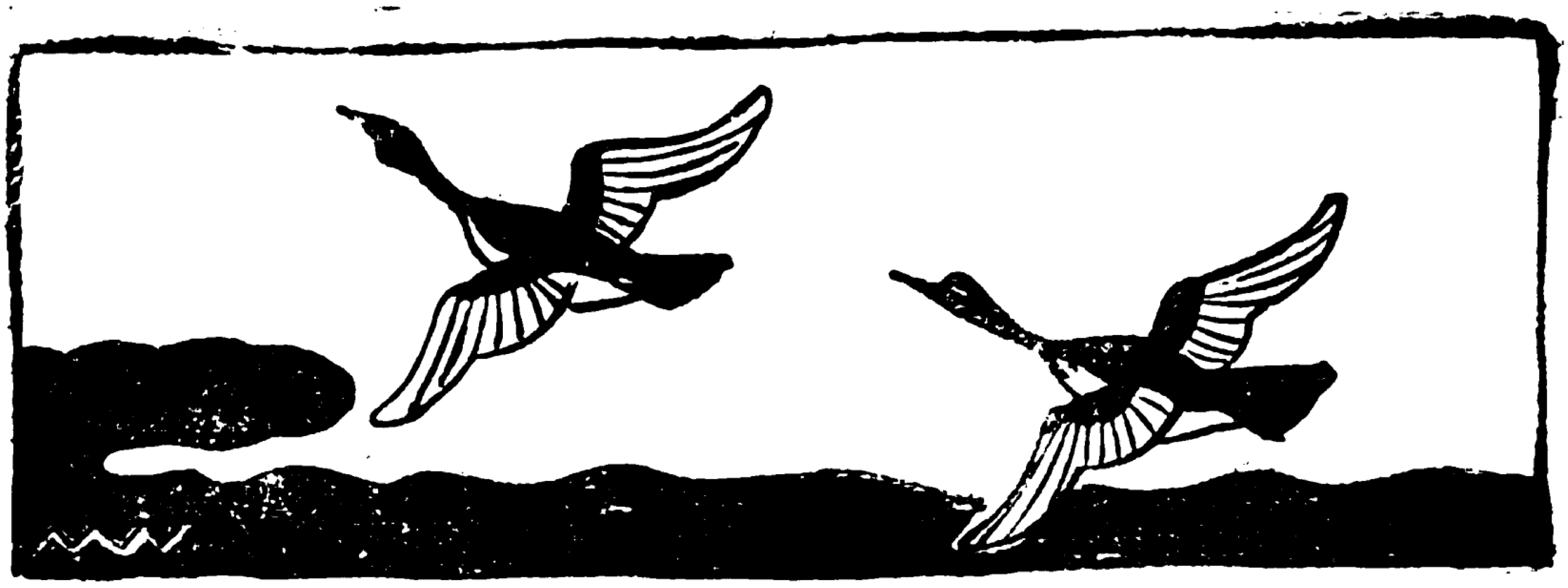
敎育、宗敎、哲學、文藝、修養、自然等論じて及ばざるなく、更に古今の人物に於ては日蓮を評しロダンを談り、ベルグソンを說く凡そ現代の思潮一として本書の中に呑吐せらざるなし

菊版函入上製 定價壹圓四十五錢 送料十二錢

(中付三の四)

發行所 東京府下西大久保二五八 (振替東京貳七〇貳壹番) 不老閣書房

大賣捌 東京堂・目黒書店・北隆館・岩波書店



藝者あがり

岩野泡鳴

一

『私こと今回上京致し、表書きのところに住しをり候間、ちよッと御知らせ申上げ候。こちらから先以つてお伺ひ致すべきの處、かれこれ多忙の爲めいづれ近々伺ひますが、あなた樣も御暇の節御出て被下度候。下山藤藏』と云ふハガキが到着した。

これを受け取つた信作は、このさし出し人の姓名をちよッと思ひ出せなかつた。渠は、早稻田文學から注文を受けた長篇の論文を熱心に書いてゐたのだが、そのペンを置いて、暫らく考へて見た。

『誰れだらう――？大阪へ行つてゐた間にでも、尋ねて來た文學志願者の一人で自分がその名を忘れてしまつた人か知らん？……いや、――それとも、地方からよく手紙をよこし、指導を仰ぎたいなどと云ふ手合ひで、碌にこちらから返事も

しなかつたそんなもの等の一人か知らん――それにしても、また、餘りに無意味な横柄に過ぎてゐるが――」

ふと思ひ出したのは、殆ど十年前の日光に於ける避暑の時のことだ。

文子！　長唄の上手な藝者！　段物を歌はせてしんみりと聽いてやれば喜ぶが、田舍節などばかりで持てる田舍もの丶席では、直ぐ都々逸などをもうるさがつて、何でも『拾八番とは聽いてはゐたが』と節附けて獨語のやうに云ひながら立つて、男舞ひをやり出したツけ――渠は斯う思ひ浮べては、獨りで微笑しないではゐられなかつた。そして卷煙草の灰を灰吹きの中へ拂ひ落した。

「さうだ！　下山藤藏とはかの女の亭主だ。そしてこのハガキの手は確かに、かの女自身の手だ。」

この手で、確かに、藝者時代には、「今晚もいらッしやるでしようね」、『待つてゐますよ』などと書いてよこした。また、あの亭主と上京して、今度のと同じ方面に家を持つた時も、一二度手紙をよこし、五圓や十圓の融通を賴んで來たこともあつた。日光へ再び歸つてからは、料理屋を開業して忙がしいと云ふ便りがあつてから、年始狀や暑中見舞の端に拜借の金はいづれ送るから惡からずとあつた。が、その後、長い間音信不通であつた。

「金のことなどは心配しないで、時々便り位はして來てもいいのに」と、信作は、先妻と共に、時々思ひ出さないでもなかつたのだ。が、渠の生活がこゝ數年前から一變して、妻も新たまり、自分も藝者遊びなどをばッたりと止めたところから、つい、かの女のことも忘れてゐた。

が、――一つの玉子を二人で一緒にすつたこともある。亭主が出來て東京へ出て來てからも、接吻を

し合つたこともある。思ひ出すと、それは二度目の出京の時て、一度目の時には或技師の圍ひ者として出て來て芝に家を持つたが、その家を持つまでに大きな腹をかかへてゐたので、その診察やら出産やらの世話を信作は先妻と共に手傳つてやつた。かの女が藝者をしてゐた間にでも、渠がいくら口說いても聽かれなかつた理由を、渠はこの時に分つたと思つた。

『藝名に本名を名のつて、文子と云つてゐたのだが――感心にもよくあんな働きの無い亭主とまだ添つてゐられるものだ。』兎に角、直ぐ訪問して見ようと云ふ氣になつたので、渠は早い晩餐を命じて、白がすりの不斷着に呂の羽織を引ッかけて、家を出た。

二

千住の大橋て電車を乘り棄て、橋を渡り、青物市場の立つ通りを少し行き過ぎた横丁てあつた。

そこをまた番號に從つて尋ねて行くと、大きな縱看板に『をんな髮結――內ゆひ――うめばち屋』と出してある、その狹いろぢだと聽いたので、またそこを這入ると、つき當りに一軒しかなかつた。

『御免――』と、渠は鈴と共に響鳴するやうな心持ちて格子を明けた。

『へい――』と云つて、障子のがらすをのぞいたのは、かの女であつた。障子を明けて、にこ〳〵と、

『入らッしやい――ハガキが屆いたてしよう』

『屆いたから、來たの、さ。』

『相變らずあなたはあなた、ね？』

『然し屆かなきやア來る筈はない、さ。』

『でも』と、急いで、ほとぼりのありさうな蒲團と枕とをまるめながら、『何から話し出していいか分らないんですもの――こんなむさ苦しい物は、まア、ペケさ。しまつてから。』

かの女が押し入れへ蒲團を押し込んでゐる間にも、信作はその蒲團の敷いてあつたところを越えて、よしずのつい立てのわきに腰をおろして見まわすと、自分の前には長火鉢が縱に据わつてゐて、その遠い端に近い柱には、三味線がさらさの風呂敷に包んでかけてある。裏も横も建て詰つた八疊の間で、それに狹い臺どころが別についてるだけだ。

『うめばち屋と云ふのがここですか？』

『ええ、うちの紋から思ひ付いて――まア、二階へいらッしやい、少しやア下よりも涼しいでしようから。』

『僕アどこでもかまひませんよ』と云ひながら、渠は立ちあがつた、『然しまだ暑いことは暑い。』

『さア、どうか――』

かの女が手でさしづした通りに先きに立つて、渠はとん〳〵とはしご段をあがつた。長四疊と六疊との間の仕切りを取り外した奥の方の突き當りに進み、家の入り口から云へば左の横手に當る高窓を背にして坐わり、自分の左り手に兩室ぶッ通しの低い明いうら窓の光を受けた。

『こんな風をして――』左の肩の方は白地が勝つて、右の肩から腰のあたり、裾までが紺で大きな蓮を染め出したしぼりの湯かた――これて寢てゐたらしい――の袖をひら付かせ、右の手に煙草盆を持ち、

左りの手を右の肩に當てて、かの女に附いて來た。「あたしは、相變らず、男のやうにかまはないたちだから。

「……………」渠は微笑の溢れてゐるかの女の顏を正面に見あげて、「かみいさんになつたの？」

「貧乏したから、ね。」渠にもおぼえのあるほがらかな聲だ。ぴたりと渠の前に坐わり、兩手を疊に突き和らかにからだをひねつて、『まア、入らッしやいまし。』

「暫らく」と、渠は輕く答へたが、心ではちよッとどぎまぎした。そしてさう堅苦しく出るにも及ばないてはないかと云ひたかつた。

かの女の擧げた顏を身じろぎもせずに見ると、年でもあらうが、ふッくらしたところは少し失せて、頰ぼねさへ目に立つて來た。が、多少は形が違つても、兩のゑくぼには、なほ當時の愛嬌は殘つてゐる。

「こわい顏をして」と、かの女は目を低い裏窓の方にそらした。

「なアに」と、笑ひ出して『年と云ふ物は爭はれない物、さ。』

「それでも」と、少し躍起になつて、「あなたよりやア七ッか八ッ下でしよう。」

「さう、さ、ね——あなたが日光で勤めた時は、もう、おほかたと——」

「いや、もッとにならう——あの時、二十七であつたぢやアないか？」

「七八年前でしよう。」

「うそ！　あたしは二十四よ。」

「さうだ、さうだ！　僕はあの時あなたを——二十四とは云つてるが——ふけてたから——自分て二十

七位だときめてゐたのだ。」

「ひどい、わ、ね――あたしはまた、あの頃から、あなたの事を毎日のやうに噂したてしよう――しまい〳〵と思つても、つい出たのだから、てイちやんによく冷かされたものです、わ。」

「てイちやんと云やア、養子を貰つて、今ぢやア福田樓のおかみさんだッて、ね――」

「ええ、あなたも宇都宮で御存じの田中屋の番頭を――」

「僕はあの頃だけで全く日光へは御無沙汰だが、人づてに聽くと。」

「人のいい主人夫婦てあつたが、ねえ、死んでしまつて――」

「その男主人、さ、僕をうらなひ師と見たのは。」

「さう〳〵！」坐わつたからだをおどらせて、『大きな番がさを斯うかかへて、さ、――お天氣のいいのに高い足駄をはいて、――あなたが歸る時に、あたしとてイちやんとがステーションまで見送つて行つたぢやアないの？』

「…………」

「あの時の格好ッたら、無かつた、ね――何だッてあんな風をしてらッしやつたんでしよう？」

「あれは――」と、渠は扇子を使ひながらあぐらになつた。

「お羽織をお取んなさい、な――暑いんですもの。」かの女が斯う云つて立つて來たその手へ、渠はそれをあぐらの儘脱いで渡した。

「あれは二度目にあなたを尋ねて行つた時だが、東京を出る時おほ雨てあつたからで――向ふへ着くと

もう、上天氣、さ。傘を小わきにかかへて、から〳〵した道を福田樓まで行きつくと、店の圍爐裏のふちに、あの死んだと云ふ主人が煮え立つ茶釜を番して、がん張つてゐた、さ。僕は無邪氣に這入つて行つて——」

「ふウちやんはゐますかッて尋ねたッて、ね。」かの女は羽織を衣紋竹で壁の上にかけてから、もとの坐についた。

「うん、さうすると、ゐないと云ふのだ。『ぢやア、てイちやんは』ッて云つても、ゐないだ。おかみさんもゐないと云ふのだ。『僕は東京から來た栗本ですが、ね』ッて説明しても、『何の用があるのです』ッて取り合はなかつた。僕は、來ないうちから、いい加減なお上手を云はれて、もう、全くみんなにふられたのだと思つた、ね。」

「ところが、あたしやてイちやんはその前の日にあナたがいらッしやるだらうッて、待〳〵てたんだのに——あたし達アあなたがお手紙通り來ないッておこつてたのです、わ。」

「でも、丁度、てイちやんのお母さんが奥からお銚子を次ぎに出て來たので、やッと分つて、三日ばかりの宿を福田樓の向ふにきめて貰つたが——矢ッ張り、あの時の心持ちぢやア、ふられたの、さ——二三度接吻をさせて貰つた切りて、ね。」

「そりやア」と、かの女は前齒を少しずらして輕くかみ合せながら——これがまたかの女の習慣を樂に優しく思ひ出させながら、『あなたが御無理だッたのですもの——でも、あとですッかりそのわけはお分りになつたでしよう——それ、みんな、元はと云へば、彌兵衛の件ですもの?」

「あの親方はどうした?」

「今年の二月に牢死しました、わ――それてあたしも少しやアおほびらに東京へ出て來られたんですの。」

「ぢやア、姉さんはどうしてゐるの?」

「今、大阪よ――」かの女は、手をついたかと思ふと、立ちあがつて行きながら、長四疊の方でちよッと立ちどまり、からだをやアわりとよぢつて、こちらを向き、「まア、お茶でも持つて來ないとお話が出來ないから。」

「あなたも大阪へ行つてたの――?」

「ええ。」二三段おりたらしいところからこちらを向き、欄干の端を兩手でしッかりかかへ込み、「然しそれはちよッとの間ですが――姉さんは、彌兵衛が二年の懲役を喰ふと間もなく、あッちへ行くゑを暗ましましたの――お父さんやおッ母さんも一緒に。」

「では、兩親もまだ達者、ね?」

「もう、七十八に七十七――」口を珍らしいだらうと云ふ風にとがらせたが、「待つて頂戴よ」と云つて、こちらを見詰めてゐた眼をかの女ははしご段の下に轉じた。が、欄干にかけてゐた手が最後に消える時、細い金の指輪をさしてゐるのが見えた。

三

信作は獨りて落ち付きが無くなつた心を立ちあがり、扇子をあわただしく使ひながら、自分の向きに對してゐる壁にかけてある寫眞の額のもとへ行つた。

寫眞は二つ並んでゐて、一つは頭巾をかぶつたふく〳〵しいお婆アさんので――これは、その娘と共に、曾て、日光へ歸る旅費を借りに來たことがあるお母さんだ。その昔、まだ日本橋の魚河岸て、まぐろ、いるか、さめ、ごんぞう等のおほ物の店を立派にやつてゐた時には、いろんな人を親切にいい方に世話してやつたので、それが爲めに菓子屋の○太樓、けんざん屋の○○屋なども、段々とよくなつたのを、いまだに恩に着てゐると云ふ。だから、道樂の爲めに相撲、藝人などを世話して、芝居の興行までに手を出し、とう〳〵家をつぶし、若い娘を二人とも藝者にさせたお父さんの方は、娘どもにくそ味噌のやうに云はれてゐても、このお母さんのこととなると、娘どもは今でも一生懸命になつて世話をしてゐるのだらうと、信作は渠等に對して忘れてゐた同情の涙をまでも思ひ浮べた。

今一つの寫眞は子供二人のだ。恐らく、文子を最初に芳町て引かせて妻に直した鹿沼の――山大盡とか云はれる――人にかの女が生んだその子であらう。

「二人もあつたのか」と思ふと、かの女が二度目の勤めにふけて見えたのも尤もであつた。

「あたしやア、子どもが直き出來るの」と云つたことがあるのも、本統のことを云つたのだ。

ふり向いて、反對のかもゐ、乃ち、兩室の仕切りになるべきかもゐを見ると、また、かの女が立派な奥さまとしてお引きずりて寫した立ち姿が出てゐて、その横にまた石州流の生け花陳列が寫してある。

「何を見てらッしやるのよ！」少しわざとらしい頓狂聲を張りあげた女を、渠は立ちながらにこりと返

り見ると、かの女は渠の右手にきまり惡さうに立つてゐた。サイダ二本とコップ二つとを盆にのせて持つたのが、衣物を地味な白がすりに着かへたし、また、さきには洗ひ髮を邪慳に結はへてゐたのが、髮を少しふくらませた束髮にかはつてゐる。

　信作は再び生け花の寫眞に目をやり、

「昔の思ひ出てしよう、ね――？」

「何でもいい、さ！」かの女は渠を後ろから突いて、奥へ進めながら、「さア、立つてらッしやらないでお坐わんなさい、な。相變らず惡くち屋の、つくしん坊、ね、のッぽに延びて！あたしの氣象もちよいとあなたに似てますよ――石州流に宗旨替へをするなんて。遠州のやうにためたり、すがめたりはあたしにやア出來ませんの。」

「それはさうと――」まだ渠は坐わらないで、高窓に背をもたせながら、「下山君は？」

「宇都宮の方へ歸りましたの」と、坐わつてこちらを見あげ、「こないだまで來てゐたのですけれど。」

「ぢやア」と、渠はかの女の愛嬌ある目を避けなければならぬ氣がして、外を見ながら、「今、獨りぼッちか？」

「すき手が一人、桂庵から來たのですけれど、よくないからこれも歸して、今、日光の方へ云つてやつてあるんですが――結句、自分ひとりが面倒臭くなくッていいし、またつまらなくあるし、ね。」

「全體」と、ふり返つて、「いつ東京へ出て來たの？」

「先々月。」

「大阪から直ぐ？」
「えゝ――でも、あたしやァ大阪に何ほどもゐなかつたのですの――梅忠を一段、○○太夫に就いて、本式にあげたばかしで。」
「義太夫語りにもならうとしたのか？」
「さうぢやァないのよ。何から話していいのやら――」かの女は身をゆすつて立つて來て、信作と一緒に高窓の敷居に、無理な工夫をして、腰をかけた。渠と自分とをばた〳〵うち輪であふぎながら、「一年ばかし病氣で、ね。」
「例の腦病――？」
「腦病はあたしの持病だが、ね――今度、もう、子宮をすッかり療治して貰つたの。」
「下山君がそんなにつよかつたのか知らん？」
「いいえ、鹿沼のが、さ。」
「また――僕の知らないうちに、また戻つたのだ、ね？」
「それが、あなた、あたしだッて子供は可愛いいから。」
「子供と云やァ、あすこに二人寫つてるぢやァないか？」
「ひとりはめかけの子、さ。」投げ出すやうに云つてから、「あたしの知らないうちに、あたしの子で屆けてあつたので。來年中學へ這入ると云ふ兄の方があたしのでー―それが二度目のめかけにいぢめられて、ね――まさか、段々ひぼしにする氣でもなかつたでしようが、――學校へ持つて行く御辨當までゞ、

んまりひどいので、あれぢやァ子供のからだにも、精神にもよくないから、何とかこちらで考へてやれと、あたしの友だちの小學女教員からこッそり云つてよこしたのですもの。あたしも躍起になりました、わ。』

『ぢやァ、下山君とは一時別れてゐたんだ、ね。』少し侮蔑の意を含めて、『あなたも隨分同じ男や違つた男を持ちかへたわけだ。』

『どうして?』かの女はうち輪の手を休めて、こちらを不審さうに見つめた。『あたしやァ鹿沼の人と下山との外に、誰れとも關係はなかつたぢやァないの?』

『さうか知らん――たとへば、僕夫婦があなたのお產の時の手傳ひをしたあの時の鶴岡とか、何とか云ふ技師は?』

『あれは――あなたも御存じなかつたんですか、ねえ――關係など、ちッともありませんでした、わ。』

『でも、子を孕んだぢやァないか?』

『あの子は生れて直ぐ死んだ、わ、ねえ――然しあれも鹿沼の人のよ。』

『へえ――』

『鶴岡さんは立派に男を立てて呉れたんだ、わ。あたしが日光へ行つて、姉さんのそばで、身を落しさへすりやァ、彌兵衞は二度と再び鹿沼の方へ無心を云つてやるまいし、あたしもいやな鹿沼の家と緣を切つて貰へるッて思つたのですが――その時、二度目の子がお腹にあつたのを知らなかつたのがあたしの失敗、さ。然し多少は氣が付いてゐたッても、あの場合は、どうしても藝者にでもなつてしまはないぢ

やアゐられなかつたのですもの。二百圓と云ふ金を、しよう懲りもなく、彌兵衛がまた無心に來て、出さないぢやア、あたしと姉さんとの素情を鹿沼郡内はおろか、宇都宮までも云ひ廣めて、あたしの主人を世に立てないやうにするッてンですもの——尤もそれが彌兵衛のおきまり文句でしたが、ね。」

「全體、姉さんがあんまり意久地がなさ過ぎたよ。」

「全く、姉さんは、もう、全くあきらめてゐて——彌兵衛の云ふ通りになつてゐさへすりやアいい、自分の考へや望みを云ひ出しちやアあたしがまた騒ぎ出すからッて心配ばかししてイたのですから。あたしだッても、どうなつたッてよかつたのですが、うちの人にやア彌兵衛の大きな無心を、もう、何度も叶へて貰つてるし、お父さんやお母さんも大變世話になつてゐないでも無いのですから、あたしがみんな背負つて立つたのよ。「よう御座います、二百圓出せばいいのです、ね」——かう云つて、あたしやア宇都宮へ行つたもの、さ、ね。宇都宮ではうちから手をまわしたので、藝者が許されなかつたので、日光へ行つて、やッと鑑札がさがつたのが丁度あなたが初めていらしつた時でしよう——御存じの通り。」

「うん——」

「彌兵衛は姉さんを——一度あたしは姉さんを逃がしたことがありますが、それがつかまつてからは——大事にしてゐるッて云ひますから、どんなに暮させてゐるかッて思つてたら、丸でお三どんあつかひてあつたぢやありませんか？二十人ばかりある兒分——と云つても、みんな石ころのやうにごろ〳〵してイる奴等ばかり——の御飯焚きてすもの。あれても、芳町に出てゐた時は一等の淸元藝者て鳴らした人が、ひびだらけの手をして、さ——あたしやアくやしくッて、くやしくッて——そッくり二百圓を揃

へて出してから、姉さんのお三どん料一ヶ年分を、かまはず、さし引いてやつた、ね。」
「ふウちやんにやア」と、云はせたのは信作の緩んで來た氣分だ、「あの巖丈な親方もかなはなかつたのだらう。」
「そりやアひどい奴よ。」かの女は眼と首とに力を入れて念を押したが、下に置いたままの盆に氣を轉じた。「おしやべりばかりして」と、窓を離れて、けッたるさうに下に坐わり、口抜きを手にしながら、「まアーーサイダアを召しあがるでしよう？ーーお茶の代りに。」

四

「うん、飲むとも」と答へたが、渠は直ぐに坐わらないで窓をのぞいた。
目に付いたのは、隣りのいちぢくだ。隣りの狭い庭を一面におほつて、周圍から建て込んだ家根々々の上にまで延び、また青いが多くの實の鈴成りしてゐるのが、あッちからもこッちからも、單スペイド型や三つまたスペイド型の廣葉の重なりの間から見えた。
「何があるの？」
「どうだらう、家根へ出てあのいちぢくを盗んだら？」こんなことを渠は云つて見たくなつてゐた。
「…………」かの女は吹き出す眞似をして、「およしなさいよ、あたしのうちが泥棒に思はれます、わ。」
「かまはないぢやアないか？」
「いやなこッた！　それこそ笑はれないぢやアないのーー色けよりも喰ひけッて？　あなたのいちぢく

好きは昔から、ね。」
「さうだつたか、ね——喰ひたいのだが——」渠も窓を離れて坐わつた。
「今に買つて來ます、わ——まア、お茶の代りに。」かの女はサイダを抜き初めた。「栗本さん——獨りと云ふものは詰らないもの、ね。あたしやアこんな寂しいくらしをしたことは初めて、さ。たださへ腦が惡いのに考へ込むばかしで——」
「だから、下山君と一緒にゐればいいではないか——かみいの亭主としては、持つて來いの人がらだア。」
「可哀さうに——」かの女は怒りもしないで、却つてふき出しながら、「自分でもそんなことを云つてるのよ。「どうせおれは教育もなし、一人前の仕事は出來ないが、石へかじり付いても自分だけの喰つてくだけは儲けるから」ッて。どッか十五圓でも二十圓でも取れるところがありませんか、ね？」
「料理屋は失敗したのか？」
「ええ——それから雜貨店をやつても、あたしがゐなくなりやア、それッ切り、成り立つて行かないし——別れてゐた間は運送の方に傭はれてゐましたが、今もまたその方の主人が病氣とかで手傳ひに行つてるのですが——」
「少しは僕も話が分つて來たやうだが——」
「でも、まだあなたにやア話さなかつたことが澤山ありますとも。」
「そりやア、音信不通になつた間のことは——」
「その前のことだッても——何だッて、親兄弟三人と云ふものは、みんな、あたし一人に手頼つてるや

うなものですから、あたしだッてやり切れません、わ。」

「そんなことァ前から知つてらァ、ね——然し、ね」と、渠は暫らく言葉を切つた。かの女もコップを手にして、こちらを見てゐた。渠はそれから再び口をひらき、『ふウちやんのすることは、いつもあんまり棄て鉢過ぎたやうだよ——何だと云やァ、直ぐまた藝者と來たやうだ。」

「それが、あなた」と、力を入れて、『あたしのやうな碌に敎育も無かつたものが、おい、それと手ッ取り早く僅かの金でもまとめられることは、外にないぢやァありませんか？」かの女の前齒合せの癖が、せんかの「せ」に、殊に目立つた特色を示めした。

「……」渠はその特色ある發音を一瞬間味はつてから、『なけりやァ無いままで自分だけの處分を自分だけでしたッてもよかつた。」

「それぢやァ丸でぶち毀わしよ——うちの人にどんな不名譽がかぶさつて來るかも知れず、親や姉さんを路頭に迷はせるやうになるでしよう——？」

「それでもふウちやんの罪にやァなりはしない、さ——初めは親が娘を藝者に賣つたのが惡かつたし、次ぎに、また、姉さんが意久地の無い爲めに、その——苟も亭主、でなけりやァ亭主同樣になつてる者を如何にいやでうッちやらかしてあつたにしろ、二度も三度もあなたの家へ無心に行かせたのが惡い。」

「そりやァ、姉さんにも貧乏の苦しまぎれもあつたでしようが——あたしの憎かつたのはたゞ彌兵衛ばかり。ぢぢィの癖に、勝手にお酒、お飯を喰らつて、博奕ばかし打つてやがつて、負けたりするたんびに、そのお尻をあたしの方へ持つて來たんですもの——一度や二度は、それでも、あたしだけの考へ

て、犬にさかなを盗まれでもした氣になつて、百圓、二百圓を出してやつたけれど、姉さんがあいつに生け捕りになつてる間は、切りがないと見ましたから、あたしも「ええッ、今一度」と云ふやうな氣で棄て鉢になつたのです、わ――あたしやァ子供の時から男をんなのやうだとも云はれたほどですから。」

「……………」信作は以前に何度も聽かせられたことだから、一々應對してゐる氣になれず、無言て受けながら、サイダを飲んでゐた。

「あの時だッて、あたしは隨分お酒をがぶ付いたでしよう――それでも、ちッとも醉はなかつたの、氣が張つてたから。何だッて、――あの少し前に、一度、あたしが姉さんを宇都宮へ逃がしましたの。原口と云ふ――これは鶴岡の親分に當る――人が――今ぢやァ、もうゐない人ですが――あたしのおやぢをよく知つてゐたので、親切に姉さんをよくかくまつて置いて呉れたのですが、日光と餘り隔たつてゐないので、うか〱外へも出られず、ちよい〱見知りのものもうろ付いてるやうだから、ぐづ〱してイりやァ見付かるにきまつてるッて云ふ知らせが、姉さんからあたしのとこへ來たんてすの。彌兵衞は丸て芝居に出る通り、さ――短刀を一本、腰にぼッ込んて、のみ取りまなこて市中をぶらついてゐたのだし、兒分や兄弟分には一々お布れのやうな物をまわしたし。あたし達は相談の上、いッそのこと、廣い東京が却つて隱れ易からう。何でも、九尺二間の裏棚、裏棚と探し込んで、そこへ隱れてゐさへすりやァて、下谷の池の端に家を借りると、――殘念も、殘念も――その二日目にかぎ付かれてしまつた、ね。」

「そりやァ僕も初耳だぜ。」渠は膝をのり出させた。

『さうてしよう。』かの女は一層調子付いて、眞がほて、『二十人ばかりのごろ付き見たやうな奴等がその狹い家へ遠慮なく這入り込んで來たのですもの——姉さんは、そんなことになると、から意久地が無いので、兩親と一緒に、隅ッこの方でぶる〳〵顫えてばかりゐました、わ。あたしやァそれを見ただけても腹が立つてしまつて、そいつ等の眞ン中へ坐わり込んで、云つてやりました、ね——「女一人の爲めにさう仰々しく大の男が十人も二十人も來ないでいい！分つた者を一人だけよこして話を付けろ！」ッて。』

『……』聽いてゐる者は、事實上、はッきりとかの女の氣質が分つて來たと思へた。『あなたは、つまり、さう云ふことをやつて見たいん、さ。』

『見たいも見たくないも、あたしにやァ一生懸命でした、わ。はだしてあとを追ッかけて警察へ行き、巡査について彌兵衞の宿に行くと、ごろ付きがまだ一人、二人ゐて、そんな女は連れ込んだおぼえが無いッてんですもの。あたしが姉さんにはかせて行かせたあたしのゴム草履があつたので、その證據をつきとめてやりましたの。然し、あとの祭りて、——姉さんは、直ぐ、そんな荒くれ男どもにかつがれて、また、日光へつれて行かれましたの。あたしはまた——夜中てしよう——くやしくもあるし、それにお腹の兒に異狀が出來たやうなので、早く家まて行きつかうッて獨りて驅け出したら、途中て水ッ溜りへぶッ倒れて——それッ切り、一週間は夢中てした、わ。今思ひ出してもに癪にさわるのは、その時呼んてゐた醫者てすが、この家には、もう、金が無いと見限つて——おやぢや、お母さんがその醫者に拜むやうに頼んて、一週間もしたら金は出來るから、どうか人助けと思つて見舞つて呉れいッて云つたのに

ぽつたり足を向けなかつたのですもの。直つてから、あたしやァ散々惡口をつきに行きました、わ。鹿沼の方から來た金で大學病院に這入り、あたしのからだは助かつたが、子供はとう〳〵死んで生れました、わ。』

『全體、何人の子を生んだのだらう？』から云ひながら、渠はからだを延ばして、肱まくらをした。

『みんな無事なら、三人てしよう――その次ぎに死んだのがあなたの奧さんにもお世話になつた子よ。』

五

『あたしやァ、これても』と、かの女も亦足を延ばして、こちらを向いて片手を突き『人のやうに、さうべた〳〵と誰れにてもくッ付いて來はしませんてした、わ――たとへ身は二度も自分から賣つても。男と云ふものは直ぐ「やつてやつた」などと自慢さうに吹聽するから、ね。――あなたにだッて、關係しようッて思やァ、何度も折はあつたのだけれど――』

『さうだ、ねえ――』としか返事の仕やうがなかつた、事實だから。

『あなたもまだ』と、かの女は然し心もとないやうに、『鶴岡とのことを疑つてらッしやるんてしよう？』

『疑ふよりやァ、一緒になつたと信じてゐたのだ。』

『田中屋の番頭にお聽きになればよく分ります、わ――今のてイちやんの御亭主に。つまり、から云ふわけてすの――あたしのお腹が少し目に立つやうになつたかと思ひましたので、福田樓とも相談づくて、先づ東京へ出てから、廢業屆をしようッて――それには、下山のことがからんてまして、ね。』

「ぢやア、何か――僕を毎晩のやうに呼び出しに來て置きながら、僕が行くと、きッと一人別にふウちやんてなければッ云ふ風な者が來た、ね。あれが鶴岡だッたらうとあとで考へ付いたのだが、敵は本能寺にあつたのか？』

『そりやア誰れか他の人てしよう――もう、忘れてしまつたけれど。下山が熱心になつて來たのは、もッとあとのことてすもの。あれには義太夫語りのあがりで、七つも年うへのがありまして、ね。夫婦同様にしてイたのでしたから、それがわざ／＼あたしのとこへ尋ねて來て、何とか下山をあたしから遠ざける工夫をして呉れろッて賴みましたの。賴んで來る奴も奴だが、あたしだッても、その時、役場で二十圓かそこら取つてるだけの者に身をまかせるつもりは少しもありませんでしたから――自分のことや人の功德が丁度一緒になつて、日光を立ちのくことにしたところが、鶴岡さんもあす東京に行くッてんて、ぢやア、どうか一緒に行つて貰ひたいッてことにしたの。すると、汽車にもまれたせいか、途中てあたしが動けなくなつて、宇都宮へ下りるッてんて、鶴岡さんも丁度ついてがあるからッて一緒に田中屋へ宿つたその晩、田中屋の番頭がどッちの顏も知つてるのて、いい加減な屆けを書いて出して置いたのてしようよ――夫婦だと、何とか。實は、然し、あたし達は別々に一室を中にして兩はじの部屋に寢ましたが。すると、どうして分つたのか、文子が鶴岡と一緒に宇都宮に下りたが、遠出の屆がしてないッてんで、――それにやアあたしを口說きに來てよくはね付けられた惡い巡査があつたので、――日光の警察から宇都宮の警察へ電話がかかつて、無屆け遠出、淫賣の件てあたしに「ちよッと來い、」さ、ね。それはあくる日のことで、番頭も大變心配して鶴岡さんに相談すると、鶴岡さんは男を立てて呉れて、

いいからおれと寝たと云へ、おれが引かせて東京へ連れて行くところだから、それを警察では何とも云へまいからッて。」

「けれども」と、渠は頰にまで熱をおぼえながら、『あなたは頻りに心配してゐたぢやァないか、僕が學校の歸りに――あの時はまだ僕は中學の先生もしてゐたが――はかまを着けたままで訪ねて行つても、旦那が來たら惡いから、成るべく來ないやうにして吳れろッて？」

「ありやァ鹿沼のこと、さ、ね、――あなたも察しが惡い。」

「さうかい！」渠はわざと眼を見張つて笑ひながら、遊んでる方の手で房々とした髮のあたまを撫でた。

「そんなことを恨んでたの、ね。』斯う慰めるやうに云つて、かの女が肱まくらの上から眞ッ直ぐな視線を向けるのを、信作は受け切れなかつた。

「別に」と、口をとがらせて、『恨む、恨まないと云ふやうなわけでも無かつた、さ。」渠はちよッと眼をあたまの方にある低い窓の外に轉じてから、またかの女を見た。『それて、然し、僕の考へてたふゥちやんの價うちが少しあがつたわけだ。」

「ありがたい、ね、こんなからだにも、まだ多少價うちがあれば。」

「もう、然し、つぶしの價段てなけりやァ通るまい、ね。」

「それも田舍の、また田舍でなら、ねえ――ああ、いやだ、いやだ！」かの女は組んで兩手をあたまの下に敷き、揃へた膝を立ててあふ向けになつた。むき出しの右の肱さきが信作の方に突き出てゐる。『子どもさへなけりやァ、もう、死んぢまつた方がいい、ね。」

『まだ然し』と、渠は肱まくらで長く投げ出してゐた足をちぢめながら、『男と云ふ物も必要だらう。』

『男も一人は必要だッた、さ――鹿沼のと手を切る爲めにやア、ね。』足を延ばして、今度はうつ伏しになり、肱を突いた兩手で、多少とがり加減のおとがひをささへ、無理ににが笑ひをするやうにして、こちらを半ば斜眼に見つめた。

かの女の格恰のいい鼻と、少し手の力で右の方に引けた口との間に、ぼつと薄墨の線が左右に奥深く刻まれて、渠にアイヌの入れ墨美人を思ひ出させたが、同時に、この女は今、月々の役にかかつてるのだと分らせた。

『月經だ、ね――今』と、渠は、右の手の人さし指で、自分の短く刈り込んだうは髯の上を横に撫てて見せ、目で以つてかの女の――人相書きて云へば、高貴のしるしだと云ふ――ほうれいのあたりを示めした。

『さうかも知れない、ね。』眼を疊に落した時、かの女の腕がぐら付いて、顏が手の上から外れかけたが、またもとの通りになつて、微笑しながら、『あなたは相變らず若い、ね、四十を一つ二つ越えたおぢいさんとはどうしても見えないよ。』

『そりやア、氣分が人と違はア、ね。』起きあがつて、またあぐらになつた。

『今度の奥さんがお若いのでしよう――?』かの女も亦斯う云つて起きあがつた。

『どうして知つてる?』

『そりやア』と、横を向いて、『有名なあなたですもの。』また向き直り、『あたしだッてどこかで分りますわ、ね――鹿沼のうちで取つてるのは、朝日と國民と讀賣と萬朝ですが、その時先づ萬朝に出ましたし、

ずッとあとになつて、また朝日にも出たてしよう。』
『ぢやア、僕の今のゐどころが分つたのは』と、煙草をふかし初めた。
『一本頂戴。』かの女も八雲の袋から卷煙草を一つ出して、火をつけながら、『讀賣に問ひ合はせたら分ると思つて。』
『道理て、變な、間違つた番地が書いてあつたよ。』
『さう――違つてたの？』大きな黑目がちの眼を見張つたが、直ぐまた安心したやうに煙りをふかして、
『でも、着いたから感心、ね。』
『何だか話が混線してばかりゐるやうだが』と、渠は眞面目な微笑になつて、
『もつと、その――鹿沼と下山との間をあなたの肉彈が二回も往來したと云ふ、その譯を聽きたい、ね。』
『また』と、あまへるやうに小首をかしげて、『小說の種てしよう――？』
『どうせ種を供給しに生れて來たやうな人、さ、――あなたは。』
『全く、ねえ！』かの女のほがらかな笑ひ聲は、低い窓のすだれの外にまで響くやうに、渠には思はれた。冗談の笑ひになり、『でも、まだ、いつかの小說のモデル料をあたしやア、まだ、貰はなかつたてしよう――あの小說ぢやア、あたしがあふ向けになつて、足を壁にあげて、ただをこねることになつてたぢやアないの？』
『ありやア、無論、あなたとしちやア僕の書き方が誇張過ぎたが――あんなことを僕が子供の時或女郎屋の三階て見たことがあるの、さ。』

「女郎(ぢよらう)なんかなら、あることでしようが――」

「…………」

「でも、面白かつた、わ、ね。」

「あんな物ア、然し、今ぢやア駄目、さ。僕は、もう、ずッと根底(こんてい)が出來たから――」

「そりやア、評判も高くおなりになつたから――」

「いや、そんな世間的なことを云ふのぢやア無い。思想と、それから材料の取り扱ひ方(かた)とに關する根底が、さ。」

「それもさうでしよう、ね、――時々、讀んでゐます、わ。」

「また横みちぢやアないか？」

「それはさうと――」と、かの女は改めて渠の顏を見て、「奧さんに云つてらッしやつたの、あたしのとこへ來(く)るッて？」

「いや、云つて來(こ)なかつた。」眞がほになつて、渠はちよッと眼をうちがはに向けたが、「然し、云つて來たとしてもかまはない、さ――別に、をかしな間でもないのだから。」

「ぢやア、ゆッくりしてもいいてしよう――何か御馳走します、わ。」

「おごるなら、おごつて貰はうが――僕は、けふは、急いで來たから、金を持つてゐない。」

「そんなことア――あたし、獨りてお膳に向つても、何もたべたくなかつたのですもの。――けふも、少しからだが惡いので、朝から寢てイたのですの――髮のお客が一人(ひとり)、二人(ふたり)來たが、ことわつて。何(なん)に

しましよう――あなた、油ッこい物はお嫌ひ？』
『何でもいい、さ、――僕は、どうせ早い晩めしを喰つて來たのだから。』
『ぢやア、何か近いところて見て來ます、わ――て、ビール？　日本酒？』
『ビールだ、ね。』
『ぢやア、さうしましよう。』かの女は立ちあがつて、一二歩行きかけたが、またふり返つてにッこりして、首で念を押した、『少し待つてて頂戴、ね。』
『うう』と、渠も首て頷いた。そして考へたには、まさか、こちらを――曾て、かの女のお客のうちに、かの女から肱鐵砲を喰つた恨みを報いる爲め、わざとかの女に酒さかなを注文させに行かせた留守に、裏手の田ン甫から逃げて行つた者があつたが、――そんな手を喰はせる者と疑つて、わざ〳〵念を押したのてはあるまいと。

六

文子が外から歸つて來て、露路の中て誰れか女の人と話をする聲が聽えた。
『どうも、露路からしてむさ苦しいんて』と、はき〳〵とした明るい聲はかの女のだ、『珍らしいお客さまがあつても、如何にも見ッとも無くッて、ねえ。』
『…………』
『それに、火事があつたら、丸で袋の鼠ぢやアありませんか？』

『…………』

やがて格子戸の明く鈴が鳴つた。また、締まる響きがした。

臺どころへ來てらしい、何かごと〳〵させてゐる。

そんな聲や音を、信作は一々身うちに滲み込ませて、あふ向けに足を延ばして、手まくらの上で、天井を見ながら、聽いてゐた。きつい女でもあるが、また愛すべきところも多いのだが、と。

『あなたの好物を買つて來ましたよ。』かの女はいちぢくとビール三本とを載せた盆を持つてあがつて來て、サイダのあき殼をのせた盆のわきへ置いた。それからまた下りて行つて、ちやぶ臺を持つて來た。そして臺の上へ、いちぢくをのせようとしたのを一つ、渠は寢ころんだまゝ手を延ばして取つた。

『こりやアうまさうだ―そこのは』と、それを持つた手で後ろの方をさし示めし、『まだみんな青いやうだが――』

『まア、待つてらッしやいよ、電氣を付けますから。』かの女は兩手を浮かせて、足の力ばかりで急に立つた時、渠には、かの女の裾がふくらッ脛のところまでまくれて、何かの模樣の褪めたが、どッしりした紫ちりめんの切れッぱしが見えた。と同時に、渠はかの女が如何に利口のやうでも、まだそんなところに不調和な日常生活を見せてゐると思つた。

かの女はずッと胸をそらせて、兩手を上に延ばしたが、一向に、低いが天井近くの電燈がおろされないので、渠は起きて行つて手傳つてやつた。ふたりの胸と胸とがさわつたと思つたので、渠は下を向いて見ると、かの女は矢張り上の電燈を見てゐた。

「おれが取るから、そこをおどきよ。」斯う云つて、渠はかの女に代つた。
「情けない、ねえ、これが取れないとは――これでも男にやア負けない氣だのに!」
「すべてが舊式、さ。」はづせた電燈を膳の上に垂らしながら、「女が男そツくりを眞似しようなんて。」
「このかさも舊式だらう、ね――半分毀われてしまつて。」
「姫ごぜのお掃除の時、おほかた掃木でもぶつけたんだらうよ。」この時、渠もかの女とさし向ひに膳を隔てて坐わつてゐた。
「よく當つた、ね」と、ふき出しさうにしてから、「きのふのことですが――でも、あたしだツて、働く時にやア働きますよ。おととひ、いとこの家がおほ掃除だツたので、手傳ひに行つて、お尻まくり、頬かぶりで半日動きまわつたら、親戚のものが見て、姉さんか誰れだが、ちツとも分らなかつたと云つたが――」
「そんな氣象は分つてるとして、さ――」
「實は、あたし、下山とも奇麗に別れてしまひたいのですが、ね。」かの女は云ひながら渠にビールをついだ。
渠はコツプにあふれようとした泡を一口飲んでから、不思議さうに、
「どうして?」
「そりやア氣の毒なこともありますが、ね――一體、あたしがあの人と一緒になることになつたのも、向ふはいざ知らず、こツちぢやア惚れた膨れたのいきさつなんかぢやァ無かつたのですもの。郡長や町

長が仲へ這入つて、鶴岡さんとも相談の上、どうか賴むッてんだし、あたしやァまた、誰れか獨りきまらなけりやァ、鹿沼の方との手がいつまでも切れないし――それにやァ、あたしもからだ一つだから、役場の書記とぐらゐが相當て、どうせ共かせぎをすればいいッて決心したのでしよう。さうしておやぢから鹿沼へさう云つてやると、主人がわざ〳〵日光まで出て來て、下山の身もと調べをして、あんな安ッぽい人間には籍を送れないッてんですもの。』

『をかしい、ね――籍を送る、送らないよりも、先づあなたの不埒を責めなけりやァなるまい、表面だけでもまだ自分の女房となつてた以上は？』

『それが、あなた、前にもお話しした通り、あたしは對島ふみと云ふ百姓の養女ぢやないの？あたしの家は武士の家で、自分は百姓だから、自分より身分の上のところから妻は貰へないッてんで、先づあたしを對島ッて百姓の養女にしてから、本式の妻としたのですが、めかけを入れるに就いて、あたしの籍を、知らないうちに、また養家へ返してしまつたので。』

『さうだッた、ね。』

『あなたは忘れッぱいの、ね――けふの話だッて、本氣に聽いてらッしやらないんでしよう。』

『そんなことは無い、さ。』手がまたビールへ行つた。

かの女は下の音を聽きつけて立つて行つたが、やがて蒸籠の三ッ重ねたのを運んで來た。

『おそばが先きへ來た、ね。』

『よからう。』

また音がした。

『はい』と、聲高に云つてから、また席を立つた。

『急がしいのッて、一緒になつて。』かの女はこれで落ち付けると思つたやうに坐わつてから、『早くすき手が一人來て呉れるといいんだけれど。』

『てんぷらだ、ね。』

『おいや――?』

『どうして〱』と、即坐に仰山に答へて、渠はかの女の心盡しを成るべく心よく受けて見せる爲めに直ぐ箸を割つた。

『話あひ手があると、あたしもおいしく喰べられるてしようよ――どうも、こないだ中から食が進まないんで。』

『入らない心配までするからだらう。』

『全く、ね。』かの女は割つた箸を持つ手を輕く膳に置いて、素直にこちらを見あげた。

七

『かうして、またあなたと行き來するやうになるなら、僕も出來るだけのことはして、またもとのやうに、あなたの相談相手にならないぢやアゐられまい、ね。』

『どうか、さうして頂戴よ。あたしやァ昔からあなたを信用してゐるの。馬鹿ばなしばかりして人を笑

はせてるやうでも、いざッて場合にやア、締めくくりがあつて――大抵のお客なら、今晩の汽車で立つてしまうッても、なか〳〵そんな顔をしないで藝者に機嫌を取らせてゐるようッて云ふところを、栗本さんは三日も前から正直に豫告してお遊びになるッて、福田屋でもみんな感心してイました、わ。それに、――それ！――あす立つからッて、そのお別れに遊びに來たりして――』

『でも、あなたが人と違つて身のまわりをかまはないで、さッぱりしてらッしやつたのは、丁度、あたしを男にしたやう、ね。』

『そりやア、ふウちやんに氣があつたから、さ。』

『その點だけで云やア、ね。』

『鹿沼のと來ちやア、年寄りの癖に、見え坊で、ね。そりやア〳〵』と、眼を堅くつぶつて見せてから、

『めかけを東京、宇都宮、鹿沼と三ヶ所に、今でも、置いとくのをまで名譽にして――その癖、あたしがおやぢやおッ母さんのことを云ふと、「おりやァ知らん」だから、ね。親や兄弟が喰ふか喰はずでゐるのを知つてながら、あたしやアちッとも贅澤なんかしてイたかアありません、わ。うちぢやアよく、金時計も買つてやつた、――衣物も買つてやつた、――親のとこへ行つて、見せて來いなんて云ひましたけれど、あたしやァ親のかど口を這入る前に、必らずコートも脱ぎ、指輪も三ッはめてるものなら二つまでは拔いてしまつたものですの。何てッても、親だけはよくして置きたい、ね。自分の親を思つても呉れないやうな手頼りのない人に、あたしの氣象として、どうしてもつれ添つてたくないんですもの。あたしとしちやア、うちがめかけを入れて呉れたのが却つて仕合せだッたのですが、また別にさう云よ

次第て、下山との仲が本式の結婚が出來なくなつたてしよう。下山も亦がッかりして、さう云はれるのも尤もだ、どうせおれにやァ男一人前の仕事は出來ないてッて、何をしても、あたしがゐなけりやァ失敗でしよう。そのうちに、鹿沼の方に子供虐待の一件が起つたんてすもの。』

『そこて鹿沼へまい戻つたんだらうが――』

『一先づ下山と手を切つたことにして、ね――下山は、どうせおれのやうな貧乏人は見込みがないのだらうからッて、したかいや味を云ひましたが、あたしやァ又鹿沼に落ち付くつもりやァ初めッから無かつたもんてすの。第一着に、めかけを出すか、それとも子供を渡すかッて條件を出したところ、年を取つてからの子供て離せないところへ以つて來て、めかけと云ふのが惡い奴て、詳しく數へりやァ二千圓にもなるてしようが、そのうち三百圓を十圓札て三十枚こッそりと簞笥の引き出しにしまつてあつたのが見付かつて、――本人は飽くまて知らないことて通さうとしましたが、――親類どもに對しても、そいつを置いとくことが出來なくなつたのてす。その叔父ッて云ふのがまた惡人て、人の子に惡名をつけて返すなら、一生よめにもやれないから、住む家と相當の金を出せッて、――あたしやァそれてもさうしてやりました、ね。すると、親類や土地のものが、あたしにあなたはもとの鞘に納つて仕合せだッて云ひますから、あたしやァそんな言葉を一々突ッ返してやつて、何が仕合せだか？仕合なんて、さう容易に――安値に――來るものぢやァない。一方に主人が千兩の儲けをしても、また一方にそれだけの借金があるかも知れないのが、人の運だッて。』

『然しそりやァ舊い哲學、さ、ね。』

『舊いッても、ほんとうなら仕かたがないてしよう。』

『まア、いいとして――』

『さうしてすッかり家の整理をしてやりましたの。だらしの無かつたことと云やア、――うちの女兄弟にはみんな亭主を持たせて、關係のある會社で使つてやつて、望み通りの給料をやつてあるし、また水車をやらせてあるのもあるのに、――その女房どもたる女兄弟が入れ代り、立ち代り、米や反物の無心を云ひに來るんでしよう。一俵ぐらゐ持つてッたッて、兄さんに分りやアしないからとか、――あれに一反織つてやつたのなら、わたしにも織つて呉れろとか、――それを見のがして置きやア、つまり、みんなあたしの上にかかつて來て、計算時になつて、何々が足りないが、お前は知らないかッて責められるのてしよう。あたしが何だか貧乏な親のとこへこッそり貢ぐやうに思はれて詰らないんですもの。あたしやア信用してまかされた物なんかを、勝手に――いくら親にだッて――送つたことアないんですもの。實は、誰れ〳〵が持つて行きましたと云へば、その者が叱られるので、それがまたあたしのとこへ來て、あれ位の物を姉さんは默つてて呉れりやアいいのになんて――あたしだッて、やり切れない、わ、ね。それに、段々と子宮を痛められて來たし、――そりやア、その點はひどいのだから、ね。大體の整理が付いたのをしほに、とう〳〵、丸一年半て宇都宮の病院へ飛び出しましたの。』

かの女は、雄辯な話のあひま〳〵にえびの揚げたのを撰つてうまさうに喰ふその口のあたりに、油ぎつたつばが滲み出るのを氣にして、ハンケチてつましく拭ぎ〳〵、熱心に物語るのてはあるけれども、信作には聽かせられない方がいいこともあるやうな、いやな氣がして、渠は眼をビールの瓶に轉じた。

そしてそれを右の手に握つて、
『まア、一杯つぎますよ。』
『…………』かの女は箸を持つたまゝ、左の手の親ゆびと高ゆびとて、自分の明いたコップの下の方を輕く觸れて、渠がそのコップの中へビールを傾むけるのを見ながら、『すまない、わ、ね、あなたにお酌をさせて。』
『これも久し振りだア、ね。』
『全く、ね。』また渠の方を見て、『もとの奥さんだツて、いい奥さんてしたが、ねえ、あなたの。』
『無論、僕は』と、笑ひもせずに、『子宮を痛められなどはしなかつた、さ。』
『…………』かの女は少しうは向きになつて引いてゐたビールを、『うツ』と喉につまらせかけた。
わざと眼を一二度白くろさせて、右の手で帶よりも上の方を叩きながら、『あ、苦しかつた！』

八

『で、病院に這入つてから、子供を呼び寄せて、それと無く、お前はおツかちやんがゐる方がいいか、ゐない方がいいかと聽いて見たら――』不思議さうにこの聲にまで力を入れて、『ゐない方がいいツてんですもの！「おツかちやんがゐると、おとツちやんが何も買つて來て呉れない」が、ゐないと、よく可愛がつて呉れるツて。あたしがゐちやア、うちでは安心して、子供のことに限らず、何でゝあたしにまかせツ切りですから、ね――何度別なのを入れて見ても、お前のやうに信用の置けるものは無いから

ッて。あたしやア、然し、ただうちのものや親類どもからまつり上げられて、床の間の置き物になつてるのアいやですとも！——「かアちやんゐない方がいいッて思ふから、この病氣が直り次第、またどこかへ行つてるから、ね」ッて——あたしやア、子供に「おとッちやんが千兩のお金を見せて、これもあとぢやアお前の物だなど云つて聽かせても、決していい氣になつて喜ぶな、——いつも云つて聽かせた通り、お前の身に着くのは、ただおとッちやんにさせて貰ふ學問だけだよ」と、よく教へて置きましたの。割り合によく分る子で、不斷ても、貰つた金を——「もッたいない」ッて、——溜めて置いて、二圓なり、三圓なりになると、おッかちやんにあげよう、あげようッて。「おッかちやんは別に持つてるから」ッても、聽かないで、「僕も亦おとッちやんに貰ふからいい」ッて。「おッかちやんはゐどころさへ知らせて呉れたらいい、中學へ行くやうになれば度々行けるから」ッて。もう、來年ですの。——「おやア、何でも僕は勉强すればいいんだ、ねえ」ッて。」

かの女の立てつづけの雄辯を聽いてゐて、信作はうッかりと『ほととぎす』劇を見せられた時のやうな、安ッぽい涙が浮びかけたのを、かの女には見せたくなかつたので、醉ひごこちのからだを膳から離してあぐらをかき、まぎらかしに、マチの箱から取り出した一本のマチの首をちぎつた。

「…………」

「あ、持つて來ますよ。』かの女はいそいで下に行つて、揚子の小箱とお茶とを持つて來てから、『子供は可哀さうですが、あんな面倒臭い家に二度とゐ坐わる氣はなかつたのですもの——籍だッて、めかけを出すと直ぐまた入れようと云ふのを、あたしが反對してそのままにして置いたのですから。』

『長くわづらつてたのか、ね？』

『丁度病院で半年ばかし――うちぢやア、あたしが獨りでゐる以上、米一俵はかかすまいし、また相當に見てやるッて、入院中も毎月百五十圓や二百圓は送つて來ました。何だッて、新聞記者なども、入れかはり立ち代り、毎日のやうに見舞ひがてら遊びに來たんですもの――そのうち、少し加減もよくなつたので、病院も贅澤過ぎるッて、鹽原に小さい家を一軒借りることにして、看護婦と女中と三人で暫らく保養してゐたのですが――』

『さうやつてゐられたのなら、何もまた例の癖でやき／＼し出さなくッてもよかつたのに。』

『さうは行きません、さ。姉さんの方ぢやア、逃げるなら、受け出してやつた時の恩返しに、「腕一本なり、脛一本なり置いてけ」ッて云ふ彌兵衛が、喝喝で牢へ這入つてから、やッとのことと日光を兩親と一緒に逃げ出して、まご／＼してイたんですもの。その入費と云やア、みんなあたしのやり繰りでしよう。さうして、宇都宮や東京ぢやア、とてもまた駄目だからッて、ずッと飛んで、大阪へ行かせましたが、そこへまた下山が――あたしの鹽原にゐるのを聽き込んで――訪ねて來たぢやアありませんか？』

『なるほど』と、右手に揚子を持つたまま、左りの肱を疊に突いて横になり、多少醉ひと滿腹との壓迫に堪へながら、『それが二度目の人の二度目のより戻りだ、ね。』

『あたしやア困つた、なッて思つたから、一度は隱れました、さ。――まア、こんな明き瓶や明きからはわきへ片づけて置きましよう、ね。』かの女は、まだ一つ蒸籠がそのままに殘つてる膳と、ビールやサイダの明きを載せた盆とを、揚子を喰はへて、次ぎの室へ運び出しながら、『人間と云ふものア勝手なも

の、さ、ね――喰べたいッて取つた物でも、お腹が十分になると、見るのもいやだ、ね。」

「それに、僕はめしを喰つて出て來たのだから。」

「まア、つき合つて貰つて、あたしやア仕合せ、さ」と、煙草盆を仲にして、信作の横になつてるのとさし向ひに膝を向けて坐わつて、「久し振りておいしくッて。――赤いてしよう?」

「………」渠は、かの女が笑ひながら兩手てその頰を押さへて突出した顔に、下齒の前齒の金齒が一つ光つたのを見た。「僕も赤いだらう?」

「眞ッ赤よ、どこかの火事のやうに。」かの女は顔から離した右の手を疊の上に突いて、からだをその方にかたむけて、「お互ひに弱いの、ね――昔から見りやア、ビールの二本や三本、ちよッと人のあがりがまちてお茶を御馳走になつたやうなものだッたのに。」

「それだけ、ふウちやんにも」と、この呼び方に一段おもたいやうな感じが添つて來た。「不平がなくなつたのだらうよ。」

「不平は澤山ありますとも。――でも、あたしやア、もう、どうなつても構はない、親と姉さんと子供の爲めにならo。」

「まだあると云ふのに」と、渠はかの女を疊の上からからかうやうな――さなくば又、滿腹の上にもなほ不足を感じしめるからだ中の强い要求を遠ざけようとするやうな、氣分になつた、「下山君と云ふ物が!」

「ありやア」と、かの女は顔をしかめたが、直ぐまた微笑になつて、「今度また一緒に住まうッてんなら

自分の喰ひぶちだけはこッちへ出さないといけないッてッてあるんですの。云つて見りやァ、下宿人を置いてやるやうに。』

『それでも、昔の髪結の亭主がはしごを賣り歩いたのよりやァましかも知れない。』云ひ過ぎたかとも思つたが、渠は自分の熱して來た氣分をこんなことてまぎらせようとしたのてあつた。

『もう、亭主てなくッていいの、さ。』かの女は、渠の様子を知つてか、知らないてか、ずる／＼と足を延ばして、渠と同じ方向へさし向ひの横倒れになつた。そしてたッぷりある髮の毛をつかねたその右の鬢づらへ、疊から立てた右の手を當てがつて、『この家だッて、下山の親戚の所有だから這入れッて云つときながら、みんなこッちて工面しなけりやァならないんてすもの！――おまけに、こんな見ッともない家が十二圓てすよ。』

『そりやァ高い！』渠は、横になつてだらけてゐては、とてもささへ切れさうてない藻がきを引き拔くやうに、突然からだを起した。そして煙草とマチとを取りながら、われから苦い顔を微笑にまぎらせて、

『僕の家だッて、さうして見れば、――もッとも、目白の郊外だからてあらうが――この家賃とそこ／＼だ。』

『あなただッて、さうお思ひでしよう。』かの女も起きて、自分の長いきせるを手にした。が、すはうとするでもなかつた。

かの女の膝さきは以前よりも信作の方へ近づいてゐた。

九

『下山にはあたしやア早く誰れかを細君に持つて呉れいッても、どうせおれのやうな者に來て呉れる女は無いッて、あたしばかりを手頼りにしてイるんてしよう。それに、あれはあたしのお父さんやお母さんを一生世話してやるッてんで、大阪の方にやア可愛がられてイて、ね――あたしはどうせよそへ養女に行つてますので、下山にもとの、魚河岸の家をつがせたいなんて、年寄りどもは云つてるんてすもの。』

『下だらない空想、さ。』

『あたしやア何でもかまはない――獨りになりさへすりやア、かみいても、お稽古でもして、氣樂に暮して行けるんだから。さうして子供の一人前になるのを見さへすりやア、もう、死んちまつてもいいんて――あたしやア子供に世話にならうなんて思つてないんてすから、ね。』

『いい心がけ、さ。』坐わつてゐても持ち切れないので、また、渠は横になつた。

『あたしもその後暫らく姉さんの方へ行つてましたが――姉さんから親に至るまでがあたしを下にも置かないッて云ふやうな取り扱ひてしよう。妹が外へ出るのに、姉が下駄の世話まで焼いて「あれかい、これかい」ッて云ふんで、「見ッともないから、よして頂戴」ッて云はないぢやアゐられなくなります、わ。こッちは少しも意張つてもしないのに、「あなたのうちのふウちやんッて、一體、どうしたお方です」と、みんなが不思議がりました。それにあたしにやア大阪のにちや〳〵した言葉や氣象がいやて、いやてたまらないんて、早く東京へ出たい、出たいと思つてましたとこへ、彌兵衛が死んだことが分つたて

しよう。おやア、あたしが先づ瀨踏みをして來るからツて、九十何圓かて買つた金時計をたツた四十圓て質に入れて、出て來ましたのは先々月ですもの。」
「どうして、もッと早く知らせて來なかつたのだらう?」
「もとのところなら覺えてもゐますが、どうせ聽きに行つても分るまいッて思つて――」自分自身を輕蔑したやうに、かの女はこちらを盜み見て、少し小さい聲て「あたし、○才文壇ッてのを讀んでゐましたよ――あッちで。」
「僕にやア別に關係のない雜誌だが――」
「でも、時々何か出てました、わ。」かの女も亦、再びからだを倒して、橫になつた。そしてそのちぢこめた膝のさきは、信作の橫たへてゐる膝と一層近くなつた。
渠は自分の肱を突いてゐた手を倒して、それを枕にしたが、女のあッたかい息が煙草盆を越えてにほつて來るやうに思はれたので、この上、自分の足でも膝でもを、ちよッとでも、動かすのは自分の心のそそりを大きくするばかりだと見て、ただじッとしてゐた。そして自分ののぼせ氣味がかの女の顏いろにも見える氣がした。
かの女は、何を考へてか、默つてしまつた。
渠も言葉が出ないて、ただかの女のこちらに向けるやわらかな視線を自分も眼て受けてゐた。そして、それまでにも勃發しようとしたのを押さへてゐた心が、私かに手を出して見ようか? 少くとも、もと〳〵通り接吻だけは、飛び付きさへすれば、許されようにと考へた。

が、また自分の心の一部からは、秋の流れのやうに澄んだ考へが出て來た。自分が新らしい妻に對して――道德上よりも、寧ろ利害上――飽くまで潔白を要求するこちらの正當な純粹權利を、今まで、無事に維持して來たのを、このあり振れたおきやん生活をして來た舊知の爲めに破られたくないのだが、――向ふも亦、弱いながらに、同じ精神があらう。女としては、あんなに苦しい中を、割り合に清く通り拔けて來たものを――たとへ正式の亭主はないにせよ、今更ら、この自分の爲めにも、また他の人の爲めにも、淸どろを塗り付けさせたくは無い、と云ふあはれみの情が渠に起つた。

『て――つまり――あなたは――』と、われながら、心熱と共に、胸一杯になつた恐れと遠慮との爲めに、自分の聲が顫えて、低く、沈み勝ちになつたのをおぼえたが、その次ぎに何を云ひ出すと云ふ用意が無かつたので、高い家賃のことに持つて行つて、『長く――ここにゐる――つもり――ですか?』

『それもあなたと相談して見たかつたのよ。』かの女も聲の調子が違つたやうに渠には思はれたが、かの女はまたからだを起して、ちよッと姿勢を正しくして見せた。

『相談ッて?』渠も起きて、今度は眞ッ直ぐに坐わつた。

『彌兵衞にやア、もう、ながねんの心配は拔けましたが、あたしやアまだ鹿沼の人にやア隱れてゐますんですよ――子供や婆アやからは、時々內證で物を送つて來ますが。』

『どうしてです?』

『ゐどころが分りやア、直ぐやつて來るんですもの――金にやア困らないとしても、また病氣になりたかアありませんから、――ねー――たださへ腦が惡いのに、醫者の言葉ぢやア、それも子宮から來てゐる

ツて。」

「下だらない心配も手傳つてゐますとも。」

「そりやア、全くよ。」しみ〲尤もだと云ふうなづきをして、「この商買だッて、あたしの名は出せないので、下山の姉さんの名を借りましたんですが、もう、年が五十て、あたしとア十五六歳も違ふんてすから、巡査でも調べに來たら、直ぐ怪しまれます、わ、ね。」

「本名を出したッて、――藝者の屆けぢやアあるまいし、――かみい位のことて本籍へかけ合ふことアあるまいて。よしんば、また、かけ合つても、前に藝者をするのをさへ故障云はなかつたのだから、今度も邪魔されるやうなことはあるまい、ね。」

「ても」と、笑ひながら、口をとがらせて、首で念を押し、「やつて來ますよ。」

「なアに」と、事もなげに、「やつて來た時は、やつて來た時、さ――あなたの心一つ、さ。」

「それもさう、ね。」ちよッと下を向いたが、直ぐ顏をあげて、「さうすりやア、あとは下山だけのことですが、あれをどッかへ周旋して貰へないてしようか？今別れの問題を云ひ出すと、如何にもあたしが向ふの困つてるのを見限つたやうになつて、ね――いくらても給料が取れるやうになれば、また偶にやア遊んて見たくもなるのが分つてますから、その時をしほに、あたしは奇麗に手を切りたいのですの。」

「そんなことを云つてちやア」と、渠の沈んでゐた反動に今度は全く卑しみの口調となり、「一生切れる時は來さうてはない。若しあなたが下山君にも別れるのが本心なら、身を隱すのは鹿沼の人からよりやア先づ下山からが順序でしよう。あなたにさへ金が送れないやうなら、どうせあなたの親の方にだッて

ことわりやら申しわけやらをばかり云つてやつてるに相違ない、さ。年寄りなんかは子供同様の馬鹿になつてるものだから、それを信用して、もう、結局、その申しわけを賞物の金を貰つたやうにありがたがつてるんだ。』

『さう云はれると、一言もないが、ね。そしてあたしも、下山が一緒にゐなけりやア、鹿沼が來ても小さくなつてるにやア及ばないんですが――』

『鹿沼の方は、あなたに本式に口を出す權利がないと僕は思ふ、ね――その主人のうちに籍があるのぢやアないから。』

『それに、このまゝだツて、もう今年中だけてしまうよ――どうせあたしがゐなけりやア、どれか、めかけを入れるてしようから。――あたしやア、もう、つくづく男はいやになつたんですもの。』

『…………』渠はかの女の最後の文句を聽いて、またかの女があふ向けになつた姿を思ひ浮べさせられた。突然に立ちあがつて、然しそれとは感づかれないふりで、『もう遲くなつたやうだから。』おもてには斯う云つて、渠はからだ中にもがいてる心に云ひ含めた、氣をよわくしてゐれば、いつまでも歸る時があるまいから、と。

『まだいいんぢやアないの？』かの女はあわてて、心配さうな顏になり、突ツ立つてる渠を見あげながら、『電車はまだ御坐いますよ――何かお氣にさわつたことがあつて？』

『また來ます』と云ひながら、渠は不器用に衣物の襟を整へた。そして誤解でもされると困るからと思つて、洒落たつもりで、『あんまりいい氣になつてると、鼻毛でも拔かれるだらうから。』

『御冗談を！あなたに限つちやア、そんなことは――』氣取つた口調で云つて、かの女も安心したやうに立ちあがつた。そして渠に先きんじて渠の羽織をおろし、『立て呂、ね』と云ひながら、渠の後ろから着せかけたが、渠には自分ながらそれを背に受ける調子がしツくり行かなかつた。

『僕は惡魔のやうな忠告をあなたにしましたが、ね』と、何げなくかの女に向いて、羽織の白い紐を結びながら、『あなたはまだ、一時のがれや下だらない義理の爲めに、どッちかの人に迷つてるやうですから、今晩よく考へて御覽なさい。』

『ええ、考へて見ます、わ。』かの女は渠の正面に立つて、微笑を向けてゐた。かの女の素直にからだを曲げた立ち姿には、苦勞人が愛を籠めたと思はせるやうな曲線がよぢ登つてゐた。そして電燈のかさの陰がさして、かの女の腰から上全體に、渠がかの女の口のあたりに見た薄墨いろを廣げてゐた。

『さうして、なほあなたが下山君を本心から戀しかつたら――』

『そんなことア、もう』と、からだをあまへるやうに振つた。

『それでも、まだあなたにやア自分の心が根底まで分つてゐないのですよ――て、改めて今度は無條件で呼び寄せてやり、鹿沼があなたを床の間の置き物としようとしたやうに、今度はあなたが下山君を立派に亭主と立て祭る、さ。』

『冗談は置いて、さ。』少し身をあとずさりさせて、『もッと安いとこへ轉宅しなけりやアならないでしよう？』

『そりやア、今晩考へた上のことだらう、ね――ここて看板をあげたのさへ、聽いて見りやア、大して

標準が立つてゐなかつたのでしよう。さう何度もかはつてゐちやア、とても、落ち付いて獨立の商賣なんか出來る筈はないです。」

「あたし、——でも、今度こそ獨立して奇麗に暮して行きたいのよ。男なんてつく〴〵いやになつたんですもの！そして見込みが立つたら、親や姉さんを呼んで、姉さんにこッちで清元の師匠をさせてやりたいのですわ、。』

『ぢやア、大阪で今やつてるんだ、ね？」渠はじッとかの女の顏を見おろした。

『ええ。』かの女も渠を見あげながら、割合ひにお白粉燒けの見えない首をうなづかせた。

どうせ持ち主のなくなるものなら、こゝに最後の耻辱を犯して、せめてかの女の首にでも抱き付いてやらうかとも思ふ感じが、渠の神經をゆるく廣げて、室内がその熱ある瞬間をうす暗くしたやうに見えた。

一〇

『これッ切り訪問はすまいか——近頃の自分をかき亂したくはない爲め——また、かの女の感心な決心を破りたくはない爲め——？』專らこんなことを考へ込みながら、信作は自分のあたまから胸にまでも一つの新らしい苦痛を浴びせられて、かの女のうめばち屋を辭した。が、自分の正確な番地を聽かれて告げないわけにはいかなかつた。

『待つてて頂戴よ——そこまで送つてきますから』と云つて、かの女も、急いで白足袋をはき、空氣草

履を引ッかけて、あとに附いて來た。『いゝお月夜、ね！』

かの女の聲も澄んて、露地ぢうに響き渡つたやうに思はれた。

『…………』良家と自稱するうちの生娘や、いやに世間の評判をおそろしがる奧さま連とは違ひ、苦勞人ッ氣のあるこの女は、以前から、男の來客を平氣て受け、また自慢さうにおほびらであたり近處を連れて歩かれたものだ。

『あたし、ね、栗本さん』と、ちよこ〳〵追ッ付くやうにしながら、『少しお金が出來たら、もッと義太夫も稽古して見たいんてすの――五圓ばかし費つて、やッと一ヶ月て梅忠一段を本式に仕込んて來たばかしてすから。なか〳〵上げさせて呉れないもの、ね。お母さんや姉さんは、まだ病氣が直らないんだから、お稽古てあたまを使つちやアよくないッてんてすが、あたしやア好きなことをやつてりやアその間は苦勞も無く、またからだの加減もいいんですの。義太夫だけは、さすが大阪に限ります、ね――言葉のなまりだッて、しッくり合つてますから、ね。――それに、あたし、お花も――これは鹿沼で、宇都宮から師匠を呼んて中まて取つてますが、まだ奧ゆるしがないのて。かねさへ出せば直ぐにも渡すッてんてすけれども、あたしやアそんな――他の人のやうに――輕薄な、云はば實のない、許しなんか取りたかアないんてすもの。』

『…………』つぶしにしてお貴とい價うちだと、渠はいつのまにか涙を呑んてゐた。低く顫えた聲て、『さうです――その――心持ちて――何をても――飽くまておやんなさい。』

『惡魔と飽くまてと――？』

『……………』答へはしなかつたが、渠はかの女の言葉が自分の今夜の言葉じりを二つ合はせて見た洒落だとは分つた。

暫らく話は絶えて、かの女のただ歩いてゐる草履の音がぺた〳〵と後ろから聽えてゐた。

『あ、しまつた、ねえ――』かの女は道ばたの水溜りへ左りの足を半ば突ッ込んだのであつた。『あんまり、あなたの足が早いから。』

これを見た信作は、あと戻りをした。自分のハンケチをたもとから出し、われ知らず自分をかの女の支へにしてやらうとして、

『おつかまんなさい――拭いてあげます。』

『見ッともない、わ！』かの女は顫えながらあとずさりをして、こちらをじッと見詰めて、子供が『いや〳〵』をする如く首やからだを左右に振つたやうに見えた。

『……………』渠は默つてまたさきへ進んだ。

『もう一つ、あなたにお話ししようッて思つて忘れてましたが、ねえ、あなた、――まだお目にやアかかりませんが、――奥さんに御相談なすつたら、どう？　こッちでても、もう、あたしやア寶石入りのゆび輪をふたアつ、七ッ屋へやつてありますの。兩方で七拾圓ばかしの物を、繻紾の帶や小紋と一緒にたッた六十圓で――下山の爲めに。どうせ假りに人の倉へ預けたのだと思つてりやア、おかねさへ出來たら取つて來られますが――あたしにやア當分見込みがないから、もうこれも流れる期限が來るでしよう。流すのも業腹ぢやアないの？　あなたのお手にてでも渡つたら、せめて未練もなくなるだらうッて、

ゆふべ、あたし、寢ていて、ふいと考へ付きましたの。御相談なすつて見たら、どう——どうせあたしの權利は全く抛棄しますから?」

「さう、ね。」ふり向きはしないで、進みながら、「相談して見てもよう御坐いますが——衣物の方は、人の着たのは嫌ふでしようよ——いつかもそんなことがあつて、斷わつたやうだから。」

「ゆび輪だッて、惜しいぢやアないの——?」

「まア、——出來れば——その方でしようよ。」

ふたりは橋の上へ來てゐた。

そこから、川しもを見渡すと、渠が先刻、まだ明るいうちに、ここを通つた時にどこ行きかの汽車が轟々と過ぎるのを見たその鐵橋のあたりまでが、水もよしも蘆もみなきら／＼と輝いて、涼しい風がその上を軌道外れに走つてるやうだ。

「いい月、ね!」かの女の、何もかも忘れたやうなこの叫びが高い空へ聽えて行つて、天空は雲も無く眞ッ青に澄んでゐた。

かの女はうへを見てゐるが、渠には、かの女が足袋の濡れた左りの足の方の褄を、氣味惡さうにだがそッと——渠がかの女の出の姿を上日光のゆふ立あがりの石ころ道に見た時のやうに、——上手に取つてるのが見えた。

「…………」どうしてもこのまま別れかねるやうな氣持ちが、むら／＼と、渠の胸には一度期に込みあがつてゐた。(完)

沈丁花

田山花袋

漲るやうに刺激して來る疼痛、灼くやうに襲つて來る熱、一時はこれてはとても醫師に通ふことも出來ないと思つた。何處か近い處の安い病院にても入らうかとも思つた。しかし、出來ることなら私は內々で治したかつた。種々な人に知れて種々なことを言はれるのを私は好まなかつた。私はいつも暗くつてから、熱のある疲れた體を腕車で電車の停留場まで運んで行つて、そこから長い階段を小さなプラツトフオムへと登つて行つた。

歸りは殊に辛かつた。藥を注入した跡はじつとしてはゐられないほど烈しく痛んだ。私は電車の隅の硝子戸に頭をよせかけて、身をもがいて、一刻も早く家に歸つて蒲團の上に仰向に寢たいと思つた。溜息がひとり手に出た。

『自業自得だ』

かう叫んで自分で自分を罵つて見ることもあつた。が、しかしそれは一時の發

作て、腹の中では決してさう簡單にばかり思つてゐなかつた。かういふ光景も一事實だ。といふ風にも考へて見た。歡樂の底に横つてゐる自然の皮肉といふ風に考へた時には、自分ながら男女の關係の上に一種のユーモアを感ぜずには居られなかつた。私は社をやすんで十日間も床の上に寢てゐた。

食後の丸藥のおくびがいやに私の神經を刺激した。私は大抵突伏して腹を押すやうにして寢てゐた。私の眼の前には石垣の塀に添つた爪先上りの細い道や、大きな二階の下宿屋の入口に出てゐる軒燈や、二三段石階を上つて行く小さな病院の入口などがいつもはつきりと映つて見えてゐた。

「何うです、今日(けふ)は？」

白い作業衣を着けた若い代診は、手にした硝子器を明るい電球にさしつけながら言つた。「ふむ、熱はとれましたか？　成たけ風邪を引かないやうにしないといけませんよ。風邪を引くと、この病氣はすぐわるくなりますから」

背の高いがつしりした院長の顔、カアテンで三つにも四つにもしきつた寢臺、その一つの寢臺の中からある時洩れて聞えた女の艶なしかし戰へたやうな聲は長い間私の耳から離れなかつた。「いゝえ……さういたくは御座いません」からその女の柔かな聲は言つてゐた。

待合室で順番を待つてゐると、その女はきまりがわるさうに、少しほんのりと赤くなつた顔を下にしてそつと入つて來てつゝましやかに腰をかけた。背の低い銀杏返に結つた女であつた。藝者とも思はれないが、さうかと言つて、お茶屋の女中らしくもなかつた。何方かと言へば、眼の細い眉の濃い髮の房

々しい綺麗な女であつた。

その病院の門を初めてくゞつたのは、丁度正月の七日であつた。イヤに曇つた寒い日で、時々雪がチラチラと雨に雜つて落ちて來てゐた。

病院の中はしんとした。

『今日は七草で、何方もゐませんが！』

から玄關の書生は火鉢にかじりつきながら言つた。火箸をわたして餅などを燒いてゐた。

私は手短に容體を話して、『折角來たんですから、何方でも好いんですが、見て戴けないでせうか』かう逢つて頼んで見ると、『それぢや、ちよつと待つて下さい。院長さんがゐますから』かう言つて奥に入つて行つたが、暫くして出て來た書生は、私の姓名を一枚の半紙に書きつけてから、私を二階の待合室へと伴れて行つた。それは灰色のペンキで四壁を塗つたやうなわびしい一間で、汚いテイブルの上には、堅炭のゴロゴロ消えた火鉢が閑却されたまゝて置かれてあつた。二三脚の安樂椅子の他に、長い椅子がその隅の方に置いてあつた。

私は其處ではいくらも待たなかつた。私はやがて名を呼ばれた。私は寢臺だの機械だの罎だのの一杯に入つてゐる室へと導かれて行つた。

院長のがつしりした岩乘な姿は私にある力を感じさせた。

私は種々なことを訊かれた。『フン、これはひどい！』から院長は硝子器を明るい方にすかすやうにして、『大抵、今日て幾日目位てす』

『さうてすな、一週間位のもんてす』

『まだ、本當に治らなかつたんてすな。これは放つて置いてはいけません。姑息なことをしておいてはそれこそ大變になりますから』から言つて私の方を見て、『系統的に根治させなければ駄目てすよ』

『何うも熱があつて困ります』

『さうてせう、この容子ぢや、もう熱が出て來ますよ。酒はいけませんよ。不養生をしてはいけませんよ。それに、毎日きつと來るやうにしなければいけません』

注射のあとを私は長い間待合室の長い椅子に身を横へてゐた。外てはいつか雨がすつかり雪になつてゐた。

何といふ不愉快な正月だらう。何といふつまらない正月だらう。私は柳のある川の緣の料理屋の一間に樂しく酒に興じてゐる友達の群を頭に描きながら、わびしく大きな停車場を電車の方へと行つた。そのあくる日から熱が更に烈しく出て來た。

惡魔！　惡魔！　あいつの罠に知りつゝかゝつて行つたやうなものだ。あの時、行きさへしなければ好かつたのだ。あの時、財布に金さへなければよかつたんだ。さうすれば、かういふ眼に逢はなくつて

も好かつた。……惡魔め！　空々しい顏をした惡魔め！『この十五日には、東京に是非行くから、彼方て何處かで逢ひませうねえ。』こんなことを言つて、その逢ふ場所まできめて置きながら――その時はきつと手紙をよこすと言つて置きながら、ては笑つてゐやがつたのだ。

「お話にも何にもなりやしない――」こんなことを言つて、自分を罵つて見ても、もう追附かなかつた。私は私の痴かなのに愛憎が盡きるやうな氣がした。私は其時のことを床の上で度々繰返して考へた。

私は妻に言つた。

「そら、あの女さ。お前、知つてるぢやないか」

『私、そんな女なんか知りません』

『そら、知つてるぢやないか。お前とあそこに行つた時、三人聯んだ中に、一人二十三四のちよつと小綺麗な奴があつたぢやないか』

「さうでしたかねえ」

「さうてしたかねえなんて……忘れつぽい奴だな。秋の七草なんて言ふのをひいたぢやないか、あの時……」

「あゝ、色の白い、背のすらりとした、……あの女？　厭ですねえ。だから、男は駄目だつて言ふんですよ。男つてイヤなもんですね」

「好いからまア、そんなことは好いから」から私は笑ひながら押へて、「それが何うだ、知つてゐながら、

罠の中に入つて行つたやうなもんだ」

「でも、本當に駄目ですよ」

「しかし、考へると面白いんだ。矢張、かうなる緣見たいなところがあるんだ。あいつ、俺に眼を附けてゐたんだ。さうさ、無論、男振りぢやないよ。金サ。この男なら、甘いから小遣位とれると思つてゐやがつたのだ。田舍ぢや金の欲しい藝者ばかりだからなア。」

「金を取られて、病氣まで引受けて、それでも面白いんですかね」

「まア、それは言ふなよ。話しだけ聞かせてやるから」

「そんな話なんか聞きたくない」

「でも、まア、聞いて見なよ。かうなんだ。この前、そら先々月行つた時、矢張西村と一緒にあいつをかけたんだ。處が西村もあいつに思召があるんだ。イヤに色眼をつかつたり手を握つたり何かしてゐるんだ。こいつは面白いと思つて飮んでゐると、先生段々醉つて來て、とう〳〵本音を吐いて、女を便所につれだしたり何かして、談判を始めたんだネ。不思議なもんだね、さうなると、男といふものは競爭して見たくなるもんでね。イヤに、その女が綺麗に見え出したり何かしてね。その女を奴にやらせるには惜しいつていふやうな氣もするんだネ。西村はまた西村で、かういふ好い機會はないから、俺にはもう一人來てゐる十八九の、まだ小便くさいやうな奴をあてがつて、自分はそれを物にしやうと言ふんだ。先生、かなり醉ふには醉つてゐたがね。俺の耳の處に顏を持つて來て、そして談判の結果を報告す

るんだ。かうやつて指を四本出してそして勸めるんだ。けれど、俺はつまらないと思つたし、それに女が西村には氣がないッて言ふことをちやんと知つてるから、俺はつとめてそれを打壞はすやうにと仕向けた。その晩は隨分騷ぎさ。女は只歸るより少しても金にしやうと思ふから、何うかして遁がすまいとする。俺は打壞さうとする。西村は成功しやうとあせる。それは騷ぎさ。それぢや別の處に行かうとまでなつて、また別の處て飲んで、とう〳〵時間までゐて、そのまゝ無事で引上げて來たのさ。前に、さういふことがあつたんだ。……だから奴に逢つたのは、此間て三度目だよ』

『何といひましたつけね、あの女!』

『繁代つて言ふんだよ』

『東京のもの?』

『東京とも……もう散々あちつこつちを食ひ詰めて歩いた奴だね……。あの時既に、俺はこいつ食へない奴だとは思つたんだ』

『でも、男は馬鹿なもんですねえ』

『まア、聞けよ。それが、去年の暮に行つた時には、さういふ氣は俺にはちつともなかつたんだ。女のことなんか思つてもゐやしなかつたんだよ。むしろあんな女にかゝつちや大變だ位に思つてゐたんだよ。處が田舍は正月は舊だから、此間だッて忙しくも何ともないんだ。三十日の晩に、西村め、又飲みに行かうッて言ふんだ。ところが、細君が中々嫉妬家やてね。これを何うかして說きつけなければならない。

養子だから、西村は何うしても細君に一目置いてゐるんだよ。終にはとう〳〵細君も一緒に伴れて行くといふことになつて、そして三人して出かけたのさ。だから、俺だッて、その晩出かける時にはそんなことは少しも考へてゐやしない。生肴でも食つて來やうッて言つて出かけたのさ。て、まア、町の料理旅館に行つて、藝者を二人聘んで、酒を飲んだんだね。西村の細君、あれて、娘時分に長唄を習つてゐるので、藝者などとも話が合ふんだ。自分でも三味線を取つて勸進帳か何か彈いてゐたつけ。その中、繁代がやつて來た。入りかけて、舌を出して俺に見せるぢやないか。俺はふとそれに引よせられた。そして、時の間に妥協しちやつた。西村は細君を歸して、後でゆつくりといふ腹があつたらしいが、細君中々言ふことをきかないので、十時すぎになつて、澁々一緒に歸つて行つた。……あとは言ふまでもないさ。でかういふ眼に逢つちやつたのさ」

「馬鹿ねえ、お話にならないねえ」

妻はつまらなさうな顔をして、向ふへ立つて行つて了つた。

しかし、私は妻に話したやうな輕い氣分ではゐられなかつた。私は女の男性に對する心持まで入つて行つて見なければ滿足は出來なかつた。その晩私は金を澤山女にはやらなかつた。その僅かな金で、傷いた體を男にまかせる女といふものを私は不思議にした。

『男の無節操に對する女の復仇』と言ふ風にも考へて見た。一方では女人に對する自己の腹黑さの自然

の報酬のやうにも考へて見た。

その時だッて、それと知つたならば、病毒を受けるのを免れる方法はいくらもある。現に用意もしてゐた。しかし、そんな樣子はこればかりも顏に現はさなかつた。やさしい聲で靜かに女は身上話などをした。「私は外に望みはありません、いゝえ、私なんかとても御氣になんか入りやしませんよ。しかし、此處に御出になつた時だけは聘んで頂戴、それで澤山、十分ですよ」などと言つた。單に金を目的にする上から言つても、これからも御馴染になつて貰はうとするのには、傷いた體を意識してまかせるといふことは、當人に取つて損なことてある。私は女の心を料りかねた。一方ではまたさういふ不治の體を衣食の料にもしなければならない女を憐れむやうな心持も盛んに起つて來た。

私は天井を見ながら終日寢て暮した。寒い寒い朝が幾日か續いた。「今朝は寒い筈ね、霜が眞白よ」などといふ娘の聲は中庭を隔てゝ聞えた。朝日の當る軒端に雀の囀る聲がした。

「かァちやん、かァちやん」

遲く起きた稚い女の兒は床の中で母親を呼んでゐた。

忙しい生活に沒頭して、一日でも靜かに休んでゐることの出來ない身に取つては、一方では十日の臥床は得難たい休養にもなつてゐた。私は納豆屋の聲や、煮豆屋の鈴の音や、豆腐屋の賣聲などを聞きながら、靜かに郊外の冬の日を想像した。

熱が段々除れて行き、疼痛が段々薄らいて行くにつれて、私の頭には段々といろいろなことが考へら

れるやうになつて來てゐた。私は性慾のことなどを深く考へた。

性慾を尋常茶飯の事のやうに考へた外國の作家のことを考へた時には、『しかし、それまでになるのが大變だ。さういふ風に考へるまでになる途上の空氣は十分に考へなければならない價値がある。一度よりも二度、二度よりも三度、その發展の仕方も矢張デグリーの問題である。ある人に取つては、性慾は皮の剝けない果實で終つて了ふことがある。ある人に取つては、性慾は尋常茶飯のこととさへ思はれないほど尋常茶飯であることがある。またある人には、性慾はその唯一の生命であることがある。しかし、性慾には確かに自然から賦與された抑制の氣分が食慾よりは一層多分にある。食慾で盲目になるのは小供の中ばかりだが、性慾はさうでない。老人になつてもその爲めに身を亡すものはいくらもある。』私はこんなことを考へながら、大きな眼を明いて天井を見てゐた。

他の青年とは違つて、積極的には行かずに、消極的に發展して行つた其時分の私の性慾のさまなどが歷々と私の眼に浮んで通つた。机に向つて蒼い顏をしてゐる青年、女の體から放射する光線に堪へないやうに顏をそむけた青年、空中に綺麗な女を描いてひとりで樂んでゐた青年、他の人達の性慾を罪惡のやうに唾棄した青年、私は實にさういふ不思議な青年であつた。外に燃えるべき筈の性慾は内にのみ壓迫されて、唯くすぶつてふすく音を立てゝゐた。私の性慾は唯センチメンタリックな淚となつて現はれてゐた。

『人間は人間のすることを必ず一度はして死ぬものだ』こんなことを言つた時代には、私の性慾はもう

そろそろ普通の徑路を取つて來てゐた。私の好奇心は性慾の世界に向つて烈しく進んで行つてゐた。

私は私夫妻の間のことを考へずには居られなかつた。私は今五人の兒の父親である。私も私の妻も性慾の何物たるをも知らずに、性慾の藝術化などといふ氣分は少しも知らずに、いつの間にか五人の子供の親になつてゐたのであつた。私達は從順な無能な自然の兒て、自然の命ずるまゝに呼吸して飮食してそして子供を生んで來たのてあつた。私は性慾の藝術化に溺れて全く生殖を營むことを忘れた女や男のことをそれに引比べて考へずには居られなかつた。『そのかはり、お前にはもう子供を生ませないよ。子供を生む苦痛と子供を育てる面倒とを免れるだけても、お前には大變樂ぢやないか』こんなことをいつか私は妻に言つた。それを私は思ひ出してゐた。

性慾の藝術化と言ふことは、一面生殖の無限の發展を押へるといふ形になつてゐた。太古の初期の慾が文明の世になつて段々精巧に複雜に微妙になつて行つて、生殖の實用といふ效力を次第に失つて來た。私はある醫師の言つた言葉を思ひ出した。『性慾の病氣は、矢張文明の上に醸された空氣から湧いて來た黴菌のやうなものですな。その證據には、單に生殖を營むといふ上ては、さういふ病が起ることはないてすからな。山の中や未開地にはまたさういふ病氣のないところはいくらもありますからな』

其時私は訊いた。

「一體、何ういふ譯て、さういふ黴菌は發生したもんてせう？」

「その原因てすか、それはちよつとわかりません。理由となると、他の學問にもわからぬ理由があると

同じやうに、矢張本當にはわかつてゐません。それは學者の本には書いてありますがね。それも好い加減なものです。唯、この病氣は印度に始つたといふことです。印度の榮えたころに始つて、それから、支那にわたつて、西洋にも行つたといふことです。日本では三百年以前にはまだなかつたといふことです」

「さうですかね。平安朝時代なんかには、まだなかつたんですな。」

「無論なかつたんでせう」

「不思議なもんですな。すると、ある力とある力との間に不意に醸されて起つて來たんですな。その最初の起點を想像して見ると、不思議な氣がしますな。それに、さういふ最初の起點があるとすると、今日でも、傳染でなくつて、特發といふやうなこともある譯ですな。一の力に二の力が觸れて、それにいくつかの力が觸れれば、その菌を醸す空氣が出來て來るわけですな」

こんなことを私達は話した。それはもう三年ほど前のことであつた。その時、私は初めてその病氣を知つたのであつた。私はある女の血とある男の血とを想像した。私は不思議な氣がした。

眼を覺すと妻の後姿が見えた。妻はかき餅を筵にひろげてゐた。

「此處に干しておいて好いでせう。向うにおくと、子供が食つて仕方がないから」

「また、つかせたのかえ？」

「え」

妻はせっせとかき餅をならべてゐた。

「よく寢てましたね」

「うむ――」

「私が入つて來たのを知らなかつたでせう？」

「知らない」

「ちつとは好いですか」

「大分好い。これぢや、もう出勤が出來さうだ」

「今回は懲りたでせう」

「何アに……」

私は笑つてゐた。

夜は子供達が騷いだ。中庭に面した六疊の室は明るく灯にかゞやいて、大きな娘は、机を持出して、明日の課程の復習などをしてゐた。西洋キシャゴの彈きつこをしてゐる男の兒の影が障子に映つて見えた。

院長にお代診にも看護婦にも、私はもう大分懇意になつてゐた。「伊藤さん――」かう言つて看護婦は笑ひながら待合室の入口に來て呼んだ。

高臺にあるその二階の廊下の硝子戸を透して、朝霜の白い町の甍が一目に見渡された。大きな學校の廣場では、生徒が元氣よく朝の器械體操をやつてゐるのが見えた。庭にある寒山竹は寒さうに朝風に靡いてゐた。私達は火の乏しい待合室よりも、薄日の當るこの廊下を選んで、そこを往つたり來たりして順番の來るのを待つた。女の患者もかなりに多かつた。イヤにこてこてとつくり立てた若い女は殊に人々の眼を惹いた。

三人ゐる看護婦は皆な田舍のものだッた。アルハの零コンマ一とか二とか命令されて、患者に注入する藥を拵へたり、繃帶と綿花とを寢臺の側に持つて行つたりした。室の隅にある流しには、代診がかはる〴〵行つては手を洗つた。

「少し痛いかも知れませんよ。我慢してゐなくつてはいけませんよ」

私の手術を受けてゐる隣からは、何うかすると、さういふ聲が聞えた。つゞいて『痛い――痛い――痛い』とたまぎるやうな聲が聞えた。かと思ふと、『また、不養生をしましたね、駄目ですよ、折角治りかけると、やすんで不養生しては』かういふ聲が別の方から聞えた。

月の二十日頃には、私はもう社の方に出てゐた。熱を持つた方は、段々よくなつて、『これでは旨く固りさうだ』などと院長は言つた。私は水藥を散藥に改へて貰つて、丸藥と一緒にそれをポッケットに入れて、社の二階を上つて行つた。社の同僚達はやせた私の顏を憐むやうにして見た。

それはあゝ寒い雨の降つた朝であつた。私は出がけに郵便箱に濡れて入つてゐる一通の手紙を見た。私はそれを取つて外に出ると、封を切つて讀んで見て、ポッケットの中に入れて溜息を吐いた。

私は要垣に添つた道でも、人々の待つてゐるプラットノオムでも、醫師の入口に行く石垣の傍でも、薄日の當つた廊下でも、手術を受けてゐる寢臺の上でも、社の多勢ゐる大きな一間でも、絶えずその手紙をよこした女のことを考へてその日は暮した。此間、手紙をやると、女はそれを心配して何彼と言つてよこした。是非御見舞に上りたいなどと書いてあつた。

田舎の一時の出來心がこの正月の歡樂を破壞して了つたのも心外だが、この女に逢ふ歡喜を失つたのは、更に更に辛かつた。『なァに、病氣なんて、醫者にかゝりさへすれば治るんだから、そんなに恐れてビクビクする必要なんかありはしない。よくしたもんでね。病氣をしてゐれば、酒も飲めず。酒も飲めなければ遊びに出かける氣にもならないからね。醫者の藥料くらゐは、それに比べると、わけはないもんだよ。何方にしても同じだよ。却つて安あがりだよ。何ァに、梅毒だッて、そんなに恐れるには足りない。例の六〇六號を二十兩も出して、注射すればけろりと治つて了ふぢやないか。病氣てへこたれるやうでは仕方がない』氣を負つた私は、ある時こんなことを友達に言つたが、しかしその金を病氣につかふよりも紅燈綠酒の間に消費する方がどれほど好いか知れなかつた。私は明るい室と美しい女とを想像した。

雨は晝頃から雪となつた。

『伊藤君、今日あたり、川の縁にでも行つてゐると好いね』
何も知らない同僚は私の傍に來て言つた。
『本當だね』
いつもなら、『一つ出かけるかな』と言ふのだが、私にはその元氣がなかつた。
『實際、今日は飮日だよ』
『さうだね』
『此頃行くかえ？』
『いや、もうすつかり意氣銷沈だ』
『今日は積るねえ』
『積りさうだね』
明るい豐かな頰をしたお酌のことなどを私は思つてゐた。同僚は私が煮え切らない返事をしてゐるので、そのまゝ話を別のことに持つて行つて、やがて向ふに行つて了つた。私は一日の仕事に勞れて、時間の來るのを待ちかねたやうにして外に出た。雪は盛に降つてゐた。
赤い友禪の縮緬の小搔卷をかけた行火や、川に臨んだ明るい灯や、夕暮の薄暗い空氣の中に白く見えてゐるかゝり舟の上の雪や、暗く淀んでたぷたぷと岸を拍つ夕潮や、狹い廊下からくつきりと拔け出したやうに鮮やかな姿を見せて入つて來る女や、さういふ光景は意地わるく私の頭に絡みついて容易に

離れなかつた。私は靜かに暮れて行く川そひの一間を眼の前に見た。

しかし何うすることも出來なかつた。私は降頻る雪に包まれながら、電車から停車場までの路を歩いた。プラットフォムの電車は明るく電燈にかゞやいてゐたけれど、それでも何となく暗い田舍に歸つて行くやうな氣がして堪らなくわびしかつた。郊外の停車場から家に行くまでの間は、雪はもう五六寸も積つて、垣添の竹は重く路に垂れ下つてゐた。家では、奧で子供の騷ぐ聲はしてゐた。しかし出て玄關に迎へるものもなかつた。私は酒も飮まず、ホソボソと飯を食つて早くから床の中に入つてさびしく寐た。女のことは矢張私の頭を離れなかつた。

泥濘の道は私のわびしい心に似てゐた。晴れた日があるかと思ふと、曇つた寒い日が幾日か續いた。アルハ零コンマの二と、明るい日にすかした硝子器と、わるいおくびの出る丸藥と、折れ曲つた銀色をした丸い棒と、汚れてきたなくなつた病室のカアテンと、赤いあかぎれだらけの手をした看護婦と、軍人のやうな大きな體格とをした院長と、それが私の細かい情緒や哀愁や煩悶にいつとなく雜り合ひて絡み合つてゐるのを私は見た。代診は機械でもあるやうに患者を呼出して、寐臺の上につれて行つて、手術をすまして、そして卓の上で、ペンで臺紙に藥料を書いた。

「何うでせう？」

と訊くと、

『さうですな。まだいけませんな』

素氣なく言つて、そして遠慮なく次の患者の名を呼んだ。

瓦甍を隔てゝ高く見えてゐる半鐘臺に人の影が小さく見えて、遠い火事を知らせてゐることなどもあつた。ある日曜日には、大きな名高い女學校が燒けて、電車の左の窓からは、到る處からその黑くもくもくとした烟が見えた。酒の飮めない私は、醫師の歸りに、わざ〳〵廻り道をして、大きな菓子屋で菓子を買つて行つたりした。

女に對する疑惑も私を落附かせて置かなかつた。手紙の往復だけはしてゐるが、それでは私には何うしても物足らなかつた。かうしてぐづぐづしてゐる間に、何んな大きな手が傍から出て來て、一刻の間に女を奪ひ去つて行くかも知れなかつた。私は遂に女の許へ出かけて行つた。

『一體、何うしたんですの？』

私は一伍十什を話した。女は笑つて、『だから浮氣をしては駄目だとあれほど言つたぢやありませんか』

『罰さ』

『そんなわるいことをするからだわ。一體、貴方はたちがわるい』

『だから罰だと言ふんだよ』

『好い氣味、好い氣味』

こんなことを言つて、後には女は笑つた。

日影の當る暖かい窓を私は其處に見た。そこから見わたした空はひろびろとしてゐた。一點の雲翳をとゞめない空には、自然の歡樂が滿ちあふれてゐるやうに思はれた。鳶は樂しげにそこに舞つてゐた。雀は喜悅を傳へるやうにチヽと軒端に集つて囀つた。女は逢はずにゐる間の出來事を種々と話した。ある女は立派な引祝をして大きな丸髷を結ふ身になつた。ある女は借金に首が廻らなくなつて、情夫と謀し合せて行衞不明になつた。ある女の旦那は、不渡の手形を書いて入牢の身となつた。私は天井を見てわびしく寐てゐる間にも、世間にはいろ／＼なことがあつた。

私達は茶を飲んで菓子を食つた。しかし私達は物足らなかつた。女は三味線を出して彈いた。しかしそれでも私達はまだ物足りなかつた。

『矢張、お酒がなくつちや駄目ね。飲んでも大丈夫ね、少しく。え？　飲む？』

『まア、よさう』

『本當？　本當によす？』

かう言つて笑つて、『ぢや、少しね。本當に少しよ。大丈夫よ、少しなら』

女は手を鳴して女中を呼んだ。

女中はさつきから、私の酒を飲まないのを不思議としてゐたが、笑ひながらその譯を女が話すと、女中は驚いたやうな顏をして、『まア、貴方が？　うそでせう。本當？　何處て、そんな浮氣をなすッて。』

「田舍ですとさ。これて、この人中々たちがわるいんですからね」

私は笑つてゐると、

「田舍はこわいねえ」

かう言つて、如才のない女中は急いて向ふに行つて了つた。

一二杯の酒も全身に沁み渡るやうに私には思はれた。私は段々輿に乘つて來るのを覺えた。私の前には、細かい松葉を敷き詰めた小さな庭があつて、葉てつゝまれた寒菊が憐れ氣にそこから首を出してゐた。椿の紅いのが冬枯のさびしい中に際立つて色濃く見えてゐた。

「さういふ時に、女には男がふいといやになるんですね。折角こつちて思つてゐるのに、そんな浮氣をすると思ふと、腹が立ちますとも」

女はこんなことを言つて笑つた。

私は性慾の發露の盲目的なのを今更に深く感ぜずには居られなかつた。その強い力に對しては病氣などは殆んど言ふに足りないやうなものてあつた。一方ては、またかういふ社會の女の大膽なのに驚かずには居られなかつた。私は自分のまだ知らない性慾の深い發展を見たやうな氣がした。「人間は實行すればどんな實行ても出來るやうに拵へられてあるんだ。」こんなことをも私は考へた。

そのあくる日の診察の時にも院長は別に何にも言はなかつた。いつものやうに硝子器を明るい方にすかして見て、いつものやうにそれを下に置いて、そして默つていつもの注藥をすました。

「別に、變りはありませんか」

かう私がきくと、

「段々好い方です。もうその中ブシーをかけるやうにしてあげませう」

院長はかう言つて、つゞいてあとの患者の名を呼ばせた。

ある朝、病院の門を出て、停留場に來て見ると、社の方に行く電車は、久しく來ないと見えて、其處に大勢人が集つて待つてゐた。此頃にめづらしいほど風の無い靜かな暖かな日て、やがて眼の前に迫つて來てゐる春のすぐ豫想されるやうな明るい日ざしが、化粧品商のシヤウウインドウにはなやかに照りかゞやいてゐた。並木の銀杏ももう靑く芽を出し始めてゐた。

ふと、私の眼は、其處に立つてゐる派手な女の後姿の上に留つた。女は長い髻を惜氣なく此方に見せて、頻りに其處に並べてある化粧品を見てゐた。何處か見たやうな橫顏だと思つて見てゐた私の觀察は過まらなかつた。

女はやがて私と眼を合はせて、丁寧に挨拶をした。それは川の緣にゐる女て、友達と酒を飮む時には私はいつも贔負にしてこの女を聘んてやつた。お酌の時分から私はよく知つてゐた。

私はその傍に行つた。

「此頃は何うかなすつて？　ちつともお出になりませんわね」

『少し、病氣をしたもんだから』
『それはいけませんわね。……それでもうおよろしいんですか。』
この女の笑顔には明るい晴れやかな表情が漲りわたつてゐた。
『横田君に逢ひますか？』
『え、昨晩、一昨晩逢ひました。貴君の噂もなすつてゐらつしやいましたよ』
『例の處で』
『え』
女は笑つたが、ふと思ひ出したやうに頭を曇を曇らせて、『貴方、まだ御存じないでせう。波ちやんのことを』
『波ちやんツて、小波？』
『え……』私の顏をちよつと見て、『本當に可哀相なことをしましたよ。』
私は胸の轟きを押へながら、『何うしたのだえ？　一體？』
『亡くなつたんですよ』
『小波が』
私は思はず聲を立てた。
『何時？』

「昨日、お葬式でした」

「何うしたんだえ、一體」

「先月あたりから、ぶらぶらしてゐたんですよ。それが急にね。血が一時に澤山下りたんですツて?」

私は驚かずには居られなかつた。川そひの柳の傍の新しい二階屋、そこに小波は姉の波子と一緒に住んでゐた。あの明るい頬の豊かな怜悧な姿がもう此の世の中にゐないのかと思ふと、私は堪らない悲哀の感に襲はれた。私は去年の暮に逢つたきりであつた。

そこに電車が續いて二臺來た。

私はその寺の深川にあることなどを聞てから、挨拶してそして別れた。私は電車の中でも、社の一間でも、食堂でも、應接間でもその日一日はその不仕合な少女を忘れることが出來なかつた。あの容色とあの藝とあの招牌と、如何やうに發展して行くことの出來る位置に身を置いたその少女の身の上を考へると、自分などは何うなつても好いとさへ思はれた。秋の晴れた日、友達と一緒に、その川ぞひの柳の葉の下を通つた時のことなどをも思ひ出された。その時、小波は朋輩のお酌と、不斷の扮裝で河の岸に立つて、人の釣をしてゐるのを見てゐた。ある時は、お座敷で酒に醉つて、『だつて、お客様が酒を飲ませるんですもの』こんなことを言つて、赤い顔をして、窓に凭つて苦しさうに呼吸をついてゐることなどもあつた。私は川の縁の明るい灯や三味線や色彩に富んだ光景を一々眼の前に繰返して描いて見た。

私は處々に水溜のある路を拾ふやうにして歩いた。停留場でその話を聞いてから、もう二三日經つてゐた。私は横田君から小波の話を何彼と訊いた。少女は懷妊してもう六月位てあつたらしかつた。流産から來た出血は、時の間に若い美しい生命を奪ひ去つて了つたのてあつた。その臨終には少女の惚れてゐた役者なども來てゐたといふことてあつた。『私は、知らせて來ましたしから、葬式に行つてやりました。本當に可哀相なことをしましたよ。あの人なんか、これからなんてすからネ、これから何んなにても發展して行かうといふ人なんてすからね。惜しう御座んしたよ。それにしても、あゝいふ人の旦那になつた人も氣の毒てすね。丁度來てましたがね。何ても横山町の大店の若旦那か何かて、まだ若い人てしたよ』こんなことを言つて横田君は靜かに落附いた調子て笑つた。歸りに、一緒に行つたあるお茶屋の女中と、川そひの鰻屋て、雨を見ながら酒を飲んて來たといふ話などをした。其處ても私は少女の墓の所在を訊ねた。

『法善寺といふ寺はこの近所にありますか』

私は電車を下りてから二三度訊いた。蕎麥屋ても聞けば、交番ても聞いた。私は漸くその寺を多い人家の中に發見した。

私は其寺に入つて行つた。路はまだわるかつた。大きな樹の根元には、一週間も前に降つた雪が汚く塵埃に塗れて殘つてゐたりした。私は寺の傍に雨にぬれて色の褪めた赤い青い作り花の置いてあるのにすぐ眼をつけた。

私は親や姉や朋輩などの涙を想像した。雨の降頻る中を衝いて——靜かにやつて來たぬれた作り花の色彩を想像した。車から下りる美しい人達の姿をも想像した。

『此處で二三日前に葬式をした女の遺骨はまた此處に置いてありますか』

玄關に出て來た若い僧は、私の問に應じて、私をすぐ本堂の方へ案内して與れた。遺骨は位牌と共に本堂の暗い隅の方に置いてあつた。線香の烟は靜かに薄暗いしんとした空氣の中に細く颺つてゐた。

古い鎌倉時代の本堂と、寂然とした佛像と、赤く黒く光つた大きな木魚と、薄暗い空氣とは、私の心を靜かな世界に伴れて行くに十分であつた。私は男と女との色彩の奥に横つてゐるさびしい境を想像して限りなき哀愁に胸は塞がるやうな氣がした。私は線香を一本手向けて祈念した。

若い僧はもう其處にはゐなかつた。私はそのなつかしいさびしい空氣の中にもつと長く浸りたいと思つて、その傍にあつた床几に腰をかけた。

何といふ矛盾が此の人間の心には横つてゐるだらう。私はこんなことを考へた。川の線の明るい灯とこのさびしい本堂とそこに何の交渉があるだらう。このロマンチツクなセンメンタリツクな情緒と、この朝の零コンマの二と何の連絡があるのだらう。種々な事實と種々の感じとは、唯その物の「あらはれ」が醸して來るばかりで、全體には何の連絡も何の交渉も持つてゐないのではないか。私は靜かに深い深い瞑想に耽つた。

暫くして本堂を出た私は、全く別世界から別の世界へと出て行くやうな氣がした。境内にある一軒の

貧しい家では、娘が盥を出して洗濯などをしてゐた。

寺の門を出て電車に乘つても、私の心は矢張深い哀愁に塞がれてゐた。いつもの女の方へと電車は走つて行つてゐるけれど、常のやうな喜悅と憧憬とは何うしても起つて來なかつた。歡樂に面するには私の心は餘りに眞面目すぎてゐた。私は灰色の世界を見た。美しいもの貴いもの世界に稀なるものは皆な早く亡びて過ぎ去つて了つて、汚いもの醜いものイヤなものばかりがこの世に長く殘つてゐるやうに私には思はれた。電車の中の人の顏も、町を歩いてゐる人の顏も皆な青く汚くわびしげに見えた。暗い影に襲はれて絕えず喘いでゐるもののやうに感じられた。ふと氣が附くと、電車は川の緣を走つてゐた。日影は鼠色の雲の間から、わびしく線を成して水の上に落ちてゐた。たぷたぷと潮の滿ちた中には、青いペンキ塗の小蒸汽が靜かに呼吸を刻むやうにして通つて行つてゐた。

都會の雜音が私の耳を强く刺激した。

春をすぐ前に置きながら、大きな木の枝も撓むやうな雪が頻りに降つた。それはいつになつたら、暖かい春は來るのであらうかと思はれるほどであつた。郊外の垣添道に萠えた青草もすつかり雪に埋められ、啼き始めた鶯も聲を收め、竹叢は薙ぎたやうに倒れ伏した。私は蝙蝠傘を傾けて、停車場から郊外への路を步いた。

わびしい日は續いた。一日晴れてまたあくる日は雪が降つた。都會の路も乾いてゐるひまはなかつた。

電車通ては人足が頻りに雪をかきよけてゐた。

もう私はブジーを使ふやうになつてゐた。『この病氣は根治するまでやつておかないといけません。少しても菌が殘つてゐると、また時候の變り目なんかには出て來ますからネ。もう少しやつたら、顯微鏡て見てあげます』院長はこんなことを言つて、看護婦の手から白く光る曲つた銀の棒を取つた。

私は體のすべての戰へるやうなイヤなイヤな疼痛と戰慄とを感じた。『痛みますか』かう言つて院長は靜かに巧に銀の棒をつかつた。私は唯手術臺に載せられたあはれな患者であつた。

『まだ、一號は駄目だ。……』

私は其處てはもう種々な人達に懇意になつてゐた。代診の一人は、私に戯談を言つたりした。天氣の好い明るく晴れた日には、深く閉ぢ込められた暗い窖の中から、自分の體が次第に浮び出して行くやうに感じられた。『何も憂ひたり悲しんだりすることはない。世界中には歡樂が滿ちてあふれてゐる。我々の取つて遊ぶのにまかしてゐる。偶々傷いたり、躓いたりすることがあつたとて、それで悲觀する必要はない。』こんなことを考へて歩いて行く私の體には、昔の元氣が次第に芽を吹き出して來てゐるのを覺えた。

藥局の隣は、院長一家の住んでゐるところてあつた。奥にはまだ三間位あるらしかつた。注藥後の疼痛に堪へかねて、何うかすると、私は長い間厠に入つてゐることがあつたが、そこから奥の女の笑聲がをりをり洩れて聞えた。ある時は琴の音などが靜かにしてゐた。私は肥つた大きな院長の細君をいろい

ろに想像した。ある時は玄關から奥へ入つて行く後姿だけを見たことがあつたが、しかし遂にその顏に接する機會を得なかつた。私は唯やさしい靜かな口の利き方をする冴えた若々しい聲だけを聞いた。

『先生、お子さんはおいくたりです？』

ある日、私は訊いて見た。

『二人ゐますよ』

『坊ちやんですか』

『イヤ、皆な女で、』

かう言つて院長は大きく笑つた。

ところがある日玄關にゐると、綺麗に仕度をして、そして奥から出て來た中年の女があつた。意氣な束髮に結つて、帶など立派なものをしめてゐた。小柄な若い綺麗な細君であつた。

あとで、書生に、

『あれが、奥さん？』

『は』

書生はかう言つて私の顏を見た。私はあの大きな體格をした院長とひきくらべて思はず微笑した。

ブジーは一週間ぐらゐつゞいた。私は病氣は段々よくなつて行つた。今回は看護婦は、小さな電氣器を取出して、その線を銀の棒の先に結び附けた。

『伊藤さん、感じすぎますか』

看護婦はこんなことを言つて薄々笑つた。

長い廊下ももう暖くなつてゐた。始め通つて來た時分のやうに、ぴつしやり閉めて置くやうなことはもうなかつた。家の角にある柳は青く芽を吹き出して、庭の梅は白く咲き過ぎてゐた。時には大手術をやるといふので、看護婦がバケツに澤山水を汲んで來たり、器械を卓の上に並べたり、寢臺のシーツを取かへたりしてゐた。晴れた日影の下に、顯微鏡が長い間そのまゝに置かれてあることなどもあつた。

ある日、代診が、

『伊藤さん、伊藤さん』

と呼ぶので、其方へ行つて見ると、代診は私にその顯微鏡を覗かせて、『そら見えるでせう、黴菌が――』

『何れです？』

『そら、そこに、すぐ前に、紫の色をした流動物があつて、その中に小さい黒い胡麻粒のやうなものが見えるでせう？』

『紫の色はよくわかるですけれど――』

『見えないですか、ちよつとお見せなさい』かう言つて、自分で覗いて見て、『それ見えるぢやありませんか、黒く、細く――』

再び覗いて見た私は、

『あゝ見えました』

から言つて、『あれが黴菌ですか』

『え、さうです、あゝいふのが無數にゐるんです。』

『不思議なもんですな』

私は凝と深く見入つた。白い色の中に紫の色があつて、その中に黑い小さな斑點！ 私は不思議な氣がした。

『あの紫は何です』

『あれは毒です』

『ぢや白いのが本當なんですな』

『え、さうです』

代診は笑つてゐた。日影は麗らかに廊下を照した。

庭の沈丁花はもう咲きすぎてゐた。

その花は私の性慾の狀態にある反映を持つてゐるやうに私には思はれた。寒い空氣の中に强い香氣を放つて、段々花を開いて行くさまはいつも私の心を惹いてゐた。私は床から辛うじて身を起して、新鮮の空氣を吸ふべく庭に下りた時、寒さとさびしさとが全くあたりを領し盡し時、風が凄じく梢を鳴し雪

が夥しく野山を埋めた時、私はその厚い緑の葉の下にかくれて花を開く前の強いかをりを四邊に漲らすのをなつかしくも力づよくも思つた。歡樂も色彩も何も彼も跡を絕つた其時にあつては、その芳烈な匂ひのみが私の唯一の慰籍であつた。私は遙かに歡樂の境をその匂ひの上にのみ想像した。

私はその時分、かう言つて妻に賴んだ。

「お前、沈丁花を一枝折つて、此處にさしておいてお吳れな」

妻はすぐ硝子戶をあけて、花鋏を持つて庭に下りて行つた。白い手をのばして枝を斫つてゐる妻の姿は、硝子戶からそれとはつきり見えてゐた。

「まだ、花ッていふほど花になつてをりませんよ」

かう言ひながら、妻は二枝三枝を小さき花瓶にいけて、それを卓の上に置いて吳れた。その高い香氣は忽ち私の病室に漲りわたつた。

深夜ひとり女の夢からさめた時など、その匂ひは何んなに私の寂寥を慰めて吳れたか知れなかつた。その花は室内の日當りの暖かさに、忽ち開いて散つて了つたけれど、庭の方の花は、長い間雨にぬれたり日に照されたり雪に埋もれたりして今日まで咲き續いて來た。私は夕暮の散步に、白く地上に落ちてゐる花を見た。

竹籔の奥に鳴く小鳥の聲なども日增に多くなつてゐた。鶯は再び好い聲を張り上げて春の歌をうたつた。來さうにしてゐて容易に來なかつた春も遂に來た。垣添道の草には細かい黃い花などが咲いた。

「やうやう春になつた」

こんなことを妻は言つた。私は長い間の病氣を振返つて考へて見るやうな人であつた。元氣の日に增るにつれて、血色なども次第によくなつてゐた。派手なネクタイをして、頭髮を綺麗に梳いて、私は每朝鏡に顏を映して見た。

『もう確かなもんだ。もう全治するのもすぐだ。今日でもう電氣をかけてから十日になるからな。明日あたり顯微鏡で見て貰はう』

私がかう言ふと、妻は、『でも、本當に今度は用心しなくつちやいけませんよ。貴君だッて痛い思をしてつまらないぢやありませんか』

『大丈夫だよ。あの時だッて、少し注意すれや好かつたんだ。病氣なぞを氣にしてゐては何にも出來きやしない。』

『すぐあゝだから、男は仕方がない。あの苦んでゐた顏つたらなかつたんですよ。あの時のことを忘れては駄目ですよ』

『大丈夫だよ』

私は笑ひながら元氣よく言つた。

檢鏡の結果、いよ〳〵黴菌がないといふことを聞いた時には、一層元氣づいて、私は町を步いた。明るい燈や、白い女の笑顏や、罎の中に湛へられた酒や、美しい女を乘せて勢よく通つて行く自働車や、さういふものが皆な新しい色彩と新しい意味とを持つて私に迫つて來た。町を行く人達は皆な嬉々とし

て春の光に浴してゐるやうに見えた。憂愁や煩悶や悲哀は何處に行つたかと思はれた。

私の心は次第に歡樂と色彩とに向つて波打ちつゝあつた。Wine, Song and women からある女の扇の裏に醉つて書いたことなどを思ひ出してゐた。私は生の力の大きいのを今更に感ぜずには居られなかつた。わびしい二階の灰色の待合室や、不愉快な汚れたカアテンや、注藥後の長い疼痛や、さういふものはいつか全く私の頭から離れて行つてゐた。花の噂が人達の口に上る頃には、私の體は全く飛ぶ鳥のやうに自由に輕くなつてゐた。私は彼方此方の濃い色彩を想像した。多勢の女は再び私の前にあつた。

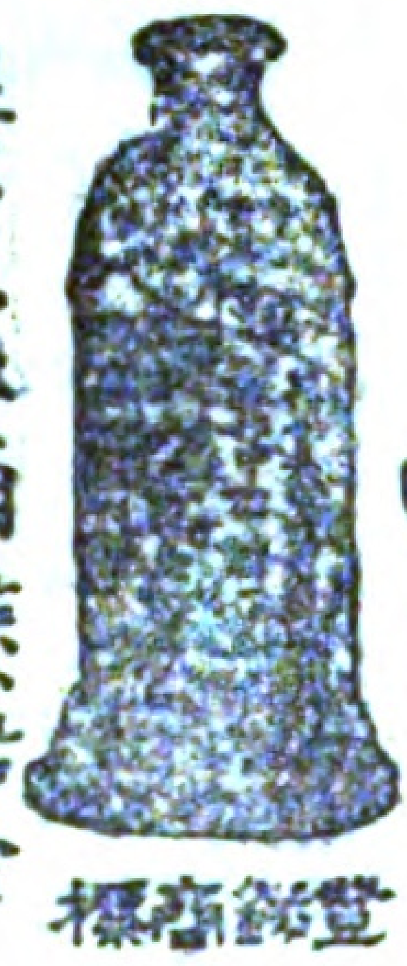
此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

主治効能

神經衰弱諸症―腦神經衰弱―不眠症―消化器衰弱―胃擴張―胃下垂―常習便秘―消化不良―營養不良―生殖器衰弱及無氣力―遺精―夢精―早漏―遺尿―慢性腎臟炎―糖尿病―一般內臟の衰弱―諸神經痛―坐骨神經痛―神經性頭痛―顔面神經痛―腕部神經痛―リューマチス―腰痛―脚氣

婦人諸病―ヒステリー、貧血、月經不順、子宮病、憂鬱、脊髓、中氣、產後及病後一般の衰弱……（說明書無代進呈）





奇効可驚

アクチナ

主治効能　眼、耳、鼻、咽喉、船暈
頭痛ニ奇効を奏す
（說明書無代進呈）

サンデン電氣帶

◎電氣醫療感電機（一名あんま器）

●定價（大形 拾六圓／中形 八圓／小形 六圓）

荷造送料（內地 六十錢／領土 八十錢）

◉本器はリューマチス、神經痛、麻痺腰痛、中風、頭痛、神經衰弱、肩凝等一般筋肉ノ疲勞血液ノ不循環等ニ特效アリ其他美顔術用トシテ「バイブレーター」ト同樣ノ効果ヲ有スルヲ以テ電流ナキ地ニ於テ紳士淑女ノ愛好ヲ受ケツヽアリ（說明書進呈）



營業品目

●電話●電鈴●表示機●避雷針●醫療用感電機●電池類●電球類各種●電線類●電燈花笠各種其他電氣に關する一切の諸器具卸小賣並に設計

●本店（東京市京橋區尾張町二丁目（銀座通東側）
電話新橋二四二二番…振替東京一八四七三番

●支店（大阪市東區心齋橋筋博勞町南入西側
電話二二〇五番…振替口座大阪七三四四番
橫濱市吉田町一ノ二九…電話一九三一番

サンデン電氣商會

（中付四の一）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

我國現下の財政を永遠に救ふべき良劑

富國强兵は國民の貯蓄心の强弱と其機關の適否完缺にあり

ドクトルオブフイロソフイー ジェームス、ハミルトン原著 三上正毅纂譯

最新刊

貯蓄と其機關

全一冊 四六判洋裝函入體裁頗斬新紙數三百數十頁餘 **定價金壹圓** 郵税金十二錢

墺塞の干戈は今や全歐洲を擾亂せしめ尙且東洋にも波及するに至れるの時貯蓄心の養成を感ずるや切なり。

今各國兵の强弱は暫く之れを他に讓る、如何に强兵ありと雖も國富之れに伴はざれば最後の勝利や徒らに豎子の名をなさしむや必せり。

普佛戰爭に敗れ五十億法の賠償金を奪はれたりし佛國が今日世界の資本金として英と併立し。其巨額の賠償金を得たる獨逸が今や世界の借金國の一に擧げらるゝを見れば凡夫も猶其原因が佛獨兩國民の貯蓄心の强弱にありしを想像するに易からむ。

然るに本邦の現狀を見るに其機關の設備に於ては缺陥の點枚擧に遑あらず、其手續の如きも手數を勞する事夥く一旦貯蓄心を起すも餘りに不便を感ずるが故に之れが實行を倦ましめ以て其効不成に終るの結果を齎す事多し。

茲に於てか著者を勞し今日此書を至し而して現下の缺を補ひ其改良に其實行に資せしめ國民の貯蓄心を激增せしめ富國强兵の淵源を作らむとす。

今や燈火相親しむ讀書の好季に際す
乞ふ一本を座右に備へ後慮の憂ひ無からしめ！

貯蓄は國富を至し國富はやがて
强兵を生むの泉源たり。

産業の興廢は工場管理の巧拙にあり

神田孝一著

菊判總クロース洋裝函入體裁頗優美 寫眞版數葉挿入 紙數六百有餘頁

好評三版

實踐 工場管理

全一冊 **定價金貳圓五十錢** 郵税金十二錢

目次大要

工業界の良寶庫

今や我國は工業を以て國家富强の大本たらしむべき機運に際す、然るに世上工業に關する學理の書尠からずと雖も未だ實踐の書を見ず、本書や之れが先覺者たり。本書の特色たるや著者が多年親しく淀橋工場に於て工場管理の任に當り、其經驗と研讚とに基き其目次に示すが如く工場管理に關する一切の必要題目を網羅し來り、學理と實踐と相俟つて其要項を詳解細説し着眼常に實際を離れざると工場法の規定を適當の場所に點綴し之れに簡明なる説明と批評とを加へ實務家の參考に供し且附録には社會政策並に共濟組合に關する事項を揭げ巻末には工場法を附し、實務家をして之れが解釋應用に便ならしめ以て現下の缺陥を補ふ事に努め、殊に當事者の最も研究を要すべき職工の生計及勞銀問題に就ては之れを周密に解説せり。故に世に工場經營者管理者並に監督者は勿論、苟くも工業經濟に志ある人士は之れを熟讀玩味し其研究と經營に資する所あらば、以て自家を利し且國家を益さむ！敢て薦む

斯業實業家必携の絶好なる活指針！

(中付四の二)

發行所 東京日本橋區本石町二丁目 光文館 電話本局一六九八番 振替東京五六一三番

九月廿日發行　寫眞四十二枚從軍觀戰の思あり

實業之日本秋季增刊

世界大戰寫眞號

大附錄　**交戰地明細地圖**　三頁大四色刷最精密

◎極彩色版に……六色刷三頁大の各國陸軍競べ及び三色寫眞文戰國の元首

▲獨軍激戰は……戰線に立てる獨軍及びモルトケ騎兵實擊等

▲白軍激戰に……リエジ大要塞の構造全景

▲佛軍激戰は……大軍巴里出發の雄姿其他

▲露軍激戰に……露國大騎兵の猛擊等

▲英軍激戰は……大艦隊の威壓、槍騎兵の突破其他

最近着到戰時寫眞網羅

▲飛行機戰に……巴里を震駭せしめし獨飛行船の雄姿其他

▲我出征軍は……勇將猛卒踊躍征途に上る其他

▲我飛行戰に……爆彈投下の決死飛行隊壯擧其他

▲全歐熱狂は……各國宣戰の際の民衆熱狂殺到の光景其他

▲青島攻擊に……大艦隊封鎖砲擊の爲の出動の壯觀其他

◎本文記事は……戰記軍事外交國民性等を八十頁に詳述す

價廿貳錢同種出版中**最低廉**　眞に絕好の大記念

(中付四の三)

發行所　東京南紺屋町　**實業之日本社**　定價一年三圓廿錢　振替口座三二六番

和蘭ライデン大學前教授
文學博士 ケルン博士原著
南條文雄師校閲

曹洞宗大學講師 立花俊道先生譯

新刊 ケルン氏 佛教大綱

索引廿四頁
洋裝美本四百廿頁
ケルン博士肖像入
正價壹圓八拾錢
送費十一錢

最も簡明なる全佛教的の組織的解説書

曩に梵文法華經を對校して、我南條博士と共に出版せられしケルン博士が、泰西に於ける當時隨一の佛教學者たるは識者の公評ある所。而して同博士が斯學に關する博大深遠の蘊蓄を集大成せられし本書が、如何に貴重すべき思想界の至寶たるかは亦言を須ひざる所とす。しかも原本は英佛獨語希臘語梵語巴利語西藏語等に亘り頗る難解なるを憾みとし、譯者多年の精力を傾注して飜譯の難事業に當り本文は勿論、無數の脚註に到る迄些毫も省略する事なく詳解して、加ふるに南條博士の嚴密なる校閲を以てせらる。最新の科學的智識を以て、最も簡明に、組織的に佛教を解説せる事本書の如きは眞に其類を見ず。矧んや索引は實に『佛教辭典の用を爲すをや。宗教界思想界の至上寶典として一本を薦む

文學士 安倍能成先生譯

オイケン 大思想家の人生觀

美本七百五十餘頁
正價參圓五拾錢
送費十六錢

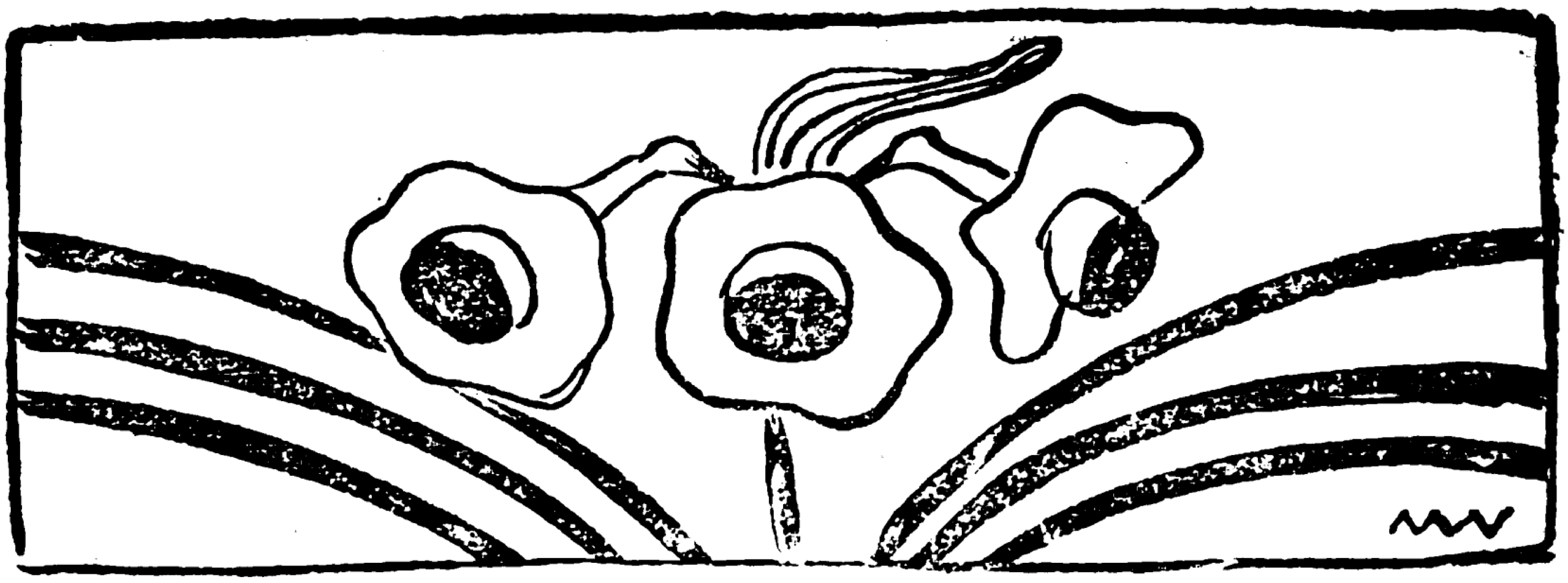
文學博士 桑木嚴翼先生著

增訂六版 哲學綱要

美本四百三十餘頁
正價壹圓八拾錢
送費十二錢

發行所 東京牛込見付 東亞堂 電話番町五三七 振替東京一七一一

(中付四の四)



妙齢

田村俊子

母と娘は毎日のやうに爭つた。母は娘を憎み、娘は母を怨んだ。何うすれば母の機嫌が直るのか娘には分らなかつた。一日一日と母の氣はむづかしくなつて、娘の爲ること、云ふことに、一々感情を損ねた。そうして怒りつけた。母は殊に、娘が蓮葉になつて、立居ふるまいが荒々しくなつたことを咎めた。浮ついた擧動を憎んだ。

だが娘には自分の樣子が母が怒るほどに浮ついてゐやうとは思へなかつた。自分は朝に晩に悲しんでゐる。ある悲しい事一とつを思ひ詰めてゐる。その自分が何うして蓮葉でゐられるだらう。自分はそんな心持ではない。自分は此家へ歸つてから聲を出して笑つたことさへない。

それだのに自分の鼓動が浮ついてると云ふのである。娘には母の心が解らなかつた。

娘は悲しかつた。夫(をつと)が戀ひしい時娘は一層悲しかつた。夫が戀ひしくて泣く時は、娘は三疊の暗い室に入つて、古机の蔭にかくれて悲しい涙を絞つた。この涙を母に知られては、どんなにか怒られると娘は思ひながら、母にかくれて泣いた。

夫を戀ひしく思ふと云ふ事は、娘は誰れにも云へなかつた。兄にも、父にも、弟にも云へなかつた。夫その人へも云つてはやれなかつた。その人の許へ再び戻れるか戻れないか、まだ分らない間柄てあつた。娘は勝手にその人へ手紙を送ることもてきなかつた。

娘はたゞ、思ひ出して泣くより仕方がなかつた。嫁入りしてからたつた三月(みつき)の間の思ひ出が、娘にとつてはどんなにか美しく、濃く、華やかなものか知れなかつた。娘は日を數へて見た。七月の十日から九月の二十二日まで、七十三日あつた。娘はその日、その日の思ひ出を一とつづゝ辿つて、思ひ出しては泣いた。

夫は優しかつた。そうして自分を愛してくれたと娘は思つた。夫の冴え〴〵とした眼は、七十三日の間、絶えず自分ばかりを見守つてゐてくれたやうな氣がした。娘は夫のあの眼に、もう一度ぢつと見守つて貰ひたくて泣いた。

娘の家の庭には、桃色の芙蓉と、薄鴇色の萩とが咲いてゐた。娘は芙蓉の花の下や、萩の叢の中に、秋の蟲のやうに隠れては男の眼を思ひ忍んだ。娘の唇は花の影に冷めたく結ばれてゐた。娘は花を挘つて、唇に花片を押付けながら夫の唇を思ひ忍んだ。芙蓉の花は毎日娘の手に捲られて散り失せた。ぽつかりと膨らんだ色濃い花の形が、娘の心を赤く惑はした。秋の日射しがちろ〳〵と屋根の瓦に流れて、

花の色を紅ににおませてゐる庭に潜んで、娘は慰みにした。娘の頭髮の上に、秋の梢の葉はこまかに揺れてゐた。日が暮れても娘はその中に佇んでぼんやりとしてゐる時があつた。

娘の嫁入りした東京の佐野と云ふ家では、その姑が娘を大切にしなかつた。娘を下女代り同樣に働かせたと云ふことが、實家のものゝ憤りの因になつた。母は殊に、實家までを侮られたやうに思つて氣を損ねた。眉目も美しく生れ、髮も美しく伸び、親は身分に似合はない高等の教育までも娘に授けてやつた。寳にも代へられない娘を、所望されたまゝに十七で嫁入らしたのである。先きではその新嫁を寳のやうに大切にはしなかつた。

その模樣が自然に實家のものゝ耳に傳はつてきた。

「お宅のお孃さんか、髮も何もちらばらにして、坂道を大きな風呂敷包みを下げて行つたのに逢ひました。」

と東京ではからず娘を見かけた人が、歸國した時わざ〳〵知らせに來た。實家では、娘の兄を緣家へやつて、娘の日常の樣子など探らせた。兄は家に歸ると、身慘めな妹の樣子を委しく親たちに告げた。

姑が何彼につけて二人の間にやかましく言葉を挿んでゐると云ふこと、朝からでも二人が膝を付け合つて話をしてゐれば姑の氣に障つて、娘はつけ〳〵と小言を云はれると云ふこと、娘たち夫婦の室が、姑の室から見通しだと云ふこと、夜中に電氣を消せば、姑に叱られると云ふことなどを、娘は兄に打ち

明けた。家のなかの掃除は娘が一人して受け持つてゐた。娘が行つてから下女にも暇をやつて、臺所ごと一切から洗濯まで娘は一人して働いてゐた。毎朝々々、不浄場の掃除を缺かしてはならなかつた。娘は朝は五時に起きて、夜は十二時過ぎまでも姑の伽に起きてゐなくてはならなかつた。遠方まで娘は幾度でも使に出た、娘は髪を飾つたり、顔を美しく裝つてゐる暇などはなかつた。娘は痩せて、衰へて、服装にも構はずに働いてゐた。娘は疲れて、四肢の血がいつも痲痺れながら戰いてゐた。覺めてゐるのか、眠つてゐるのか分らないやうな、もや／＼した時間が夜となく日となく續いた。

「私は疲れてゐて、粗忽ばかりする。」

と娘は兄に云つた。兄は親たちにそれを一とつ一とつ話して聞かせた。

打つ捨つておけば、娘は病氣になると云つて實家の親たちは心配した。實家では、母がひどく病つてゐると云ふ文面で、娘を佐野から呼びよせた。

實家から不意に呼ばれて、娘は歸らなくてはならなかつた。母がひどく病つてゐると云ふことが心にかゝつた。姑は嫁を立たせてやる時、途中の小使まで心付けて嫁の紙入れに入れてやつた。嫁入りしてから娘は多くの衣類を作つてもらつた。それを鞄に入れて、姑に挨拶して、娘は夫に連れられて停車場まで行つた。汽車が出る時、夫は娘の顔を見て微笑した。娘も夫の顔を見て微笑した。その微笑が直ぐに消えて、夫は淋しい顔をした。娘は遠のいた夫の方を見て丁寧に頭を下げた。夫はそれに輕く會釋した。夫の姿はそれぎりで見えなくなつた。

家に着いた時、娘は父や母が戀ひしくて、淚がほろ／＼と落ちた。住み馴れた庭向きの八疊の座敷に

座つて、兩親に言葉をかけられながら娘は泣いた。娘は窶れて、見る影もなかつた。母は娘の姿を見ると、涙をこぼした。

娘は親たちに聞かれるまゝに、嫁入つてからのことを話した。當人の口から聞けば、さまでにない事にも、一層母は口惜しかつた。

「お前も馬鹿だ。」

母は然う云つて娘を罵つた。娘の嫁入りした先きは、三十年ほども古るい以前の、娘の父の知人であつた。その頃佐野の父は、娘の父の官の下に使はれてゐた。母はその恩故を嫁入る前にも娘に云つて聞かせた。今でこそ主人は亡くなつても佐野には財が殖えて、富裕な生活をしてゐるものゝ、三十年の昔には父の下に使はれてゐた小役人だつたと母は娘に聞かせた。

「云はゞ主筋の娘ぢやないか。」

と母は烈しく怒つた。

「お前はお父さんやお母さんの體面を忘れたんだ。あんまり意氣地がなさすぎるぢやないか。姑にそんな目に逢ひながらも、あんな家に居なくてはならない事はないぢやないか。お前はお父さんやお母さんを馬鹿にされながら平氣でゐたのだ。佐野のお母さんは私たちを馬鹿にしてゐるのだ。お前を大切にしないと云ふのは、私たちを見縊つてゐるからだ。」

母は身體を震はして怒つた。娘は二度と佐野へは歸さないと母は云つた。娘を引取りたいと云ふ手紙が、實家から佐野の家に直かに送られた。

娘は悲しかつた。不意に佐野へ歸されなくなつたことに失望した。娘は佐野へ歸りたかつた、娘は三疊にはいつては、幼馴染の夫との急の別れを思つて獨りて泣いた。

自分が姑に下女はしたの樣に酷く使はれたことが、自分の親たちを恥しめることにならうとは娘は思ひも寄らなかつた。自分は嫁入つた日から佐野の家の人になつたのだと思つてゐた。佐野の家の生活は、實家とはまるて係りのないものだと考へてゐた。佐野の家の爲に、働くことは自分の爲に働くのだと思つてゐた。

娘は利發であつた。眞實の親たちへ對する愛情を、姑の前では決して露にしなかつた。眞實の親の愛を姑に見せないことが嫁の務めだと思つてゐた。務めと云ふことを娘は大切に思つた。

こんな事は、誰れが教へたのでもなかつた。嫁入つてから、姑の前で親たちの噂をしたり、稀に親たちへ手紙を一通書いても、姑の機嫌がよくはなかつた。娘の利發な性質は、その姑の心を解んで、そうして嫁の義理の務めと云ふことを、自然に娘は會得した。娘は決して實家へはしけじけと手紙で認めなかつた。それと同時に、眞の親たちへの愛の務めと云ふことも娘は考へた。月に一二度でも、實家の親たちの機嫌だけをたづねてやつた。娘は佐野の家の事などは、一と端でも迂闊に漏らしてやるやうな事はしなかつた。兄が來た時、娘は遂、眞身のなつかしさに、一とつ二たつ打明け話をした。――眞身の親たちは、それてすべてを了解してくれて、許してくれるのだと娘は思つた。

それが母の氣に入らなかつた事を見出して、娘はしみじみと悲しかつた。嫁入りしてから、娘が一度も細々とした消息を實家へ送らなかつた事を、母は娘に怒つた。實の親たちへ消息することさへも姑に

氣を兼ねると云ふことはない。嫁入りしても實の親は親である。その親を忘れると云ふことはない。姑と實の親と何方がお前には大切なのだと、母は云つた。

姑の機嫌に叶ふやうに務める爲に、實家の親を粗にした娘の心根が、母には憎かつた。

「お父さんやお母さんを忘れはしません。何所にゐても決して忘れやしません。」

娘は母に云つたけれども、母はきかなかつた。娘が佐野にゐて、朝夕姑に媚びたり阿諂つたりしてゐたことが腹が立つた。佐野へ嫁つてから、佐野の家のものに、好い樣にされてゐた娘が憎かつた。母はその怒りの感情を、ぴしぴしと娘に投げ付けた。

云ひ解かうとするほど、母は猶更、娘を思ひ誤つた。娘は默つてゐた。娘はたゞ夫が戀ひしかつた。夫を戀ひしく思ふことばかりに娘の心は眩んでゐた。三月の間の經驗は娘にさまざまな智恵をつけた。娘は誰れとも物を云はずに、三疊の暗い室にはいつて物思ひに暮らした。

夜るになれば、夫のあたゝかい抱擁を娘は心でまさぐつた。娘は眠られなかつた。夜徹し眠られなかつた。曉方になつてはうつうつと眠つた。床を出て、ぼんやりと井戸端の傍に立つのが、毎朝十時を過ぎてゐた。

娘は幼少な弟や妹が煩さかつた。三疊の襖を締めきつて、幼少なものを入れないやうにした。

母は娘の一とつ一とつの擧動が癪にさわつた。しどけなく扱帶の端を引摺つて遲く床をはなれてくる娘を見ると、母は、

「その風はなんだ。宿場女郎見たいな。」

と叱りつけた。母の眼には、娘の踵の肉までが淫らに見えた。母はある晩、皆が寐鎮つてから、三疊の襖の外に立つて、そつと室内の氣勢を立聞きしたりした。

娘は新婚の紀念の寫眞を持つてゐた。娘の島田の毛は、ふさ〳〵として鬢が張つてゐた。花笄の先きが見えた。裾模様の裾を曳いて、娘は腰をかけてゐた。夫の秀之助は、その傍に羽織袴で立つてゐた。夫は平常より老けて寫つてゐた。髭が娘にはなつかしかつた。娘は寫眞を取り出しては眺めた。盛粧して並んでゐる晴れの姿の二人の蔭に、娘の心の狂ふやうな、愛の抱擁が娘の眼に動いてゐた。娘の全身が愛で痲痺れ、愛でおのゝいてゐた。娘は寫眞を取り出す度にかつとして血が上つた。娘は寫眞を出しては眺めた。夜の床の中でも、娘は灯りに透かして眺めながら寐た。寫眞が夜着の下に挿んであることがあつた。ある日に、その寫眞を母に取り上げられた。

娘は齒を病んだ。白い洋傘をさして、堺を廻つて流れる小さい流れに添ひながら、娘は町の齒醫者に通つた。紫の龜甲絣の銘仙の袂が、長く路傍に搖れて、秋の日が淋しくうつろつてゐた。流れには青い空と白い雲が映つてゐた。娘はその流れの水を眺めながら歩いた。蟲が鳴いてゐた。風の音が娘には悲しくて堪らなかつた。遙かに、はなれたところに居る人のなつかしい愛を娘は思つた。齒醫者の門をはいる時、娘の眼瞼には涙が浮んでゐた。

媒介人から返事が來た。何う云ふ間違ひか知らないが、佐野の母は非常に立腹してゐるので、落着い

た相談もできないでゐる。その内秀之助とも計つた上で自分が參上する、と書いてあつた。それまで和子さんは預つておいていたゞきたい。と云ふことであつた。父は、再び先方から和子を取り戻そうとする時に、こちらから持ち出す條件などを考へてゐた。母はそんな話には乘らなかつた。決して佐野へは歸さないと定めてゐた。佐野の母が自分たちの前に來て、手を突いて詫びない限り、娘は彼の人等の手に決して渡しはしないと云ひ張つた。娘に酷くした佐野の母へ對する恨みは、中々消えるところではなかつた。佐野の母の立腹と云ふことが、どんなにか母の心にさわつた。

「一度嫁入りしてから、もう一度他へ緣付くと云ふことは世間にはいくらもある。今の内に思ひ切つてしまはないと、お前の行末の爲にならない。まだお前は十七だから。」

と云つた母の言葉を、娘はさもしく聞きながら、何も云はずにゐた。心では、佐野との緣が切れゝば二度と嫁入りなどはしないと、娘は覺悟してゐた。母は、娘が身重にでもなつてはゐないかと、それを心配してゐた。

娘は自分の母がいやで堪らない日があつた。母には物を云ふことも厭な日があつた。心の底で、四十を越してからも、子などを生んだ母を嘲笑つてゐるやうな時があつた。その大きい乳房の下がつた、眼尻が皺んで三角になる母の顏や姿が、娘には壓しつけられるやうであつた。娘はこの世界中に、母のやうな厭はしい人はないやうな氣がした。

二人は些細なことに云ひ爭つて、罵られたり、泣き聲を立てたりした。幼少いものは、姉の傍に行けば、泣いて母のところへ歸つて來た。

「姉さんの傍に行くのではない。どんな事をされるかわからない。」

母は態と娘にあてこすりを云つた。然うして幼少いものを、決して娘の手に預けなかつた。娘は思ひに鬱して、身體は働くことができなかつた。うつら〱と秋の日和を眩ゆく眺めながら日を暮らした。母から渡された縫物は、いつまでも捗がゆかなかつた。母が自分の手から縫ひ物を引つ奪つて、せつせと針を運ぶ様子などを、娘はぢつと打守つて默つてゐる時があつた。然う云ふ時の娘の態度が、母には打ちのめしても足りないほどに憎かつた。

娘が髮など上げてゐる時、母はその美しい娘の髮を見た。その髮も、今までのやうに母の自由にはならなくなつた事を母は直ぐに思つた。今までは、娘は母の思ふやうに髮を上げた。母の氣に入るやうに結び上げた。そうして其れをいちばん見好い形だと娘は思つてゐた。それが髮の結び振りまで違つて來た。母はそれを非難さずにはゐられなかつた。娘はおもしろくなかつた。娘は髮を好ひ加減に束ねて、きれいに結び上げると云ふやうな事もしなかつた。母にはそれが憎かつた。

母は、娘の髮を持つて引摺り廻すやうな事があつた。母がこれほどに娘を思ふことが、少しも娘に通じないと思ふ時、母は娘を苛み殺しても足りないほどに憎かつた。たゞ一圖に憎くつて堪らなかつた。娘の心は始終佐野の家にばかり惹き着けられてゐた。秀之助を忘れることのできない娘の情けが、母には淫らなことにばかり思ひ取られて口惜しかつた。いくら折檻しても、娘の心は、もう決して母の懐に

戻つてこなかつた。母の愛憎の感情が、烈しく娘をいぢるほど、娘は尚更母を忌み嫌つた。二人は爭はなければ、口を交き合はなかつた。父は母娘の爭ひの仲裁に疲れた。

父は娘を、取り戻したことを悔いてゐた。今更、佐野の家に娘を直ぐにも連れてゆくと云ふことはできなかつた。父は自分の爲たことを輕忽だつたと思つた。殊に娘の、哀れな愛着の悩みを見る度に、父は餘計なことをしたやうに思つた。妻があんまり娘について心勞をしすぎる爲に、遂、娘を呼び戻す氣になつた。然し、一旦他に嫁つた娘は、どこまでも他人のものになりきつてゐることを父は思つた。娘を取り戻したことは娘の不幸であつたと思つた。

母は强かつた。佐野との縁を切つて、もつと母自身の氣に入つた家に嫁入りをし直させるまで、娘を自分の手から離すまいとした。長い間、何年かゝつても娘を引き付けておいて、三月前までの母にばかり縋つてゐたあの舊の心に返させなくてはならないと思つた。

「お母さんに反抗してはいけない。」

と父は娘に幾度も云つた。

「然うすれば、お前たちの間には何もなくなるのだ。お母さんに反抗をすることはお前がどこまでも惡るいのだ。それをお母さんにあやまつて、お母さんと仲好くしてくれ。お父さんが辛いから。」

と父は娘に云ひ聞かせた。父が娘の肩を持てば、母は夫にまで食つてかゝつた。父はそれを煩さく思ふばかりに、いつも母に無理があると知つてゐながら、娘を叱つた。

「お前が惡るい。お前が惡るい。」

と父は娘に云つた。父はレウマチで半身が利かなかつた。鳥の世話をしたり、畑のものなど弄りながら、奥の座敷に寝たり起きたりしてゐた。小供たちが大きく成長してくるほど、自分の求めた生活の平和が崩れてゆくことを、父は心に嘆いてゐた。娘の兄の新吉は、神經衰弱にかゝつて、中學も卒業し得なかつた。今は名を明かされない病氣にかゝつて、ぶら〳〵してゐた。蒼い顔をして、一と間に閉ぢ籠つて八犬傳などを讀んで暮らしてゐた。父はその新吉の顔を見ると、むらむらと怒りが心に上つてきて我慢ができなかつた。父はなるたけ、新吉に顔を合はせないやうにして日を過ごした。母は又、新吉を可愛しかつた。夜着についてる汚點などを、母は誰れにも知らさずにそつと洗濯しておいたりした。

娘はこの兄とも絶え間なしに口論をした。兄は、佐野の秀之助の惡る口を妹に云つた。娘はそれが口惜しかつた。母と娘が爭ふ時、兄はのそりと室から出て來て、母の味方をした。

娘は「お母さん。」と母を呼んだこともなかつた。母も娘を「和子。」と呼んだこともなかつた。何うすれば、何時二人の仲が解け合ふのかわからなかつた。娘は直きに、咽喉も裂き破れるやうな聲を出して泣いた。癇が募つてくると、眼を血走らして、着てゐるものをびり〳〵と食ひ裂いた。然う云ふ娘の仕打を見る母は、娘の我が儘に怒つて、娘を打擲した。

「出て行け出て行け。裸體で出て行け。」

と母は云つた。

「お前は子だとは思はない。お前は私の子ではない。」

「私もあなたをお母さんだとは思ひません。ほんとのお母さんぢやありません。私のお母さんはきつと

他にあります。私は私のお母さんを探します。他へ行つてほんとのお母さんを探します。」

娘は斯う云つて泣きつゞけた。

「馬鹿なことを云ふものぢやない。お母さんがお前を生みなすつたのだ。」

父は傍から娘に靜に云つたが、娘はきかなかつた。

「生んだのはこのお母さんでも、決してほんとのお母さんぢやない。私のほんとのお母さんぢやない。」

親子の愛はそんなものではない。と娘は深く思つた。娘には母の心が鬼のやうに思はれた。

「誰れが私をお嫁にやつたのです。私は自分勝手に佐野へ行つたのではありません。お父さんやお母さんが勝手に佐野へ私をやつたのではありませんか。」

娘が斯う云つて突つかゝつて行く時、母は氣狂ひのやうになつて、娘を折檻した。

「その口(くち)はなんだ。」

と母は云つた。

「おゝ姉上よ……姉上よ。私は決してもう二度と佐野の家には戻りません。けれどもこの實家にも私は足をとめてはおりません。もう直き私は家を出ます。私はどこへても一人して流れ漂つてゆくつもりで御座います。私のやうな不幸なものはありません。實家は私にとつては地獄で御座います。殊に母は、まるで鬼のやうになつて私を惱むのです。私は母ぐらゐ、勝手な……」

娘は大阪へ嫁入つてゐる姉にあてゝ、斯う手紙を書きかけながら、悲しくつて筆が動かなかつた。片手に筆の軸を握つたまゝ、娘は片手を袂にあてゝ、机の上でしばらく泣いてゐた。娘は筆をおいて、泣きながら門の外に出た。

夜が更けてゐた。空には月があつた。門前の松並木が一本づゝ月の光りに包まれて、はつきりと透いて見えた。蟲の音ばかりがひろがつてゐた。娘は門に寄りかゝつて月を眺めた。月は靜であつた。空の色が薄く、星の光りが消えさうに淡かつた。娘は月を見詰めてゐるうちに、この世界のどこかに、あの月のやうに大きな耀いた愛がぢつとして動かずにゐるやうに思はれた。娘はその大きな愛にぢつと包んで貰ひたくて、玉のやうな月の光りに憧がれた。娘の眼から涙が流れた。

家のものは、娘の影が家内に見えないと云つて騒いでゐた。裏手から井戸の廻りを父と兄は探した。どこにも、庭にも、娘の姿は見えなかつた。門の潜りが開いてゐたので、父も兄も吃驚しながら外に出た。娘は直ぐ門の傍に、露に濡れながら立つてゐた。

「何をしてゐる。もう遅いから家へはいるのだ。こんな所に立つてゐるのぢやない。」

父は優しく云つて娘を入れやうとしたが、娘は急に身體を固くして動かなかつた。

「强情を張るんぢやない。お前が然う云ふ事をするから、お母さんは猶怒るのだ。中へ入つてお寢み。お母さんも心配してゐなさる。」

娘は家に入つて、疊の上に坐ることがいやであつた。洋燈の灯に照らされながら、寢苦しい三盤の夜着の中に入ることがいやであつた。娘は今夜一と晩、門の外に佇んで月の光りで照らされてゐたかつ

た。夜の空氣が、娘の精神を開かせた。娘は父に手を取られた時に、膝を折つて、土の上に坐つた。

「馬鹿。」

娘は父にも兄にも斯う云つて怒鳴られた。娘は立つて、二人に連れられて內に入つた。

ある雨の降る夕方に、佐野の秀之助が娘の家に來た。

娘は玄關にゐて、偶然、その訪れる聲を聞いた。娘はいきなり三疊に駈け込んで、隱れた。

「佐野から。」

三疊の室の外で、父や母が何か云ひ合つてゐた。玄關で靴を脫いでゐる音が、娘のゐる所で聞こえた。娘は息をひそめて、眞つ赤な顏をして、袂で口を抑へてゐた。夫の呼吸がこゝまで響いてくるやうに思はれた。秀之助が奥の座敷に伴はれて行つてから、娘は、ほつとして、三疊の襖をあけた、幼少い妹を呼んで、

「お客樣はどこの御座敷へ行つた。」

と聞いて見た。そこへ父が來て、挨拶だけに顏を出してこいと云つて行つた。娘は、髮もこわれて、顏も垢で汚れてゐた。その姿で直ぐに出てゆくことが耻しかつた。あわてゝ鏡の前に坐つて髮を解いたり、立つたり坐つたりした。ピンで鏡臺の緣に疵を付けながら、娘は急 沈んで青い顏になつて、いつまでもぼんやりとして居た。

「なんてもいゝ。」

と娘は思つた。娘は又、髮をぐる／＼と束ねて、その顏の儘で挨拶に行つた。

娘は秀之助の顏をよくは見なかつた。襖のところから半身を出して、手を突くと、もう娘は駈けて歸つて來た。そうして三疊に入つて、誰れも來ないやうに襖をしめきつた。

一時間半ぐらゐ、秀之助はこの家にゐた。終列車に間に合ふ時間に、家を出て秀之助は歸つて行つた。娘は三疊に隱れたまゝて、秀之助の歸つて行く樣子を聞いてゐた。

「和子によろしく云つて下さい。」

秀之助の斯う云つた聲が聞こえた時、娘は一途に悲しくなつた。待つてゐた車が、雨の中を軋つて出て行つた。娘は窓の傍に寄りかゝつて立ちながら、長い間泣いてゐた。

秀之助が娘の兩親に逢つた時、男泣きに泣いたと云ふことを、娘は後から聞いた。秀之助がすつかり奪れてゐたことも後から聞いた。姑と別居をすることにして、改めて和子を迎えたいと秀之助は娘の兩親に賴みに來たのであつた。姑に對する心持を、好くして貰ひたいと秀之助は娘の母に佗びて行つた。

母と兄と父が、繰り返して話をしてゐる時に、娘は何時の間にか、その座敷に入つて來て、聞いてゐた。

娘はそれから二三日、胸が晴れてひどく心持が快かつた。何か嬉しいことが迫つてくるやうで、氣がいそ〳〵した。ぴたりと蓋をされてしまつた自分の運命が、ふと開かれたやうな幸ひな感じがあつた。娘は幼少な弟や妹にも、つとめて優しくした。髮を上げたり、顏を粧つたり、着物などを着代へたりした。

娘は秀之助と二人の上に來る新たな生活を考へて樂しんだ。姑とはなれて、二人ぎりて家を作ること

が、娘には嬉しかつた。三月の經驗が、娘の空想の上に一層濃かな色を織り出して娘を樂しませた。
媒介者から、はつきりしない手紙が來た。その文面では、姑の心が解けないので、話はこれぎりになるかも知れなかつた。然し、是非この緣はもう一度纏めたいと思ふ熱心で、自分がいろ〳〵に姑を說いてゐるとのことであつた。娘の實家の云ひ分もよく聞いて見たいと思つてゐるから、その內伺ふつもりだと、云つて寄越した。

「だから、私は秀之助にもはつきりした返事をしなかつたのだ。秀之助は意氣地なしだから駄目だ。あれの意見は母親の前ではちつとも通らないのだから、母親を說服すること一とつ出來ないのだ。だから自分の大切な嫁を母親にこき使はれるやうな事をするのだ。」

と母は云つた。

「人の前で泣くやうな男はお母さんは大嫌ひだ。男らしくもない。お前はそんな男が好きか。」

と母が娘に聞いた。

娘はその時、うつかりと「自分も嫌いだ。」と母に云つた。

娘はあとになつて、其の言葉を取り返すことができないと知つた時に悲しかつた。何うしてあのやうな、心にもない僞りを母の前で云つたのか、娘にはわからなかつた。

娘はその時から、全く秀之助とは離れてしまつたやうな氣がした。自分の手で秀之助との緣を切つて了つたやうにも思はれた。自分の口で、秀之助を捨てたやうにも思はれた。娘は「嫌ひだ。」と云つた一と言に、その身を責められながら、悲しい日を送つた。

「尼にでもならうか、」

と娘は考へることがあつた。極りない悲しみに閉ざされながら、娘は、尼になることに憧れた。父の本箱からふと見付けた中將姫の緣起本を、娘は大事に毎日々々繰り返して讀んだ。娘は自分が十七て、もうさま〴〵に人の世の味を知つたことを悲しく悲しく思ひ返した。友達はまだ誰れも親の家にゐた。その友達たちは、未來にどんな光りがあるか、闇があるかも知らなかつた。娘はもう、昔のやうに笑ふことのできなくなつた自分の身を悲しんだ。娘の十七の心は、哀れに傷ついてゐた。

娘は家を出やうと決心した。

ある晩がたに、寒い絞つたやうな風が吹く時、娘は平常着のネルを一枚着て、小さい風呂敷包みを片手に持ちながら、片手に白い洋傘を持つて家を出た。母は小供たちと一所に湯を浴びてゐた。父は奥に寢んでゐた。兄が庭の掃除をしてゐた。娘はその隙に家を出た。

けれども、其れは直ぐに見付かつた。丁度、母が湯から出て車井戸から水を汲んでゐた。母はそこから一と目に見える門の内から、娘が白い洋傘を持つて出て行くのを、ちらと見た。

「新吉。新吉。早く。」

母は兄を呼び立てた。狼狽へて走つて來た新吉は、母に云はれて門の外に駈けて出た。妹が一町程先きを、急いて歩いて行く姿が見えた。兄は、並木の外れて妹に追ひ着いた。風が追つて行くものと、追

はれるものとの袂を吹いて過ぎた。

「何所へ行くんだ。和子。」

兄は妹の腕をおさへた。娘は立ち止つて兄の顏を見返しながら、

「はなして下さい。私は歸らない。」

と云つた。兄は妹を引き摺つて引つ返して來た。

「歸らない。歸らない。」

娘は足をとめては泣いた。洋傘に躓いて娘は地面に轉んだ。それを引つ立てられながら娘は連れて來られた。

「此家を出て何所へ行くつもりだ。」

父は娘の顏を見ると聞いたが、娘は返事をしないで泣いてゐた。

その時から家のものは、嚴重に娘を監視した。娘は一人では門際へも出られなかつた。

「私を他へやつて下さい。大阪へやつて下さい。お願ひですから。」

娘は父に賴んだが、父は母の思惑を兼ねて、聞き入れなかつた。

娘はまた、三疊の暗い室に閉ぢ籠つて、そこで一人で物を思つた。娘は秀之助の涙を思つた。夫が此家へ來て泣いて行つたことを思つた。娘はその涙を自身の口に吸ふやうにも懷しかつた。娘も夫を見て泣きたかつた。その夫とも、永の別れをすることに定まつてしまつたことを娘は思つた。

母は娘を可哀想に思ふ時、打ち解けて、いたはつてやり度いやうにも心の動くことがあつたけれど

も、母の意地は、自分から娘に優しく折れてゆくことができなかつた。母は、娘とはまだ氣の直らない仲でゐた。直かに二人が物を云ふことはしなかつた。間で誰れかゞ取り次いだ。娘は決して母に物を云はなかつた。

母への怨み、それがだん〳〵に娘の胸に深く穿たれていつた。自分の靈の疵は、親たちがつけたのだと娘は思ひ信じた。母らしくない母のなさけ——娘はそれを執念く胸に刻んで忘れまいとした。母に打たれた腕の痣が、まだ癒えなかつた。

「親が勝手に、嫁に行かせたのだ。」

たつた一度、斯う母に云ひ返した娘の言葉も、母の心からはなれなかつた。それが咒ひの言葉だと思ふほど、母は一層、然う云ふ事を云ひ募つた娘の考へを恐しく思つた。娘はそれを口惜しく思ふばかりに、毎日親たちに反抗してゐるのではないか。不貞腐れてゐるのではないか。

母は然う感じる時、娘の性根を撓めてやれ、と思つた。母は娘に種々の用を云ひ付けた。娘は兄から傳へられても、何も爲なかつた。決して爲ないでゐた。そうして、髮をばらばらにして三疊の暗い室にかくれてゐた。

「何うしたと云ふんだ。身體が惡るければ醫者へでも行つたらいゝぢやないか。」

母は三疊に來て、娘に怒りつけた。その時娘は机の前に座つてぼんやりと窓から、外の青桐の葉を見詰めてゐた。

「身體が惡るいのか。」

娘は默つてゐたが、眼から涙が傳はつた。娘は母の方を振向かないてゐた。

「お前は一體何うしやうと云ふのだ。親に不貞腐れてゐればそれでいゝと云ふのかい。」

娘は心の内で、優しくない母だと思つてゐた。この母には微塵も憫れみと云ふものがないと娘は思つてゐた。

「私の云ひ付けたことを何故しないのだ。」

娘はそれでも默つてゐた。

「お前見たいなものは死んてしまつた方がいゝ。死んてしまへ。」

母は怒りの上つた眼で、娘を睨み据へながら、斯う云つて三疊を出て行つた。

母の怒りの言葉が、靜に娘の頭腦のなかに沁み流れた。母が、

「死んてしまへ。」

と云つた、娘は、その言葉を繰り返した。

娘は三疊から出て、母に云はれたことを爲た。臺所に行つて働いたり、幼少いもの丶爲にも、用事をした。それが四五日つゞいた。娘はその時から食事がすゝまなくなつた。蒼いやつれた顔をして、物憂い手先きを、黄色い秋の日のかげて動かしながら、張り物をしたりした。大人らしく冠つた手拭の下に、娘の耳前髪はおそろしく憔悴けて見えた。

娘は佐野の家を思はないやうになつた。秀之助のことも思はないやうになつた。一時のやうに、娘は夫を慕ひこがれるやうな事がなくなつた。唯時々、娘は夫と別れてからの日を數へて見ることがあつ

た。別れてから一と月余りにもなつた。

娘は、いつかの晩、月を見た時のやうに、大きな愛がこの世界のどこかにぢつとしてゐるやうに思はれてならなかつた。娘はその大きな愛に抱き守られたかつた。娘はどこに其の愛が凝つとしてゐるのだらうと思つた。

死んでからの未來に、その大きな愛があるのではないかと娘は思つた。娘は死ねば、その優しい大きな愛が自分の全體を、抱きかゝへて與れるのではないかと思つた。娘は死と云ふことを考へた。

「死んでしまへ。」

と母に云はれたやうに死ぬことが、娘には心持快く思はれた。遠く〳〵、いつの世になつても再び秀之助に逢へないことが、娘には心持が快かつた。娘の心臟は、ふしぎな快さに波立つて、笑つてゐた。

町を横切つて流れるM川まで、娘が家を抜けて出て行つた晩は、木枯しのやうな風が強く松並木を吹いてゐた。闇であつた。

娘の靈魂は、その風に吹き揉まれながら永久に消えた。

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町 東京堂
仝 神田區裏神保町 上田屋
仝 京橋區尾張町 東海堂
仝 京橋區元數寄屋町 北隆館
仝 京橋區西紺屋町 良明堂
仝 日本橋區本石町 至誠堂
大阪市北區梅田町 盛文館
仝 東區京町堀 太華堂
仝 東區瓦町 東枝支店
京都市七條停車場前 三共社

○定價 金貳拾五錢郵税金貳錢（海外郵税拾貳錢但支那を除く）

冊數＼國別	內國	外國
六冊	金壹圓五拾錢	金貳圓拾錢
十二冊	金參圓	金四圓貳拾錢
以上郵税共		

▲但し新年號（本年度に限り三倍）春秋二期附錄號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、卽ち一ケ年迺計十五册（本年度十六册）分の割合なれば一ケ年分御註文の方は內國は金參圓七拾五錢（本年度金四圓）外國は金五圓貳拾五錢（本年度金五圓六十錢）拂込まるべし

本號特價金參拾五錢 郵税金貳錢五厘

送金注意

一誌代郵税 は一切前金とす、金切の場合は發送を止むべし
一郵便爲替 にて御送金の場合は本鄉西片町十番地中央公論社と指定し拂渡局を東片町局と指定あれば途中盜取の虞なし
一振替貯金 口座は東京三十四番なり
一郵券代用 必ず一割增の事
一集金郵便 の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし弊社は直ちに其取扱手續をなすべし

一金一圓迄 金五錢
一金三圓迄 金六錢
一金五圓迄 金七錢
（集金委託料及送達料共）

一受領證請求 は必ず返信料を要す

大正三年九月廿九日印刷納本
大正三年十月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人 麻田駒之助
印刷人 高木酉三

發行所 東京市本鄉區駒込西片町十番地 中央公論社
電話(長)下谷九一九
振替東京三十四番
電信略號コウロン

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 5.25; Single copy 37 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

明治三十年一月二十九日第三種郵便物認可